

常三島遺跡3

— 地域連携プラザ地点・フロンティア研究センター地点 —

2017

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

常三島遺跡3

—地域連携プラザ地点・フロンティア研究センター地点—

2017

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

序 文

本学では、常三島キャンパスと総合グラウンドの地下に所在する遺跡を独自に、常三島遺跡と呼んでいます。今日、私たちが遺跡とみなしている、この場所は、近世の絵図や古文書によれば、徳島城下町を形成する六つの島のうち、主として中・下級武士が居住した「常三島」にあたることが分かります。こうした認識に立って、常三島遺跡の発掘調査は、本調査室が設置されすぐの1992年に始まり、これまで21次にわたって実施されてきました。その結果、近世常三島の武家屋敷の実態が徐々に明らかとなりつつあります。

さて、本書は、2013年に実施した常三島遺跡第19・20次調査（地域連携プラザ地点・フロンティア研究センター地点）の発掘調査報告書です。地域連携プラザ地点では、東西に向に走る屋敷境の溝が発見されました。こうした溝は、これまでの調査でもたびたび見つかっており、研究者のあいだで活発な議論を巻き起こしてきました。現在は、屋敷境溝が掘削された理由を、治水対策に求める説が有力です。フロンティア研究センター地点では、池状遺構の中から、生活用水を利用するための階段・足場とみられる石組み遺構が検出されました。こうした性格の遺構が発見されたのは、常三島遺跡では初めてです。いずれの発見も、常三島に住んだ武士たちの生活や知恵を鮮やかに復元する資料として、注目されます。

常三島遺跡の報告書は本書で3冊目になりますが、2冊目を刊行してから、すでに10年以上が経過してしまいました。そういうこともあって、本書には先に述べた2地点の調査報告だけでなく、これまでの調査成果の総括的な内容を盛り込んだつもりです。CADソフトウェアを使用して、遺構の変遷図を作成したのも、そうした試みのひとつです。新たな方法や技術を積極的に導入することで、報告書作成作業の合理化や効率化を図っていくことも、今後の調査室に求められていると考えます。

最後とはなりましたが、発掘調査、整理作業、そして本書の刊行にあたって、ご協力・ご助言を賜った学内外の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。今後、本書と報告資料が、徳島城下町跡の調査研究、近世考古学・近世史研究、さらには徳島という地域社会での文化財の保存・活用の一助となることを祈願します。

平成29年3月31日

徳島大学埋蔵文化財調査室長

端野晋平

例　　言

1. 本書は、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室が2013年度に実施した、本学常三島キャンパスにおける地域連携プラザ新館、フロンティア研究センター新館に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 整理作業は、端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・岸本多美子・久米淑子・中原尚子・板東美幸・古川裕美・前田千夏・安山かおり・山本愛子が担当した。
3. 遺構写真の撮影は端野・遠部慎（現・久万高原町教育委員会）・山口雄治（現・岡山大学）が、遺物写真的撮影は板東が担当した。遺物観察表の作成は、第2・3章の陶器・土器・土製品を安山が、第2章の金属製品・ガラス製品・瓦・石製品を脇山が、第3章の金属製品・ガラス製品・瓦・石製品・骨製品を三阪が担当した。金属製品のX線写真撮影は、植地岳彦氏（当時、徳島県埋蔵文化財センター、現・徳島県立博物館）にお願いした。
4. 本書の執筆分担は、目次と本文中に示した通りである。木製品の樹種同定は、中原計氏（鳥取大学）に依頼し、玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。
5. 本書の編集は、端野が行った。
6. 本書で使用した座標の値は、世界測地系による平面直角座標系（第IV系）に準拠した。方位は座標北、レベルは海拔標高である。
7. 土層および土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。
8. 陶磁器・土器の製作年代を決定するに際しては、以下の文献（五十音順）を参照した。
扇浦正義, 2000. 現川・九州陶磁の編年. 九州近世陶磁学会, 有田. pp.304-309.
大成可乃, 2011. 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2). 東京大学構内遺跡調査研究年報7. 東京大学埋蔵文化財調査室. 223-313.
大橋康二, 1988. 十七世紀後半における肥前系磁器の銘款について. 青山考古6. 25-37.
大橋康二, 1989. 18世紀における肥前系磁器の銘款について. 東洋陶磁17. 67-74.
大橋康二, 1990. 肥前磁器の変遷－技法と器形からみた－. 柴田コレクション展Ⅰ. 佐賀県立九州陶磁文化館, 有田. pp.227-238.
大橋康二, 1991. 肥前磁器の変遷－文様を中心として－. 柴田コレクション展Ⅱ 資料編. 佐賀県立九州陶磁文化館, 有田. pp.87-95.
大橋康二, 2001. 肥前陶磁. ニュー・サイエンス社, 東京.
大橋康二, 2004. 世界をリードした磁器窯・肥前窯. 新泉社, 東京.
小川裕司, 2012. 雜司が谷遺跡出土の飯碗についての予察. 雜司が谷Ⅶ. 都道整備事業関連豊島区遺跡調査団. 東京. pp.99-112.
金子健一, 2006. 近世都市出土の瀬戸・美濃・江戸時代の瀬戸・美濃・三都と名古屋-. (財)瀬戸市文化振興財団, 瀬戸. pp.70-76.
日下正剛, 2002. 大谷焼の生産と流通. 関西近世考古学研究X. 17-34.

- 柴田明彦, 1998. 有田磁器の技法. 柴田コレクションVI 江戸の技術と装飾技法. 佐賀県立九州陶磁文化館, 有田. pp.256-269.
- 下中直人(編), 2000. 増補 やきもの事典. 平凡社, 東京.
- 白神典之, 1990. 堆積鉢と明石堆鉢. 江戸遺跡研究会第3回大会 江戸の陶磁器 発表要旨. 江戸遺跡研究会, 東京. pp.47-51.
- 白神典之, 1990. 堆積鉢と明石堆鉢. 江戸遺跡研究会第3回大会 江戸の陶磁器 資料編. 江戸遺跡研究会, 東京. pp.123-144.
- 鈴木良章(編), 1993. シンポジウム「信楽焼と京焼」. 信楽町教育委員会, 信楽.
- 鈴田由紀夫, 1995. 17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様. 柴田コレクションIV 古伊万里様式の成立と展開. 佐賀県立九州陶磁文化館, 有田. pp.272-279.
- 高島裕之ほか, 2009. 有田・南川原窯ノ辻窯跡出土の陶磁器. 駒澤考古34. 39-54.
- 高橋洋二(編), 1988. 別冊太陽 古伊万里. 平凡社, 東京.
- 田口昭二, 1983. 美濃焼. ニュー・サイエンス社, 東京.
- 長佐吉真也, 1991. 潬戸美濃産「太白焼」小考. 東京都埋蔵文化財センター研究論集X. 405-418.
- 長佐吉真也, 1996. 「江戸」遺跡に流通する量産陶器碗の編年(Ver. 2.1). シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題II 発表要旨. 江戸陶磁土器研究グループ, 東京. pp.69-83.
- 中野雄二, 2000. 波佐見. 九州陶磁の編年. 九州近世陶磁学会, 有田. pp.254-289.
- 中野雄二, 2010. 波佐見くらわんか茶碗のひろがり. 金大考古66. 17-24.
- 成瀬晃司・堀内秀樹, 1990. 消費遺跡における陶器の基礎的操作と分析. 東京大学遺跡調査室(編). 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点. 東京大学医学部附属病院, 東京. pp.821-860.
- 成瀬晃司, 1992. 磁器碗・皿の分類. シンポジウム 江戸出土の陶磁器・土器の諸問題I 発表要旨. 江戸出土陶磁土器研究グループ, 東京. pp.14-22.
- 難波洋三, 1992. 徳川氏大坂城崩の炮烙. 難波宮址の研究 第九(本文). (財)大阪市文化財協会, 大阪. pp.373-400.
- 乗岡実, 2002. 近世備前焼堆鉢の編年案. 岡山城三之曲輪跡. 岡山市教育委員会, 岡山. pp.190-197.
- 長谷川寅, 2004. 壺類にみる近世丹波焼. 関西近世考古学研究XII. 関西近世考古学研究会, pp.1-23.
- 藤澤良祐, 1998. 近世瀬戸磁器編年の再検討. 楠崎彰一先生古希記念論文集刊行会(編). 楠崎彰一先生古希記念論文集. 真陽社, 京都. pp.377-388.
- 北條ゆうこ, 1998. 近世阿波のしめなわ文茶碗. 徳島県立博物館研究報告8. 67-93.
- 北條ゆうこ, 2002. しめなわ文茶碗再考. 論集 徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島. pp.765-779.
- 堀内秀樹, 1992. 東京大学本郷構内の遺跡統一編年試案. シンポジウム 江戸出土の陶磁器・土器の諸問題I 発表要旨. 江戸出土陶磁土器研究グループ, 東京. pp.39-57.
- 堀内秀樹, 1992. (付)年代を推定できる主な技法、文様、鉄款. シンポジウム 江戸出土の陶磁器・土器の諸問題I 発表要旨. 江戸出土陶磁土器研究グループ, 東京. pp.23-28.
- 村上伸之, 2004. 唐津焼の成立と初期の窯業. 古唐津. 出光美術館, 東京. pp.178-186.
- 村上伸之, 2006. 肥前 生産に関わる技術の成立と展開を中心に. 江戸時代のやきもの-生産と流通 - 記念講演会・シンポジウム資料集. (財)瀬戸市文化振興財団 埋蔵文化財センター. 瀬戸. pp.69-88.
- 盛峰雄はか, 2000. 肥前(佐賀県)の製品について. 九州陶磁の編年. 九州近世陶磁学会, 有田. pp.10-249.
- 森本伊知郎, 2009. 近世陶磁器の考古学. 雄山閣, 東京.
- 明石市立文化博物館(編), 1994. 明石城武家屋敷跡 I. 明石市教育委員会, 明石.
- 江戸遺跡研究会(編), 2001. 図説 江戸考古学研究事典. 柏書房, 東京.
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター(編), 2001. 瀬戸大窯とその時代. (財)瀬戸市埋蔵文化財センター,

- 瀬戸。
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター(編), 2002. 江戸時代の瀬戸窯. (財)瀬戸市埋蔵文化財センター, 瀬戸.
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター(編), 2003. 江戸時代の美濃窯. (財)瀬戸市埋蔵文化財センター, 瀬戸.
- 佐賀県立九州陶磁文化館(編), 2004. 古伊万里の見方 シリーズ1種類. 佐賀県立九州陶磁文化館.
- 滋賀県立安土城考古博物館(編), 2009. 大信楽焼展－出土資料を中心にして. 滋賀県立安土城考古博物館, 近江八幡.
- 瀬戸市史編纂委員会(編), 1993. 瀬戸市史 陶磁史篇五. 愛知県瀬戸市, 瀬戸.
- 瀬戸市史編纂委員会(編), 1998. 瀬戸市史 陶磁史篇六. 愛知県瀬戸市, 瀬戸.
- 東京大学埋蔵文化財調査室(編), 1999. 東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1). 東京大学埋蔵文化財調査室, 東京.
- 土岐市美濃陶磁歴史館(編), 2004. 織部の流通圏を探る 西日本. 土岐市美濃陶磁歴史館, 土岐.
- 豊島区遺跡調査会(編), 1998. 陶磁器・土器分類・計測基準. 伝中・上富士前II 別冊. 豊島区教育委員会, 東京.
- 波佐見町教育委員会(編), 1993. 波佐見町内古窯跡群調査報告書. 波佐見町教育委員会, 波佐見.
- 萬古陶磁器振興協同組合連合会(編), 2010. よくわかる四日市萬古焼読本. 萬古陶磁器振興協同組合連合会, 四日市.
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(編), 2005. 鎌平焼窯跡. 兵庫県教育委員会, 神戸.
9. 本書に掲載した調査記録および出土遺物は、すべて本調査室で保管している。今後、研究・教育の場で積極的に活用されることを期待する。
10. 発掘調査・整理作業にあたっては以下の方々にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
- 東潮、氏家敏之、大北和美、勝浦康守、近藤玲、塚本章宏、中村農、西本沙織、根津寿夫、平井松午（敬称略、五十音順）。

目 次

第1章 歴史的・地理的環境	端野 晋平 …	1
第1節 遺跡の位置と歴史的環境		1
第2節 常三島遺跡の概要		3
第2章 第19次調査（地域連携プラザ地点）	端野 晋平 …	15
第1節 調査の経過と概要		15
1. 調査に至る経緯		15
2. 調査組織		15
3. 調査の経過		15
4. 調査の概要		16
第2節 調査の記録		16
1. 調査地点の位置		16
2. 基本層序		18
3. 遺構と遺物		18
4. 包含層出土遺物		22
第3章 第20次調査（フロンティア研究センター地点）		79
第1節 調査の経過と概要	端野 晋平 …	79
1. 調査に至る経緯		79
2. 調査組織		79
3. 調査の経過		79
4. 調査の概要		80
第2節 調査の記録		81
1. 調査地点の位置	端野 晋平 …	81
2. 基本層序	端野 晋平 …	83
3. 第2遺構面の遺構と遺物	三阪 一徳・端野 晋平 …	83
4. 第15遺構面の遺構と遺物	脇山 佳奈 …	113
5. 第1遺構面の遺構と遺物	脇山 佳奈 …	133
6. 包含層出土遺物	端野 晋平 …	180

第4章 木製品の樹種同定と年代測定	201
第1節 常三島遺跡第19・20次調査出土木製品の樹種	中原 計 201
1. 試料内容	201
2. 同定方法	201
3. 同定結果と考察	201
第2節 常三島遺跡第19次調査出土杭の放射性炭素年代測定… 加速器分析研究所	205
1. 測定対象試料	205
2. 測定の意義	205
3. 化学処理工程	205
4. 測定方法	205
5. 算出方法	205
6. 測定結果	206
第3節 常三島遺跡第20次調査出土桶（タガ）の放射性炭素年代測定 …………伊藤 茂・安昭 炫・佐藤 正教・廣田 正史・ 山形 秀樹・小林 紘一・Zaur Lomtadidze・黒沼 保子 208	
1. はじめに	208
2. 試料と方法	208
3. 結果	208
4. 考察	209
第5章 総 括	端野 晋平 211

挿 図 目 次

第 1 図 吉野川下流域の地形分類図-----	1	第 36 図 包含層出土遺物 (13)-----	41
第 2 図 常三島遺跡の位置-----	2	第 37 図 包含層出土遺物 (14)-----	42
第 3 図 常三島遺跡の発掘調査地点-----	4	第 38 図 包含層出土遺物 (15)-----	43
第 4 図 工学部実習棟地点の屋敷境溝-----	6	第 39 図 包含層出土遺物 (16)-----	44
第 5 図 工学部電気電子棟地点の舟入状遺構-----	8	第 40 図 包含層出土遺物 (17)-----	45
第 6 図 『徳島藩領国図屏風』安宅島部分拡大-----	9	第 41 図 包含層出土遺物 (18)-----	46
第 7 図 地域共同研究センター棟地点の埋納遺構と 出土遺物-----	9	第 42 図 包含層出土遺物 (19)-----	47
第 8 図 地域共同研究センター棟地点出土の しめなわ文茶碗-----	10	第 43 図 包含層出土遺物 (20)-----	48
第 9 図 しめなわ文茶碗をめぐる威信財交換モデル-----	11	第 44 図 包含層出土遺物 (21)-----	49
第 10 図 地域共同研究センター棟地点出土の 投網用鍤鋸型-----	12	第 45 図 包含層出土遺物 (22)-----	50
第 11 図 工学部光応用工学科棟地点の火葬墓の位置-----	13	第 46 図 包含層出土遺物 (23)-----	51
第 12 図 作業風景-----	15	第 47 図 包含層出土遺物 (24)-----	52
第 13 図 調査地点の位置-----	17	第 48 図 包含層出土遺物 (25)-----	53
第 14 図 調査区西壁土層断面-----	19	第 49 図 包含層出土遺物 (26)-----	54
第 15 図 調査区西壁土層断面写真-----	20	第 50 図 包含層出土遺物 (27)-----	55
第 16 図 検出遺構全体図-----	21	第 51 図 包含層出土遺物 (28)-----	56
第 17 図 調査地点全景-----	22	第 52 国 包含層出土遺物 (29)-----	57
第 18 国 SD1 土層断面 (調査区東壁)-----	23	第 53 国 包含層出土遺物 (30)-----	58
第 19 国 SD1 完掘状況-----	24	第 54 国 包含層出土遺物 (31)-----	59
第 20 国 SD1 上層出土遺物-----	26	第 55 国 包含層出土遺物 (32)-----	60
第 21 国 SD1 下層出土遺物-----	26	第 56 国 包含層出土遺物 (33)-----	61
第 22 国 SA1 検出状況・土層断面-----	27	第 57 国 包含層出土遺物 (34)-----	62
第 23 国 SA1 に用いられた杭-----	28	第 58 国 包含層出土遺物 (35)-----	63
第 24 国 包含層出土遺物 (1)-----	29	第 59 国 作業風景-----	79
第 25 国 包含層出土遺物 (2)-----	30	第 60 国 調査地点の位置-----	82
第 26 国 包含層出土遺物 (3)-----	31	第 61 国 調査区南壁土層断面-----	83
第 27 国 包含層出土遺物 (4)-----	32	第 62 国 第2遺構面全体図-----	84
第 28 国 包含層出土遺物 (5)-----	33	第 63 国 SG401 土層断面 a-a'-----	85
第 29 国 包含層出土遺物 (6)-----	34	第 64 国 SG401 土層断面 b-b'-----	86
第 30 国 包含層出土遺物 (7)-----	35	第 65 国 SG401 土層断面 c-c'-----	87
第 31 国 包含層出土遺物 (8)-----	36	第 66 国 SG401 土層断面 d-d'-----	88
第 32 国 包含層出土遺物 (9)-----	37	第 67 国 SG401 土層断面 e-e'-----	88
第 33 国 包含層出土遺物 (10)-----	38	第 68 国 SG401 出土遺物-----	89
第 34 国 包含層出土遺物 (11)-----	39	第 69 国 SX402 (1)-----	92
第 35 国 包含層出土遺物 (12)-----	40	第 70 国 SX402 (2)-----	93
		第 71 国 SX402 木樁検出状況-----	94
		第 72 国 SX402 木樁検出状況-----	94
		第 73 国 SX402 遺物出土状況 (階段状部分)-----	95

第 74 図	SX402 遺物出土状況（積石状部分）	95	第 116 図	SK99 出土遺物	147
第 75 図	SX402 盛上出土遺物	96	第 117 図	SK116 出土遺物	147
第 76 図	SX402 出土遺物（1）	98	第 118 図	第 1 遺構面検出遺構（6）	149
第 77 図	SX402 出土遺物（2）	99	第 119 図	第 1 遺構面検出遺構（7）	151
第 78 図	SX402 出土遺物（3）	100	第 120 図	第 1 遺構面検出遺構（8）	153
第 79 図	SX402 出土遺物（4）	101	第 121 図	第 1 遺構面検出遺構（9）	155
第 80 図	SX402 出土遺物（5）	102	第 122 図	第 1 遺構面検出遺構（10）	157
第 81 図	SX402 出土遺物（6）	103	第 123 図	SK123 出土遺物	158
第 82 図	SX402 出土遺物（7）	104	第 124 図	SK124 出土遺物	158
第 83 図	第 2 遺構面検出遺構（1）	107	第 125 図	SK189 出土遺物	158
第 84 図	第 2 遺構面検出遺構（2）	109	第 126 図	SK191 出土遺物	158
第 85 図	第 2 遺構面検出遺構（3）	111	第 127 図	第 1 遺構面検出遺構（11）	161
第 86 図	SK330 出土遺物	112	第 128 図	第 1 遺構面検出遺構（12）	163
第 87 図	SK398 出土遺物	112	第 129 図	第 1 遺構面検出遺構（13）	165
第 88 図	第 15 遺構面全体図	114	第 130 図	第 1 遺構面検出遺構（14）	167
第 89 図	第 15 遺構面検出遺構（1）	115	第 131 図	第 1 遺構面検出遺構（15）	168
第 90 図	第 15 遺構面検出遺構（2）	117	第 132 図	SK192	169
第 91 図	第 15 遺構面検出遺構（3）	119	第 133 図	SK192 出土遺物（1）	170
第 92 図	SK260 炭化木材検出状況（北から）	120	第 134 図	SK192 出土遺物（2）	171
第 93 図	第 15 遺構面検出遺構（4）	121	第 135 図	SK192 出土遺物（3）	172
第 94 図	第 15 遺構面検出遺構（5）	123	第 136 図	SK192 出土遺物（4）	173
第 95 図	第 15 遺構面検出遺構（6）	125	第 137 図	SK198 出土遺物	175
第 96 図	第 15 遺構面検出遺構（7）	127	第 138 図	SK207 出土遺物	175
第 97 図	第 15 遺構面検出遺構（8）	129	第 139 図	第 1 遺構面検出遺構（16）	176
第 98 図	SK343	131	第 140 図	SK208 出土遺物	177
第 99 図	SK292 出土遺物	132	第 141 図	SK211 出土遺物	177
第 100 図	SK312 出土遺物	132	第 142 図	第 1 遺構面検出遺構（17）	178
第 101 図	SK343 出土遺物	132	第 143 図	SK212 出土遺物	179
第 102 図	第 1 遺構面全体図	134	第 144 図	包含層出土遺物（1）	182
第 103 図	第 1 遺構面検出遺構（1）	135	第 145 図	包含層出土遺物（2）	183
第 104 図	SD206 出土遺物	137	第 146 図	包含層出土遺物（3）	184
第 105 図	SK03 出土遺物	137	第 147 図	包含層出土遺物（4）	185
第 106 図	SK04 出土遺物	139	第 148 図	包含層出土遺物（5）	186
第 107 図	SK35 出土遺物	139	第 149 図	包含層出土遺物（6）	187
第 108 図	SK162 出土遺物	139	第 150 図	包含層出土遺物（7）	188
第 109 図	SK55 出土遺物	139	第 151 図	包含層出土遺物（8）	189
第 110 図	第 1 遺構面検出遺構（2）	141	第 152 図	包含層出土遺物（9）	190
第 111 図	第 1 遺構面検出遺構（3）	143	第 153 図	包含層出土遺物（10）	191
第 112 図	第 1 遺構面検出遺構（4）	145	第 154 図	包含層出土遺物（11）	192
第 113 図	第 1 遺構面検出遺構（5）	146	第 155 図	包含層出土遺物（12）	193
第 114 図	SK61 出土遺物	147	第 156 図	包含層出土遺物（13）	194
第 115 図	SP81 出土遺物	147	第 157 図	包含層出土遺物（14）	195

第 158 図	常三島遺跡第 19 次調査出土木製品の 顕微鏡写真	203	第 162 図	常三島遺跡の主要遺構（Ⅰ期）	215
第 159 図	常三島遺跡第 20 次調査出土木製品の 顕微鏡写真	204	第 163 図	常三島遺跡の主要遺構（Ⅱ期）	217
第 160 図	暦年較正年代グラフ	207	第 164 図	常三島遺跡の主要遺構（Ⅲ期）	219
第 161 図	暦年較正結果	210	第 165 図	常三島遺跡の主要遺構（Ⅳ期）	221
			第 166 図	常三島遺跡第 14 次調査地点の遺構	223

表 目 次

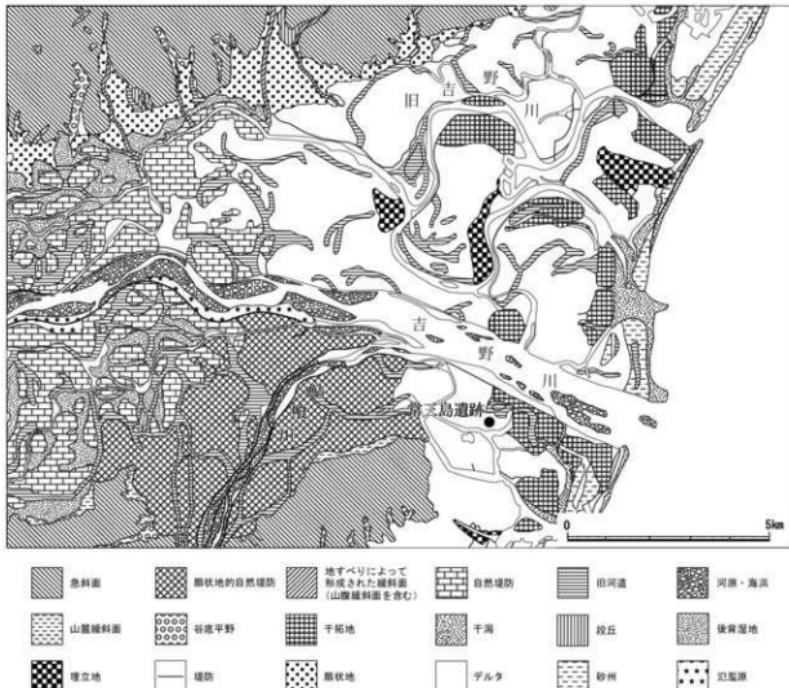
第 1 表	常三島遺跡発掘調査一覧	5	第 19 表	SK192 遺物観察表（1）	173
第 2 表	包含層遺物観察表（1）	64	第 20 表	SK192 遺物観察表（2）	174
第 3 表	包含層遺物観察表（2）	65	第 21 表	包含層遺物観察表（1）	195
第 4 表	包含層遺物観察表（3）	66	第 22 表	包含層遺物観察表（2）	196
第 5 表	包含層遺物観察表（4）	67	第 23 表	包含層遺物観察表（3）	197
第 6 表	包含層遺物観察表（5）	68	第 24 表	包含層遺物観察表（4）	198
第 7 表	包含層遺物観察表（6）	69	第 25 表	包含層遺物観察表（5）	199
第 8 表	包含層遺物観察表（7）	70	第 26 表	包含層遺物観察表（6）	200
第 9 表	包含層遺物観察表（8）	71	第 27 表	常三島遺跡第 19・20 次調査出土木製品一覧	202
第 10 表	包含層遺物観察表（9）	72	第 28 表	放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{14}\text{C}$ 補正）	207
第 11 表	包含層遺物観察表（10）	73	第 29 表	放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{14}\text{C}$ 未補正値、 暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）	207
第 12 表	包含層遺物観察表（11）	74	第 30 表	測定試料および処理	208
第 13 表	包含層遺物観察表（12）	75	第 31 表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	209
第 14 表	包含層遺物観察表（13）	76	第 32 表	常三島遺跡の主要遺構一覧（1）	224
第 15 表	包含層遺物観察表（14）	77	第 33 表	常三島遺跡の主要遺構一覧（2）	225
第 16 表	包含層遺物観察表（15）	78	第 34 表	常三島遺跡の主要遺構一覧（3）	226
第 17 表	SG401 遺物観察表	90			
第 18 表	SX402 盛土遺物観察表	97			

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

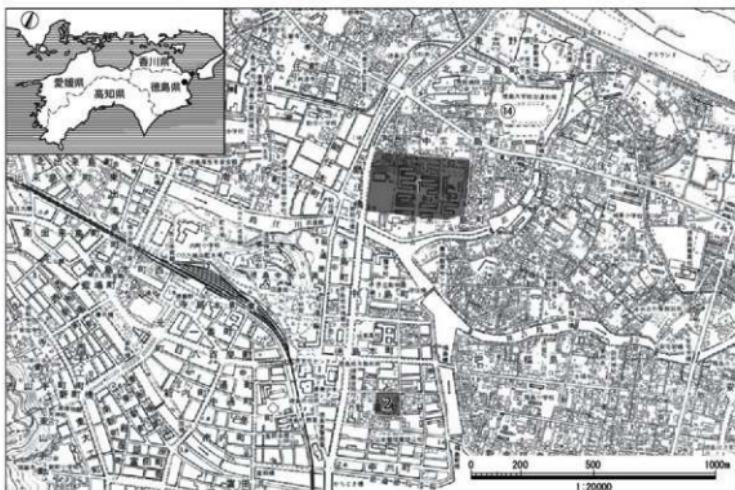
常三島遺跡は、徳島大学常三島キャンパス（徳島市南常三島町1丁目・2丁目）および総合グラウンド（徳島市北常三島町3丁目）に所在する近世城下町跡である。現在、常三島キャンパスの範囲は、徳島県遺跡地図（徳島県教育委員会 2006）では、「徳島城下町跡南常三島町1丁目地点」あるいは「南常三島町2丁目地点」という遺跡名で、周知の埋蔵文化財包蔵地として掲載されている。しかし、本調査室ではこれまで、研究・教育・社会貢献の様々な場で、この範囲に所在する遺跡を「常三島遺跡」と独自に呼称してきた経緯があり、その利便性も勘案して、本書でもこれを用いたい。

この遺跡は、四国最大の河川、「四国三郎」吉野川の河口付近のデルタ地帯に位置する（第1・2図）。高知県瓶ヶ森山南方を水源とする吉野川は、四国山地から中央構造線に沿って、紀伊水道に向けて東



第1図 吉野川下流域の地形分類図

大矢 (1993) よりトレイス・改変。



第2図 常三島遺跡の位置

1. 常三島遺跡 2. 新島遺跡 ④は常三島遺跡第14次調査地点
国際航業株式会社謹製『徳島市全図2』をもとに作成。

流する。今日の市街地は、吉野川によって形成された沖積平野である徳島平野を中心に広く展開している。

現在の常三島キャンパスにあたる地点は、文書・絵図などの資料によって、近世に阿波徳島藩が中州の一部を埋め立て、中・下級武士の屋敷地とした場所であったことが明らかとなっている。明治時代になると、この地一帯は、江戸時代の街区区画が残されたまま、急速に水田化した後、徳島県尋常師範学校附属小学校や徳島大学工学部の前身である徳島高等工業学校が設置された。その後、太平洋戦争を経て、戦後まもなくしてから常三島キャンパスが設置され、今日に至っている。

常三島遺跡の周辺では、徳島城が築かれた城山（渭山）山麓に、縄文時代後期から晩期に属する城山貝塚が存在する。ここからは弥生土器も出土したとされるが、それ以外に常三島遺跡の付近で、弥生時代、それに続く古墳時代の遺跡は現在でも確認されていない。吉野川河口付近には阿波國の条里があり、奈良時代の8世紀中頃には、東大寺領阿波國新島荘が置かれていた。この新島荘には3地区があり、そのうちの枚方地区が常三島遺跡の北西に位置する現在の北田宮・上助任町付近に比定されている。その後、新島荘は10世紀頃まで確実に存続していたことが文献記録に残されている。鎌倉時代に入った1203（建仁3）年、南助任保と津田島を寄進された大和春日神社が、荘園化のため立券荘号を申請し、翌年に富田荘が正式に成立したという記録が残されている。その後、豊臣秀吉の四国平定によって、1585（天正13）年、蜂須賀家政が阿波国に入部し、城下町建設に着手することとなった。

蜂須賀氏は入部当初、長宗我部氏の旧城である一宮城を居城としていたが、すぐに徳島城に移転した。この理由として、次の三つが考えられる。一つ目は、陸上交通の要衝にあたる点である。阿波の

中でも徳島城が所在する「徳島」は、吉野川南岸を東西に走る伊予街道、海岸線に沿って南北に延びる土佐街道、淡路街道、讃岐街道の起点となっていた。二つ目は、海上防備、海上交通において有利な点である。徳島は、眉山から紀伊水道を見渡せ、かつ網の目のように広がる吉野川の支流が紀伊水道にそのまま流れ込み、また吉野川上流域への水運も開けている。三つ目は、河川を城郭の防備に利用可能な点である。徳島は、吉野川の分流に囲まれた自然の要塞とみることができる。洪水のたびに河成地となる徳島に、城下町を建設できた理由の一つとして、近世初頭の寒冷化に伴う海退現象によつて、吉野川河口付近の三角州が発達したことをあげる意見もある（平井 1995）。

徳島城下町は、城郭の置かれた徳島をはじめとする出来島、寺島、福島、常三島、住吉島の6島と、それらの周りに配置された新町地区、富田地区、佐古地区、前川・助任地区からなる。6島は、吉野川分流の網状河川によって形成されたものであり、そこに「島普請」によって、武家屋敷や役所などが建設された。徳島には、家老・中老・物頭といった上級武士が、それ以外の島には主として中・下級武士が居住した。本学の新蔵キャンパスは徳島に、常三島キャンパスは常三島に所在し、それぞれに存在した武家屋敷は、屋敷主の階級を異にしている。島の周りに配置された地区には、足軽や町人が居住した。

これまで徳島城および城下町跡は、徳島県教育委員会、徳島市教育委員会、徳島県埋蔵文化財センター、そして本調査室によって調査されてきた。これらの調査は、城内と徳島地区、常三島地区を中心に行われ、当時の土地利用の実態解明に貢献してきた。しかし、富田、新町、佐古などの町屋、寺社地区の調査はほぼ行われていないのが現状である。

第2節 常三島遺跡の概要

常三島遺跡では、再開発を原因として、2016年度までに計21次にわたる発掘調査が実施された。結果として、近世徳島城下町常三島地区の様相が、少しずつ明らかにされつつある。常三島キャンパスは、キャンパス中央を南北に走る道路を境として、西エリア（南常三島町1丁目）と東エリア（南常三島町2丁目）に分けられるが、発掘調査は東エリアで17次、西エリアで3次にわたって実施されている。また、キャンパスの北東に位置する総合グラウンドでは、1次の調査が実施されている。本書で報告する地域連携プラザ地点調査は、西エリアで3回目の調査であり、常三島遺跡としては、第19次調査にあたる。そして、フロンティア研究センター地点調査は、東エリアでは17回目の調査であり、常三島遺跡としては、第20次調査にあたる（第3図・第1表）。

これまでの調査では、江戸時代（17～19世紀代）の武家屋敷跡が検出されている。それより前の時期に属する遺構は今のところ、確認されていない。注目すべき成果としては、屋敷境の溝（1・3・4・6・7・9・11・16・17次）、素掘り舟入状遺構（15次）、石組み舟入状遺構（15次）、呪的な性格を有する青銅製品埋納遺構（2次）といった遺構の発見があげられる。また今日、徳島城下町遺跡を代表する遺物に数えられるしめなわ文茶碗の発見の契機となったのも、本遺跡の発掘調査（2次）である。同調査地点からは、投網用錘の鉄型も出土しており、これについての考察も試みられている。最近では、屋敷地内で検出された火葬墓（3・5次）についての検討もされている。以下、それぞれの調査



第3図 常三島遺跡の発掘調査地点

成果とそれに関連する議論について、詳述する。

屋敷境をめぐる議論 常三島遺跡での屋敷境の認識は、第1次調査（工学部実習棟地点）を嚆矢とする。この調査で初めて、調査地で検出された2条の溝が、絵図に示された屋敷地間の境界に該当することが確かめられた（北條・定森編 2006）（第4図）。その後の調査でも検出例が相次ぎ、その成果をもとに、考古学研究者の橋本達也と文献史学研究者の石尾和仁との間で論争が行われた。橋本は、第3次調査（工学部光応用工学科棟地点）での成果をふまえ、常三島地区の屋敷境の基本構造を、中央に土手があり、その両側に溝が掘られるものとみた。そして、18世紀後半における溝の掘削（大型化、二条構造化）を、水害に対する排水効果を考慮しつつも、「所有権の明確化、屋敷地の再編・統制を行う」ためのものと考えた（橋本 1998）。いっぽう石尾は、こうした溝の掘削を、新川掘り抜き（吉野川直流化）に起因とする洪水に対する排水効果を目的とするものとみて、橋本の見解を批判した（石尾 1999a）。これに対し、橋本は溝の掘削の主たる目的は「所有権の明確化と公共事業として土木事業を行う」とことと再度主張したが（橋本 1999）、石尾は藩主によって下賜された「拝領屋敷」に「所

第1表 常三島遺跡発掘調査一覧

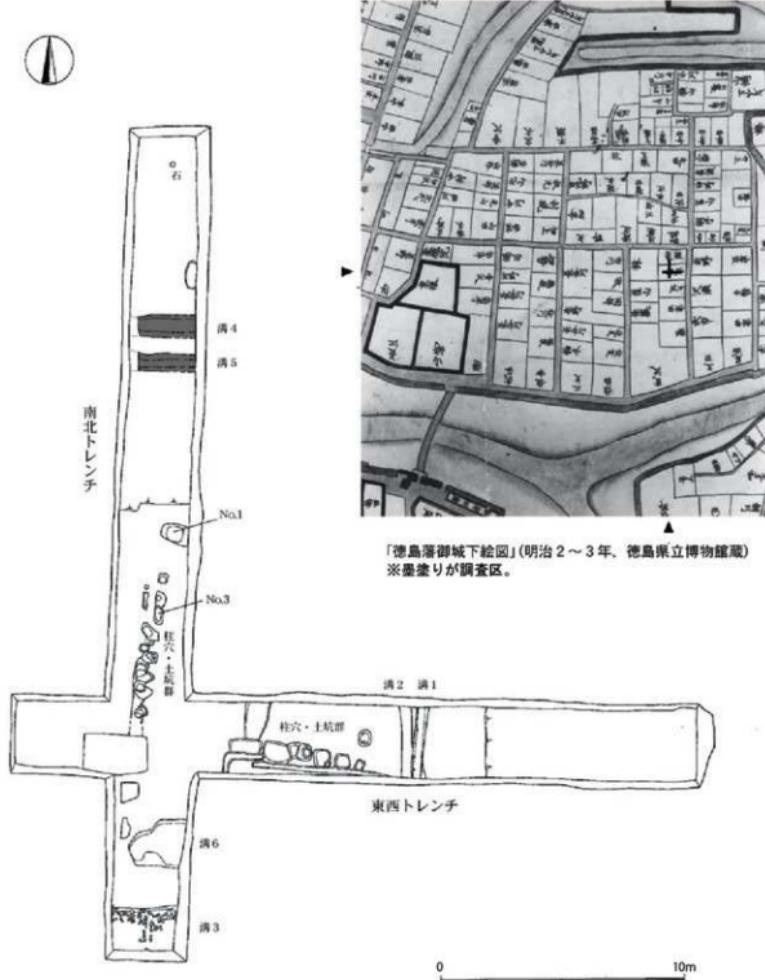
調査名	調査実施年 (年度)	調査地点	調査面積 (m ²)	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)
第1次調査	1992年 (平成4年度)	工学部実習棟	160	9月10日～9月20日 (11日間)	徳島大学	東・潮 ○北條芳隆
第2次調査	1993年 (平成5年度)	地域共同研究センター	373	10月1日～10月30日 (1ヶ月)	徳島大学	東・潮 ○北條芳隆
第3次調査	1995年 (平成7年度)	光応用工学科棟	783	8月22日～8月25日 (3ヶ月)	徳島大学	東・潮 ○橋本達也
第4次調査	1995年 (平成7年度)	工業会館	400	12月1日～1月31日 (2ヶ月)	徳島市教委	勝浦康守
第5次調査	1996年 (平成7年度)	光応用工学科棟・追加	165	4月17日～5月30日 (1ヶ月半)	徳島大学	○橋本達也
第6次調査	1996年 (平成7年度)	サテライト・ベンチマーク・ ビジネス・ラボラトリ	619	6月6日～8月10日 (2ヶ月)	徳島大学	○橋本達也 中村・豊
第7次調査	1997年 (平成8年度)	機械工学科棟	1,800	7月24日～11月8日 (3ヶ月半)	徳島大学	○橋本達也 中村・豊
第8次調査	1997年 (平成9年度)	総合情報処理センター	687	3月28日～6月10日 (2ヶ月半)	徳島大学	北條芳隆
第9次調査	1998年 (平成9年度)	共同溝	178	7月22日～9月4日 (1ヶ月半)	徳島大学	○中村・豊 北條芳隆
第10次調査	1999年 (平成10年度)	共通講義棟I	900	5月10日～6月7日 (1ヶ月)	徳島大学	○中村・豊
第11次調査	1999年 (平成10年度)	共同溝II-4	200	6月28日～8月11日 (1ヶ月半)	徳島大学	○北條芳隆 橋本達也 中村・豊
		共同溝II-1 共同溝II-2	171 300	7月15日～5月26日 (10ヶ月)	徳島大学	○北條芳隆 ○橋本達也
第12次調査	2000年 (平成11年度)	総合研究実験棟	1,000	7月24日～11月27日 (4ヶ月)	徳島大学	北條芳隆
第13次調査	2001年 (平成12年度)	総合教育研究棟 (共通講義棟II期)	1,110.6	3月15日～6月8日 (3ヶ月)	徳島大学	○中村・豊 北條芳隆
第14次調査	2002年 (平成13年度)	総合グラウンド管理棟 器具庫の配水管	100	2月21日～3月1日 (2週間)	徳島大学	北條芳隆
第15次調査	2002年 (平成14年度)	工学部電気電子棟	253	5月20日～8月5日 (2ヶ月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村・豊
第16次調査	2002年 (平成14年度)	総合科学部3号館	532	7月29日～10月31日 (3ヶ月)	徳島大学	○定森秀夫 中村・豊
第17次調査	2003年 (平成15年度)	工学部建設(総合研究)棟	381	4月28日～7月17日 (2ヶ月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村・豊
第18次調査	2007年 (平成19年度)	総合科学部1号館エレベーター	35	1月16日～1月21日 (6日間)	徳島大学	中原・計
第19次調査	2013年 (平成25年度)	地域連携プラザ	458	6月6日～7月1日 (1ヶ月)	徳島大学	○端野晋平 遠部慎 山口雄治
第20次調査	2013年 (平成25年度)	フロンティア研究センター	756	6月27日～9月11日 (2ヶ月半)	徳島大学	○端野晋平 遠部慎 山口雄治
第21次調査	2014年 (平成26年度)	地域創生・国際交流センター	40	5月28日～6月2日 (4日間)	徳島大学	○端野晋平 三坂一哉

有権」という論理自体が成立しえないとして、これを退けた(石尾 1999b)。

徳島地区に位置する旧動物園跡地点の調査を行った勝浦康守は、調査の結果をふまえ、石尾・橋本が主張するような屋敷境溝の機能を、城下町全体での普遍的なものとして語ることはできないとした。そして、同地点で検出された、2条の溝に挟まれた「緩衝帯」を、屋敷間を通る「路地」とみなした(勝浦 2000)。

その後、橋本達也は、総合グラウンドの北西部に所在する土手を紹介し、これを絵図に描かれた常三島地区北東部の外縁ラインに相当するものとみなした。そして、この土手に沿った溝と、土手の上部に植えられた松の存在を認め、土手・溝・松とがセット関係にあったことを指摘した。さらに、こうした現象が、常三島キャンパス内での調査で確認されていた屋敷境の構造と一致すると述べた(橋本 2001a)。

これに対し、北條芳隆は、橋本が城下町境界遺構と個別屋敷地の境界構造との共通性を説いた点を



第4図 工学部実習棟地点の屋敷境溝（縮尺：1/200）

グレー塗りが屋敷境溝。北條・定森編（2006）より引用・改変。

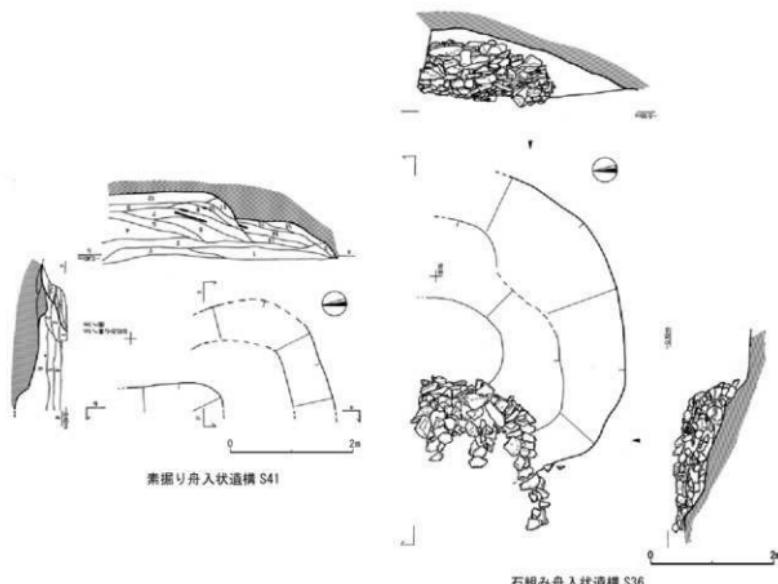
問題視した。そして、屋敷境造構の調査所見を検討したうえで、屋敷境の基本構造は、2条の溝とそれに挟まれた掘り残し部分であり、掘り残し部分上に土手、さらに土手と松のセット関係を積極的に想定しうる証拠は得られていないと批判した。また、溝出土遺物の再検討結果をふまえ、それまで一律に18世紀後半ごろとみなされていた溝の大規模化・二条化の画期を、一部の地点においてはそれを認めつつも、おしなべてみた場合は、18世紀初頭から前半とみなすのが妥当であるとした。溝の機能については、石尾（1999a）と同じく排水用とみなし、大規模な溝の埋土中から竹の根株が多数発見されている事実から、溝とともに竹垣が屋敷境の基本構造として重要であると説いた（北條芳隆2001）。

この竹垣の重要性は、北常三島町で聞き取り調査を行った橋本が、現在残された竹垣の存在を示したうえで、語っている。聞き取り調査の結果によれば、むかし（戦前）は、大水時に屋敷内部のものが外部へと流出するのを防ぐために竹垣が設けられていたという（橋本2001b）。

2006年には、第7回四国城下町研究会が「近世の屋敷境とその周辺」というテーマで開催され、その時点までの研究の総括が行われた。その中で、常三島地区を担当した北條芳隆は、それまでの研究で明らかとなつた事実を整理している。以下、それを引用する。

- 常三島地区において、道路に面しない部分の屋敷境には2条の溝が掘られるという形態が基本である。道路に面した部分についてはなお検討を要する。
- 溝は17世紀代から幾度かの掘り返しを経て幕末期まで推移するというありようが基本である。すべての地点において当初から2条であったのかどうかはなお検討を要するが、18世紀代において開削され直す現象や、2条の溝が揃う地点は確かに目立つ。
- これらの溝が排水機能を有したことにも動かない。
- 2条の溝に挟まれた間の「土手」状の掘り残し部分がおそらく境界である。この掘り残し部分は「緩衝帯」として把握され、路地として利用された可能性もあるが、どちらの屋敷にも属さない（なお普遍化はしないが、この掘り残し部分に松の植栽があった事実もある）。
- 「土手」状の高まりは、両側を溝によって掘削された結果、見かけ上の「土手」として認識されるものであり、たとえば幅数mにも達する大規模な溝を掘削した後に、改めて中央部に土を盛り上げ直した「堤状の人為的構築物」などと解釈しうる余地はない。
- 各屋敷の外縁部には竹が生け垣として植栽される場合が多かつたと判断される。竹が植栽される理由は、洪水や増水への対処策が本地区では切実な課題であったからである。
- 竹が植栽される背景に洪水対策が想定される以上、これと並行して2条の溝が掘削される理由としては、同様に洪水対策としての意味を想定するのがもっとも自然である。溝と竹の性格を切りはなして別立てで論じるべき根拠はない。

また北條は、常三島地区における治水対策の問題についても言及した。すなわち、18世紀においての別宮川（現・吉野川）への流路変更とそれに伴う城下域への水量増加と、屋敷境構や排水路、「調整池」の掘削との間の関連性について、今後、関連構造の出現時期の同時性と広域性の点で検証する必要性を説いた。さらに、常三島武家屋敷を景観的側面からみて、あえて2条の溝とし、掘り残し部分を間に設けている点に、中世の居館との類似性を見出し、その背後に中世的ないし封建的屋敷觀が



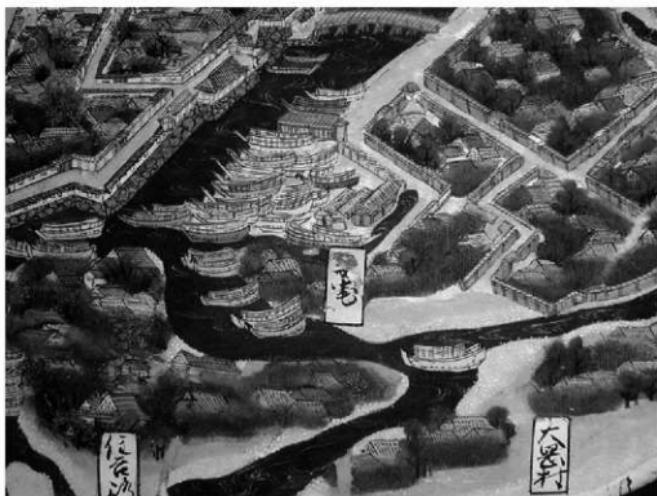
第5図 工学部電気電子棟地点の舟入状遺構（縮尺：1/80）

定森編（2005）より引用・改変。

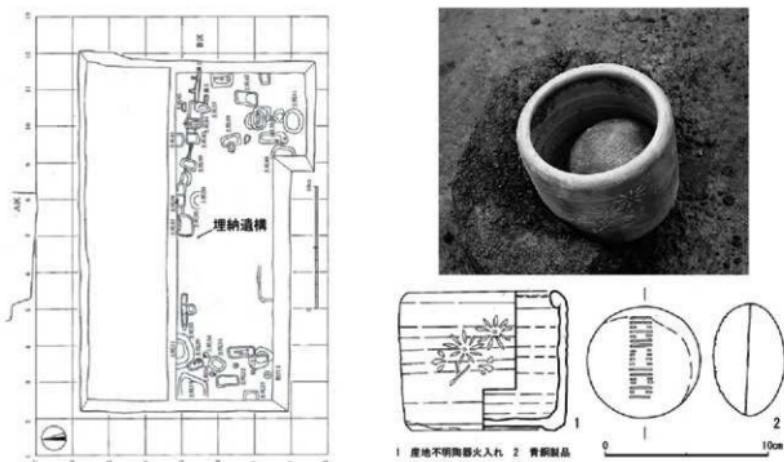
存在したという仮説を提示した（北條芳隆 2006b）。

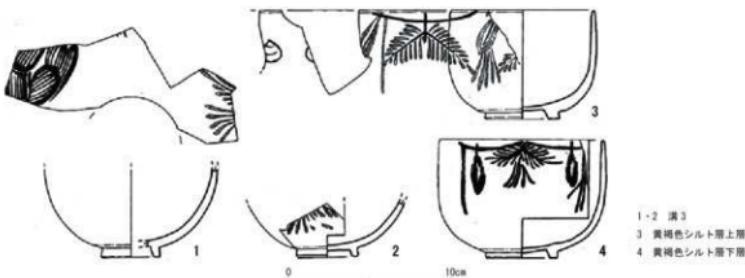
舟入状遺構の発見 第15次調査（工学部電気電子棟地点）で発見された素掘り舟入状遺構、石組み舟入状遺構の発見もまた、屋敷境溝の調査と並んで重要である（定森編 2005）（第5図）。現在の工学部付近は「安宅島」と呼ばれ、『徳島藩領国図屏風』や『忠英様御代御山下画図』（推定寛永年間、国文学研究資料館史料館蔵）などに描かれた徳島藩の船置所があったと推定される（第6図）。17世紀前半から中頃の素掘り舟入状遺構は、この船置所に所在した船着場と考えられている。この船置所は、助任川の堆積が厚くなり、船の航行に支障が出始めたため、福島安宅へと移設されることとなつた（根津 2005）。初期船置所の移設後、旧安宅島は宅地化され、民澤家の屋敷地となる。このことは『阿波國德島城之図』（1646年、個人蔵）で確認される。この地点を調査した定森秀夫は、17世紀後半から18世紀の石組み舟入状遺構は、絵図には描かれていないものの、初期船置所の施設を再利用して、屋敷地内に舟入を造り、私的な水運を行ったものとみている（定森 2005）。文献史学の立場から、安宅の移転時期の諸説を検討した根津寿夫は、1641（寛永18）～1642（寛永19）年を有力な時期とみなし、さらにこの移転を一国一城令発令後の、国内の動きと連動した城下町再編のなかに位置づけた（根津 2005）。

扁球形青銅製品埋納遺構の発見 第2次調査（地域共同研究センター地点）では、小規模な土坑内



第6図 『徳島藩領国図屏風』安宅島部分拡大

第7図 地域共同研究センター棟地点の埋納遺構と出土遺物
北條・定森編（2006）より引用・改変。



第8図 地域共同研究センター棟地点出土のしめなわ文茶碗

1~3: 色絵 4: 鉄絵 北條・定森編(2006)より引用・改変。

に完形の陶器の火入れを埋納し、その中に扁球形を呈する青銅製品を納めたうえ、この青銅製品と火入れを砂で埋めた状態の遺構が発見された（北條・定森編 2006）（第7図）。この遺構については、北條芳隆と定森秀夫の二人によって、解釈が示されている。

北條は、遺構の所属時期は幕末ごろとみたうえ、地鎮祭の遺構として一般的に認知されているものとは異なるものの、呪的な性格を帯びたものと考えた。そして、遺構の位置関係をみて、埋納が建物の縁に沿う場所を選んだ可能性を指摘した（北條・安山 2006）。

定森は、青銅製品に彫り込まれた八卦に、「家内安全」などの吉ないし善意の意図を読み取り、北條の示した解釈に加え、当地を拝領した佐野家で、家内安全などを祈願して家の周辺部に青銅製品が埋納されたという解釈も示した（定森 2006）。

しめなわ文茶碗をめぐる議論 今日、徳島城下町遺跡を代表する遺物の一つに数えられるしめなわ文茶碗の発見は、常三島遺跡第2次調査（地域共同研究センター棟地点）を契機とする（北條・定森編 2006）（第8図）。しめなわ文茶碗の研究は、この調査に関わった北條ゆうこによって先鞭がつけられた。

北條は、徳島県内の出土例を施文技法によって、色絵・鉄絵・鉄絵+染付・鉄絵+色絵の4つに分類し、そのうち、色絵資料については編年案を提示した。そして、民俗記録や文献史料の検討によって、しめなわ文茶碗が正月のオオブクチャ行事に使用される碗であり、阿波の藩主がオオブクチャを飲み、しめなわ文様をもつ「大福茶碗」を使用していたことを突き止めた。また徳島藩の藩士宅でも、正月にオオブクチャを飲んでいたことを文献史料で確かめ、屋敷跡から多数出土するしめなわ文茶碗をそれに用いたものと捉えた。さらに、しめなわ文茶碗の変遷過程と聞き取り調査で得られた伝承をもとに、徳島藩では年頭礼の際に、しめなわ文茶碗でオオブクチャを藩士達に振る舞い、その茶碗を引き出物のように与えていたという仮説を提示した。そして、しめなわ文茶碗の動向と徳島藩の動向とを次のように対応させた。すなわち、18世紀後半の数量の増加、分布の拡大、文様の定型化などの変化を10代藩主重喜の藩政改革の時期に、19世紀前半の需要・供給安定期を11代藩主治昭の改革推進期に、19世紀後半の規格品の粗悪化が進む供給側の混乱期を天保以降から幕末期の藩制弱体化期

に、という具合である。また、こうしたオオブクチャ行事は、君主と家臣の間の連帯意識を強固なものにする装置として期待された儀式であり、オオブクチャワーンはそのシンボルであったのではないかと考えた（北條ゆうこ 1998）。

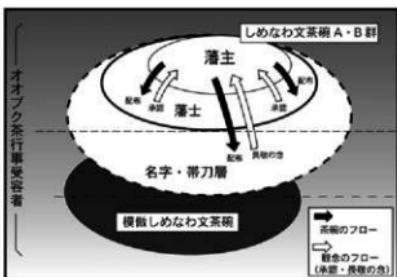
続いて日下正剛は、新蔵町1丁目遺跡出土の陶磁器碗類における京・信楽系陶器、しめなわ文茶碗の比率を検討した。この結果、明らかとなつたしめなわ文茶碗の高い比率から、この確を決して希少性のある特殊器種ではなく、量産品ともいるべきものとみなしめた。また、しめなわ文茶碗の器形を10種類に分類し、さらに他の京・信楽系九碗をも分類し、比較することによって、両者に共通する器形の有無を検討した。その結果、認められたしめなわ文茶碗としてしかみられないタイプは、18世紀後半以降に徳島向け特注品として製作されたものである可能性を考え、このことが生産地の京都から周辺の信楽などへの移動・拡散という問題とも対応するとした（日下 2000）。

その後、しめなわ文茶碗の再検討を行った北條は、近世の徳島藩では正月儀礼などの場で、オオブクチャワーンが藩士へ下賜されていたことを、文献史料で確かめた。そして、北條ゆうこ（1998）とは異なり、A群（鉄絵+呉須、鉄絵）とB群（色絵）とに大別し、文様構成によって細別する分類案を提示し、器形とともに変遷を示した。そのうえで、系統差と生産地の問題にも言及し、しめなわ文茶碗の生産体制が京都から信楽へとシフトしたと考えた（北條ゆうこ 2001）。

続いて北條は、徳島県内出土資料の集成を再度行つたうえで、北條ゆうこ（2001）と同じく、文様による分類の修正案を提示し、それと器形との関係を検討した。そして、大別分類のA群（鉄絵、呉須による施文）とB群（色絵による施文）を系譜の違いととらえ、18世紀半ばに京都において生産が始まつた双方の系譜が、18世紀後半には信楽でも生産が開始され、18世紀末に降ると徳島藩の市場では信楽産が独占するまでになり、以後19世紀半ばまでその体制が継続するという過程を示した（北條ゆうこ 2002）。

以上の北條ゆうこ、日下正剛の研究成果を受けた北條芳隆は、しめなわ文茶碗の歴史的評価を以下のように総括した。

- ・しめなわ文茶碗は、徳島藩における藩主在藩の年の正月年頭礼時に、藩主が藩士に振舞うためにあつらえられた特製茶碗である。
- ・それは隔年ごとに初期には京焼窯元へ、後期には信楽焼窯元へと特注され一括入手された。
- ・年頭礼のために登城し、藩主お目見えを果した藩士達は、一連の行事の終了後、賜り物の一つとして茶碗を各自の居宅に持ち帰つた。こうした行為は、18世紀以降から幕末期まで隔年ごとに繰り返されたので、徳島藩士の各屋敷地には多量のしめなわ文茶碗が蓄積されることとなつた。
- ・しかし、個々の茶碗の使用期間は、藩主在藩の次の年頭礼を超えることはなく、常に新規の賜り物によって刷新され続ける性格のものであつた。



第9図 しめなわ文茶碗をめぐる威信財交換モデル
北條（2006）より引用。

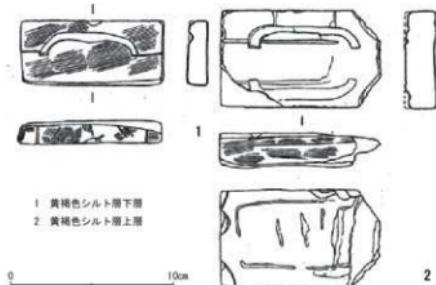
- こうした年頭行事を考案したのは、文化人としても著名で、京文化への憧憬が強かったとされる10代藩主蜂須賀重喜であった可能性が高い。

こうした評価にもとづいて、北條は藩主と藩士との間で成立した「威信財交換」を媒介・表象する物品として、しめなわ文茶碗を位置づけた。そして、藩士層および名字帯刀を許された町人層、それ以外の町人層といった徳島城との距離感や藩政下での格差が、城下に居住する人々の間で、しめなわ文茶碗を介して、隔年ごとに再確認され続けたという図式を提示した（北條芳隆 2006a）（第9図）。

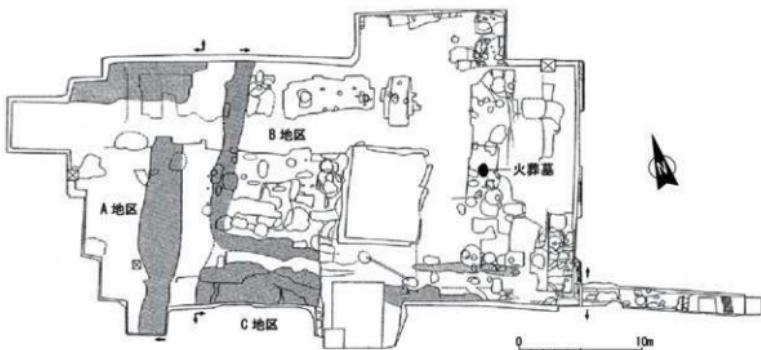
投網用錘鋲型の意味するもの 地域共同研究センター棟地点では、投網用の鉛製錘「イワ」の鋲型が2点出土した（北條・定森編 2006）（第10図）。同地点を調査した北條芳隆は、こうした漁具が武家屋敷から出土することの背景として、1) 余暇利用の一形態ないし余技、2) 補助食料の獲得といった二つの可能性をあげた。このうちの2) のケースは、網漁を規制する文献記録（安永6〔1777〕年～寛政年間）からも、その存在がうかがえるとした。そして、初期の規制範囲がのちに徳島城下近辺まで徐々に縮小され、かつ当初、許されていた投網漁が最終的には規制対象に加えられた背景に、18世紀後半の徳島藩が、藩士に対する網紀衛正にそれまで以上に力を入れ始めたことを読み取った。さらに、こうした動向はしめなわ文茶碗の導入と変質化とも密接に関係し、10代藩重喜の藩政改革と廃位（あるいは息子・治昭による改革）とも連動していると考えた（北條芳隆 2006a）。

屋敷地内で発見された火葬墓 第3・5次調査（工学部光応用工学科棟地点）では、17世紀代の火葬墓が屋敷地内より検出された（徳大寺文委・徳大寺文調 1997）（第11図）。最近になって、本調査室では火葬墓とその出土遺物の整理作業を実施し、その結果をもとに、筆者と米元史織は、造墓の背景と火葬墓の系譜について考察した。その結論は、何らかの特別な事情があつて（しかも消極的な理由で）、屋敷地内で成年前半・男性の被葬者が火葬されたのではないかということ、仏教でいう「頭北面西」を想起させる埋葬姿勢と火葬のあり方は室町時代からみられる習俗と系譜を同じくする可能性があるということであった（端野・米元 2015）。

以上、常三島遺跡での調査成果とそれに関連した議論を概観した。議論は様々な遺構・遺物を対象とし、幅広い課題に取り組んだものであり、アプローチ法としては、近世遺跡ということもあって、物質資料だけではなく、絵図、文書などの文献史料を積極的に活用した点が特徴といえよう。さらに、議論の範囲は常三島にとどまらず、徳島城下町全体を視野に入れ、藩政の動向との関係にまで及んでいる。こうした研究成果の多くは、発掘調査報告書刊行の過程で得られたものであるが、常三島遺跡の報告書はいまだに未刊行のままとなっているものが多い。今後、これらの報告書を刊行する過程で、研究のさらなる展開が期待できる。そして考古学の立場から、幕藩体制下における近世城下町研究の



第10図 地域共同研究センター棟地点出土の投網用錘鋲型
北條・定森編（2006）より引用・改変。



第11図 工学部光応用工学科棟地点の火葬墓の位置

徳大埋文委・徳大埋文課（1997）より引用・改変。

貴重なケーススタディを提供できるものと考えられる。

（端野晋平）

文献

- 石尾和仁, 1999a. 徳島城下町の考古学的研究. 史窓 29, 2-22.
- 石尾和仁, 1999b. 屋敷境の二条の構をめぐって—橋本報告に寄せて—. 徳島城下町通信 創刊号, 7-10.
- 大矢雅彦, 1993. 河川地理学. 古今書房. 東京.
- 勝浦康守, 2000. 徳島城下町遺跡－旧動物園跡発掘調査－. 徳島大学総合科学部歴史学研究室・考古フォーラム蔵本（編）, 四国・淡路の陶磁器－生産と流通 I-1. 徳島城下町研究会, 徳島. pp. 179-183.
- 日下正剛, 2000. 新蔵町1丁目遺跡出土の注連縄文茶碗. 日下正剛（編）, 新蔵町1丁目遺跡企業局総合管理事務所 地点II. 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター, 徳島. pp. 207-218.
- 定森秀夫, 2005. 調査の成果. 定森秀夫（編）, 常三島遺跡 1. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 10-59.
- 定森秀夫, 2006. 後記－特殊遺物の解釈を兼ねて－. 北條芳隆・定森秀夫（編）, 常三島遺跡 2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 90-91.
- 定森秀夫編, 2005. 常三島遺跡 1. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 徳島県教育委員会, 2006. 徳島県遺跡地図 第2分冊（地図編）. 徳島.
- 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 1997. 徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 工学部光応用工学科棟. 徳島.
- 根津寿夫, 2005. 安宅の移転について. 定森秀夫（編）, 常三島遺跡 1. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 60-71.
- 端野晋平・米元史織, 2016. 常三島遺跡の近世火葬墓. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 2, 37-51.
- 橋本達也, 1998. 江戸時代の城下町を発掘で探る. 川と人間. 溪水社. 広島. pp. 278-293.
- 橋本達也, 1999. 徳島城下町の構造. 関西近世考古学研究会・考古フォーラム蔵本（編）, 京焼－消費地出土の様相－.
- 関西近世考古学研究会・考古フォーラム蔵本, 徳島. pp. 1-18.
- 橋本達也, 2001a. 常三島の「土手」. 四国徳島城下町通信 6, 14-16.

- 橋本達也, 2001b. 常三島の「竹垣」. 四国徳島城下町通信 8, 9-11.
- 平井松午, 1995. 城下町起源の都市徳島. 寺戸恒夫（編）, 徳島の地理. 徳島地理学会, 徳島. pp. 179-181.
- 北條ゆうこ, 1998. 近世阿波のしめなわ文茶碗. 徳島県立博物館研究報告 8, 67-93.
- 北條ゆうこ, 2001. 徳島出土のしめなわ文茶碗. 関西陶磁史研究会（編）, 近世信楽焼をめぐって. 関西陶磁史研究会, 京都. pp. 174-182.
- 北條ゆうこ, 2002. しめなわ文茶碗再考. 徳島考古学論集刊行会（編）, 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島. pp. 765-779.
- 北條芳隆, 2001. 土手や松は過大評価できない. 四国徳島城下町通信 7, 1-5.
- 北條芳隆, 2006a. 総括. 北條芳隆・定森秀夫（編）, 常三島遺跡 2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 79-89.
- 北條芳隆, 2006b. 徳島城下町の屋敷焼 1－常三島地区－. 四国城下町研究会（編）, 近世の屋敷焼とその周辺. 四国城下町研究会, 徳島. pp. 9-15.
- 北條芳隆・定森秀夫編, 2006. 常三島遺跡 2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 北條芳隆・安山かおり, 2006. 地域共同研究センター地点の調査成果. 北條芳隆・定森秀夫（編）, 常三島遺跡 2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 30-78.

第2章 第19次調査（地域連携プラザ地点）

第1節 調査の経過と概要

1. 調査に至る経緯

2012年度に、常三島キャンパスの北西部に位置する総合科学部2号館の音楽棟と美術棟の間に、地域連携プラザ新館の計画が示された。常三島キャンパスの位置する常三島地区は、近世徳島城下町跡の一つとして、周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されている。『御山下島分絵図』(安政年間、個人蔵)などの実測分間絵図によれば、建設予定地は二つの武家屋敷地をまたぐ地点にあたることが明らかであり、範囲内に近世武家屋敷に関係する遺構・遺物の存在が予測された。そこで、2013年6月6日から調査員3名が担当して、約1か月間の予定で発掘調査を実施することとなった。調査面積は458m²である。

2. 調査組織

調査組織は以下の通りである。

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査担当 端野晋平（調査主任）

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）

調査補助 古川裕美・前田千夏（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

3. 調査の経過（第12図）

6月6日から重機掘削を開始し、11日からは調査区壁の精査、側溝の掘削を開始した。重機によって搅乱部分を除去した結果、砂層が調査区の全面に現れ、これを遺構検出面として、調査を進めることにした。12日は台風接近のため、作業を中止した。13日からは重機で除去できなかった搅乱土を人力で掘削しつつ、遺構の検出に努めた。そうした中で、調査区の北側において東西方向に走る1条の溝（SD1）を、調査区西壁・東壁と平面とで確認した。17日からは調査区平面図・土層断面図の作成と、それらの写真撮影を開始した。20～24日までは雨天のため、作業を中止した。25日からSD1の掘削を始めたが、26日はまたしても雨天のため、作業を中止せざるを得なかった。27日はSD1の掘削を終え、



第12図 作業風景

全景写真のための清掃を開始した。28日はまず全景写真の撮影を行い、その後で調査区平面図・土層断面図の作成、遺構の写真撮影を行った。それと同時に、撤収作業を開始した。7月1日には撤収作業を終え、すべての調査を完了した。

4. 調査の概要

本調査地点では1枚の遺構面が調査され、調査区の北側で東西方向に延びる1条の溝が検出された。この溝は、基盤となる整地層の時期、埋土から出土した遺物の時期などからみて、17世紀代に掘削され、19世紀後半には埋没していたものと判断される。溝の底面からは、土留め板の支え杭と思われる杭列が検出された。遺物は、溝と包含層から、陶磁器・土器、金属製品、ガラス製品、瓦、石製品、木製品が、コンテナで11箱分出土した。

第2節 調査の記録

1. 調査地点の位置

本調査地点は、徳島大学常三島キャンパスの北西部に位置する（第13図）。南東側には近世武家屋敷地形成以前の砂層が検出された第18次調査地点（総合科学部1号館エレベーター地点）、屋敷境溝などの遺構が検出された第16次調査地点（総合科学部3号館地点）、南側には近世常三島地区の盛土の南限が検出された第21次調査地点（地域創生・国際交流会館地点）がある。現在の地図と近世に作成された絵図とを重ね合わせてみると、本調査地点は二つの屋敷地を横断する場所に位置することがわかる。作成時期が比較的限定可能で、かつ屋敷主の名が記された絵図と、『徳島藩土譜』（宮本編1973）によって把握された、南北二つの屋敷地の主（禄高）の変遷は、以下の通りである²¹⁾。

元禄4年（1691）『御山下画図（網矩様御代御山下画図）』（国文学研究資料館史料館蔵）

（北側）山川家（禄高不明）（南側）長坂家（禄高不明）

享保年間（1716～1735）『御城下絵図』（徳島大学附属図書館蔵）

（北側）倉知家（200石）（南側）寺沢家（350石）

天明年間（1781～1789）『御山下画図』（個人蔵）

（北側）倉知家（200石）（南側）寺沢家（350石）

文化・文政年間（1804～1830）『徳島御山下絵図』（徳島県立図書館蔵）

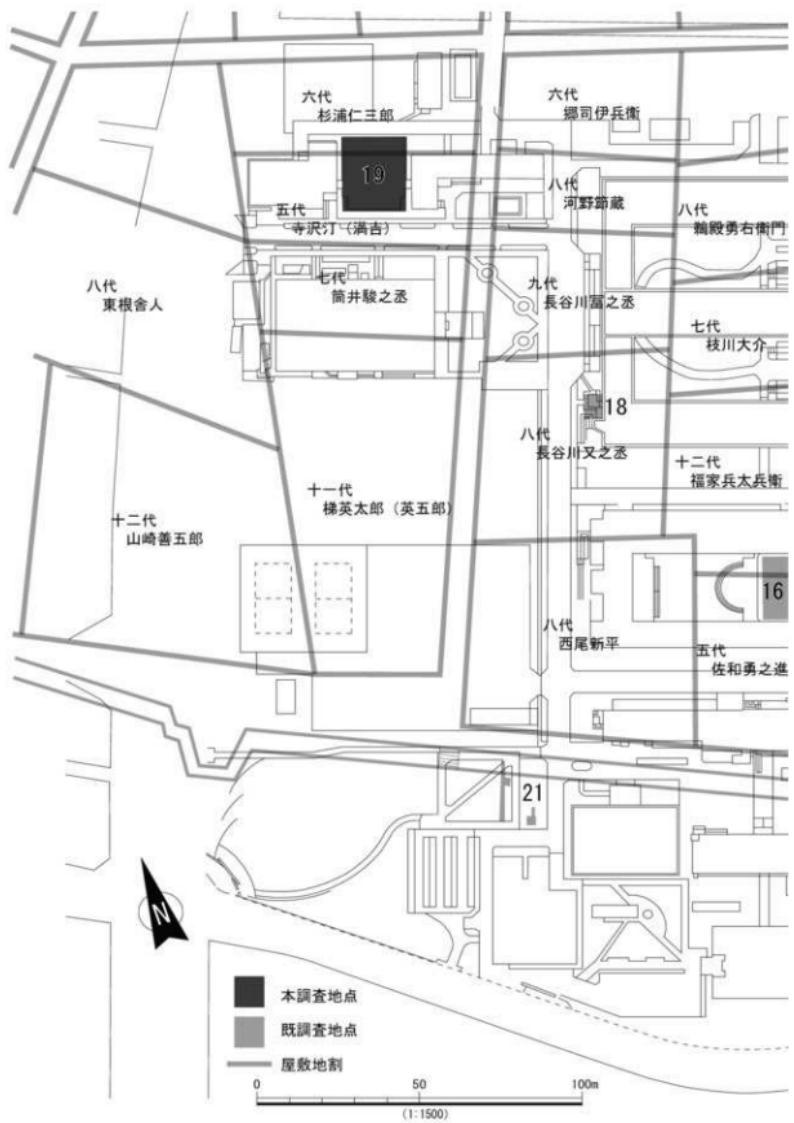
（北側）杉浦家（200石）（南側）寺沢家（350石）

安政年間（1854～1860）『御山下島分絵図』（個人蔵）

（北側）杉浦家（200石）（南側）寺沢家（350石）

明治2～3年（1869～1870）『徳島藩御城下絵図』（徳島県立博物館蔵）

（北側）杉浦家（200石）（南側）寺沢家（350石）



第13図 調査地点の位置

屋敷地割・屋敷主名は『御山下島分類図』(安政年間、僧人蔵)と徳島藩士譜(宮本編 1973)をもとに作成。

2. 基本層序

本調査地点の基本土層は3層に分けられる。以下、調査区西壁の土層断面（第14・15図）にもとづいて詳述する。なお、現地表面は標高約1.4mであり、そこから標高0.4～-0.2m辺りまでは近代以降の搅乱を受けていた。

I層：暗灰黄色（2.5Y5/2）細砂からなる。上面の標高は0.2m前後、厚さは10～25cmを測る。近世の整地層と考えられる。上面では近世の屋敷境溝が検出された。

II層：黄褐色（2.5Y5/3）細砂からなる。上面の標高は0.1～0.2m、厚さは15～30cmを測る。地山と考えられる。

III層：暗オリーブ色（5Y4/3）粗砂からなる。上面の標高は0.0m前後を測る。地山と考えられる。

3. 遺構と遺物

SD1（第16～21図）

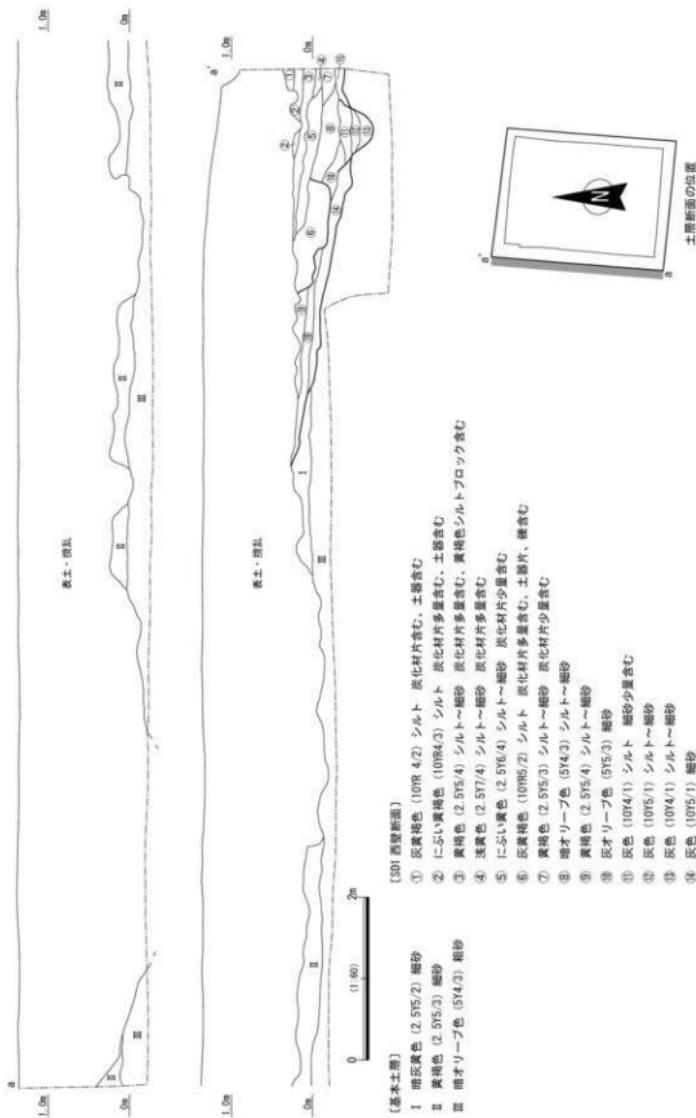
調査区の北部に位置する溝である。検出面の標高は-0.2～-0.6mで、幅約3m、東西に約18.0m分検出した。断面形は、西壁土層断面で尖底の浅い皿形を呈し、深さ1.0mを測る。底面の標高は西側で-0.63～-0.69m、東側で-0.70～-0.74mを測り、全体的にみて東側がやや低くなっている。このことからみて、溝の機能時、水は西から東へと流れている可能性があるが、高低差がわずかにすぎないため、周囲の調査により検証する必要がある。

埋土は、西壁土層断面で15層からなる。溝が掘削された後、灰色細砂・シルトからなる⑪・⑫層が堆積する。これらの層を切って尖底状に再掘削した後、⑬→⑭→⑮→⑯層の順に堆積する。これらの層は、灰色系のシルトあるいは細砂からなる。⑰～⑲層は、溝の機能時の自然堆積層と考えられる。⑳・㉑層が自然堆積した後、さらに再掘削され、そこに炭化材片を多量に含む㉒層が堆積するが、これは埋土からみて溝ではなく、性格の異なる別の遺構の可能性がある。㉒層に加え、炭化材片や黄褐色シルトブロックなどを含む黄褐色系のシルトあるいは細砂からなる㉓～㉔層は、人為堆積層の可能性が高い。

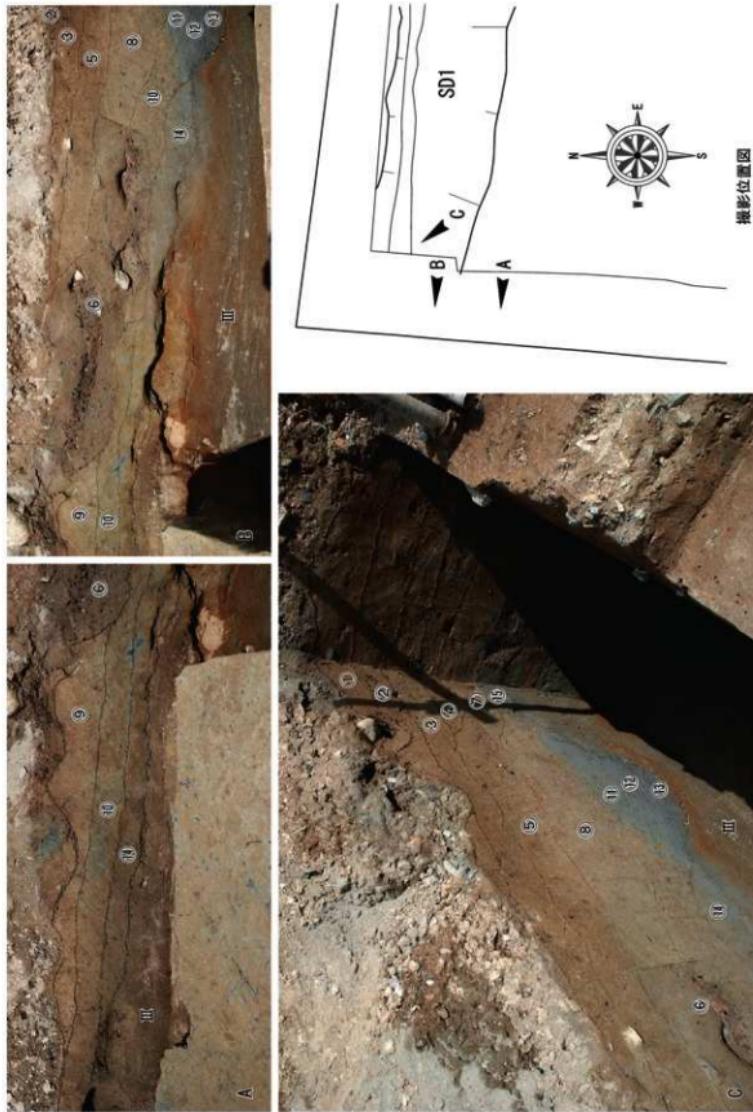
SD1は、㉓～㉔層を下層、それより上の層を上層として、掘削と遺物の取り上げを行った。上層からは、肥前系磁器、肥前系陶器、土師質土器が出土した（第20図）。肥前系磁器の広東碗（第20図1）は18世紀後半～19世紀前半、肥前系陶器（第20図5）は17世紀前半のものである。下層からは、瀬戸・美濃系陶器、肥前系陶器、土師質土器が出土した（第21図）。瀬戸・美濃系陶器の天目碗（第21図1）、肥前系陶器の絵唐津の皿（第22図2）は、17世紀代のものである。このように、上層が下層より新しい遺物を含んでいることは注意される。

この溝は、17世紀前半のものとみなせる初期伊万里の皿（第29図90）が出土したI層（整地層）を切っていることから、17世紀前半以降のどこかの時期で掘削されたとみられる。搅乱には、師範学校時代の建物基礎や建築部材などと思われる石材（緑色片岩）や木材が含まれていたことからみて、1898年に同学校関係の建物が建てられる前には、この溝は埋没していたものと考えられる。これらのことと総合すると、この溝は17世紀代に掘削され、19世紀後半には埋没していたものと考えられる。

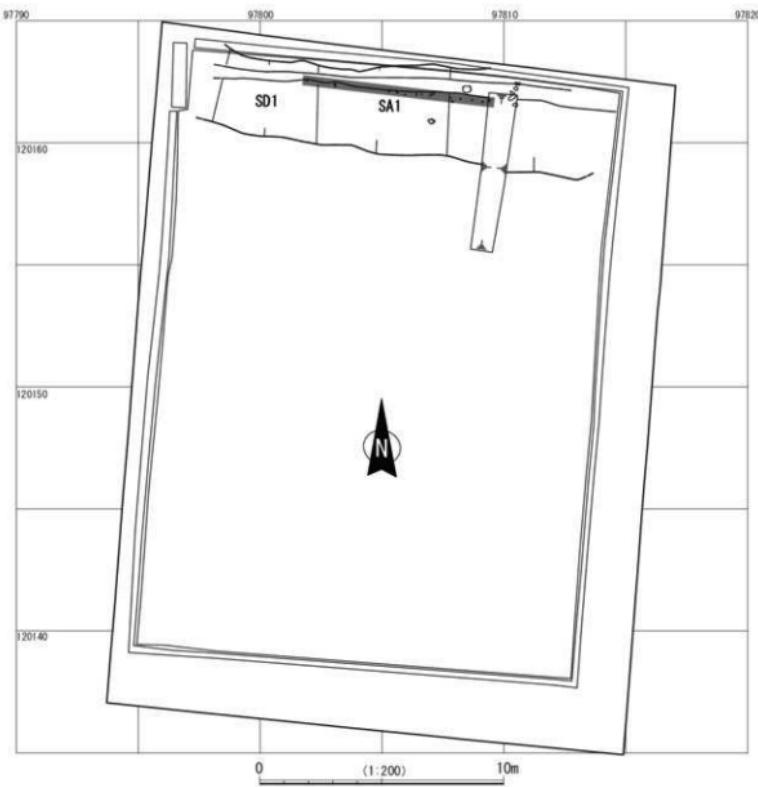
なお、これまでの本遺跡の調査では、屋敷境が二条の溝に挟まれた掘り残し部分によって表現され



第14図 調査区西壁土質断面



第15図 調査区西壁土壌断面写真



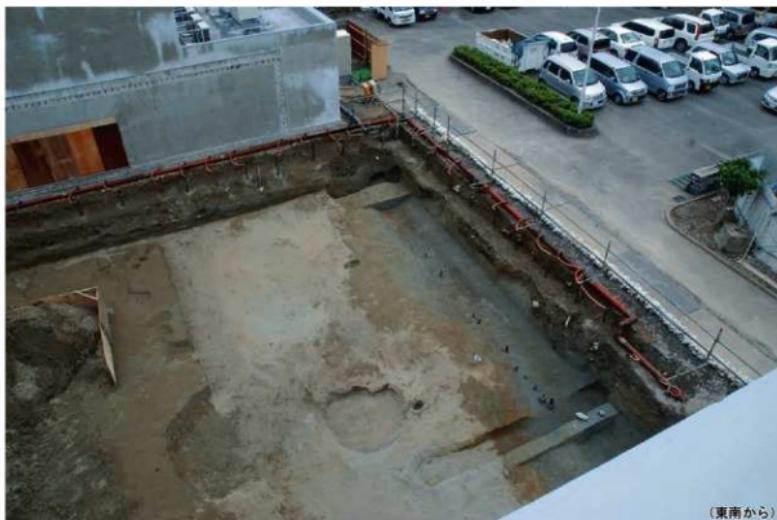
第16図 検出遺構全体図

ていることが明らかとなっている。本調査地点付近に対しても、この原則を当てはめるならば、調査区外の北側に、もう1条、東西方向の溝が存在した可能性がある。

SA1（第22・23図）

SD1の南側下端付近で検出された杭列である。合計16本の杭が、SD1の下端と軸をそろえて、約7.5mにわたって東西に列をなす。杭の間隔は、最大で杭3・4間の219cm、最小で杭2・3間の9cmを測るが、多くが20～50cmに収まる。杭2・3間に加え、杭9・10間は14cm、杭11・12間は17cmと小さく、かつそれらの軸は南北に振れている。何らかの機能的な意味がありそうである。杭の太さは3～13cm程度を測る。第1次調査地点（工学部実習棟地点）では、溝にともなって土留めの板を支える杭列が検出されており（北條・定森編2006）、本杭列もそれと同様の機能を有したものかと思われる。

検出された杭は合計16点であったが、多くは腐食が激しく、図化が可能なものは3点であった（第



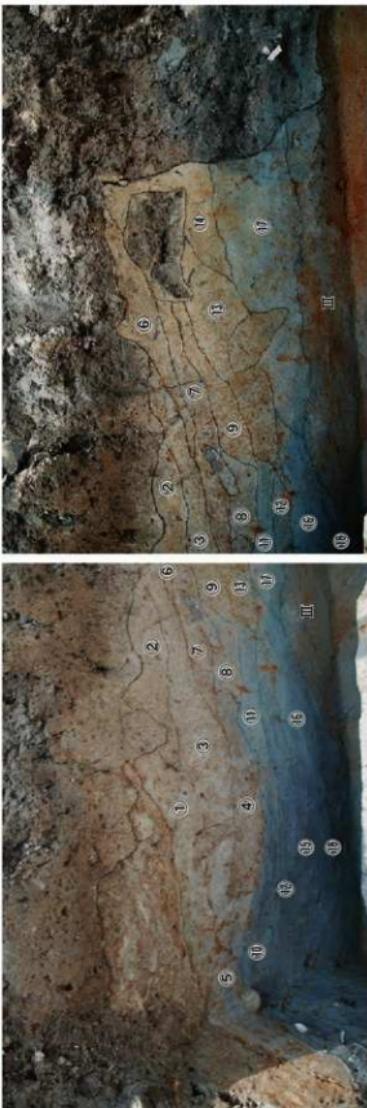
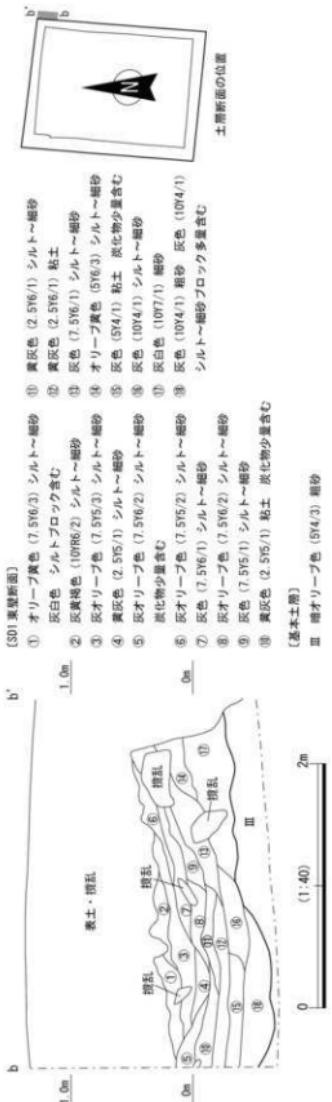
第17図 調査地点全景

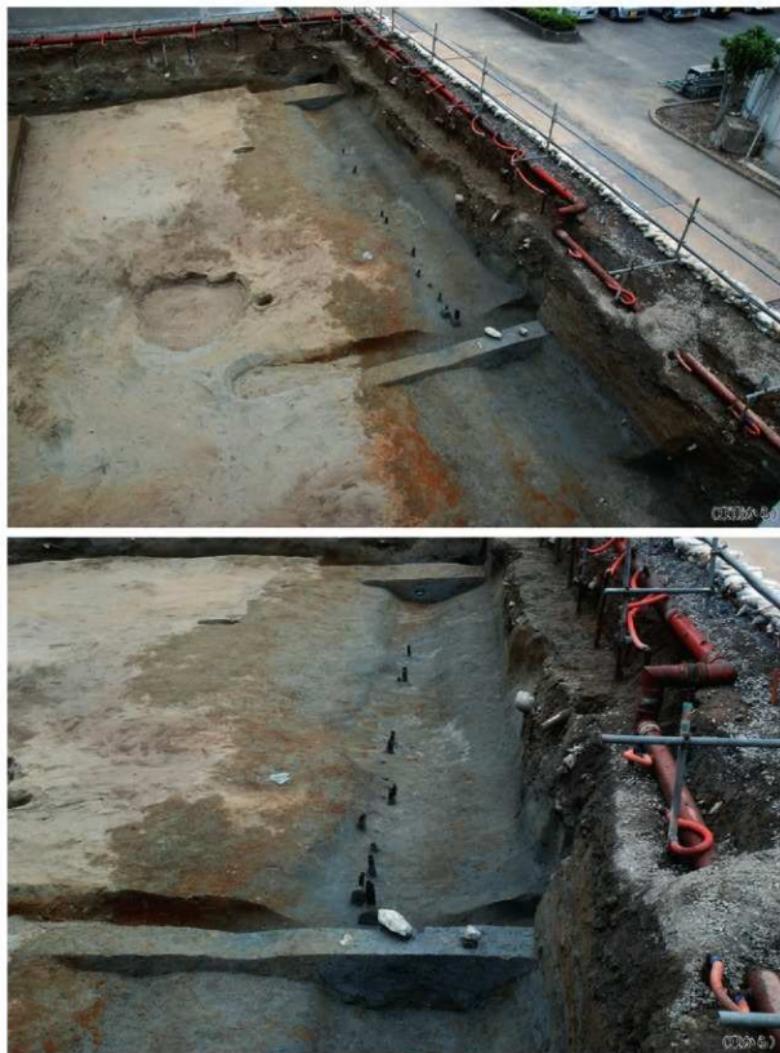
23図)。杭1点(第23図2)の炭素年代測定を実施した結果、較正年代で16世紀～17世紀代にかけての年代が得られた(第4章第2節)。これは、SD1の掘削時期とも矛盾しない。

4. 包含層出土遺物(第24～58図・第2～16表)

包含層からは、陶磁器・土器、金属製品、ガラス製品、瓦、石製品が出土した。ここでは残存状態が良好で、図化し得たものだけを報告する。陶磁器には、肥前系磁器、瀬戸・美濃系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、大谷焼、関西系磁器、堺・明石系陶器、景徳鎮窯系磁器、珉平焼、丹波系陶器、萬古系陶器、舞子焼がある。構成比は、肥前系磁器(36%)が最も高く、それに瀬戸・美濃系磁器(29%)、肥前系陶器(14%)とつづき、そのほかは1割を下回る。瓦質土器には火鉢・焜炉、御厨系の焙烙、土師質土器には、関西系の焙烙がある。これらには、16世紀中頃までさかのぼる可能性をもつものから近代以降のものまであり、年代の幅は広い。金属製品には、不明銅製品がある。ガラス製品には、インク瓶、ソーダ瓶がある。いずれも大正期～昭和初期のものである。瓦には、軒丸瓦、軒棧瓦、敷瓦がある。軒棧瓦には、「犬伏瓦組合」と刻印されたものが1点ある。瓦の再加工品もある。石製品には、硯、石筆がある。石筆は近代のものである。

(端野晋平)





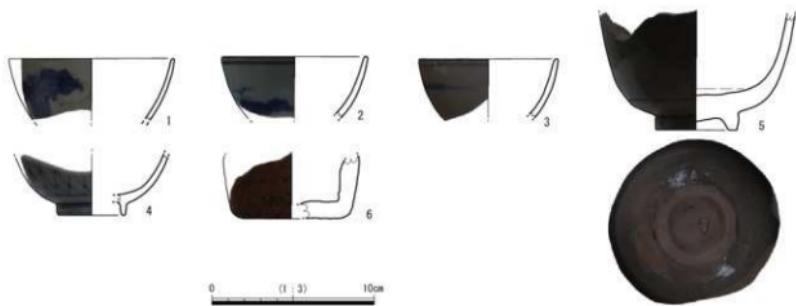
第19図 SD1 完掘状況

註

1. 根津寿夫氏（徳島市立徳島城博物館）からのご協力を得た。

文献

- 原祐一・小林照子編, 2012. 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院受変電設備棟地点, 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12. 東京大学埋蔵文化財調査室, 東京.
- 北條芳隆・定森秀夫編, 2006. 常三島遺跡2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 宮本武史（編）, 1973. 徳島藩士譜. 徳島藩士譜刊行会, 徳島.
- 森田克行, 1984. 屋瓦. 摂津高槻城: 本丸跡発掘調査報告書, 高槻市文化財調査報告書第14冊. 高槻市教育委員会, 高槻.
pp. 129-142.

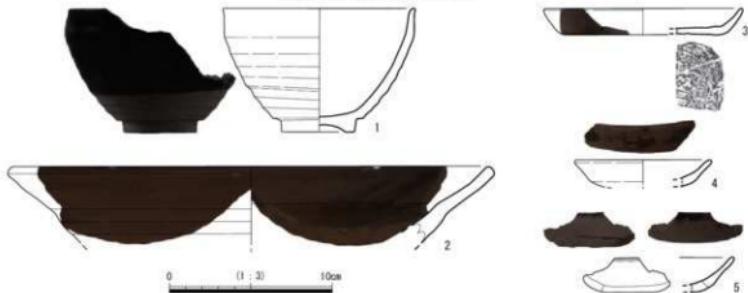


報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・構み径(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	絞付	装飾技法	鉢・割印・墨書き	胎土色・含有物質	邊溝・層位	備考
1 磁器	磁	肥前系	(10.1)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 N8/(白色味強い)	SD1 上層	東京碗。1780~1840年代	
2 磁器	磁	肥前系	(8.8)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 N8/(白色味強い)	SD1 上層		
3 磁器	磁	肥前系	(8.4)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 N8/(白色味強い)	SD1 上層		
4 磁器	磁	肥前系	—	(2.0)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 N8/(白色味強い)	SD1 上層	高台断面に状。高台高が高い(0.7cm)、高台妙付着	
5 陶器	磁	肥前系	—	5.0	—	ロクロ	灰釉(底部斜く)				灰白色 2.5Y7/1	SD1 上層	妙付妙目(4箇所)、1610~1640年代	
6 土師質土器	土	信濃系	—	—	(6.0)	—	輪積み				泥赤褐色 2.5YR7/4 (2.5YR7/4) 10R6/4(2部) 長石(種小)中、 表面に多い。石高、 輪積目、削色、削 白、黒色釉、金露 目(種小)	SD1 上層	内部被熱 外面:ナギ 内面:ユビオサエ	

「—」は、「不明」を示す。
()内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

含有物質は、土器のみ記載。備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

第20図 SD1上層出土遺物



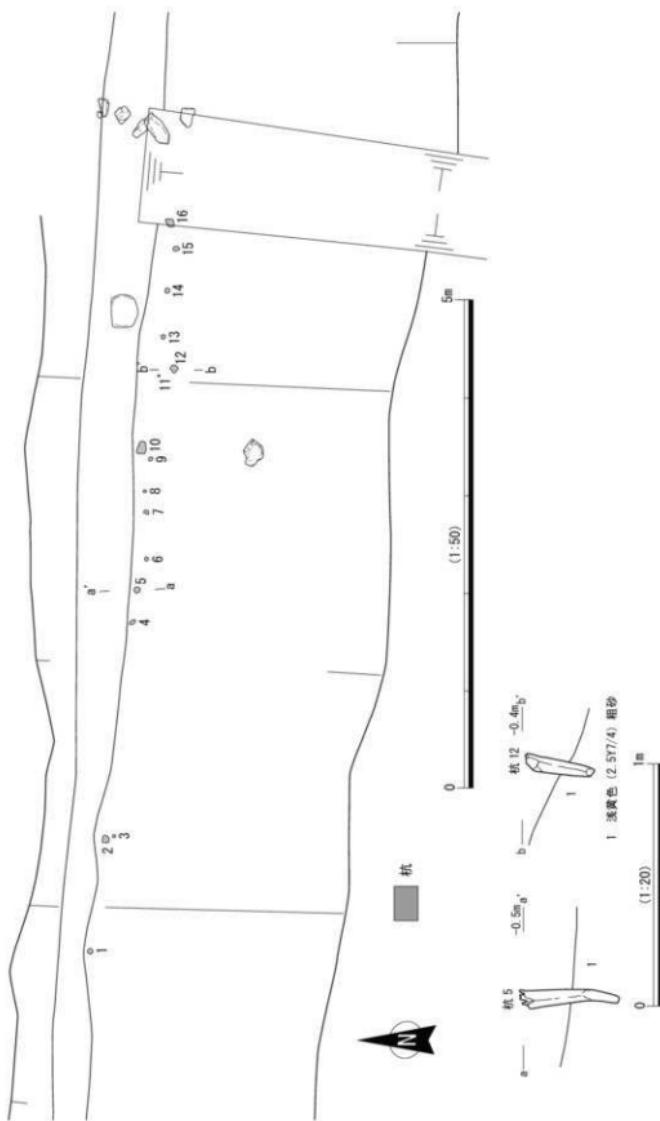
報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・構み径(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	絞付	装飾技法	鉢・割印・墨書き	胎土色・含有物質	邊溝・層位	備考
1 陶器	磁	瀬戸・美濃系	(11.6)	4.4	7.6	ロクロ	鉄釉(天目釉)				灰白色 N8/(灰色味強い)	SD1 下層	天目碗。17世紀	
2 陶器	磁	肥前系	(29.3)	—	—	ロクロ	灰釉	鉄絞	手描き		灰白色 2.5Y7/1	SD1 下層	純度津。17世紀	
3 土師質土器	土	—	(12.1)	(9.8)	1.6	ロクロ					灰白色 10YR8/2 長石・金露母(種 小、少量)	SD1 下層	外面:回転あわせり層のちら目状圧 出あり(底部)、回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ、板ナデ	
4 土師質土器	土	—	(8.3)	—	—	ロクロ					灰白色 2.5Y8/2 長石・金露母(種 小、少量)	SD1 下層	外・内面:回転ナデ	
5 土師質土器	土	—	—	—	2.1	ロクロ	輪積み				灰白色 2.5Y8/1 長石・純晶片岩、 黒色釉(種小、 少量)	SD1 下層	打芯油痕 外・内面:回転ナデ	

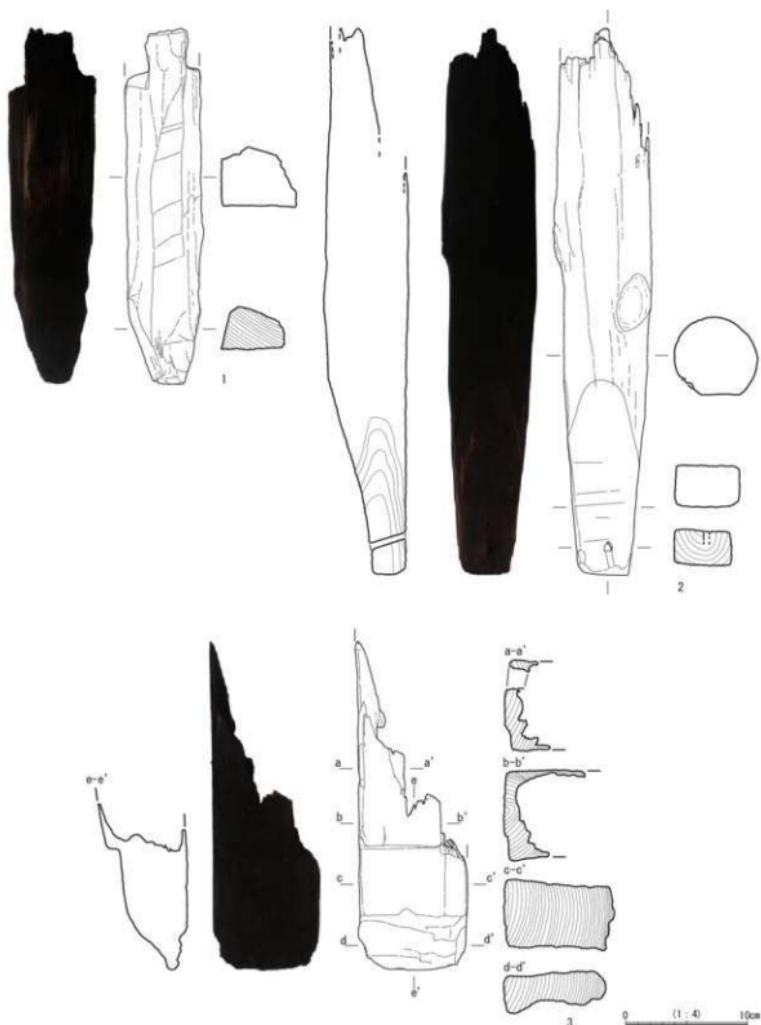
「—」は、「不明」を示す。
()内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

含有物質は、土器のみ記載。備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

第21図 SD1下層出土遺物

第22図 SAI検出状況・土質断面





報告番号	遺物名	器種	最大長(cm)*	最大幅(cm)*	最大厚(cm)*	樹種	遺様・層位	備考
1	杭	角杭	29.2	6.1	4.9	ツガ	SAI	芯去材
2	杭	丸杭	(44.8)	8.0	7.0	ツガ	SAI	先端の方に径7mmの穿孔1か所、樹皮有、芯持材
3	杭	角杭(建築部材転用)	(27.0)	9.0	5.2	ツガ	SAI	19×3cmの納穴1か所、芯去材

* []は残存部のサイズを示す。

第23図 SAIに用いられた杭



第24図 包含層出土遺物（1）

0 (1 : 3) 10cm

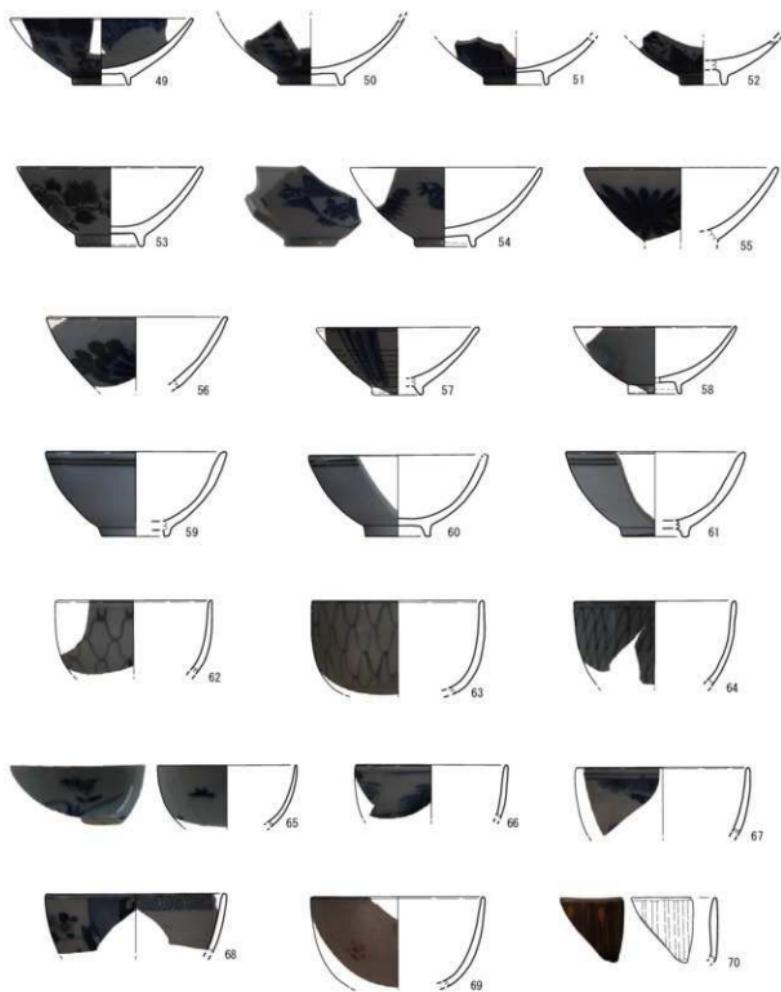


第25図 包含層出土遺物(2)

0 (1-3) 10cm



第26図 包含層出土遺物（3）



第27図 包含層出土遺物(4)

0 (1 : 3) 10cm



第28図 包含層出土遺物(5)

0 (1 : 3) 10cm



第29図 包含層出土遺物 (6)

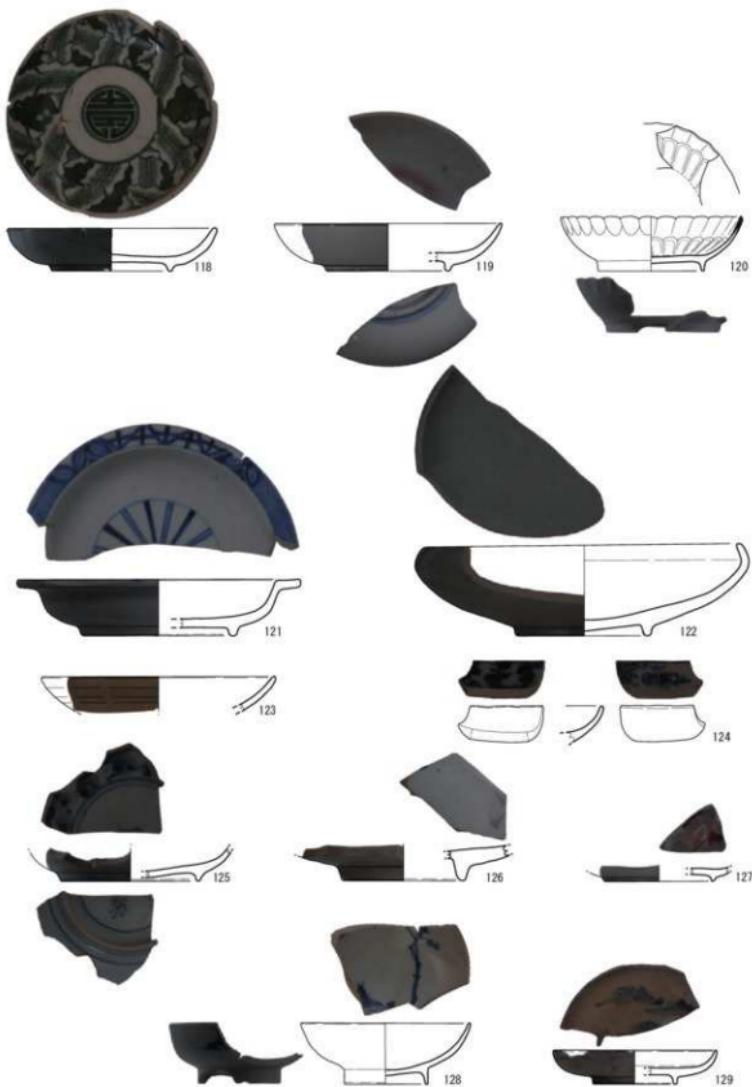
0 (1-3) 10cm



第30図 包含層出土遺物（7）

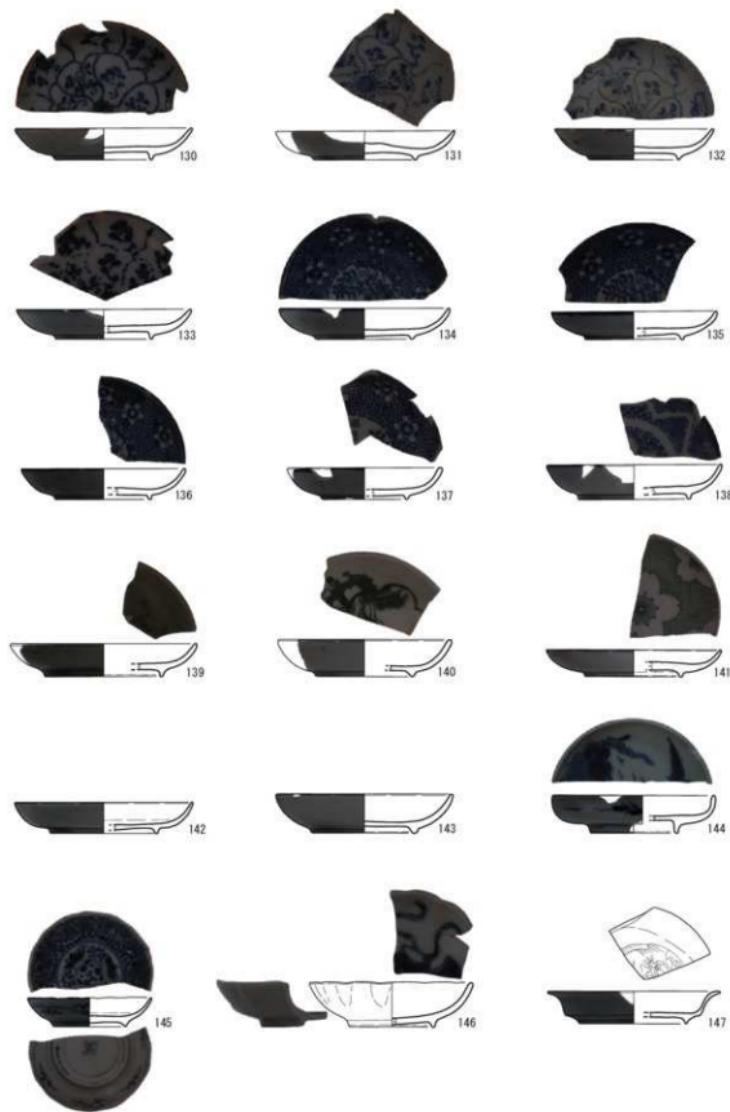


第31図 包含層出土遺物 (8)



第32図 包含層出土遺物（9）

0 (1-3) 10cm



第33図 包含層出土遺物 (10)



第34図 包含層出土遺物 (11)

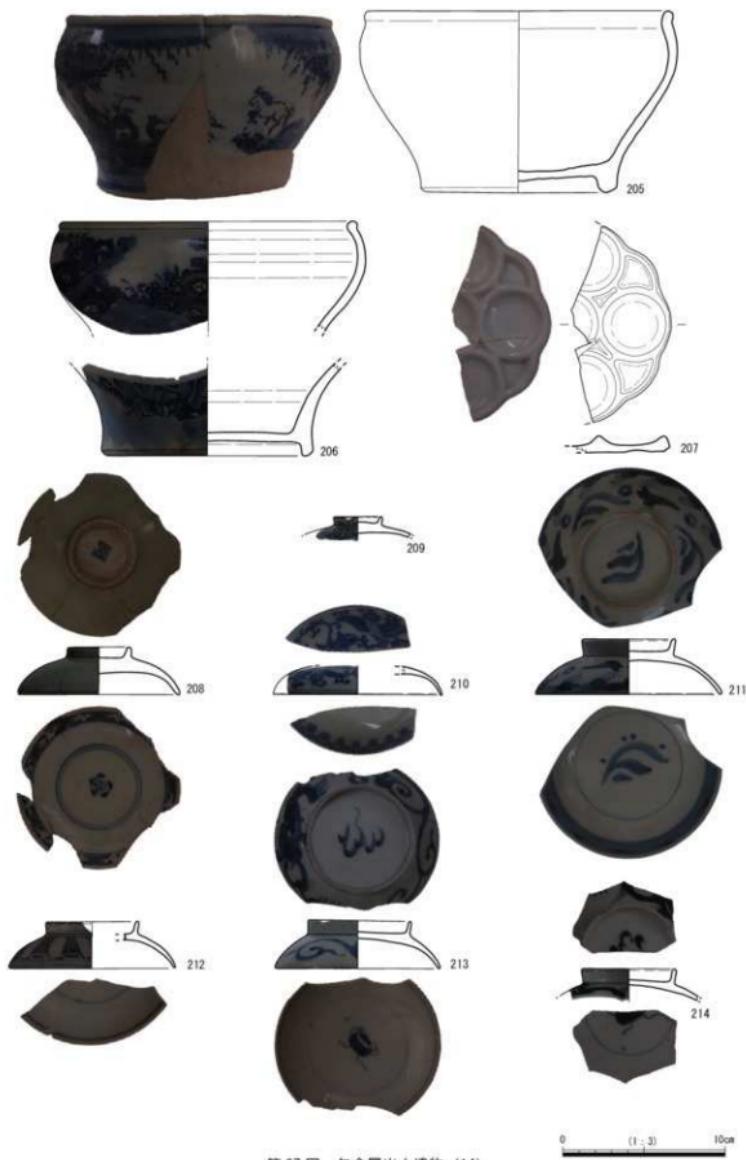


第35図 包含層出土遺物(12)

0 (1-3) 10cm



第36図 包含層出土遺物 (13)

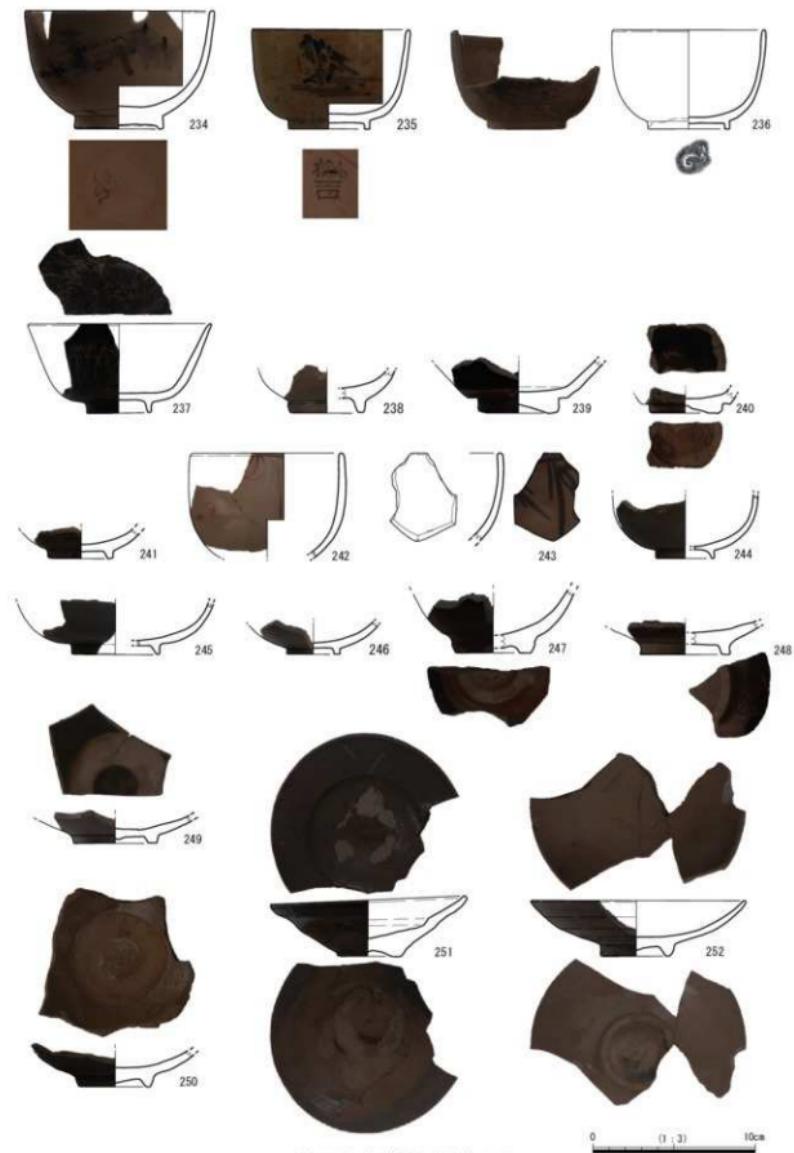


第37図 包含層出土遺物 (14)



第38図 包含層出土遺物 (15)

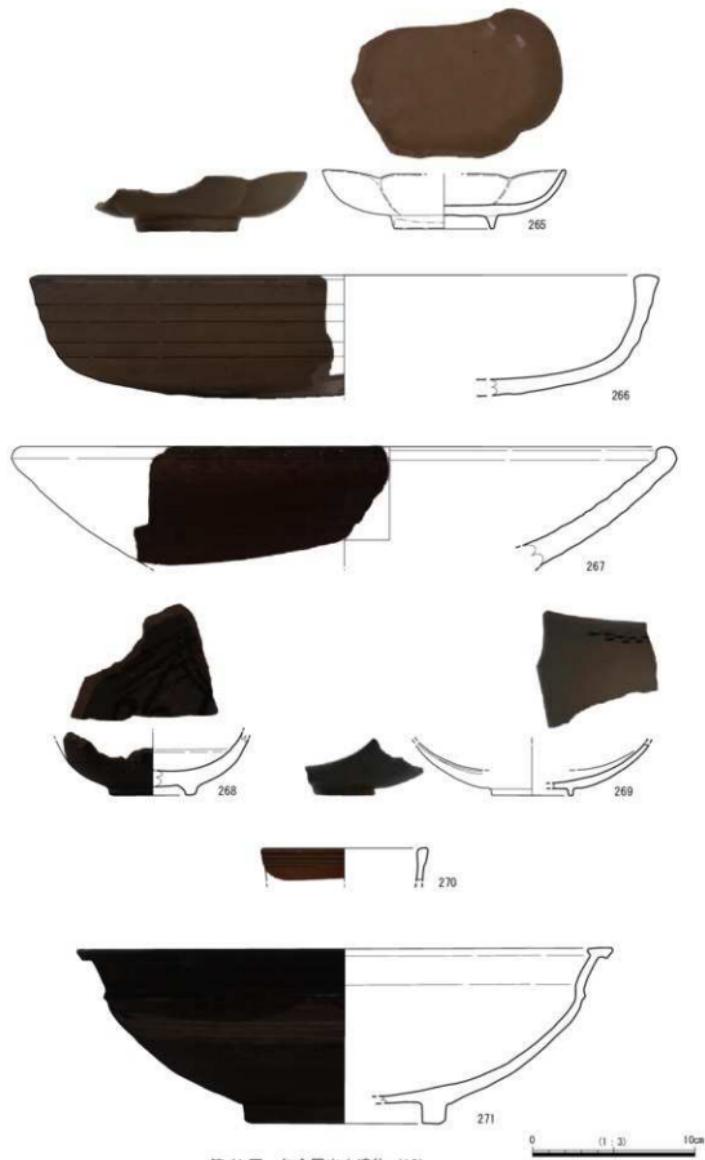
0 (1 3) 10cm



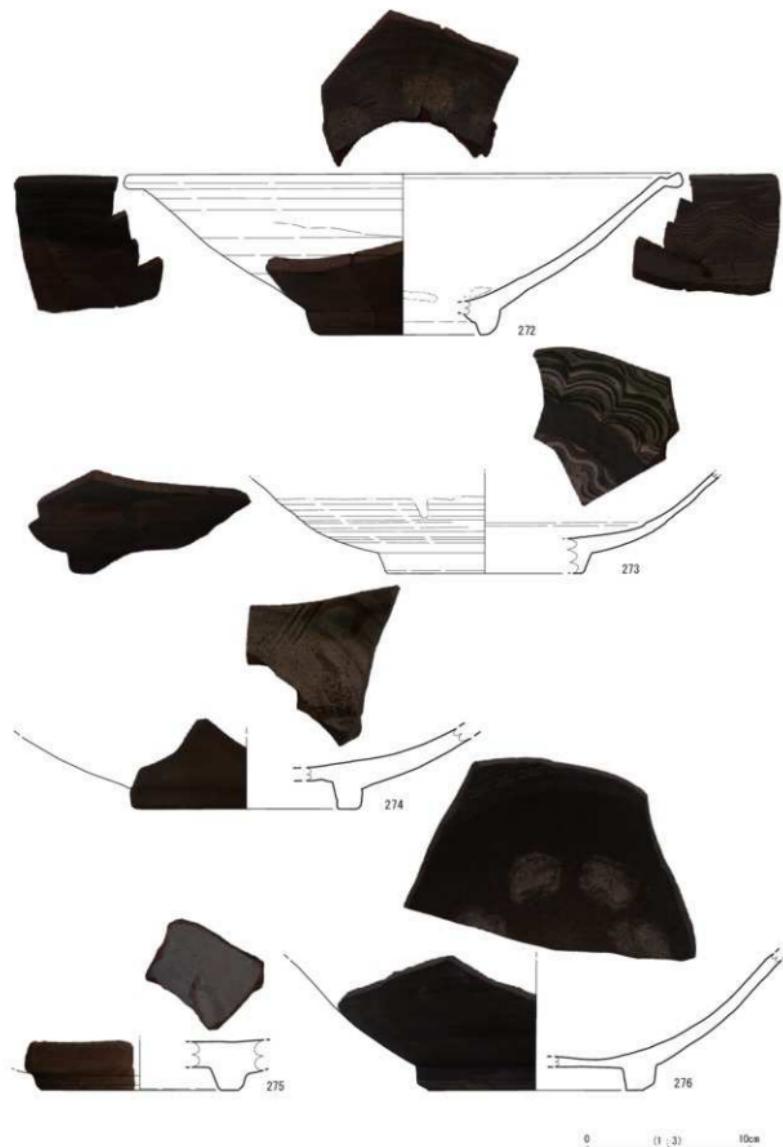
第39図 包含層出土遺物 (16)



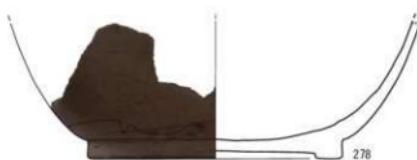
第40図 包含層出土遺物 (17)



第41図 包含層出土遺物 (18)



第42図 包含層出土遺物（19）

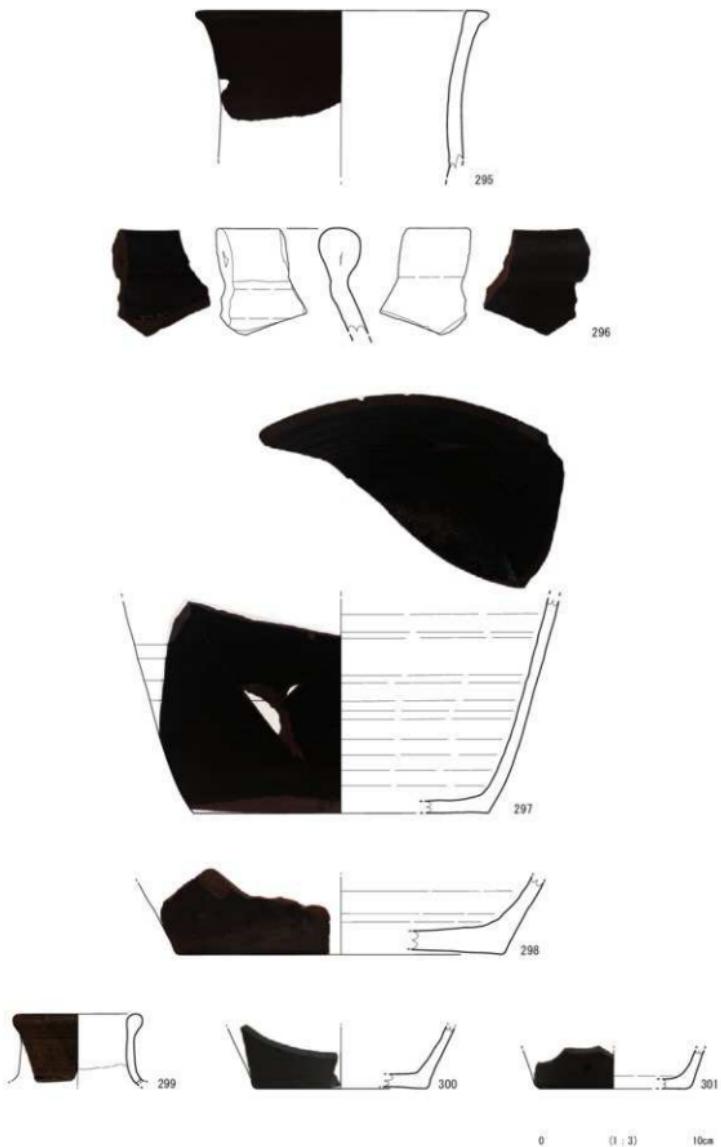


0 (1 : 3) 10cm

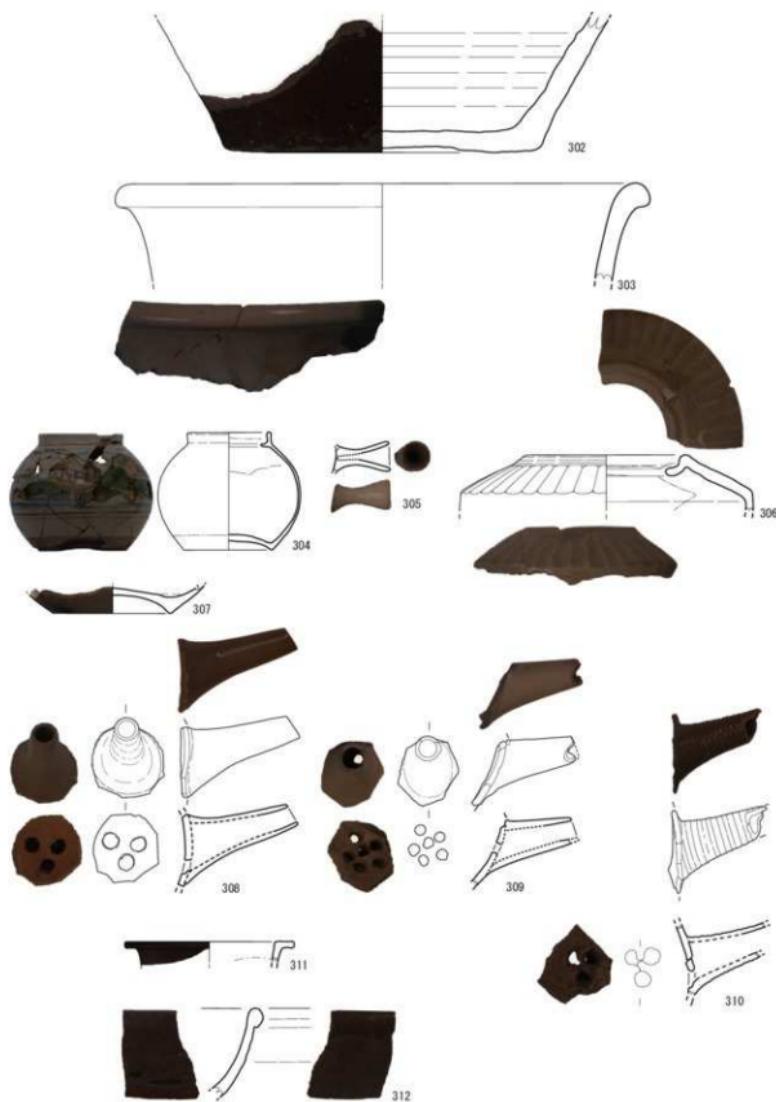
第43図 包含層出土遺物 (20)



第44図 包含層出土遺物 (21)

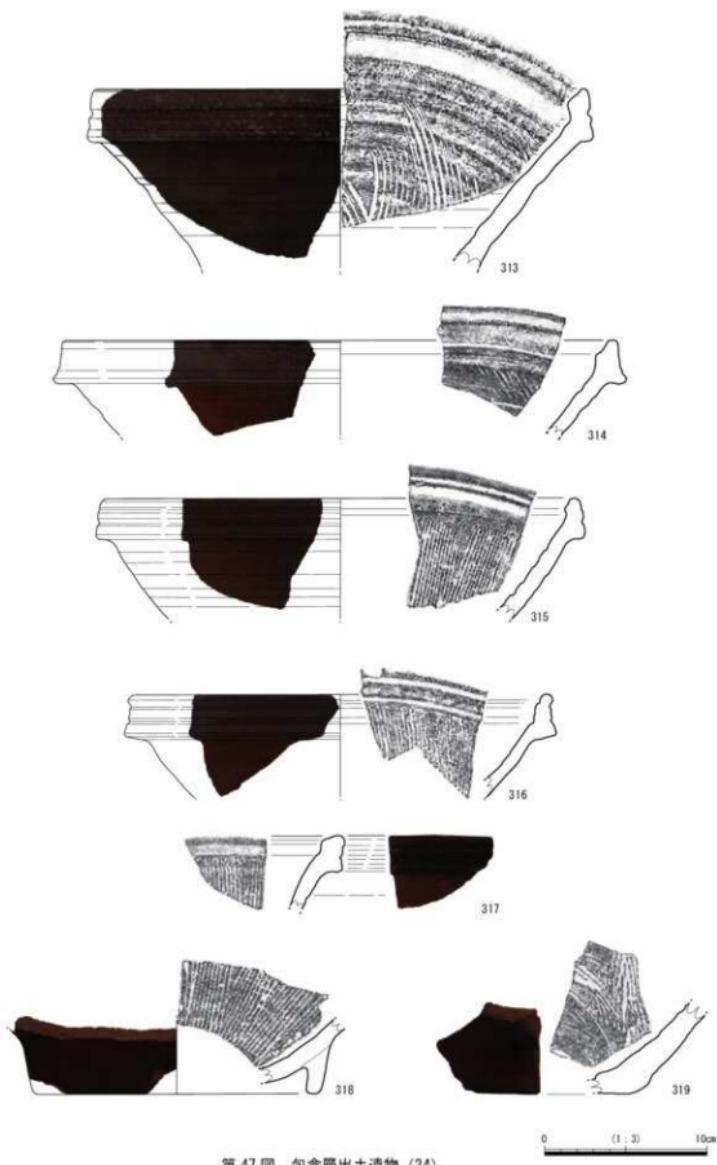


第45図 包含層出土遺物 (22)

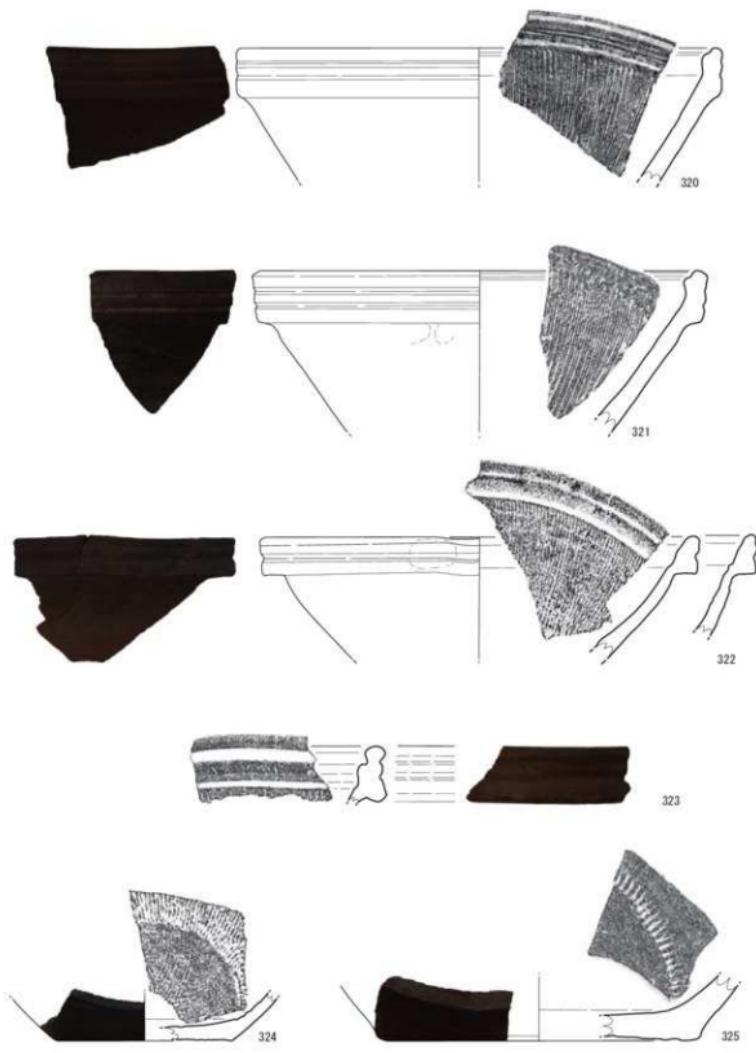


第46図 包含層出土遺物 (23)

0 (1 : 3) 10cm

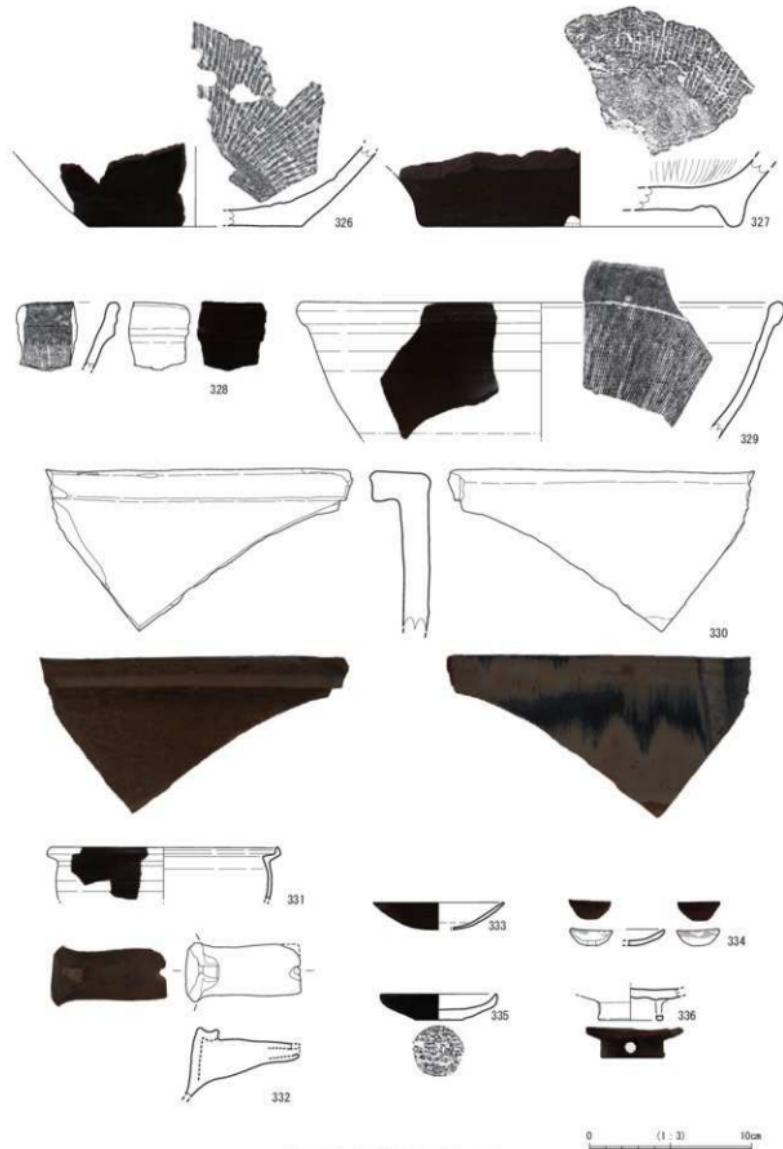


第47図 包含層出土遺物 (24)

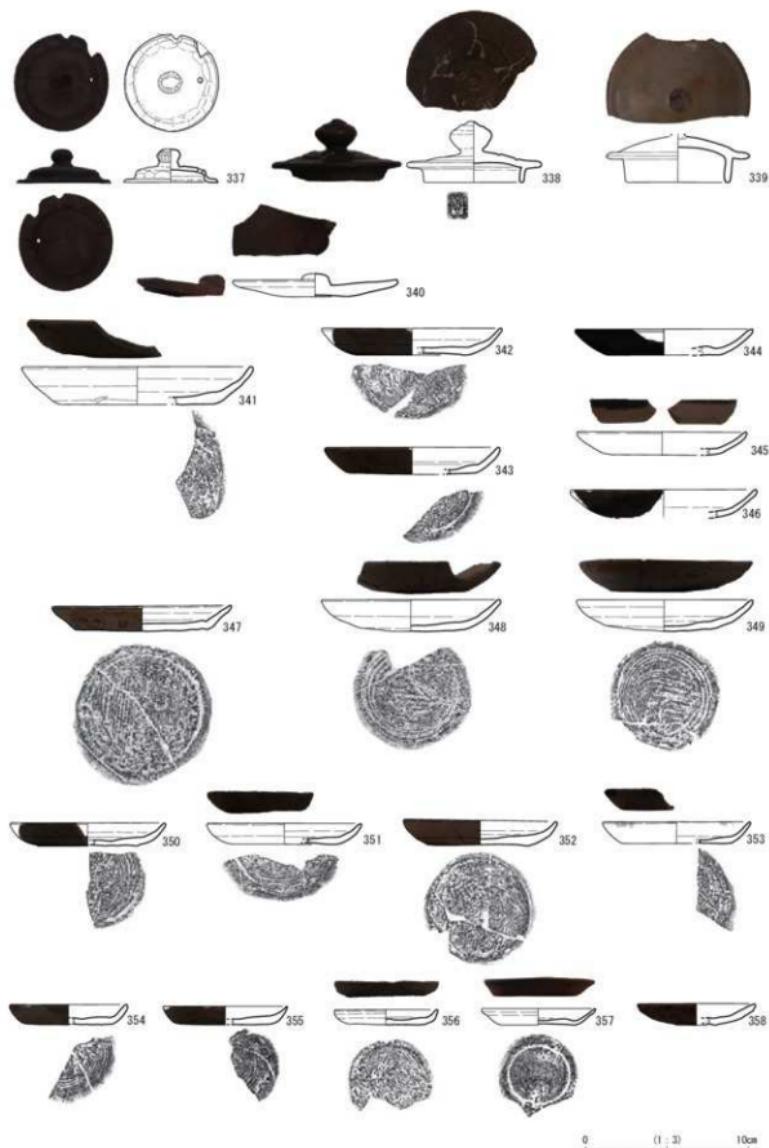


第48図 包含層出土遺物 (25)

0 (1 : 2) 10cm



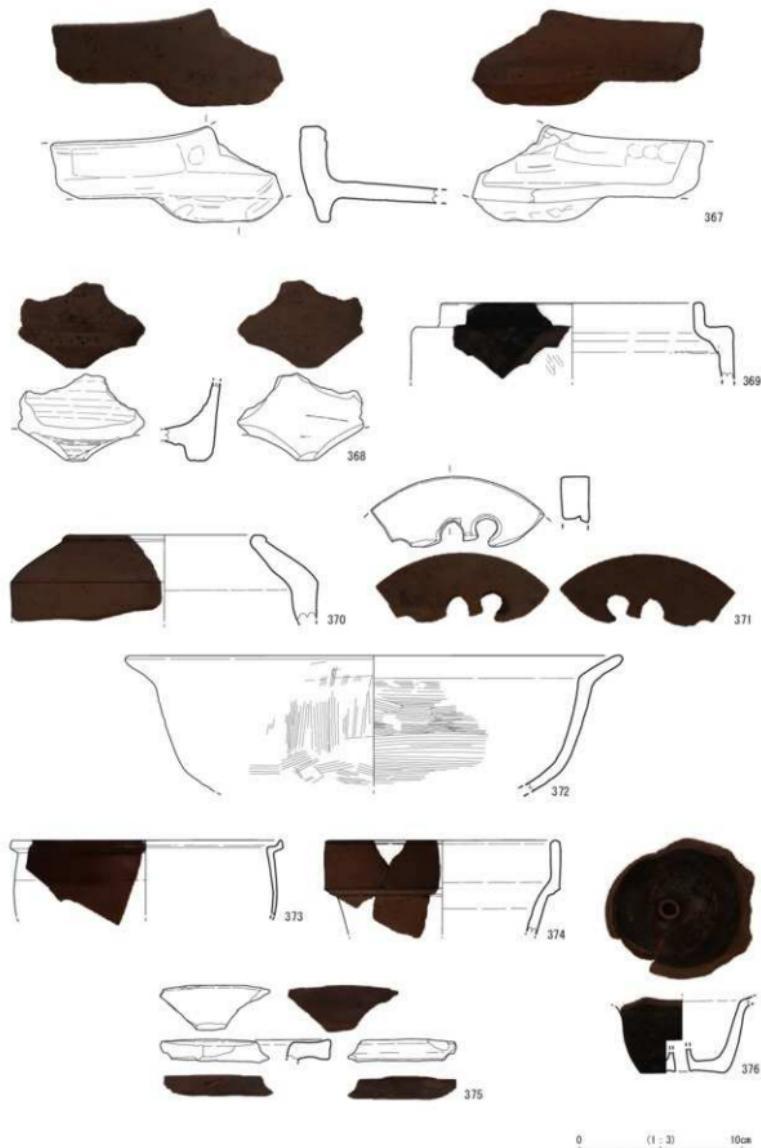
第49図 包含層出土遺物 (26)



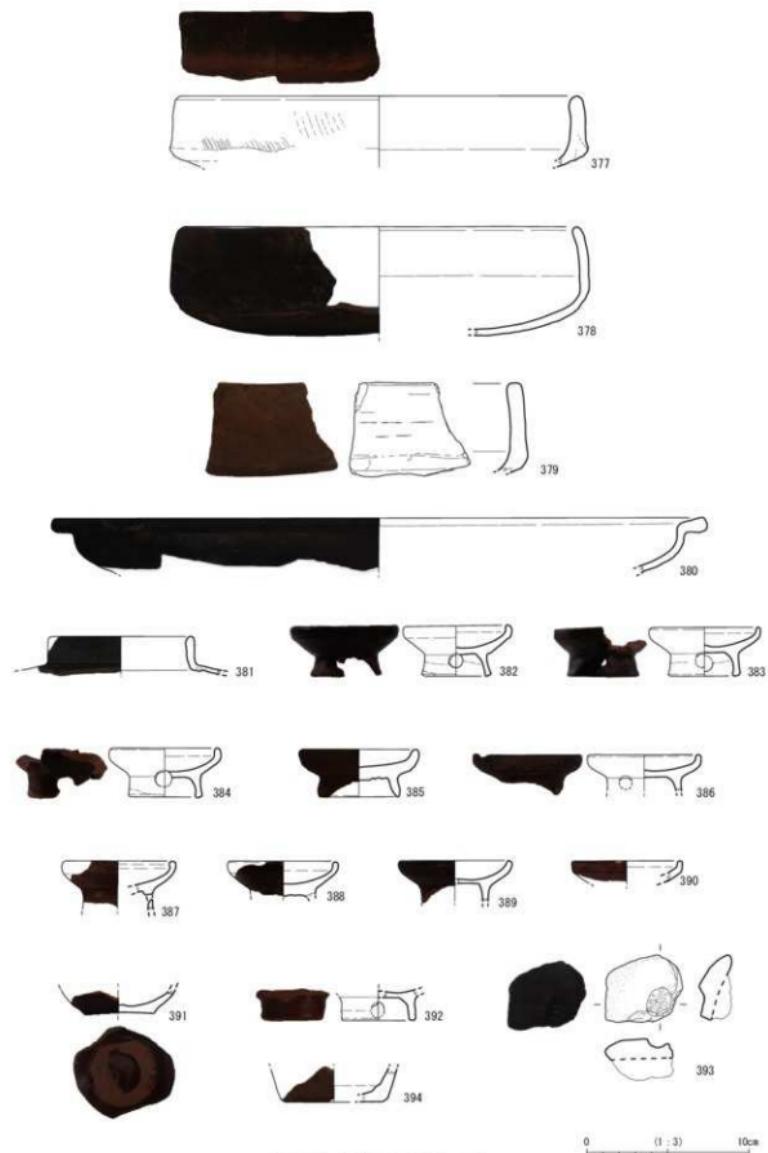
第50図 包含層出土遺物 (27)



第51図 包含層出土遺物 (28)



第52図 包含層出土遺物 (29)

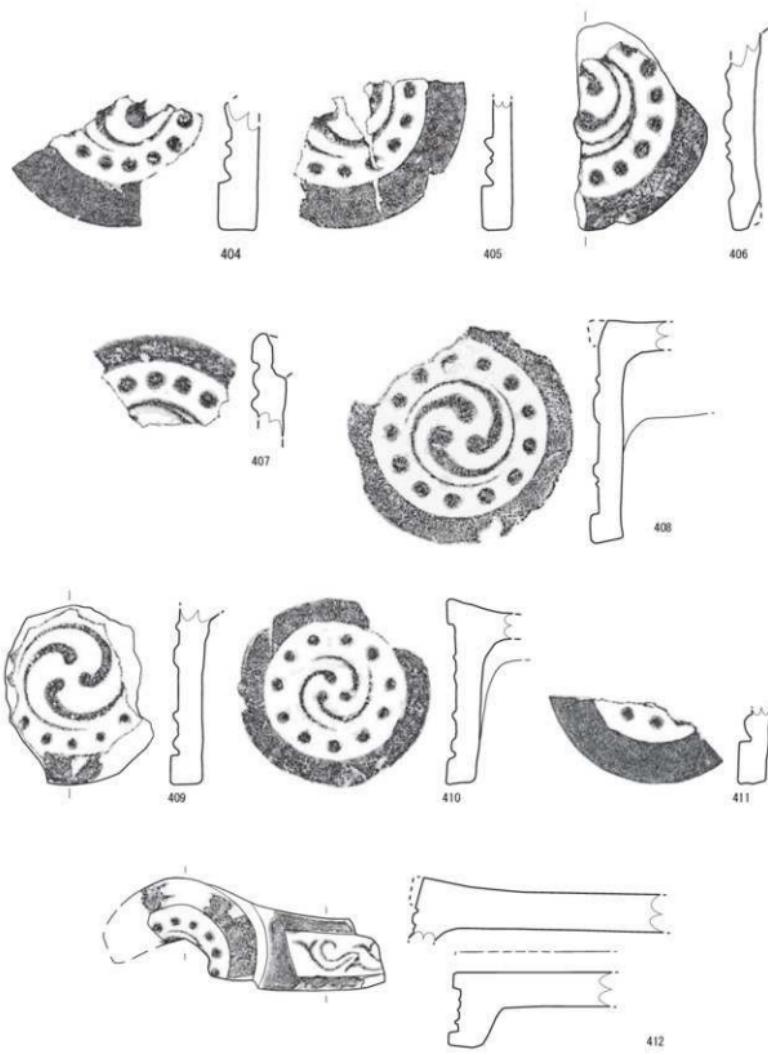


第53図 包含層出土遺物 (30)



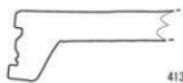
第54図 包含層出土遺物 (31)

0 (1 : 3) 10cm

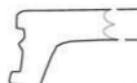
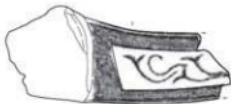


第55図 包含層出土遺物 (32)

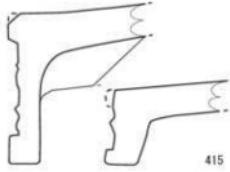
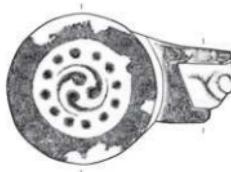
0 (1-3) 10cm



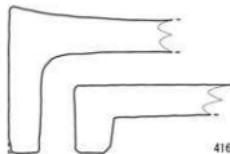
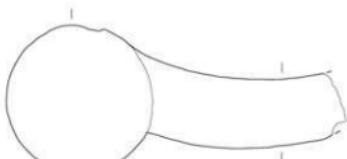
413



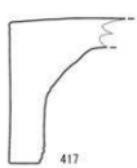
414



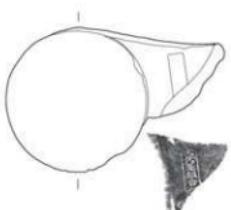
415



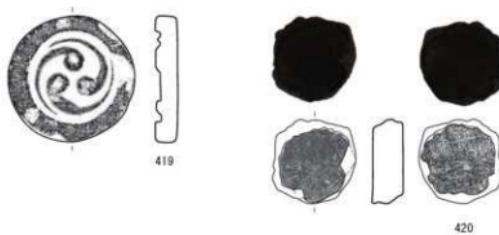
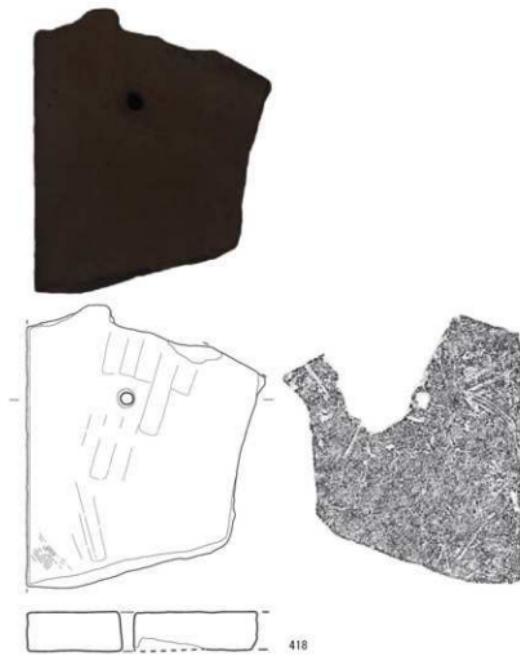
416



417

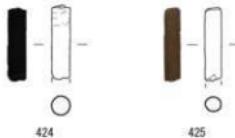
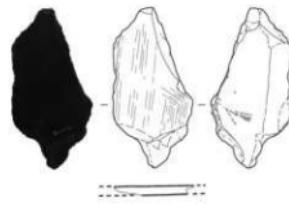
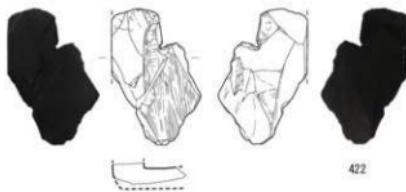


第56図 包含層出土遺物 (33)



0 (1 : 3) 10cm

第57図 包含層出土遺物 (34)



第58図 包含層出土遺物 (35)



第2表 包含層遺物観察表(1)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 拂み径(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	絞付	装飾技法	鉢・鋤田・ 壺	胎土色・ 含有鉱物	遺構・層位	備考	
1	磁器	碗	肥前系	(8.7)	4.4	6.4	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・復元	初期伊万里、着付砂付窯、 1610～1650年代		
2	磁器	碗	肥前系	—	4.6	—	ロクロ	透明釉(底 部削欠)	染付	手描き	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・復元	底部無釉、1640～1660年 代		
3	磁器	碗	肥前系	—	(3.8)	—	ロクロ	青磁釉(底 部削欠)					底部無釉、1640～1660年 代		
4	磁器	碗	肥前系	8.4	3.5	4.2	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	底部無釉、表付砂付窯、 1640～1660年代		
5	磁器	碗	肥前系	8.5	5.1	6.45	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細	表土・復元	高台断面三脚型、裏台輪厚 理不施用、1650～1660年 代		
6	磁器	碗	肥前系	10.0	5.5	6.4	ロクロ	透明釉	染付	手描き	「大正成化年製」 款(高台内) 灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	高台断面三角形、裏台輪厚 理不施用、1650～1660年 代		
7	磁器	碗	肥前系	9.9	4.3	5.55	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	高台断面U字状、高台高が 低い(0.5cm)、高台輪厚 理不施用		
8	磁器	碗	肥前系	(10.4)	4.0	6.4	ロクロ	透明釉	染付	手描き(外 部素面) 墨書き(口 縁部内面)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	高台断面U字状、高台高が 低い(0.5cm)		
9	磁器	碗	肥前系	(8.9)	3.8	4.8	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	高台断面U字状、高台高が 低い(0.4cm)		
10	磁器	碗	肥前系	—	4.0	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	二重方型 特徴(底 部削欠) 灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	高台断面U字状、高台高が 低い(0.5cm)		
11	磁器	碗	肥前系	(8.7)	3.2	4.4	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細	表土・復元	「うわんか」、着付砂付窯、 1680～1690年代		
12	磁器	碗	肥前系	—	(4.0)	—	ロクロ	青磁釉 透明釉(内 部削欠、高 台内)	染付	手描き	「清風」 款(高台内) 灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	くらわんか、青磁釉付、高 台砂付窯、1680～1690年 代		
13	磁器	碗	肥前系	(8.0)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	扇形脚、19世紀第2四半 期～1910年代		
14	磁器	碗	肥前系	—	3.6	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き コニニャク 印(見込)	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・復元	扇形脚、高台砂付窯、19世紀 末～不良(釉面)、19世紀第 2四半期～1910年代		
15	磁器	碗	肥前系	—	(4.15)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	小広東窯、1760～1820年 代		
16	磁器	碗	肥前系	—	5.1	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・復元	広東窯、着付砂付窯、1780 ～1840年代		
17	磁器	碗	肥前系	—	5.9	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	広東窯、1760～1840年 代		
18	磁器	碗	肥前系	—	(6.0)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	広東窯、1780～1840年 代		
19	磁器	碗	肥前系	—	(6.4)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	広東窯、1780～1840年 代		
20	磁器	碗	肥前系	(11.2)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	広東窯、1780～1840年 代		
21	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系	(10.8)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き 絞拂寫	一重方型 特徴(底 部削欠) 灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	広東窯、1887年～		
22	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系	11.4	4.8	6.1	ロクロ	透明釉	染付	手描き 墨書き	一重方型 特徴(底 部削欠) 灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	螭反形、螭尾、19世紀第1 四半期～19世紀第3四半 期		
23	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系	(9.3)	(3.4)	5.4	ロクロ	透明釉	染付	手描き 墨書き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	螭反形、19世紀第1四半 期～19世紀第3四半期		
24	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系	(9.2)	3.8	5.1	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・復元	螭反形、19世紀第1四半 期～19世紀第3四半期		
25	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系	(9.0)	(3.7)	5.1	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	螭反形、19世紀第1四半 期～19世紀第3四半期		
26	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系 ?	(9.4)	(4.1)	5.2	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	螭反形、19世紀第1四半 期～19世紀第3四半期		
27	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系	(10.2)	4.2	5.6	ロクロ	透明釉	染付 (脚七コ バルト)	手描き (見込)	脚七 脚底墨書き (脚七 バルト)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	螭反形、着付アルミナ砂 付、口縁部絞拂寫のぐる～ 乾用?、1882年～	
28	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系	(11.8)	4.8	6.0	ロクロ	透明釉	染付 (脚七コ バルト)	手描き (脚七 バルト)	脚底墨書き (脚七 バルト)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	螭反形、1887年～	
29	磁器	碗	開窓系	(12.0)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・復元	螭反形		
30	磁器	碗	肥前系	—	(3.9)	—	ロクロ	透明釉	染付 (脚七コ バルト)	手描き	灰白色 細	表土・復元	湯飲み、着付アルミナ砂 付、1870年～		

「—」は、「不明」を示す。〈〉内の数字は、残存部から復元した値を示す。
含有鉱物は、土器のみ記載。備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

第3表 包含層遺物観察表(2)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・脚み径(cm)	器高(cm)	成形技法	鉢茎	給付	装飾技法	銘・鉢印・書面	胎土色・含有物質	遺構・層位	備考	
31	磁器	碗	瀬戸・美濃系	—	(5.5)	—	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	手描き(簡略)	灰白色 細(やや白色味強い)	表土・埋乱	湯飲み。骨付アルミニヤ砂巻布。1882年~		
32	磁器	碗	瀬戸・美濃系	—	(4.2)	—	ロクロ	透明釉	染付	網版転写(外縁) 手描き(口縁部内面、高台内)	紙あり(高台内)	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	湯飲み。1887年~	
33	磁器	碗	瀬戸・美濃系	—	4.1	—	ロクロ	透明釉	上給付(黄色・緑色・白色・茶色組合)	手描き	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	湯飲み。1870年代~		
34	磁器	碗	瀬戸・美濃系	—	3.9	—	ロクロ	透明釉	—	—	灰白色 細	表土・埋乱	湯飲み。1870年代~		
35	磁器	碗	肥前系	—	4.7	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	窓高台。1820~1870年代		
36	磁器	碗	肥前系	—	(4.4)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	窓高台。骨付移付巻。1820~1870年代		
37	磁器	碗	肥前系	—	3.8	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	幅広窓高台		
38	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.9)	4.1	4.5	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細	表土・埋乱	39・40・41と器形・文様同じ。1882年~		
39	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(12.0)	(3.8)	4.9	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細	表土・埋乱	39・40・41と器形・文様同じ。1882年~		
40	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.4)	(3.5)	4.1	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細	表土・埋乱	38・39・41と器形・文様同じ。1882年~		
41	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.8)	—	—	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(やや白色味強い)	表土・埋乱	38・39・40と器形・文様同じ。1882年~		
42	磁器	碗	瀬戸・美濃系	11.5	4.0	4.5	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(やや白色味強い)	表土・埋乱	43・44と器形・文様同じ。骨付移付巻。1862年~		
43	磁器	碗	瀬戸・美濃系	11.3	(3.5)	4.2	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細	表土・埋乱	42・44と器形・文様同じ。1862年~		
44	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(10.6)	(3.7)	4.8	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(やや白色味強い)	表土・埋乱	43・44と器形・文様同じ。1862年~		
45	磁器	碗	瀬戸・美濃系	12.1	4.1	5.0	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	45と器形・文様同じ。骨付移付巻。1862年~		
46	磁器	碗	瀬戸・美濃系	—	3.5	—	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	45と器形・文様同じ。骨付移付巻。1862年~		
47	磁器	碗	瀬戸・美濃系	11.4	3.8	4.95	ロクロ	透明釉	網版転写 手描き(高台内)	「三峰屋」(高台内)	灰白色 細(やや白色味強い)	表土・埋乱	46と器形・文様同じ。1862年~		
48	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.2)	(3.8)	4.7	ロクロ	透明釉	網版転写 手描き(高台内)	「三峰園」(口縁・高台内)	灰白色 細(やや白色味強い)	表土・埋乱	47と器形・文様同じ。1862年~		
49	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.1)	3.2	4.1	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	1862年~		
50	磁器	碗	瀬戸・美濃系	—	3.75	—	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	1862年~		
51	磁器	碗	瀬戸・美濃系	—	(3.7)	—	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	1862年~		
52	磁器	碗	瀬戸・美濃系	—	(2.7)	—	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	型紙彫	灰白色 細(やや白色味強い)	表土・埋乱	1862年~		
53	磁器	碗	瀬戸・美濃系	11.3	3.9	4.9	ロクロ	透明釉	下給付(酸化コバルトム)	網版転写	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	高台移付巻。1867年~		
54	磁器	碗	瀬戸・美濃系	11.7	4.9	3.6	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	網版転写 手描き(簡略)	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	1867年~		
55	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.8)	—	—	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	網版転写	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	56と器形・文様同じ。1867年~		
56	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.0)	—	—	ロクロ	透明釉	染付(酸化コバルトム)	網版転写	灰白色 細(白色味強い)	壁清掃	55と器形・文様同じ。1867年~		
57	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(10.0)	(3.0)	4.2	ロクロ	透明釉	下給付(酸化コバルトム)	手描き	灰白色 細(やや白色味強い)	表土・埋乱	1870年~		
58	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(10.0)	(3.3)	4.15	ロクロ	透明釉	上給付(酸化コバルトム・正円子)	吹絵?	灰白色 細(白色味強い)	表土・埋乱	1894年~		

註は第2表に同じ。

第4表 包含層遺物観察表(3)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 拂み幅(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	繪付	装飾技法	鉢・鋤田・ 唐草・唐草	胎土色・ 含有物質	過橋・滑脂	備考	
59	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.0)	(4.0)	5.2	ロクロ	透明釉	下絵付 (焼化け 口ム)	手描き?	反白色 純/ (白色味強い)	青土・復乱	60・61と器形・文様同じ。 1875年~		
60	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.0)	4.0	5.0	ロクロ	透明釉	下絵付 (焼化け 口ム)	手描き?	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	59・61と器形・文様同じ。 1875年~		
61	磁器	碗	瀬戸・美濃系	(11.0)	(4.0)	5.2	ロクロ	透明釉	下絵付 (焼化け 口ム)	手描き?	反白色 純/ (白色味強い)	青土・復乱	59・60と器形・文様同じ。 1875年~		
62	磁器	碗	肥前系	(9.6)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	1650~1690年代		
63	磁器	碗	肥前系	(10.4)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	1650~1690年代		
64	磁器	碗	肥前系	(9.8)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	1650~1690年代		
65	磁器	碗	肥前系	8.5	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
66	磁器	碗	肥前系	(9.2)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
67	磁器	碗	肥前系	(10.6)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
68	磁器	碗	肥前系	(10.9)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	1710~1720年代		
69	磁器	碗	肥前系	(10.6)	—	—	ロクロ	透明釉	上絵付 (赤色 緑色 黄色) (赤色 緑色 黄色)	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
70	磁器	碗?	瀬戸・ 美濃系	—	—	—	型押	オリーブ に 点々 の 黄褐色 色點に 黒褐色 色點 混入 外面 銀鉢(外 面) 透明白 (内面)			反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
71	磁器	碗	肥前系	—	5.2	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	19世紀		
72	磁器	碗	肥前系	—	(5.3)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き(素書き)	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	1780年代~		
73	磁器	碗	肥前系	—	4.8	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
74	磁器	碗	肥前系	—	4.2	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	萬古台付番。燒成不良(輪 白)		
75	磁器	碗	肥前系	—	(4.6)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
76	磁器	碗	肥前系	—	4.5	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
77	磁器	碗	肥前系	—	(3.2)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	燒成不良(難白済、肩須 色悪い)		
78	磁器	碗	肥前系	—	4.1	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	萬古台付番		
79	磁器	碗	肥前系	—	(4.9)	—	ロクロ	透明釉	化粧 化粧 下絵付 (焼化け 口ム)	手描き(團 縁)	反白色 純/ (白色味強い)	北側溝	50・51と器形・文様同じ。 切妻アルミナ砂漬布。1882 年~		
80	磁器	碗	肥前系	—	4.9	—	ロクロ	透明釉	染付 (焼化け ハルト)	手描き(團 縁)	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	79・81と器形・文様同じ。 切妻アルミナ砂漬布。1882 年~		
81	磁器	碗	肥前系	—	(5.25)	—	ロクロ	透明釉	染付 (焼化け ハルト)	手描き(團 縁)	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	79・80と器形・文様同じ。 切妻アルミナ砂漬布。1882 年~		
82	磁器	碗	瀬戸・ 美濃系	—	(3.7)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱			
83	磁器	碗	關西系	—	3.9	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	「舟」字 (見立)	反白色 純/ (やや白色味強 い)	表土・復乱		
84	磁器	皿	肥前系	12.0	4.9	3.1	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (やや白色味強 い)	表土・復乱	初期伊万里。最付砂付番。 1610~1650年代		
85	磁器	皿	肥前系	12.8	4.7	2.55	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (やや白色味強 い)	表土・復乱	初期伊万里。萬古台内 砂付番。1610~1650年代		
86	磁器	皿	肥前系	(12.4)	4.75	2.7	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (素)	表土・復乱	初期伊万里。萬古台内 砂付番。1610~1650年代		
87	磁器	皿	肥前系	—	(5.1)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (やや白色味強 い)	表土・復乱	初期伊万里。最付砂付番。 1610~1650年代		
88	磁器	皿	肥前系	—	6.9	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	初期伊万里。1610~1650 年		
89	磁器	皿(小皿)	肥前系	(8.8)	(3.4)	2.7	型打	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	初期伊万里。幅広足台。輪 白。1610~1650年代		
90	磁器	皿(小皿)	肥前系	—	(3.1)	—	型打	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	1周	初期伊万里。幅広足台。輪 白。1610~1650年代		
91	磁器	皿(小皿)	肥前系	—	4.0	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 純/ (白色味強い)	表土・復乱	初期伊万里。萬古台内 砂付番。1610~1650年代		

註は第2表に同じ。

第5表 包含層遺物観察表(4)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・脚み径(cm)	器高(cm)	成形技法	鉢茎	給付	装飾技法	銘・鉢印・書面	胎土色・含有胚物	遺構・層位	備考
92	磁器	皿 (小皿)	肥前系	—	3.2	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・擦乱 鉢、底部灰褐色かかる。1610 ～1650年代	物販伊万里、高台砂付等。 底部灰褐色かかる。1610 ～1650年代	
93	磁器	皿	肥前系(21.6)	(12.3)	2.7	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細	表土・擦乱	高台断面三角形。1650～ 1680年代	
94	磁器	皿	肥前系(13.4)	(8.4)	3.7	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細	表土・擦乱	くわんいか、昌須灰色が かる。底部砂付等。1650 ～1680年代	
95	磁器	皿	肥前系(11.0)	—	—	—	ロクロ	透明釉(底 部斜く)	染付	手描き	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・擦乱	見込挖ノ目跡剥ぎ・砂付等。 1650～1700年代	
96	磁器	皿	肥前系(?)	—	(2.0)	—	ロクロ	透明釉(底 部斜く)	染付	手描き	浅黄褐色 10782/1	表土・擦乱	見込挖ノ目跡剥ぎ・茎葉模 様。底部灰褐色? (輪白周)。 1650～1700年代	
97	磁器	皿	肥前系(12.6)	8.3	2.15	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	切ノ目日影高台。18世紀 第2四半期	
98	磁器	皿	肥前系(?)	—	(8.3)	—	ロクロ	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 N/	表土・擦乱	蛇ノ目日影高台。見込挖ビ ン底。1682年～	
99	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.5)	7.2	3.3	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	100・101と型紙・文様同 じ。蛇ノ目影高台。(無輪部 分アミナ砂呂布)。輪白。 1650～1680年代	
100	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.8)	(7.7)	3.1	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	99・101と器種・文様同 じ。蛇ノ目影高台。(無輪部 分アミナ砂呂布)。輪白。 1650～1680年代	
101	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.6)	—	—	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	99・100と器種・文様同 じ。輪白。1682年～	
102	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.6)	8.0	2.9	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	103・104・105・106・107 と器種・文様同じ。蛇ノ目 影高台。(無輪部分アミナ 砂呂布)。輪白。見込挖ビ ン底。1682年～	
103	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.8)	(6.6)	3.05	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	103・104・105・106・107 と器種・文様同じ。蛇ノ目 影高台。(無輪部分アミナ 砂呂布)。輪白。見込挖ビ ン底。1682年～	
104	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.3)	(5.8)	2.9	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	103・104・105・106・107 と器種・文様同じ。蛇ノ目 影高台。(無輪部分アミナ 砂呂布)。輪白。見込挖ビ ン底。1682年～	
105	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(?)	—	(6.9)	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・擦乱	102・103・104・106・107 と器種・文様同じ。蛇ノ目 影高台。(無輪部分アミナ 砂呂布)。輪白。見込挖ビ ン底。1682年～	
106	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.8)	—	—	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	102・103・105・106・107 と器種・文様同じ。蛇ノ目 影高台。(無輪部分アミナ 砂呂布)。輪白。見込挖ビ ン底。1682年～	
107	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(13.2)	—	—	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	102・103・104・105・106・107 と器種・文様同じ。蛇ノ目 影高台。(無輪部分アミナ 砂呂布)。輪白。見込挖ビ ン底。1682年～	
108	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.4)	7.35	3.2	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	109・110・111と器種・文 様同じ。蛇ノ目影高台。 輪白。見込挖ビン底。1682年～	
109	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(—)	—	6.8	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	109・110・111と器種・文 様同じ。蛇ノ目影高台。 輪白。見込挖ビン底。1682年～	
110	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(—)	—	—	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・擦乱	109・110・111と器種・文 様同じ。蛇ノ目影高台。 輪白。見込挖ビン底。1682年～	
111	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(—)	—	—	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	108・109・110と器種・文 様同じ。蛇ノ目影高台。 輪白。見込挖ビン底。1682年～	
112	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(12.4)	(7.2)	3.6	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・擦乱	蛇ノ目影高台。(無輪部分 アミナ砂呂布)。輪白。見込 挖ビン底。1682年～	
113	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(14.0)	(8.5)	3.9	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (やや白色味強 い)	表土・擦乱	蛇ノ目影高台。輪白。見込 挖ビン底。1682年～	
114	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(—)	—	8.0	—	型打	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	蛇ノ目影高台。(無輪部分 アミナ砂呂布)。輪白。見込 挖ビン底。1682年～	
115	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(—)	—	7.8	—	ロクロ	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	蛇ノ目影高台。(無輪部分 アミナ砂呂布)。輪白。見込 挖ビン底。1682年～	
116	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(—)	—	(8.0)	—	ロクロ	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細 (白色味強い)	表土・擦乱	蛇ノ目影高台。見込挖ビ ン底。1682年～	
117	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系(—)	—	(8.0)	—	ロクロ	透明釉	染付(輪化コ バルト)	型紙模 手描き(外 面周縁)	灰白色 細	表土・擦乱	蛇ノ目影高台。(無輪部分 アミナ砂呂布)。輪白。見込 挖ビン底。1682年～	
118	磁器	皿	簡易系	12.7	7.4	2.6	ロクロ	透明釉	下絵付(輪化コ ルム)	網版転写	灰白色 細 (やや白色味強 い)	北側溝	費付手漉。1687年～	

註は第2表に同じ。

第6表 包含層遺物観察表(5)

報告番号	社員	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 拂み幅(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	繪付	装飾技法	鉢・鋤田・ 唐草	胎土色・ 含有物質	遺構・層位	備考
119	磁器	盤	瀬戸・ 美濃系	(13.9)	(7.4)	2.9	ロクロ	透明釉	染付(黒化コバルト) 面 下絵付(正円)	手描き(外 面) 吹付(内側)	灰白色 純/ (白色味強い)	北側溝	1894年~	
120	磁器	盤	肥前系	(11.1)	6.5	3.15	型打	透明釉		型打による 縁脚(内側 面)	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	輪花、高台内ハリ支え板、 1650年代~	
121	磁器	盤	瀬戸・ 美濃系	(17.3)	(9.3)	3.5	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱		
122	磁器	盤	肥前系	(19.3)	(8.2)	5.6	ロクロ	青磁釉		線彫り(内 面)	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	萬古台付蓋、1630年代~	
123	磁器	盤	肥前系	(14.4)	—	—	ロクロ	青磁釉			灰白色 純/ (白色味強い) 裏裡色 STB/3	表土・埋乱		
124	磁器	皿	肥前系?	—	—	—	型打	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	輪花、1882年~	
125	磁器	皿	肥前系	—	(8.6)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	「鉢」灰白色 純/ 鉢(高台 内)	表土・埋乱		
126	磁器	皿	肥前系	—	(7.4)	—	ロクロ	透明釉	染付(見 込)	手描き	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱		
127	磁器	皿	瀬戸・ 美濃系	—	(6.8)	—	ロクロ	透明釉	上絵付(赤色 松脂 具)	鋼瓶軸写 模	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	1887年~	
128	磁器	皿(小皿)	肥前系	(10.4)	5.1	3.8	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 純/ (白色味強い)	北側溝		
129	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系?	(10.0)	(5.0)	2.1	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 純/ (やや白色味強 い)	表土・埋乱		
130	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(11.0)	(6.0)	1.95	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模 口紅	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	131・132と器形、文様同 じ、高台内カバン、1882 年~	
131	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(11.0)	(6.4)	1.8	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模 口紅	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	130・131と器形、文様同 じ、1882年~	
132	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(9.7)	(5.6)	1.9	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模	灰白色 純/ (白色味強い)	壁滑清	130・131・132と器形、文様同 じ、傳作不良(輪花)、1882 年~	
133	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.7)	(5.9)	1.8	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	1882年~	
134	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.4)	(5.9)	1.9	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模	灰白色 純/ (やや白色味強 い)	表土・埋乱	135・136・137と器形、文 様同じ、1882年~	
135	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.1)	(6.0)	1.7	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模	灰白色 純/ (やや白色味強 い)	表土・埋乱	134・136・137と器形、文 様同じ、1882年~	
136	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.0)	(6.0)	1.9	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	134・135・137と器形、文 様同じ、1882年~	
137	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(9.3)	(5.3)	1.9	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	134・135・136と器形、文 様同じ、1882年~	
138	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.7)	(6.8)	2.15	ロクロ	透明釉	染付(黒化コ バルト)	型紙模	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	1882年~	
139	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(11.4)	(7.2)	2.05	ロクロ	クロム青 磁器 透明釉(高 台内)	下絵付(黒化コ バルト) 口紅	型紙模 百盞り	灰白色 7.5YR/1 (白色味強い)	表土・埋乱	1882年~	
140	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.6)	(5.9)	2.1	ロクロ	透明釉	下絵付(黒化コ バルト)	鋼瓶軸写	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	1887年~	
141	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.7)	(5.9)	1.65	ロクロ	透明釉	下絵付(黒化コ バルト)	型打による 縁脚	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	1887年~	
142	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.9)	(6.6)	1.9	ロクロ	透明釉			灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱		
143	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.7)	(6.5)	2.4	ロクロ	透明釉			灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱		
144	磁器	皿(小皿)	關西系	(10.0)	(5.4)	2.3	ロクロ	透明釉	染付	手描き	二重方盤 持手付(白 色味強い 高台内)	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	
145	磁器	皿(小皿)	肥前系	7.6	4.4	1.8	型打	透明釉	染付	手描き	二重方盤 持手付(白 色味強い 高台内)	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	輪花、18世紀
146	磁器	皿(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.1)	(5.2)	2.75	型成型 (外型・内型)	透明釉	染付	型成型によ る縁脚	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	輪花、19世紀	
147	磁器	鉢(小皿)	瀬戸・ 美濃系	(10.6)	(6.6)	2.0	型打	透明釉		型打による 縁脚	灰白色 純/ (白色味強い)	北側溝	19世紀	
148	磁器	鉢	肥前系	(21.1)	(11.6)	7.85	型打	透明釉	染付	手描き	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	折人目切高台、輪花、18 世紀後半~	
149	磁器	鉢	肥前系	(22.8)	—	—	型打	透明釉	染付	手描き	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	輪花	
150	磁器	鉢	肥前系	—	—	—	型打	透明釉	染付	手描き	灰白色 純/ (白色味強い)	表土・埋乱	輪花	

註は第2表に同じ。

第7表 包含層遺物観察表(6)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・脚溝径(cm)	器高(cm)	成形技法	鉢茎	輪付	装飾技法	縁・鋸印・墨書き	胎土色・含有物質	遺構・層位	備考
151	磁器	鉢	肥前系	—	(9.6)	—	型打	透明釉	染付	手描き	三重円形 縁内側 鉢内(高台内)	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	18世紀
152	磁器	鉢	肥前系	—	(7.8)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	蛇口目脚窓高台、18世紀後半~	
153	磁器	鉢	肥前系	—	(7.8)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	鉢または蓋物、高台砂付窯	
154	磁器	向付	肥前系	—	(5.7)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	基部落口	
155	磁器	向付?	肥前系	—	—	—	型打	透明釉 鉄錆(黄 鉄錆)	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱		
156	磁器	小杯	肥前系	(5.8)	(2.7)	3.0	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	北側溝		
157	磁器	小杯	肥前系	(6.9)	(2.4)	2.65	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (やや白色珠強 い)	表土・埋乱		
158	磁器	小杯	肥前系	(8.3)	(3.9)	3.0	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱		
159	磁器	小杯	肥前系	(7.3)	(3.8)	3.1	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱		
160	磁器	小杯	肥前系	—	2.8	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	くらわんか、高台脚跡処理 不規則、底成不良(鉛白層) 1680~1860年代	
161	磁器	小杯	肥前系	—	(3.0)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	「大明」 「成化」 「年輪」 「萬(見込)	北側溝	砂付砂付窯、1630年代~ 18世紀初頭	
162	磁器	小杯	肥前系	—	(3.3)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	「大明」 「成化」 「年輪」 「萬(見込)	表土・埋乱	17世紀前半~19世紀	
163	磁器	小杯	肥前系	—	(3.9)	—	ロクロ	透明釉	—	—	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	高台砂付窯	
164	磁器	小杯	瀬戸・ 美濃系	(7.8)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	ゴム感触付	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	1920年代~	
165	磁器	小杯	瀬戸銀 窯系	(6.2)	2.45	3.3	ロクロ	透明白釉 付→高台内 斜内	青花	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	166・167と器物、文様同じ、 端反形、高台内カンナ板	
166	磁器	小杯	瀬戸銀 窯系	(6.6)	(2.2)	3.5	ロクロ	透明白釉 付→高台内 斜内	青花	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	165・167と器物、文様同じ、 端反形、口縁部外高、高台 脇カント直	
167	磁器	小杯	瀬戸銀 窯系	(6.4)	—	—	ロクロ	透明釉	青花	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	165・166と器物、文様同じ、 端反形	
168	磁器	小杯	瀬戸銀 窯系	—	7.4	—	ロクロ	透明釉	青花	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形?	
169	磁器	小杯	肥前系	(6.4)	2.5	4.9	ロクロ	透明白釉 底 斜内	青花	—	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形、初期伊万里。1610 年~1650年代	
170	磁器	小杯	肥前系	(6.2)	2.75	3.7	ロクロ	透明釉	—	—	灰白色 灰白色 2.5Y8/I (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形、高台砂付窯、1610 年~1650年代	
171	磁器	小杯	肥前系	7.7	3.1	4.8	ロクロ	透明釉	染付	手描き	一重方 形縁内 斜内 字紋 高台内	表土・埋乱	端反形、青付砂付窯、1650 年代後半~	
172	磁器	小杯	肥前系	(7.0)	(2.9)	3.55	ロクロ	透明釉	—	—	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形、端付砂付窯	
173	磁器	小杯	肥前系	(7.2)	—	—	ロクロ	透明釉	—	—	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形	
174	磁器	小杯	肥前系	—	3.2	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形、端付砂付窯	
175	磁器	小杯	肥前系	—	(2.5)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形	
176	磁器	小杯	肥前系	—	3.2	—	ロクロ	透明釉	—	—	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形、端付砂付窯	
177	磁器	小杯	瀬戸・ 美濃系	(7.4)	(3.1)	4.0	ロクロ	透明釉	染付 (酸化コ バルト)	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形、高台高台。1870 年~	
178	磁器	小杯	瀬戸・ 美濃系	(7.8)	2.8	3.75	ロクロ	透明釉	染付 (酸化コ バルト)	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	179・180・181と器物、文 様同じ、端反形、1870年~	
179	磁器	小杯	瀬戸・ 美濃系	(8.0)	(2.6)	4.0	ロクロ	透明釉	染付 (酸化コ バルト)	手描き 口絵	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	178・180・181と器物、文 様同じ、端反形、1870年~	
180	磁器	小杯	瀬戸・ 美濃系	—	(2.9)	—	ロクロ	透明釉	染付 (酸化コ バルト)	手描き	灰白色 灰白色 (やや白色珠強 い)	表土・埋乱	178・179・181と器物、文 様同じ、端反形、1870年~	
181	磁器	小杯	瀬戸・ 美濃系	—	(3.0)	—	ロクロ	透明釉	染付 (酸化コ バルト)	手描き	灰白色 灰白色 (やや白色珠強 い)	表土・埋乱	178・179・180と器物、文 様同じ、端反形、1870年~	
182	磁器	小杯	瀬戸・ 美濃系	(7.2)	3.5	4.4	ロクロ 蓋取	透明釉	—	—	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	端反形、1877年~	
183	磁器	小杯	瀬戸・ 美濃系	—	(2.85)	—	ロクロ	透明釉	染付 (酸化コ バルト)	鋼網鉛写	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	高台砂付窯、1887年~	
184	磁器	小杯	肥前系	—	(2.1)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	半球形、18世紀初頭~19 世紀	
185	磁器	小杯	肥前系	—	2.2	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 灰白色 (白色珠強い)	表土・埋乱	半球形、18世紀初頭~19 世紀	

註は第2表に同じ。

第8表 包含層遺物観察表(7)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 拂み幅(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	絞付	装飾技法	鉢・鋤田・ 壺	胎土色・ 含む有機物	遺構・層位	備考
186 磁器	磁器	肥前系	—	—	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 2.5YB/1 (白色味強い)	表土・搅乱	燒成不良?	(雜白泥)
187 磁器	香炉	肥前系	(11.0)	(4.7)	5.5	ロクロ 貼付(足)	透明釉 (青磁釉・底 部除外)	粘付	手描き	灰白色 細/ (やや白色味強 い)	表土・搅乱	見込み重ね焼き痕		
188 磁器	香炉	肥前系	—	(6.3)	—	ロクロ	青磁釉・底 部除外(外 面)	透明釉	手描き	灰白色 細/	表土・搅乱			
189 磁器	瓶	肥前系	—	6.4	—	ロクロ	透明釉(外 面)	染付	手描き	單純灰色 10G18/1	表土・搅乱	初期伊万里、高台付着。 1610～1650年代		
190 磁器	瓶	肥前系	—	(9.0)	—	ロクロ	透明釉(外 面)	染付	手描き	反白色 細/ (外 側) 灰白色 10YR7/1 (内面)	表土・搅乱	輪・肩淡灰色がかる		
191 磁器	瓶	肥前系	—	5.8	—	ロクロ	透明釉(外 面)	トビガンナ 繩彫り	手描き	灰白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	輪・目高台		
192 磁器	瓶	肥前系	—	(4.6)	—	ロクロ	透明釉(外 面)	透明釉(外 面)	手描き	灰白色 2.5YB/1	北側溝	高台付着		
193 磁器	瓶?	肥前系	—	(6.4)	—	ロクロ	透明釉(外 面)	透明釉(外 面)	手描き	灰白色 細/	表土・搅乱	輪付着付着		
194 磁器	酒造利	肥前系	1.3	—	—	ロクロ	透明釉(外 面)	染付	手描き	反白色 細/ (やや白色味強 い)	表土・搅乱			
195 磁器	酒造利	肥前系	—	3.8	—	ロクロ	透明釉(外 面)	染付	手描き	灰白色 細/	表土・搅乱	高台付着		
196 磁器	焼利	瀬戸・ 美濃系?	(3.0)	—	—	ロクロ	透明釉(外 面～腹部 内面)	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱			
197 磁器	焼利	關西系	—	(5.2)	—	ロクロ	透明釉(底 部外面部 下)	染付	手描き	坐書(「ミ サ」) (底 部外面部)	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱		
198 磁器	焼利	關西系	—	(6.6)	—	ロクロ	透明釉 (脚ヒコ バルト)	脚版転写	手描き	反白色 細/ (やや灰色味強 い)	表土・搅乱	1887年～		
199 磁器	段重	瀬戸・ 美濃系?	(10.2)	9.5	2.7	ロクロ	透明釉 (脚ヒコ バルト)	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	腰部無釉部分アルミナ砂漿 布、1882年～		
200 磁器	段重	瀬戸・ 美濃系?	(11.5)	(10.85)	2.65	ロクロ	透明釉 (脚ヒコ バルト)	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	腰部無釉部分アルミナ砂漿 布、1882年～		
201 磁器	段重	瀬戸・ 美濃系	(10.5)	(9.2)	2.55	ロクロ	透明釉 (脚ヒコ バルト)	染付	手描き	反白色 細/ (やや白色味強 い)	表土・搅乱	腰部無釉部分アルミナ砂漿 布、1882年～		
202 磁器	壺物	肥前系	(7.0)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱			
203 磁器	壺物	瀬戸・ 美濃系?	—	(9.0)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 細/ (やや白色味強 い)	表土・搅乱	輪付着付着。1882年～		
204 磁器	合子?	關西系	—	(6.0)	—	ロクロ	透明釉 (底 部削 く)	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱			
205 磁器	建水?	瀬戸・ 美濃系	(18.4)	12.5	11.2	ロクロ	透明釉 (脚ヒコ バルト)	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	205と器形・文様同じ。蓋 付アルミニナ砂漿付着。1882 年～		
206 磁器	建水?	瀬戸・ 美濃系	(17.8)	(11.8)	—	ロクロ	透明釉 (脚ヒコ バルト)	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	205と器形・文様同じ。蓋 付アルミニナ砂漿付着。1882 年～		
207 磁器	焼真 パレット	瀬戸・ 美濃系	—	—	—	型成形	透明釉 (底削 く)	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	鶴皿、近代～		
208 磁器	焼蓋	肥前系	10.0	3.95	3.0	ロクロ	透明釉	染付	手描き	二重方盤 (脚ヒコ バルト)	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	丸縁。くわんわんか。青磁染 付、輪付着付着。18世紀 中頃～18世紀末	
209 磁器	焼蓋	肥前系	—	(2.9)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	丸縁		
210 磁器	焼蓋	瀬戸・ 美濃系	(10.3)	—	—	ロクロ	透明釉 (脚ヒコ バルト)	脚版転写	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	丸縁。1887年～		
211 磁器	焼蓋	肥前系	(11.4)	5.5	3.4	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	東廣島、1780～1840年 代		
212 磁器	焼蓋	肥前系	(10.3)	(5.6)	2.8	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	東廣島、1780～1840年 代		
213 磁器	焼蓋	肥前系	10.0	6.25	2.95	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	東廣島、1780～1840年 代		
214 磁器	焼蓋	肥前系	—	(5.7)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	東廣島、1780～1840年 代		
215 磁器	焼蓋	肥前系	10.1	(4.3)	2.8	ロクロ	透明釉	染付	手描き	反白色 細/ (白色味強い)	表土・搅乱	焼形、1810年代～近代		

註は第2表に同じ。

第9表 包含層遺物観察表(8)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・脚み径(cm)	器高(cm)	成形技法	鉢茎	給付	装飾技法	銘・鉢印・墨書き	胎土色・含有物質	遺構・層位	備考
216	磁器	碗蓋	肥前系	9.4	3.8	2.8	ロクロ	透明釉	染付	手描き 内側押捺	二重方形 内側斜め 字路(脚 内)	灰白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	礫反形。1810年代~幕末
217	磁器	碗蓋	瀬戸・美濃系	9.2	3.8	3.1	ロクロ	透明釉	染付	手描き	一重方形 内側斜め 字路(脚 内)	灰白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	礫反形。19世紀第1四半期~19世紀第3四半期
218	磁器	碗蓋	瀬戸・美濃系	6.85	3.0	2.0	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	礫反形。19世紀第1四半期~19世紀第3四半期	
219	磁器	碗蓋	瀬戸・美濃系	(9.2)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	礫反形。19世紀第1四半期~19世紀第3四半期	
220	磁器	碗蓋	肥前系	(9.0)	4.2	3.15	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	高台。1820~1870年代	
221	磁器	碗蓋	肥前系	(10.0)	(4.5)	2.9	ロクロ	透明釉	染付	手描き	「太明一 筋」(脚 み内)	反白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	高台。1820~1870年代
222	磁器	碗蓋	肥前系	—	(4.7)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	高台。1820~1870年代	
223	磁器	皮重・ 蓋物垂	肥前系	(10.0)	—	—	ロクロ	透明白(台 わせ目脚 く)	染付	手描き	灰白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	表土・埋乱	
224	磁器	皮重・ 蓋物垂	肥前系	(8.8)	—	—	ロクロ	青白釉(台 わせ目脚 く外面) 透明釉 (外・内面)	染付	手描き	灰白色 細 (白色珠地)	表土・埋乱	青磁染付	
225	陶器	碗	肥前系	(10.8)	5.2	7.4	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/1	表土・埋乱	瓦器手破。青白釉手把。17世紀後半~18世紀前半	
226	陶器	碗	肥前系	—	(5.1)	—	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/2 (白色珠地)	表土・埋乱	瓦器手破。17世紀後半~18世紀前半	
227	陶器	碗	肥前系	—	5.1	—	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/2 (白色珠地)	表土・埋乱	瓦器手破。17世紀後半~18世紀前半	
228	陶器	碗	肥前系	—	(6.0)	—	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/2 (やや白色珠地 く)	表土・埋乱	瓦器手破。漆絆。17世紀後半~18世紀前半	
229	陶器	碗	肥前系	—	(4.6)	—	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/1 (白色珠地)	表土・埋乱	瓦器手破。17世紀前半	
230	陶器	碗	肥前系	—	4.6	—	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/2	表土・埋乱	瓦器手破。17世紀後半~18世紀前半	
231	陶器	碗	肥前系	—	(5.3)	—	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/2 (白色珠地)	北朝	瓦器手破。漆絆。17世紀後半~18世紀前半	
232	陶器	碗	肥前系	(11.9)	—	—	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/2 (白色珠地)	表土・埋乱	瓦器手破。17世紀後半~18世紀前半	
233	陶器	碗	肥前系	(10.8)	—	—	ロクロ	灰釉			灰白色 2.578/2 (白色珠地)	表土・埋乱	瓦器手破。17世紀後半~18世紀前半	
234	陶器	碗	肥前系	(11.5)	5.4	7.3	ロクロ	灰釉(底 部剥離く)	鉢底	手描き	刻印「清 水」・丹 波焼(高 台内)	灰白色 2.578/2	表土・埋乱	京焼風陶器。17世紀後半~18世紀前半
235	陶器	碗	肥前系	9.6	5.0	6.15	ロクロ	灰釉(底 部剥離く)	鉢底	手描き	刻印「小 松屋」・丹 波焼(高 台内)	灰白色 2.578/2 (白色珠地)	表土・埋乱	京焼風陶器。17世紀後半~18世紀前半
236	陶器	碗	肥前系	(9.3)	5.0	6.1	ロクロ	灰釉(底 部剥離く)	鉢底	手描き	刻印「清 水」・丹 波焼(高 台内)	灰白色 2.578/1	表土・埋乱	京焼風陶器。17世紀後半~18世紀前半
237	陶器	碗	肥前系	(11.2)	(4.0)	5.5	ロクロ	鉢底	白化粧土	刷毛目	灰白色 2.578/2	表土・埋乱	17世紀後半~	
238	陶器	碗	肥前系	—	(4.5)	—	ロクロ	透明釉 (白色粧土 塗りのち)			灰白色 2.578/1 (やや白色珠 地)	表土・埋乱	陶器染付?。畫付粉付。17世紀後半~19世紀	
239	陶器	碗	瀬戸・ 美濃系	—	4.9	—	ロクロ	鉢底(天 目脚) 鉢底(底 部)			灰白色 2.578/1 (やや白色珠 地)	表土・埋乱	天目碗。17世紀	
240	陶器	碗	瀬戸・ 美濃系	—	(4.1)	—	ロクロ	鉢底(内 面)			灰白色 2.578/2 (やや白色珠 地)	表土・埋乱	天目碗。17世紀	
241	陶器	碗	瀬戸・ 美濃系	—	4.0	—	ロクロ	灰釉(底 部剥離く外 縁脚(内 面))		トビガンナ (外縁)	淡黃褐色 2.578/3	表土・埋乱	鎌茶碗。18世紀後半~19世紀前半	
242	陶器	碗	底・ 信楽系	(9.2)	—	—	ロクロ	灰釉	上給付 (赤色・ 緑色・ 黄色 鉢底)	手描き	灰白色 578/1 (白色珠地)	表土・埋乱	注連錦文碗。18世紀前半~19世紀前半	
243	陶器	碗	底・ 信楽系	—	—	—	ロクロ	灰釉	鉢底	手描き	灰白色 578/1 (白色珠地)	表土・埋乱	注連錦文碗。18世紀後半~19世紀代	
244	陶器	碗	底・ 信楽系	—	(3.4)	—	ロクロ	灰釉(底 部剥離く)		上給付 (赤色 鉢底)	手描き	灰白色 578/1 (やや白色珠 地)	表土・埋乱	注連錦文碗。18世紀後半~19世紀代
245	陶器	碗	底・ 信楽系	—	(5.3)	—	ロクロ	灰釉(底 部剥離く)			灰白色 577/1 (白色珠地)	表土・埋乱	表土・埋乱	
246	陶器	碗	底・ 信楽系	—	3.3	—	ロクロ	灰釉(底 部剥離く)			灰白色 N.B.	表土・埋乱	表土・埋乱	

註は第2表に同じ。

第10表 包含層遺物観察表(9)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 拂み幅(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	絞付	装飾技法	鉢・鋤田・ 器書	胎土色・ 含有物質	遺構・層位	備考
247	陶器	碗	肥前系	—	(2.6)	—	ロクロ	黒釉(内面 上半) 銀鉢(裏 内側外 面下半)			灰白色 N6/ (灰色味強い)	表土・焼粘	置砂目跡、1610~1640 年代	
248	陶器	碗	鹿戸・ 美濃系	—	(5.5)	—	ロクロ	銀鉢(底 削除<)		鉢印一重 方形枠 内波線(高 台盤)	灰白色 2.5Y7/1 (やや灰色味強 いV)	表土・焼粘		
249	陶器	皿	肥前系	—	(5.1)	—	ロクロ	網目鉢(底 削除<)			灰白色 5Y8/1 (やや白色味強 いV)	表土・焼粘	網目皿、見込鉢/目鉢削 り砂目、17世紀末~18 世紀初	
250	陶器	皿	肥前系	—	4.4	—	ロクロ	灰鉢(内 面)			灰黄色 2.5Y7/2 (やや灰色味強 いV)	表土・焼粘	見込鉢/目鉢削ぎ・砂付器、 1650~1780年代	
251	陶器	皿	肥前系	11.9	4.0	3.7	ロクロ	灰鉢(外 面上半+ 内面)			灰白色 5Y7/1 (やや灰色味強 いV)	西側溝	見込鉢、置砂目、1610~ 1690年代	
252	陶器	皿	肥前系	(13.2)	4.3	3.4	ロクロ	灰鉢(底 削除<)			灰白色 2.5Y8/1	表土・焼粘	見込鉢、高台砂目、1610~ 1690年代	
253	陶器	皿	肥前系	11.6	3.7	2.0	ロクロ	灰鉢(底 削除<)			灰白色 5Y7/1 (やや白色味強 いV)	北側溝	灰釉溝縁皿、見込、高台砂 目、1610~1640年代	
254	陶器	皿	肥前系	(13.9)	—	—	ロクロ	灰鉢			灰白色 2.5Y7/1	表土・焼粘	灰釉溝縁皿、1610~1640 年代	
255	陶器	皿	肥前系	—	4.1	—	ロクロ	灰鉢(底 削除<)			灰白色 2.5Y8/2 (やや灰色味強 いV)	北側溝	見込砂目、高台砂付器	
256	陶器	皿	肥前系	—	4.5	—	ロクロ	灰鉢(底 削除<)			灰白色 2.5Y8/1	表土・焼粘	見込砂目、見込	
257	陶器	皿	肥前系	—	(9.0)	—	ロクロ	灰鉢 壱化粗土	三角手 印花・緋 施V)		灰白色 2.5Y8/1 (白色味強いV)	表土・焼粘	見込砂目、1610~1690年 代	
258	陶器	皿	肥前系	—	4.9	—	ロクロ	灰鉢	鉢柱	手焼き	灰黄色 2.5Y7/2	表土・焼粘	鉢柱溝、見込胎土目、1594 年頃~1610年代	
259	陶器	皿	肥前系	—	4.7	—	ロクロ	灰鉢(内 面上半+ 内面)			にぶい褐色 7.5Y7/3	壁掛器	見込胎土目跡、1594年 頃~1610年代	
260	陶器	皿	肥前系	(13.2)	(4.7)	3.5	ロクロ	灰鉢(底 削除<)			灰白色 N6/	表土・焼粘		
261	陶器	皿	肥前系	(15.0)	(5.0)	5.35	ロクロ	灰鉢(底 削除<)	鉢柱	手焼き	灰白色 2.5Y7/1 (白色味強いV)	表土・焼粘	鉢柱溝、17世紀	
262	陶器	皿	肥前系	—	—	4.7	型打	灰鉢(費 を含む全 面)	型打による 縦溝		灰白色 2.5Y8/1	北側溝	鉢柱、置砂目、三足足器	
263	陶器	皿	肥前系	—	7.2	—	型打	灰鉢(底 削除<)	鉢柱 立付	手焼き	灰白色 2.5Y8/2	表土・焼粘	京傳風陶器、17世紀後半~ 18世紀前半	
264	陶器	皿	肥前系	(23.6)	(8.8)	3.1	ロクロ	灰鉢(裏 内側外 面含む底 削除<)	鉢柱	手焼き	灰白色 5Y8/1 (白色味強いV)	表土・焼粘	京傳風陶器、17世紀後半~ 18世紀前半	
265	陶器	皿	鹿戸・ 美濃系	(15.0)	6.1	3.65	(外型) (内型) 立付(高台 内面)	灰鉢(底 削除<)			灰白色 2.5Y8/2	表土・焼粘	木足形	
266	陶器	皿	(大皿) 鹿戸・ 美濃系	(37.4)	—	—	ロクロ	灰鉢(高 台底盤跡)			灰白色 5Y8/1 (白色味強いV)	表土・焼粘	壁掛	壁掛(内面上半)、16世紀 末~17世紀初期
267	陶器	盤	備前系	(40.0)	—	—	ロクロ				赤褐色 10R5/4	表土・焼粘	赤褐色	17世紀後半~18 世紀初
268	陶器	向付	肥前系	—	5.1	—	ロクロ	灰鉢(底 削除<)	鉢柱	手焼き	にぶい褐色 5Y7/4	表土・焼粘	赤褐色	17世紀
269	陶器	向付	東・ 信楽系	—	(5.0)	—	型打	灰鉢(底 削除<)	鉢柱	手焼き	にぶい褐色 10Y7/4	表土・焼粘	赤褐色	17世紀後半~18 世紀初
270	陶器	鉢?	坂平	(10.2)	—	—	ロクロ	褐鉢			灰白色 N6/ (白色味強いV)	表土・焼粘	礪器質土、19世紀	
271	陶器	鉢	肥前系	(33.0)	(12.4)	10.8	ロクロ	鉢柱(底 削除・内 面下半、 内面)	白化粗土	刷毛目	赤灰色 2.5YR5/1	表土・焼粘	透青?、17世紀後半~18 世紀後半	
272	陶器	鉢	肥前系	(33.7)	(11.3)	(11.0)	ロクロ	鉢柱(底 削除・内 面下半、 内面)	白化粗土	刷毛目	赤褐色 10R5/4	表土・焼粘	見込砂目、17世紀後半~18 世紀後半	
273	陶器	鉢	肥前系	—	(12.0)	—	ロクロ	鉢柱(底 削除・内 面)	白化粗土	刷毛目	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	表土・焼粘	見込砂目、内側面陶器片埋 青、17世紀後半~18世紀 後半	
274	陶器	鉢	肥前系	—	(13.5)	—	ロクロ	灰鉢	二彩手		褐色 7.5YR6/1	表土・焼粘	見込砂目、17世紀後半~ 18世紀後半	
275	陶器	鉢	肥前系	—	(12.2)	—	ロクロ	透明釉	白化粗土	刷毛目?	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 2.5YR6/4(芯部)	表土・焼粘	17世紀後半~18世紀後半	

註は第2表に同じ。

第11表 包含層遺物観察表(10)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・脚み径(cm)	器高(cm)	成形技法	鉢葉	輪付	装飾技法	銘・刻印・書	胎色・含有物	遺構・層位	備考
276	陶器	鉢	肥前系	—	(13.3)	—	ロクロ	灰輪(足付鉢・外面)	白化土	三島手(印花・捺彫り)		赤褐色 10R5/3	表土・埋乱	見込砂目、17世紀後半～18世紀後半
277	陶器	大鉢	大谷	(35.4)	—	—	ロクロ	鉢輪			にぶい赤褐色 10R6/4	表土・埋乱	19世紀	
278	陶器	程鉢	瀬戸・美濃系	(25.0)	(15.7)	—	ロクロ	灰輪(足付鉢・外面)		墨書きあり(高台内)	灰白色 2.5Y8/1(白色味強い)	表土・埋乱	見込真珠、19世紀後半～18世紀後半	
279	陶器	小鉢	肥前系	—	3.4	—	ロクロ	鉢輪(奥付鉢・外面)			にぶい赤褐色 10R6/3	壁崩落土		
280	陶器	小鉢	窯・信楽系	—	3.8	—	ロクロ	灰輪(高台内)			灰白色 2.5Y8/1	表土・埋乱		
281	陶器	小鉢	舞子	—	3.6	—	ロクロ	鉢輪(奥付鉢・外面)			灰白色 M7/(やや白色味強い)	表土・埋乱	胎土は黒色の鉄状物粒子を多量に含み、灰輪には鐵染みがみられる。19世紀	
282	陶器	香炉・火入	肥前系	—	6.6	—	ロクロ	鉢輪(足付鉢・外面)			にぶい赤褐色 2.5Y8/3	表土・埋乱	切高台(口方向)	
283	陶器	香炉・火入	瀬戸・美濃系	(12.6)	(10.0)	6.8	ロクロ	鉢輪(足付鉢・外面) アガリ輪(足付鉢・外面)			灰白色 2.5Y8/2(白色味強い)	表土・埋乱	切高台	
284	陶器	香炉・火入	窯・信楽系	(10.0)	—	—	ロクロ	鉢輪(外面～口縁部内面) (内面)			灰白色 10Y87/1(やや灰色味強い)	表土・埋乱	黄入顔譜	
285	陶器	香炉	波平	(7.8)	(5.6)	3.0	ロクロ	貼付(足付・足先残れ)			灰白色 2.5Y8/1(白色味強い)	表土・埋乱	19世紀	
286	陶器	香炉・火入	—	—	(14.3)	—	ロクロ	灰輪?			にぶい赤褐色 2.5Y8/4	表土・埋乱		
287	陶器	瓶	備前系	—	(5.8)	—	ロクロ				灰色 N6/	表土・埋乱	波土(底部脇外)	
288	陶器	瓶	備前系	—	(6.4)	—	ロクロ				灰褐色 7.5R6/2	表土・埋乱	波土・火煙(外面)	
289	陶器	瓶	備前系	—	(10.7)	—	ロクロ				赤褐色 10R4/3	表土・埋乱	波土(外)	
290	陶器	瓶	備前系	—	—	—	ロクロ	留根・貼付(布袋)			灰白色 2.5Y7/1(灰色味強い)	表土・埋乱	波土(外)	
291	陶器	瓶	大谷	—	(7.0)	—	ロクロ	鉢輪(外面)			赤色 10R5/6	表土・埋乱	底部波成後穿丸、19世紀	
292	陶器	—	大谷	—	6.2	—	ロクロ	鉢輪(底部剥離・外面)			灰赤色 10R5/2	表土・埋乱	既たは水注または壺、19世紀	
293	陶器	壺	肥前系	(24.2)	—	—	ロクロ	鉢輪	留毛目(鉢輪を削り取る)		焼反色 7.5Y86/1(灰色味強い)	表土・埋乱		
294	陶器	壺	肥前系	—	12.3	—	ロクロ	鉢輪 灰輪(足付・内面部上部)			にぶい赤褐色 2.5Y8/3	表土・埋乱	見込付壺、高台付壺、泥部側成後穿丸? 一極木鉢用?	
295	陶器	壺?	備前系	(17.5)	—	—	ロクロ				灰赤色 10R5/2	北側溝	自然縫(外)	
296	陶器	壺	大谷	—	—	—	ロクロ	鉢輪			赤褐色 10R5/4	表土・埋乱	19世紀	
297	陶器	壺	大谷	—	(18.2)	—	ロクロ	鉢輪(足部外張り)			赤褐色 10R5/4	表土・埋乱	底部内面凹し・もみ版筋、19世紀	
298	陶器	—	大谷?	—	(20.0)	—	ロクロ	鉢輪(足部外張り)			褐色 2.5Y86/6	表土・埋乱	更または大鉢、壺土? (内面)、19世紀	
299	陶器	壺	窯・信楽系	(8.0)	—	—	ロクロ	灰輪			灰白色 M7/(やや白色味強い)	表土・埋乱		
300	陶器	壺	窯・信楽系	—	(10.6)	—	ロクロ	留根(底部剥離・外面)			灰白色 N6/(やや灰色味強い)	表土・埋乱	焼白壺?、17世紀前半～18世紀	
301	陶器	壺	窯・信楽系	—	(8.9)	—	ロクロ	留根(底部剥離・外面)			明褐色 5Y7/2(内側) 灰白色 2.5Y8/1(内側)	表土・埋乱	焼白壺?、17世紀前半～18世紀	
302	陶器	—	丹波系	—	(19.5)	—	ロクロ	鉢輪(足部外張り)			焼反色 10Y86/1 灰褐色 10R6/2	表土・埋乱 北側溝	更または壺	
303	陶器	手水鉢	瀬戸・美濃系	(31.4)	—	—	ロクロ	灰輪 透明輪(足付・底部内面) 鉢輪と底部内面剥離し掛け	下輪付 (鉢輪・底部内面剥離・鉢輪・底部内面)		灰白色 N6/(やや灰色味強い)	表土・埋乱	底部外側スス付着	
304	陶器	急須	—	5.0	5.4	7.2	ロクロ	透明輪(外面) (白化粧土・底部内面剥離のち)		手彫き	にぶい黄褐色 10Y87/3	表土・埋乱	底部外側スス付着	
305	陶器	急須(把手)	—	—	—	—	ロクロ	透明輪(足付・底部内面剥離のち)			にぶい黄褐色 10Y87/3	表土・埋乱	304の把手?	
306	陶器	土瓶	瀬戸・美濃系	(9.7)	—	—	ロクロ	灰輪(奥受け抜く外面)			灰白色 2.5Y8/2(やや白色味強い)	表土・埋乱		

註は第2表に同じ。

第12表 包含層遺物観察表(11)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・脚み幅(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	絆付	装飾技法	鉢・鋤印・墨書き	胎土色・含有物質	遺構・層位	備考
307	陶器	土瓶	—	—	7.3	—	ロクロ	灰釉(内面)			淡黄色 2.5Y8/3	表土・埋乱		
308	陶器	土瓶(注口)	—	—	—	—	ロクロ 貼付	灰釉(外 面・注口 内面)透明白 釉(内面)	白化粗土		灰黄色 2.5Y7/2	壁面薄土		
309	陶器	土瓶(注口)	—	—	—	—	ロクロ 貼付	灰釉 (白色粘土 帯のち)			灰白色 10Y8/2	表土・埋乱		
310	陶器	土瓶(注口)	—	—	—	—	ロクロ 貼付	灰釉(外 面) 糊付のち 灰釉?(内 面)			淡黄色 7.5Y8/3	表土・埋乱		
311	陶器	植木鉢?	—	(10.3)	—	—	ロクロ	鉄釉			灰白色 NT/ (灰色強い)	表土・埋乱		
312	陶器	片口	肥前系	—	—	—	ロクロ	灰釉	鉄輪	手描き	にぶい赤褐色 5Y8/4	表土・埋乱	佐賀津、17世紀	
313	陶器	擂鉢	備前系	(30.0)	—	—	ロクロ				褐色灰 5YR6/1	北側溝		
314	陶器	擂鉢	備前系	(33.2)	—	—	ロクロ				にぶい赤褐色 10R6/4	表土・埋乱	佐賀津、17世紀	
315	陶器	擂鉢	備前系	(29.0)	—	—	ロクロ				にぶい赤褐色 3.5YR6/3 灰褐色 NS/(口縁 部)	北側溝		スリメ 12条/単位。口縁 部と口縁部外側に墨 引き、内側に墨引き。 口縁部上端と口縁部外側下 部に墨引き。口縁部外側 と底部外側に色調差。 底部外側(17世紀前葉) 鉄輪外側 回転ナガ
316	陶器	擂鉢	備前系	(25.5)	—	—	ロクロ				赤褐色 10R5/4	表土・埋乱	スリメ 10条/単位。口縁 部と口縁部外側に墨 引き、内側に墨引き。 底部外側(19世紀中葉) 鉄輪外側 回転ナガ	
317	陶器	擂鉢	備前系	—	—	—	ロクロ				にぶい赤褐色 2.5YR6/4	表土・埋乱	スリメ 10条/単位。口縁 部と口縁部外側に墨 引き、内側に墨引き。 底部外側(19世紀初頭) 鉄輪外側 回転ナガ	
318	陶器	擂鉢	備前系	—	(17.3)	—	ロクロ 貼付				にぶい赤褐色 2.5YR6/4	表土・埋乱	スリメ 9条/単位。貼付高 台、表土(外・内面)。火 照焼。備前近世3期(16世 紀後半-17世紀初頭) 鉄輪外側 ナデ?	
319	陶器	擂鉢	備前系	—	—	—	ロクロ				褐色 2.5YR6/6	表土・埋乱	備前近世2期(16世紀後 半-17世紀初頭) 鉄輪外側 回転ナガ	
320	陶器	擂鉢	堺・ 明石系	(29.0)	—	—	ロクロ				灰褐色 NS/(外側) 褐色 10R5/4 (内側)	表土・埋乱	スリメ 6条/単位。白神 1式(18世紀後半-19 世紀初頭) 鉄輪外側 回転ヘラケズリ のち回転ナガ	
321	陶器	擂鉢	堺・ 明石系	(26.9)	—	—	ロクロ				灰色 NS/ 赤褐色 10R5/4 (芯部)	表土・埋乱	スリメ 9条/単位。白神1 式(18世紀中葉) 鉄輪外側 回転ヘラケズリ のち回転ナガ	
322	陶器	擂鉢	堺・ 明石系	(26.5)	—	—	ロクロ				赤褐色 10R5/4	表土・埋乱	スリメ 16条/単位。休耕 上部と下部に色調差。白神 1式(18世紀後半-19 世紀初頭) 鉄輪外側 回転ヘラケズリ のち回転ナガ	
323	陶器	擂鉢	堺・ 明石系	—	—	—	ロクロ				赤褐色 10R6/6	表土・埋乱	白神3型(18世紀後半 -19世紀) 鉄輪外側 ナデ	
324	陶器	擂鉢	堺・ 明石系	—	(10.8)	—	ロクロ				灰白色 NT/	表土・埋乱	黒込スリメ放射状(9条/ 鉄輪外側 回転ナガ	
325	陶器	擂鉢	堺・ 明石系	—	(20.0)	—	ロクロ				赤褐色 10Y5/4	表土・埋乱	底部端から1cmほどそこ らを焼くナカ。わざかに高 台を作り出す? 鉄輪外側 回転ナガ	
326	陶器	擂鉢	堺・ 明石系?	—	(13.2)	—	ロクロ				赤色 10R5/6	表土・埋乱	鉄輪外側 ナデ	
327	陶器	擂鉢	堺・ 明石系?	—	(19.5)	—	ロクロ				赤褐色 10R5/4	表土・埋乱	高台内欠塗部分あり(燒 付はせず高台欠塗) 鉄輪外側 回転ナガ	
328	陶器	擂鉢	瀬戸・ 美濃系	—	—	—	ロクロ	鉄輪(外 面・口縁 内面) 鉄輪(頂 部内面)			灰白色 2.5Y8/2	表土・埋乱		
329	陶器	擂鉢	—	(19.5)	—	—	ロクロ	鉄輪			灰色 NS/ 赤褐色 2.5Y6/2 (芯部)	北側溝	スリメ 19条/単位	
330	陶器	火鉢?	瀬戸・ 美濃系	—	—	—	板作り	灰釉 ウノ輪、 アガノ輪 消し掛け (外側)			灰褐色 2.5Y7/2 (灰色強い)	表土・埋乱	角火鉢?	

註は第2表に同じ。

第13表 包含層遺物観察表(12)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・脚み径(cm)	器高(cm)	成形技法	輪葉	繪付	装飾技法	銘・鉢印・墨書き	胎土色・含有物質	遺構・層位	備考
331	陶器	鍋	—	(14.0)	—	—	ロクロ	鉄輪(棒輪)				灰白色 2.577/I	表土・擾乱	
332	陶器	手平鍋(把手)	—	—	—	—	ロクロ	貼付	灰輪			にじいろ赤褐色 10YR7/2	表土・擾乱	
333	陶器	灯明皿 傷痕系	(8.0)	—	—	—	ロクロ					にじいろ赤褐色 2.5YR7/4	表土・擾乱	壁土(内面)
334	陶器	灯明皿 傷痕系	—	—	—	1.0	ロクロ					にじいろ赤褐色 10R6/4	表土・擾乱	壁土(内面)、灯芯油痕
335	陶器	灯明受皿(上皿)	大谷	7.1	3.0	1.5	ロクロ	鉄輪(底部跡)				褐色 7.5YR4/I	壁付灯明受皿、扇下部外表面 板目状瓦底、19世紀	
336	陶器	味噌味合器	大谷	—	4.0	—	ロクロ	鉄輪(底部跡)				褐色 2.5Y6/6	表土・擾乱	高台状瓦底(2か所)、19世紀
337	陶器	魚頭面	萬古系	5.8	1.5	2.0	型成形	鉄輪(嘴み上部)				褐色 7.5YR5/I	表土・擾乱	外、内側に細かい布目痕、 明治~口縁部上面:ユビオサリ
338	陶器	土瓶蓋	喜・佐奈系	(6.1)	2.6	3.8	ロクロ	灰輪(合わせ目隠) 白化粧土	イチッテン描	刻印「寶山」(見 出)	灰白色 10YR8/2	表土・擾乱		
339	陶器	土瓶蓋	—	(6.2)	—	—	ロクロ				灰白色 2.578/I	表土・擾乱		
340	陶器	蓋	傷痕系	(10.0)	(3.8)	1.4	ロクロ				にじいろ赤褐色 2.5YR6/4	表土・擾乱		
341	土質質土器	皿	—	(14.1)	(9.6)	2.35	ロクロ				灰白色 10YR8/2 長石・結晶片岩 金霞母(極小、 少量)	表土・擾乱	底部スス付帯 外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ	
342	土質質土器	皿	—	(11.0)	(7.0)	1.65	ロクロ				灰白色 10YR8/I	表土・擾乱	外表面スス付帯 外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ	
343	土質質土器	皿	—	(10.6)	(7.6)	1.65	ロクロ				灰白色 10YR8/2 長石・金霞母(極 小、少量)	表土・擾乱	外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ、ナデ	
344	土質質土器	皿	—	(10.9)	(7.0)	1.6	ロクロ				黄褐色 2.5Y5/I 長石・(極小、少量)	表土・擾乱	外表面スス付帯、 打芯油痕 外表面:回転ナデ	
345	土質質土器	皿	—	(10.4)	(7.1)	1.4	ロクロ				灰白色 10YR8/2 長石・黒色粒 金霞母(極小、 少量)	表土・擾乱	打芯油痕 外表面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	
346	土質質土器	皿	—	(11.3)	—	—	ロクロ				灰白色 10YR8/1 長石・黒色粒(極 小、少量)	表土・擾乱	外表面スス付帯 外表面:回転ナデ	
347	土質質土器	皿	—	11.0	8.1	1.6	ロクロ				灰白色 10YR8/2 長石・石英 金霞母(極小、少量)	表土・擾乱	外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ	
348	土質質土器	皿	—	10.9	(6.3)	1.95	ロクロ				灰白色 10YR8/2 長石・結晶片岩 金霞母(極小、 少量)	北側溝	灯芯油痕 外表面:石回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ、ナデ	
349	土質質土器	皿	—	10.7	6.7	1.95	ロクロ				灰白色 10YR8/2 長石・結晶片岩 (極小、少量)	北側溝	底部スス付帯 外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ、ナデ	
350	土質質土器	皿	—	(9.4)	(6.05)	1.45	ロクロ				灰白色 10YR8/1 長石・結晶片岩 金霞母(極小、 少量)	表土・擾乱	外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ	
351	土質質土器	皿	—	(9.4)	(6.5)	1.3	ロクロ				灰白色 10YR8/1 金霞母、長石(極 小、少量)	表土・擾乱	外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ、ナデ	
352	土質質土器	皿	—	9.3	6.2	1.65	ロクロ				灰白色 7.5YR8/3 長石・石英 金霞母(極小、少量)	表土・擾乱	外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ	
353	土質質土器	皿	—	(9.0)	(6.8)	1.35	ロクロ				灰白色 10YR8/1 黒色粒、長石、 金霞母(極小、 少量)	表土・擾乱	灯芯油痕 外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ	
354	土質質土器	皿	—	(7.2)	(5.35)	1.25	ロクロ				灰白色 10YR8/2 長石・金霞母(極 小、少量)	北側溝	外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ	
355	土質質土器	皿	—	(7.6)	(5.6)	1.1	ロクロ				にじいろ赤褐色 7.5YR7/3	表土・擾乱	外表面:回転糸切り崩しのち 板目状瓦底(一部)、 回転ナデ、ナデ	
356	土質質土器	皿	—	6.3	4.5	0.95	ロクロ				灰白色 10YR8/2 長石・金霞母(極 小、少量)	表土・擾乱	外表面スス付帯 底部外表面:石回転糸切り崩し (板目状瓦底なし)	
357	土質質土器	皿	—	7.0	4.6	1.0	ロクロ				にじいろ赤褐色 5YR7/4 長石・金霞母(極 小、少量)	表土・擾乱		

註は第2表に同じ。

第14表 包含層遺物観察表 (13)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 掃み幅(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	絵付	装飾技法	鉢・鋤田・ 唐草	胎土色・ 含有有機物	遺構・層位	備考
358	土師質土器	皿	—	(7.3)	(2.4)	1.2	ロクロ					褐色 SYR7/6 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	外面：回転糸切り砸し（底部）、回転ナデ 内面：回転ナデ
359	土師質土器	皿	—	—	6.8	—	ロクロ					褐色 SYR7/4 金霞母・長石・赤色斑粒(極小・少量)	表土・混乱	外面：右回転糸切り砸しの 外縁状況や底あり（底部）、 内面：回転ナデ
360	土師質土器	皿	—	—	(5.8)	—	ロクロ					褐色 SYR7/9 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	外面：右回転糸切り砸しの 外縁状況や底あり（底部）、 内面：回転ナデ
361	土師質土器	皿	—	—	(6.4)	—	ロクロ					褐色 SYR7/9 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	外面：右回転糸切り砸しの 外縁状況や底あり（底部）、 内面：ナデ
362	土師質土器	皿	—	—	(6.4)	—	ロクロ					灰白色 10YR8/2 やや白色抹れ いし・長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	外面：板目状底あり（底部）、 内面：回転ナデ
363	土師質土器	碗型土器	—	(10.2)	3.7	5.0	手捏ね					褐色 SYR7/3 長石・金霞母(極小・少量)	北側窓	内面～底面外側スリット面、 表裏刷毛面
364	土師質土器	碗型土器	—	(10.0)	—	—	手捏ね					灰白色 2.5YB7/2 金霞母・長石・ 石英(極小・少量)	表土・混乱	外面下半・見込み付面 内面：ナデ (口縁部)、 ナデ (サザエ)
365	土師質土器	火鉢・焗炉	—	17.8	—	19.5	板作り（外壁） 外壁抹茶、内壁抹茶 糊付（底部） 型削・貼付 （出窓・把手）				あ彩（底部 窓く外側）	褐色 SYR7/3 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	七面・内部・上部開放部又 付面 外壁外面：ミガキ（底部除 外）
366	土師質土器	火鉢・焗炉	—	—	(21.0)	—	輪踏み？ 貼付					褐色 SYR6/6 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	外側：回転ナデ。ミガキ
367	土師質土器	火鉢・焗炉	—	—	—	—	貼付					褐色 SYR6/3 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	舟形 外・内面：ナデ、横ナデ
368	土師質土器	火鉢・焗炉	—	—	—	—						褐色 SYR6/3 長石・石英・赤色斑粒(極小・少量)	表土・混乱	波打？、アーチ状に切り込 外壁 内面：回転カズレ
369	瓦質土器	火鉢・焗炉	—	(16.0)	—	—	貼付					褐色 2.5Y6/1 長石・金霞母(極小・少量)	北側窓	行火？、内面スリット面 内面：ミガキ 内面：ナデ
370	土師質土器	火道壺	—	(12.0)	—	—	外型成形（肩部・輪削） 貼付・回転合成					褐色 SYR7/1 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	内面スリット面 内面：ナデ・横ナデ 内面：回転ナデ
371	土師質土器	さな	—	(14.5)	(15.2)	1.7	刃削型 棒状工具に よる穿孔					灰白色 2.5Y7/1 褐色 SYR7/1 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	内面離れ付着
372	土師質土器	鍋	—	(30.2)	—	—	粘土巻上 つけ？					褐色 SYR6/3 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	外面スリット面 内面：ナデ・横ナデ 内面：回転ナデ
373	土師質土器	行平鍋	—	(16.6)	—	—	ロクロ	透明釉（明 赤褐色）				褐色 SYR6/6	表土・混乱	
374	土師質土器	楕木鉢？	—	(14.1)	—	—	ロクロ					褐色 7.SYR7/6 長石・結晶片岩・ 赤色斑粒(極小)	北側窓	外・内面・回転ナデ
375	土師質土器	楕木鉢？	—	—	—	—	ロクロ					褐色 2.SYR7/6 長石・石英・赤 色斑粒(極小)	表土・混乱	外・内面・回転ナデ
376	土師質土器	米甌	—	—	(5.2)	—	ロクロ	透明釉				褐色 7.SYR8/4 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	底部に輪穴穿孔、外・内面 スリット面、表面刷毛面
377	土師質土器	焙燒	關西系	(24.4)	—	—	型成形（底 部） 貼付・回転 合成					褐色 2.SYR6/6 長石・金霞母(極小・少量)	表土・混乱	口縁部外側スリット面、底盤 D型（17世紀後半～ 18世紀初頭） 外面：箱状工具堆积上げの 回転ナデ（底部） 内面：回転ナデ

註は第2表に同じ。

第15表 包含層遺物観察表(14)

報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・脚み径(cm)	器高(cm)	成形技法	鉢茎	輪付	装飾技法	銘・刻印・墨書き	胎土色・含有物質	遺構・層位	備考		
378	土師質土器	培塿	閑西系	(24.2)	—	—	型成形(底付・回転合形成)	—	—	—	—	[ごじい様色 SYR7/4 長石・金雲母・ 黑雲母・赤色斑 駆(細小)]	表土・擦乱 外側スリット付表層、器底付(17 世紀末～18世紀初半) 外・内面：回転ナナ(やや 粗)	—		
379	土師質土器	培塿	閑西系	—	—	—	型成形(底 付・回転合形成)	—	—	—	—	[ごじい様色 SYR7/4 長石・金雲母・ 石英・純晶片岩・ 赤色斑駆(細小)]	表土・擦乱 底部外側スリット付表層、器底付(17 世紀末～幕末以降) 外・内面：回転ナナ	—		
380	瓦質土器	培塿	御厨系	(40.4)	—	—	型成形(底 付・回転合形成)	—	—	—	—	[灰白色 SYR7/5 長石・金雲母・ 石英・純晶片岩・ 赤色斑駆(細小)]	表土・擦乱 外側スリット付表層、器底付(口縁部)、 ユビオヤエ(房部)、 内面：回転ナナ	—		
381	瓦質土器	—	—	(8.5)	—	—	削成形(口 縁部・脚部 分割成形)	—	—	—	—	[灰白色 SYR7/5 長石・金雲母・ 石英・純晶片岩・ 赤色斑駆(細小)]	表土・擦乱 蓋頭または土瓶 外・内面：回転ナナ	—		
382	土師質土器	味噌焼き器	—	6.3	3.7	3.1	口クロ	透明釉(赤 褐色)	—	—	—	—	褐色 2. SYR7/6 (白色珠駆(細小))	表土・擦乱 高台に穿孔(2か所)	—	
383	土師質土器	味噌焼き器	—	(6.6)	4.0	3.0	口クロ	透明釉(赤 褐色)	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 (赤褐色)	表土・擦乱 高台に穿孔(2か所)	—	
384	土師質土器	味噌焼き器	—	(6.5)	(4.5)	3.0	口クロ	透明釉(赤 褐色)	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 金雲母(細小)	表土・擦乱 高台に穿孔(2か所)	—	
385	土師質土器	味噌焼き器	—	(7.0)	(4.65)	3.0	口クロ	透明釉(赤 褐色)(底 部駆(細 小))	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 金雲母(細小)	表土・擦乱 高台に穿孔1か所残存	—	
386	土師質土器	味噌焼き器	—	(6.7)	—	—	口クロ	透明釉(赤 褐色)	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 金雲母(細小)	表土・擦乱 高台に穿孔1か所残存	—	
387	土師質土器	味噌焼き器	—	(6.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	褐色 2. SYR7/6 金雲母(細小)	表土・擦乱 高台に穿孔1か所残存	—	
388	土師質土器	味噌焼き器	—	(6.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 金雲母(細小)	表土・擦乱 高台に穿孔1か所残存	—	
389	土師質土器	味噌焼き器	—	(6.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 (赤褐色)	表土・擦乱 高台に穿孔1か所残存	—	
390	土師質土器	味噌焼き器	—	(6.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	褐色 2. SYR7/6 (赤褐色)	表土・擦乱 高台に穿孔1か所残存	—	
391	土師質土器	味噌焼き器	—	—	(4.3)	—	—	口クロ	透明釉(赤 褐色)	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 (赤褐色)	表土・擦乱 高台に穿孔(2か所)	—
392	土師質土器	味噌焼き器	—	—	(4.4)	—	—	口クロ	透明釉(赤 褐色)	—	—	—	—	褐色 2. SYR7/6 金雲母(細小)	表土・擦乱 高台に穿孔(2か所)	—
393	土師質土器	土型	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	褐色珠(松脂)の型??、城 壁の隙間に砂付着?	—	—	
394	土師質土器	—	—	—	(6.6)	—	—	口クロ	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 (赤褐色)	外壁・回転ナナ切り離し(底 部)、回転ナナ 内面・回転ナナ	—	
395	土師質土器	火消壺	—	(22.9)	(22.4)	3.1	外型成形(底 部)	—	—	—	—	—	[ごじい様色 SYR7/4 長石・金雲母・ 石英・純晶片岩・ 赤色斑駆(細小)]	表土・擦乱 内面スリット付表層、 外・内面：回転ナナ	—	
396	土師質土器	火消壺	—	—	(16.6)	—	外型成形(底 部)	—	—	—	—	—	[ごじい様色 SYR7/3 金雲母・長石・ 赤色斑駆(細小)]	表土・擦乱 外壁・回転ナナ、ユビオヤエ(房部) 内面：回転ナナ	—	
397	土師質土器	平手鍋	—	—	4.2	—	口クロ	透明釉(赤 褐色)	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 (赤褐色)	表土・擦乱 表土・擦乱	—	
398	磁器	ミニチュア碗	把前系	(2.9)	1.5	1.7	口クロ	透明釉	染付	手描き	—	—	灰白色 NB/ (白色珠駆(細小))	表土・擦乱 高台内砂付着	—	
399	磁器	ミニチュア碗	把前系	3.4	1.7	2.3	口クロ	透明釉(底 部駆(細 小))	—	—	—	—	灰白色 NB/ (白色珠駆(細小))	表土・擦乱 表土・擦乱	—	
400	土師質土器	ミニチュア瓶	—	—	—	8.15	板作り	—	—	—	—	—	褐色 SYR7/6 長石・金雲母(細 小・少量)	表土・擦乱 内面スリット付表層	—	

註は第2表に同じ。

報告番号	遺物名	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	遺構・層位	備考
401	不明鋼製品	(16.6)	—	0.8	21.9	銅 表土

* [] は残存部のサイズを示す。

報告番号	遺物名	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	遺構・層位	備考
402	インク瓶	6.3	5.8	99.2	表土	肩部に、S.S.S.FOUNTAIN PEN INK. とエンボス加工される
403	ソーダ瓶	24.5	6.6	432.0	表土	外側下部に「登録(マーク)商標 日本麥酒醸造株式会社」、底部に「A5」がエンボス加工されている。1921～1933年に製造された瓶と考えられる

第16表 包含層遺物観察表(15)

報告 番号	遺物名	瓦当・軒丸部(cm) *		瓦当・軒平部(cm) *		軒部(cm) *			調査	色調(断面)	胎土	含有物	塑型材	コピック	遺構・層位	備考		
		文様	瓦当側面	内底 縁	珠様	文様	瓦当側面	支幅										
404	軒丸瓦 三巴文	(16.0)	(10.0)	1.2	—	—	—	(2.2)	—	—	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/2	織密	長石	キラコ	?	表土
405	軒丸瓦 三巴文?	(15.0)	(10.0)	1.3	—	—	—	(1.8)	—	—	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/1	織密	長石	キラコ	?	表土
406	軒丸瓦 三巴文, 道模	(16.0)	(11.0)	1.2	—	—	—	(2.5)	—	—	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/1	織密	表面	?	表土	
407	軒丸瓦 道模	(16.0)	(12.0)	1.3	—	—	—	(1.2)	—	—	—	ナデ	灰黄色 2.5Y10/2	織密	長石・雲母	?	表土	
408	軒丸瓦 三巴文,	13.6	10.3	1.3	—	—	—	(7.3)	12.7	1.5	5.6	ナデ	灰黄色 2.5Y10/2	織密	長石・雲母	?	北側溝	
409	軒丸瓦 三巴文, 道模	(13.0)	(10.0)	0.9	—	—	—	—	—	—	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/1	織密	表面	?	表土	
410	軒丸瓦 三巴文, 道模	11.6	8.2	0.9	—	—	—	(4.5)	10.2	1.4	4.2	ナデ	灰白色 3Y7/1	織密	長石	?	表土	
411	軒丸瓦 道模	(13.0)	(7.8)	1.4	—	—	—	—	—	—	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/1	織密	長石	キラコ	?	表土
412	軒丸瓦 三巴文, 道模	(9.5)	(7.3)	0.9	均壁型草文	(7.0)	5.5	(18.0)	(15.5)	2.1	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/1	織密	長石	?	表土	
413	軒丸瓦	—	—	—	均壁型草文	(15.8)	4.2	—	(15.0)	1.7	—	ナデ	灰白色 N 6/	織密	長石	キラコ	?	表土
414	軒丸瓦	—	—	—	均壁型草文	(7.0)	4.8	—	(9.0)	2.2	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/1	織密	長石	?	表土	
415	軒丸瓦 三巴文, 道模	9.2	5.9	0.8	均壁型草文	(4.2)	4.6	(11.6)	(13.0)	1.8	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/1	織密	長石	?	表土	
416	軒丸瓦 素文	9.0	—	—	素文	(11.6)	4.2	(10.0)	(18.5)	2.0	—	ナデ	灰白色 2.5Y10/1	織密	長石	キラコ	B ?	表土
417	軒丸瓦 素文	8.6	—	—	素文	(4.0)	—	(7.0)	(12.0)	—	—	ナデ	灰黄色 2.5Y10/2	織	表面	?	壁隙落	

* ()は残存部のサイズを示す。計測部は原・小林編(2012)に従う。()内の数値は、残存部から復元した数値を示す。

** 森田(1984)に従う。

報告 番号	遺物名	文様	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	色調	胎土	含有物	遺構・層位	備考
418	敷瓦	—	(14.5)	14.2	2.2	灰白色 7.5Y7/1	緻密	雲母	表土	釘穴1か所、1角を落とす
419	軒丸瓦・軒丸瓦の 再加工品か 瓦の再加工品	三巴文	7.8	5.5	1.4	灰白色 5Y7/1	緻密	長石・雲母	表土	
420	—	—	5.0	4.9	1.9	灰白色 5Y7/1	緻密	長石	表土	
報告 番号	遺物名	最大長(cm) *	最大幅(cm) *	最大厚(cm) *	重量(g)	石材	遺構・層位	備考		
421	磚	(15.0)	6.1	2.0	289.3	?	北側溝			
422	磚	(5.3)	(3.3)	(0.9)	15.6	?	表土			
423	磚	(3.3)	(6.6)	(0.4)	9.4	?	表土			
424	石筆	(3.0)	0.8	0.7	2.3	滑石?	表土	明治から昭和初期に石板と共に使用された文具		
425	石筆	(3.0)	0.7	0.6	2.2	滑石?	表土	明治から昭和初期に石板と共に使用された文具		

* ()は残存部のサイズを示す。

(大伏瓦組合)
上段は森田(1984)による
大伏は現存の新
野町か。

第3章 第20次調査（フロンティア研究センター地点）

第1節 調査の経過と概要

1. 調査に至る経緯

2012年度に、常三島キャンパス東半の工学部エリア北西部に位置する駐車場として利用されていた敷地に、フロンティア研究センター新営の計画が示された。常三島キャンパスの位置する常三島地区は、近世徳島城下町跡の一つとして、周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されている。『御山下島分絵図』（安政年間、個人蔵）などの実測分間絵図によれば、建設予定地は、長谷川家の屋敷地の一角にあたることが明らかであり、範囲内にこれに関係する遺構・遺物の存在が予測された。なお、予定地の南東側に位置する第8次調査地点（総合情報処理センター地点）では、長谷川家屋敷地裏庭の畑地、他の屋敷地との境界を区画する溝などが検出されている。そこで、2013年6月27日から調査員3名が担当して、約1か月半の期間の予定で発掘調査を実施することとなった。調査面積は756m²である。

2. 調査組織

調査組織は以下の通りである。

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査担当 端野晋平（調査主任）

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）

調査補助 古川裕美・前田千夏（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

3. 調査の経過（第59図）

6月27日から重機掘削を開始し、28日からは同じキャンパスで発掘調査を終えつつあった地域連携プラザ地点から器材の搬入を始めた。7月1日には、器材の搬入を終え、環境整備を開始した。その後、調査区内の地下水排水のためのウェルポイント設置に数日間を要し、結局、現場に作業員を入れ、作業を開始したのは4日からであった。同日からは、まず重機掘削では取り除けなかったコンクリート杭などの搅乱除去を行い、そして調査区壁の清掃、側溝の掘削を開始した。重機によって搅乱部分を除去した結果、オリーブ褐



第59図 作業風景

色細砂～シルト層が現れ、11日からは、これを第1遺構面として遺構検出を進めた。その結果、多

数の土坑・ビットが検出され、17日からはこれらの掘削を行いつつ、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測を行った。26日は、第1遺構面の全景写真の撮影に備えて、清掃を行った。29日は、全景写真の撮影を行い、その後、I・II層の掘り下げを始めた。掘り下げは、III層（地山）の上面（第2遺構面）とI層の上面（第1遺構面）との間に、遺構面（第1.5遺構面）を設定して、そこまで行った。30日からは、遺構面までの掘り下げと遺構検出を併行して行い、8月1日からはそれらの作業に加え、遺構掘削を行いつつ、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測を行った。また、山口特任助教の岡山大学転出によって、以後、端野・遠部の調査員2人体制で調査を実施することになった。12日から16日まではお盆休みとして作業を中断し、19日から再開した。20日からは、第1.5遺構面をIII層上面まで掘り下げ、それを第2遺構面とみなして遺構検出を始めた。22日からはそれらの作業に同時併行で遺構掘削を行いつつ、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測も行った。また、調査区西側に落ち込み（本報告での池状遺構〔SG401〕を指す。以下、同じ。）が検出されたので、その範囲を確認するためのサブトレーンチを、東西方向・南北方向で二つ設定し、それぞれを掘削した。東西方向サブトレーンチの土層断面を観察した結果、この落ち込みが遺構ではなく、自然地形であると考えられたため、当初は南北方向サブトレーンチで範囲を確認するにとどめ、落ち込み部分の掘削は行わずに調査を終了する予定であった。ところが、南北方向サブトレーンチを掘削時に、石組み遺構が検出され、それが西側まで延びることが確認された。そのため、第2遺構面については、調査期間の制約上、全景写真撮影後に、落ち込み部分を掘削し、石組み遺構の調査を行うこととした。26日の午前中は雨天のため、作業を中止したが、午後になり天候が回復したので、全景写真撮影のための清掃を行い、その後に写真撮影を行った。27日以降は落ち込みの掘削と石組み遺構の検出、遺構・サブトレーンチ壁土層の写真撮影・実測を行った。30日には落ち込みの掘削と石組み遺構の検出、写真撮影が完了し、台風の接近が予想されたので、石組み遺構についてはシートで養生を施した。9月に入ると、遠部助教の北海道大学転出によって、調査員は端野1名となった。9月2日は、台風接近による天候不良のため、遺構の実測が思うように進行せず、3・4日は雨天のため、現場作業を実施することはできなかつた。5日に作業を再開したが、台風通過中、調査区内は大雨により一時冠水したにもかかわらず、石組み遺構は養生を十分に行ったかいもあって、検出時の状態をほぼ保っていた。同日より石組み遺構の実測を開始し、9日にはそれを完了した。10日からは石組み遺構の石は除去して、その下の盛土の掘り下げを開始し、11日にはそれらの作業を完了した。そして、石組み遺構の周囲や盛土の下で検出された杭などの実測を行った。同日には撤収作業を終え、すべての調査を完了した。

4. 調査の概要

本調査地点では、3面の遺構面が調査され、17世紀前葉～明治期にかけての遺構が確認された。以下、各遺構面で調査された遺構、出土遺物の概要を述べる。

第2遺構面 本遺構面では、17世紀代に掘削された池状遺構1基、石組み遺構1基、溝1条、土坑57基が検出された。遺構密度は低い。明治期に埋没したとみられる池状遺構と石組み遺構を除いて、遺構からは17世紀中葉以降まで下る遺物は得られなかった。調査区西側に位置する池状遺構（SG401）とその中に造られた石組み遺構（SX402）は、飲料水以外の生活用水を利用するための施設と考えられ、

これは常三島遺跡では初出である。調査区南東部に位置する溝（SD371）の用途は不明である。土坑は調査区の南端部を除き、広く分布する。このなかには、建物などの柱穴が含まれていると思われるが、規則的な配置を見出すことにはいたらなかった。

第1.5遺構面 本遺構面では、土坑・ピット126基が検出された。遺構密度は中程度である。出土遺物は、17世紀前葉～中葉のものに限られる。個々の遺構の時期を決定するのは難しいが、層位からみて、多くが17世紀～18世紀前半のものと思われる。土坑・ピットは、調査区の全域に広く分布するが、南半部は分布が疎である。土坑は、形態やサイズが多様であり、一つ一つの性格を確定するのは難しいが、なかにはゴミ穴や柱穴が含まれるものと考えられる。これらには、底面に礎石とみなせる跡が確認されたもの（SP254・SP291）もあったが、建物などの構造物を復元することはできなかつた。

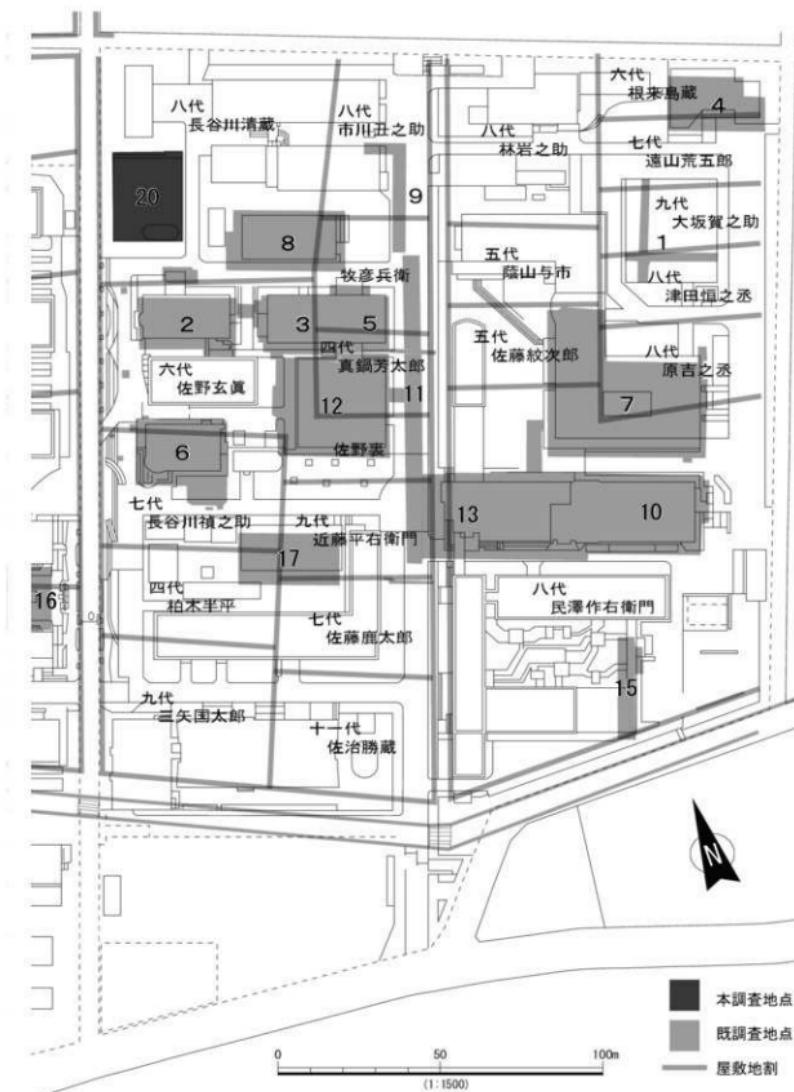
第1遺構面 本遺構面では、18世紀後半～幕末の溝5条、土坑・ピット203基が検出された。遺構密度は高い。出土遺物は、16世紀末～幕末にかけての幅広い時期のものである。基盤となるI・II層から出土した遺物は、おおむね17世紀代のものに限られるが、近接する第2・3・5・6次調査地点での層位所見に準拠して、こうした遺構の時期を想定した。溝には、南北方向のもの（SD01）、東西方向のもの（SD128・SD130・SD206・SD210）の二者がある。さらに、東西方向のものは、短いもの（SD128・SD130）と長いもの（SD206・SD210）とに分かれる。南北方向のものは北東隅、東西方向の短いものは東側中央部、長いものは南側に位置する。これらの溝の用途は不明である。土坑・ピットは、調査区の全域に広く分布するが、南半部は分布がやや疎である。土坑は、形態・サイズとともに多様である。第1.5遺構面と同様、なかにはゴミ穴や柱穴が含まれるものと考えられる。これらには、柱の痕跡が確認されたもの（SP81）もあったが、位置関係などから建物などの構造物を復元することはできなかつた。

出土遺物 池状遺構、石組み遺構、溝、土坑・ピット、包含層から、陶磁器・土器・土製品、金属製品、ガラス製品、瓦、石製品、骨製品、動植物遺体がコンテナ16箱分出土した。

第2節 調査の記録

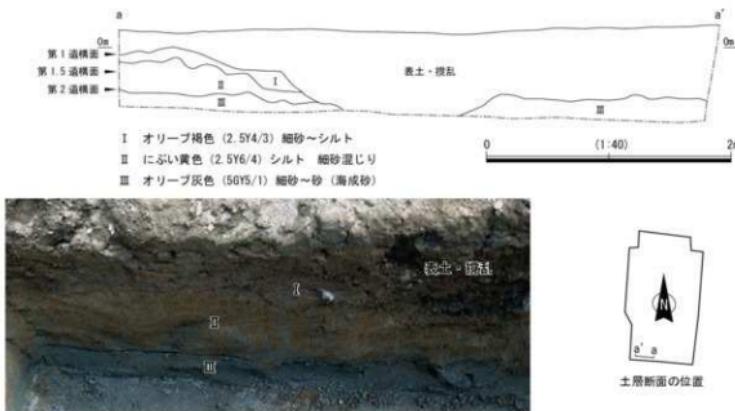
1. 調査地点の位置

徳島大学常三島キャンパスは、南北に走る道路を境として、西側の総合科学部エリアと東側の工学部エリアに分けられる。本調査地点は、工学部エリアの北西部に位置する（第60図）。東側には近世武家屋敷内の塙跡、藩主蜂須賀家家紋入り蒔絵漆碗、漁網鍤の鉄型などが検出された第8次調査地点（総合情報処理センター地点）、南側には近世の青銅製品埋納遺構、幕末から明治期の方形水溜遺構などが検出された第2次調査地点（地域共同研究センター地点）がある。『御山下画図（綱矩様御代御山下画図）』（元禄4年〔1691〕）、『御城下絵図』（享保年間〔1716～1735〕）、『御山下画図』（天明年間〔1781～1789〕）、『徳島御山下絵図』（文化・文政年間〔1804～1830〕）、『御山下島分絵図』（安政年間〔1854～1860〕）、『徳島藩御城下絵図』（明治2～3年〔1869～1870〕）といった絵図によれば、本調査地点は江戸時代の元禄期から明治期初めまで継続して、長谷川家の屋敷地内であったことがわ



第60図 調査地点の位置

屋敷地割・屋敷主名は『御山下島分給図』(安政年間、個人蔵)と徳島藩譜(宮本編 1973)をもとに作成。



第61図 調査区南壁土層断面

かる¹¹⁾。また、『徳島藩土譜』（宮本編 1973）によれば、この間の長谷川家の禄高は 150 石である。

なお、調査にあたっては、調査区外の南西側に原点をとり、南北軸を真北に合わせ、5 m グリッドを設定した。

2. 基本層序

本調査地点の基本土層は 3 層に分けられる。以下、調査区南壁の土層断面（第 61 図）にもとづいて詳述する。なお、現地表面は標高 0.10 ~ 0.20 m であり、そこから標高 0.00 ~ 0.60 m 辺りまでは近代以降の擾乱を受けている。

I 層：オリーブ褐色（2.5Y4/3）細砂～シルトからなる。上面の標高は約 0.00 m、残存厚は 3 ~ 15 cm を測る。近世の整地層と考えられる。

II 層：にぶい黄色（2.5Y6/4）シルトからなる。上面の標高は 0.10 ~ 0.35 m 前後、厚さは 7 ~ 30 cm を測る。近世の整地層と考えられる。

III 層：オリーブ灰色（5G5Y1/1）細砂～砂からなる。上面の標高は 0.40 m 前後を測る。海成砂からなる地山と考えられる。

本調査地点では、1 層上面を第 1 遺構面、3 層上面を第 2 遺構面、第 1 遺構面と第 2 遺構面の中間に第 1.5 遺構面として遺構検出を実施した。

3. 第 2 遺構面の遺構と遺物（第 62 図）

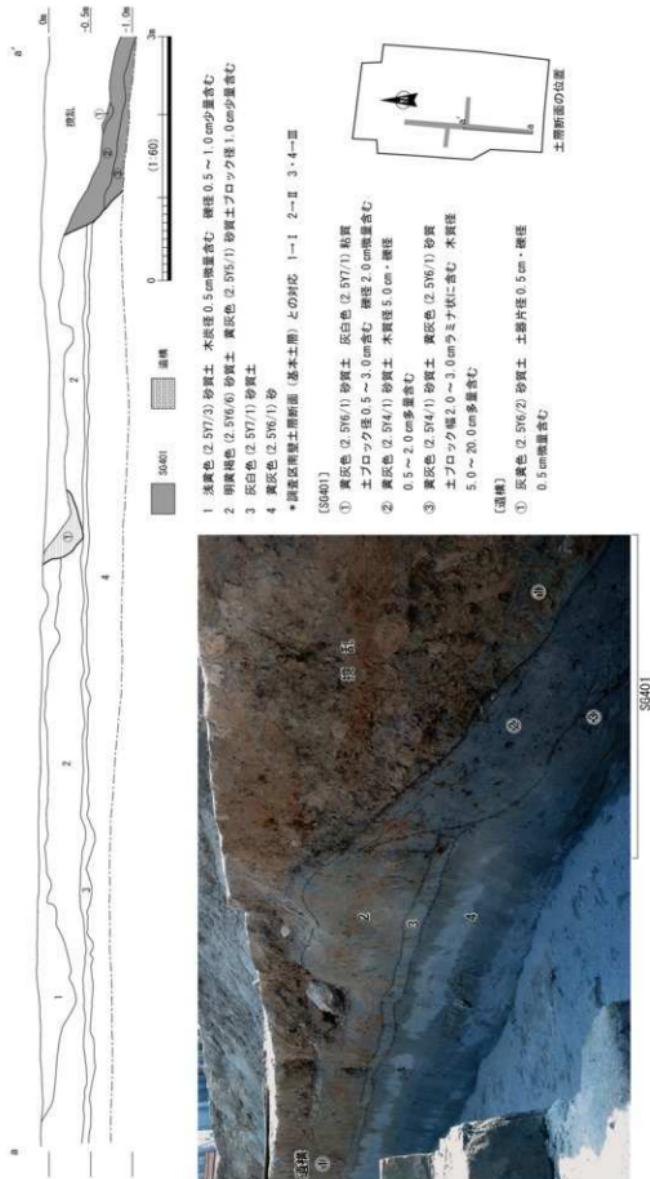
(1) 池状遺構

SG401（第 62 ~ 67 図）

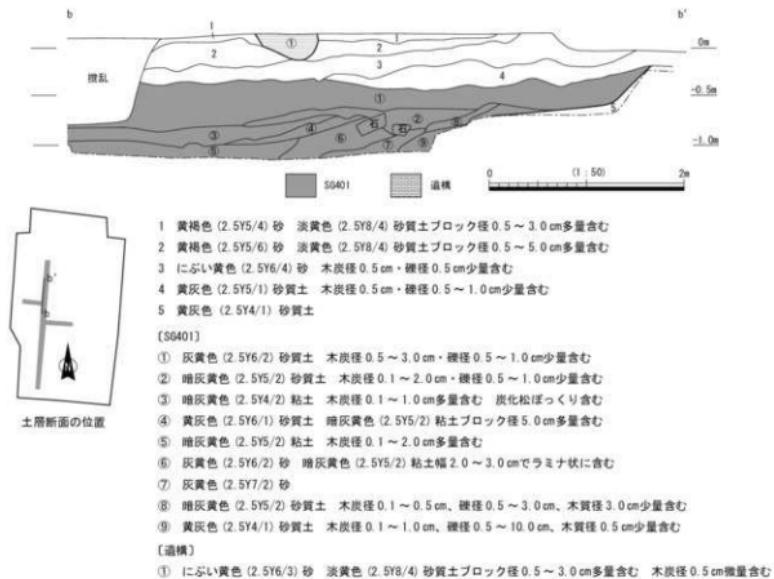
調査区西側中央部に位置する池状遺構である。概報では「落ち込み」として報告した（端野



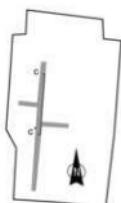
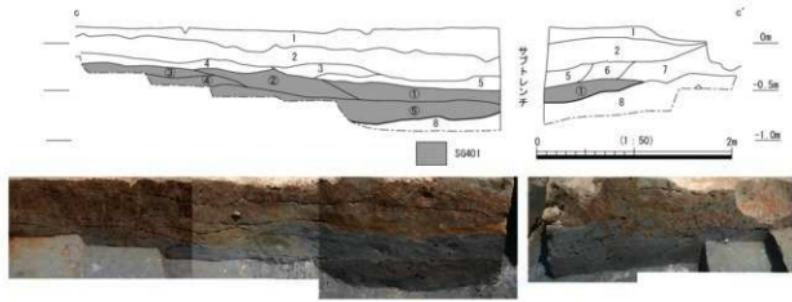
第62図 第2遺構面全体図



第63図 SG401 土壌断面 a-a'



第 64 図 SG401 土層断面 b-b'



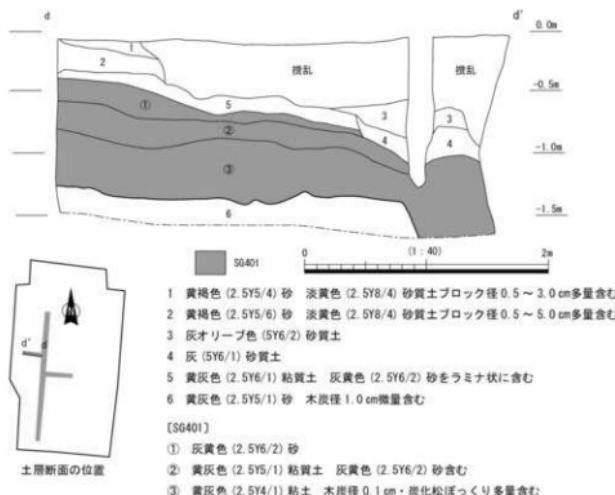
土層断面の位置

- 1 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂 淡黄色 (2.5Y8/4) 砂質土ブロック径 1.0 ~ 5.0 cm 多量含む 木炭径 0.1 ~ 1.0 cm 少量含む
- 2 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 淡黄色 (2.5Y8/4) 砂質土ブロック径 1.0 ~ 5.0 cm 多量含む
- 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土ブロック径 1.0 ~ 3.0 cm 少量含む 木炭径 0.1 ~ 0.5 cm 少量含む 磨径 0.5 cm・瓦片径 0.5 cm 微量含む
- 4 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土ブロック径 1.0 ~ 3.0 cm 少量含む 木炭径 0.1 ~ 0.5 cm 少量含む
- 5 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂ブロック幅 20.0 cm 少量含む 木炭径 0.1 ~ 0.5 cm。炭化松ぼっくり少量含む
- 6 褐色 (10YR6/1) 砂質土 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂ブロック径 10.0 cm 少量含む 木炭径 0.5 cm 少量含む
- 7 明灰褐色 (7.5YR7/1) 砂質土 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂ブロック径 5.0 ~ 10.0 cm 少量含む 木炭径 1.0 cm・磨径 1.0 ~ 3.0 cm 少量含む
- 8 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土ブロック幅 1.0 cmが帯状に水平方向で伸びる 木炭径 0.5 ~ 2.0 cm 少量含む

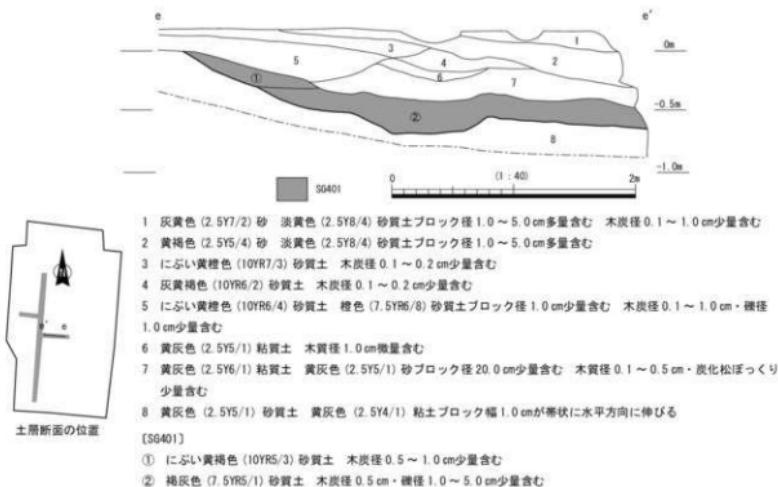
(SG401)

- ① 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂質土 木炭径 0.5 cm・磨径 1.0 ~ 5.0 cm 少量含む
- ② 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂 木炭径 0.1 cm・磨径 0.5 cm 少量含む
- ③ 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土 木炭径 0.1 cm 少量含む
- ④ 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 木炭径 0.1 cm 微量含む
- ⑤ 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂ブロック帯状に含む 木炭径 0.1 ~ 2.0 cm 多量含む 炭化松ぼっくり含む

第65図 SG401 土層断面 c-c'



第66図 SG401 土層断面d-d'



第67図 SG401 土層断面e-e'



第68図 SG401出土遺物

第17表 SG401遺物観察表

監査番号	胎質	器種	生産地	口径 (cm)	奥径・横み幅 (cm)	基高 (cm)	成形技法	施薬	給付	装飾技法	既・鉛印・金墨	胎土色	造構・部位	備考	
1	磁器	皿	肥前系	—	(6.8)	3.3	型打	透明釉	染付 (施化コート)	鋼板転写	灰白色 NR/ (白色地強引)	56401/ 石組み開 輪花。1887年～			
2	陶器	碗	肥前系	—	3.8	—	ロクロ	灰釉 (底部脚C)			灰白色 2 SYB/1	56401/ ⑤	17世紀前葉		
3	陶器	碗	肥前系	—	(4.4)	—	ロクロ	灰釉 (底部脚C)			灰白色 SYT/1	56401/ ⑤	17世紀前葉		
4	陶器	碗	肥前系	—	4.4	—	ロクロ	灰釉 (費村脚C)			灰褐色 SYR6/2	56401/ ③	17世紀前葉		
5	陶器	皿	肥前系	(2.4)	3.8	3.3	ロクロ	灰釉 (底部脚C)			灰白色 SYT/1 (灰褐色強引) 灰褐色 2 SYB/4	56401/ ⑤	17世紀前葉		
6	陶器	皿	肥前系	—	—	—	ロクロ	灰釉			にぶい黄褐色	56401/ 石組み開 1610～1640年代	17世紀前葉		
7	陶器	皿	肥前系	—	3.8	—	ロクロ	灰釉 (底部脚C)			褐色 10YR6/1	56401/ 石組み開 1610～1640年代	17世紀前葉		
8	陶器	皿	肥前系	—	(4.9)	—	ロクロ	灰釉 (内面)			深黄褐色	56401/ 石組み開 1610～1640年代	17世紀前葉		
9	陶器	皿	肥前系	—	(3.7)	—	ロクロ	灰釉 (内面)			灰褐色 2 SYB/3	56401/ 石組み開 1610～1640年代	17世紀前葉		
10	陶器	皿	肥前系	—	4.0	—	ロクロ	灰釉 (底部脚C)			褐色 10YR6/1	56401/ 石組み開 1610～1640年代	17世紀前葉		
11	陶器	鉢	肥前系	—	(10.0)	—	ロクロ	灰釉 (内面)			にぶい褐色	56401/ 石組み開 1610～1640年代	17世紀前葉		
12	陶器	瓶	大谷	—	—	—	ロクロ	鉢釉 (外面)			鉢刻「一輪」 (外蓋部)	56401/ 石組み開 1610～1640年代	19世紀		
13	陶器	擂鉢	肥前系	(28.5)	—	—	ロクロ					灰褐色 SYR6/2	56401/ 石組み開 1610～1640年代	17世紀前葉	

「—」は、「不明」を示す。〔 〕内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

通過・部位欄の丸数字は、第73～74図と対応する。

報告番号	遺物名	最大長 (cm) *	最大幅 (cm) *	最大厚 (cm) *	重量 (g) *	材質 **	造構・部位	備考
14	皿	(3.2)	0.9 (頭部)	0.7 (脚部)	(3.46)	鉢	SG401	石組み断面形。

* () は残存部のサイズを示す。重量は算びを含む。

** 肉眼観察による。

2015)。しかし、絵図をみると、本調査地点のすぐ西側には道路が南北に走っており、この造構の平面プランは長谷川家の屋敷地内で完結するものとみなせる。したがって、ここでは人為的な營力による「池状造構」として報告する。造構全体が検出できたわけではないが、平面形は隅丸方形あるいは長方形と思われ、南北 12.8 m、東西 9.6 m を測る。湧水のため、底面まで完掘できなかったが、断面形は造構の肩から中央に向かって緩やかに傾斜し、中央部で急に深く落ち込む。深さは 1.4 m 以上である。埋土は、土壟断面 d-d' で、①層が灰黄色砂、②層が黄灰色粘質土、③層が黄灰色粘土である。

遺物は、肥前系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、大谷焼、土師質土器、瓦、貝などが少量、埋土から出土した。ここでは、製作年代が明らかなものや生産地・器種が把握し得、かつ残存率が比較的高いものを中心に図化した(第68図・第17表)。遺物の時期は、16世紀末から近代にかけてと幅広いが、なかでも17世紀前葉のものが多い。本造構の掘削時期の決め手となり得るのは、これら遺物のうち、内部の石組み造構(SX402)の構築に伴い、埋没したとみなせるものである。石組みの下や隙間から出土した肥前系陶器の碗(第68図3)と備前系陶器の擂鉢(第68図13)が、これに該当する。これらの製作年代は17世紀前葉であることから、本造構はその時期に掘削されたものとみなせる。後述するSX402盛土から出土した遺物の製作年代もまた、この見解に矛盾しない。

では、埋没時期はどうか。本造構からは、17世紀代の遺物のほか、19世紀代の大谷焼の瓶(第68図12)、19世紀末以降のものとみなせる肥前系磁器の皿(第68図1)も出土した。このうち肥前系磁器は、本造構の埋没時期を示す重要な遺物である。17世紀前葉に掘削された本造構は、その後、3世紀近くにわたって屋敷地の一角落としての機能を有し、明治期の武家屋敷廃絶後に埋没したもの

スリット 11条 / 单位: 口縁
外部裏面黄土層 / 美濃国近世
2a期 (17世紀後半)
側面側面開口部。
無い回転ナメ

とみなせよう。土層断面 a-a'（第63図）をみると、基本土層Ⅱ層（2層）の上方から、本遺構の肩が下りていることがわかる。このことは、整地層であるⅡ層の堆積後に、この遺構が埋没したことを見しておらず、ここでの主張を裏づける事実といえる。

なお、本遺構は第2遺構面で検出したが、先述の通り、出土遺物には近代まで下るものも含まれ、本来は第1遺構面で調査すべきものであった。こうしたことの原因は当初、調査区の西側は近代以降の擾乱のため、破壊されているとみて、調査範囲から外してしまい、包含層を掘り下げるまで、この遺構の存在を正しく認識し得ていなかったことによる。

ところで、常三島地区で確認されている大規模な溝を、治水対策の一環としての排水溜めの「調整池」とみなす見解（北條2006）がある。本遺構も洪水時にはそうした機能を有した可能性がある。

（2）石組み遺構

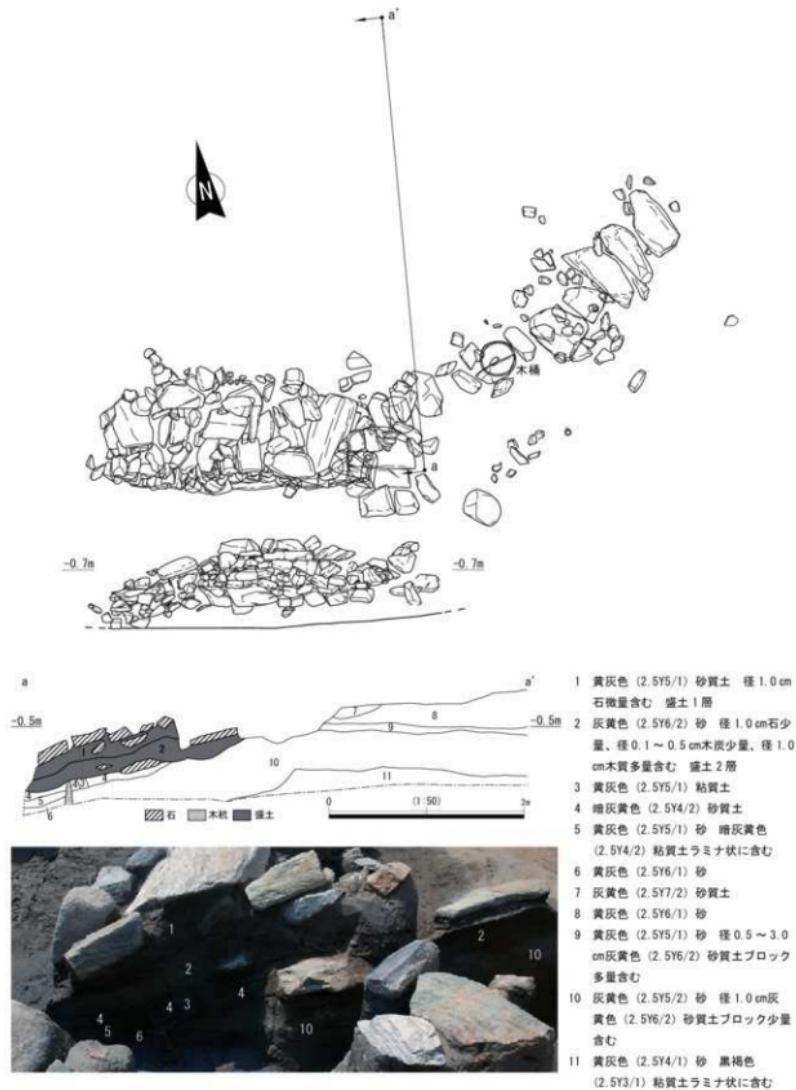
SX402（第69～74図）

調査区西側に位置するSG401の斜面から底面にかけての場所で検出された石組み遺構である。この遺構は、緑色片岩（通称・青石）を含む10～80cmの大石からなり、大きくみて、SG401の北東付近から南西方向へと石が階段状に並べられた部分（階段状部分）と、SG401の底面に大小の石が東西方向で数段にわたって積み重ねられた部分（積石状部分）とに分けられる。石の分布範囲は、階段状部分で長さ2.8m、幅0.9m、積石状部分で長さ3.5m、幅1.3mを測る。石の高さは、階段状部分の最も高いところで標高0.16m、積石状部分の最も低いところで標高-1.30mである。階段状部分の南西端の石を除去すると、木桶が検出された（第72・76～82図）。また、積石状部分の石を除去すると、盛土が検出された。さらに、盛土を除去する過程で、数本の木杭が現れた。これらは積石を構築する前の基礎となった構造物と理解される。

盛土は、黄灰色砂質土の1層と灰黄色砂の2層とに分層できる。1層からは肥前系？陶器、瀬戸・美濃系陶器が、2層からは肥前系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、瓦質？土器、土師質土器、瓦、砥石、碁石、貝？などが少量出土した。ほかに盛土からは、松かさ、土師質土器も出土した。ここでは、製作年代が明らかなものや生産地・器種が把握し得、かつ残存率が比較的高いものを中心に図化した（第75図・第18表）。これらの遺物のうち、肥前系陶器の皿（第75図1）、肥前系陶器の皿？（第75図2）、肥前系陶器の鉢（第75図3）の製作年代はいずれも、17世紀代である。SG401で述べたように、石組みの下や隙間から出土した遺物の製作年代からみて、本遺構もまた、17世紀前葉に構築されたとみなせる。

なお、上述した木桶のタガ（タケ亜科）の炭素年代測定を行った結果、15世紀後半～17世紀前半の年代が得られた（第4章第3節）。この結果は、出土遺物の製作年代からみた本遺構の構築時期よりも、古い年代までさかのぼる可能性を含んでいるものの、矛盾するものではない。

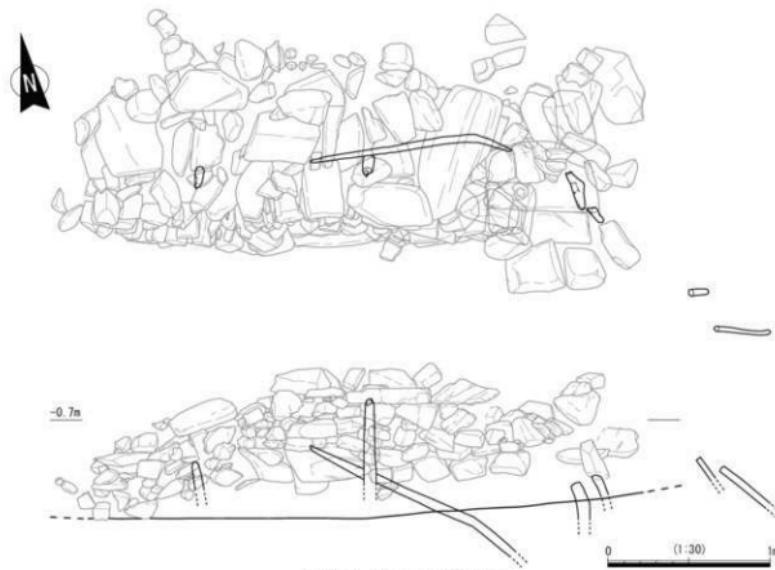
では、この遺構の用途についてはどうであろうか。SG401の底面のレベルは、標高-1.30mにも達し、調査中はウェルポイントで排水を行っていたにもかかわらず、湧水を止めることはできなかった。過去に多少の海水準変動はあったとしても、SG401の中には埋没前、當時、水が溜まっていたものと考えられる。したがって、SG401の中へとづく、SX402は生活用水を得るために水場へと降りる階段、足場としての用途が推定されよう。ただし、生活用水とは言っても、ここで得られた水には塩分が多い



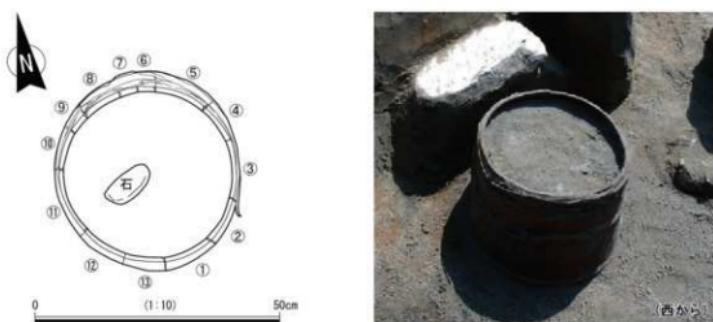
第69図 SX402 (1)



第70図 SX402 (2)



第71図 SX402 木杭検出状況

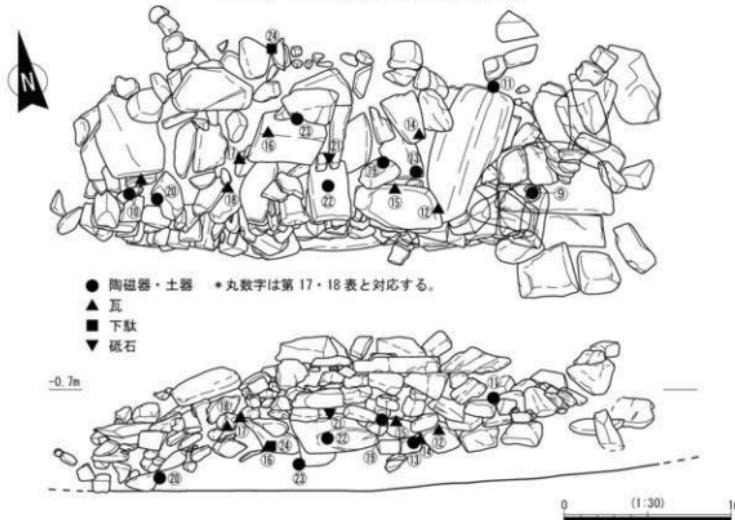


第72図 SX402 木桶検出状況

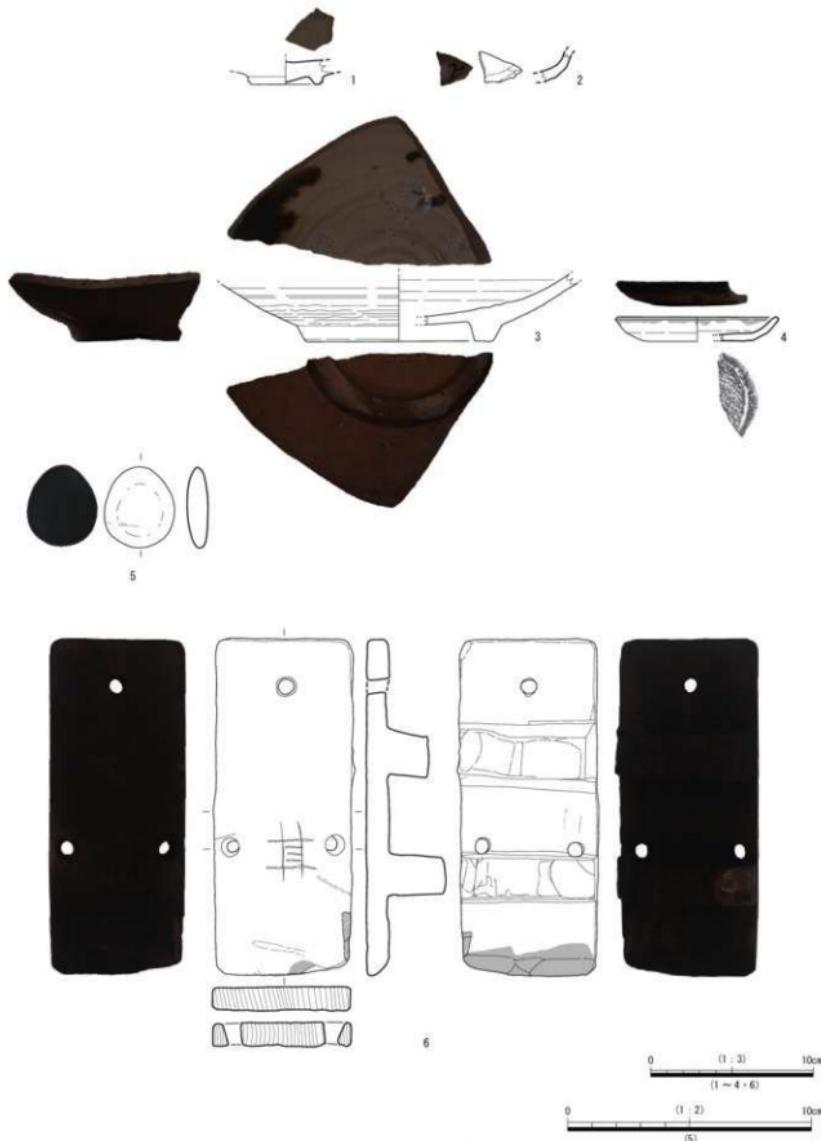
丸数字は第82図の表と対応する。



第73図 SX402 遺物出土状況（階段状部分）



第74図 SX402 遺物出土状況（積石状部分）



第75図 SX402盛土出土遺物

第18表 SX402 盛土遺物観察表

報告 番号	貯 藏	器種	生産地	口径 (cm)	高 さ・ 奥 深 み (cm)	基 高 (cm)	成形技法	釉 薬	絞付	装飾技法	器・刻印・ 墨書き	胎土色・ 含 有 植 物	造構・層位	備考
1	陶器	皿	肥前系	—	(4.2)	—	ロクロ	灰釉(底部剥く)				灰白色 10YR8/2	SX402 盛土	見出砂目、1610～1690年代
2	陶器	皿？	肥前系	—	—	—	ロクロ	灰釉	鉢底	手焼き		淡黄色 2.5YR4/4	SX402 盛土	輪唐津、17世紀
3	陶器	鉢	肥前系	—	(11.4)	—	ロクロ	透明釉(内面)	白化粧土 鉢底	二彩手		にぶい褐色 7.5YR7/3	SX402 盛土	見出砂目、裏口に胎土目がはすず跡に生じた大風穴アリ?、17世紀前半～
4	土師質 土器	皿	—	(9.7)	(6.8)	1.5	ロクロ					淡黄褐色 7.5YR8/4	SX402 盛土	灯芯頭部、外・内面スヌードル外縁・右側縁角切削線(底 内面・回転子母)。ナデ

〔一〕は、「不明」を示す。〔二〕内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

含有植物、土着のみ記載。備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

造構・層位欄の丸数字は、第74図と対応する。

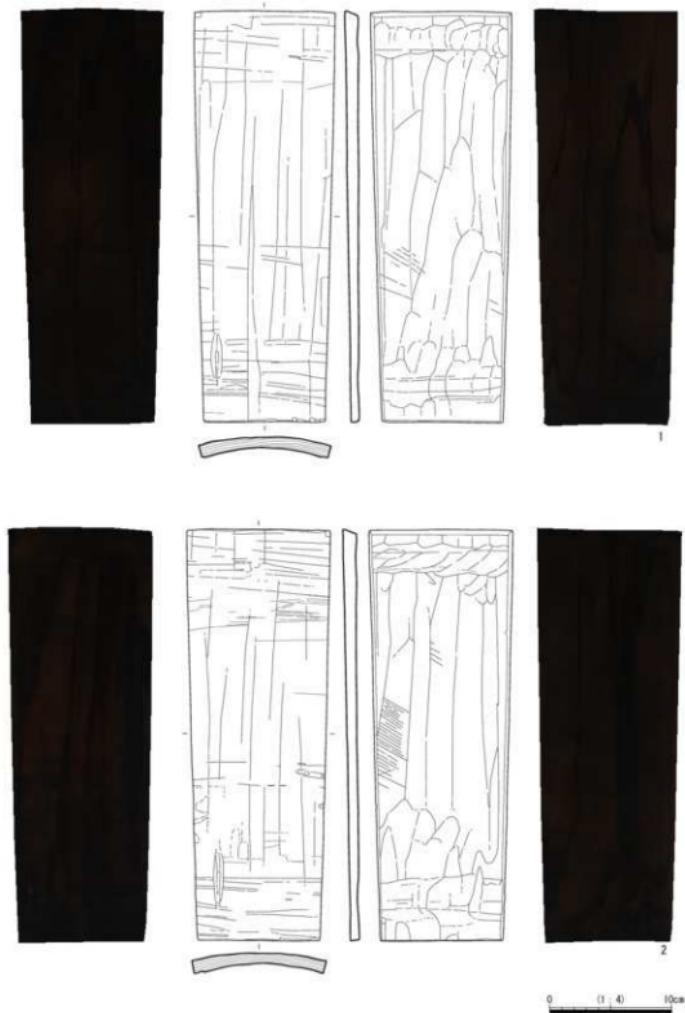
報告 番号	遺物名	最大長 (cm) *	最大幅 (cm) *	最大厚 (cm) *	重量 (g) *	石材 **	造構・層位	備考
5	基石	3.3	—	2.9	0.9	11.79	頁岩	SX402 盛土 2層

* 〔一〕は残存部のサイズ・重量を示す。

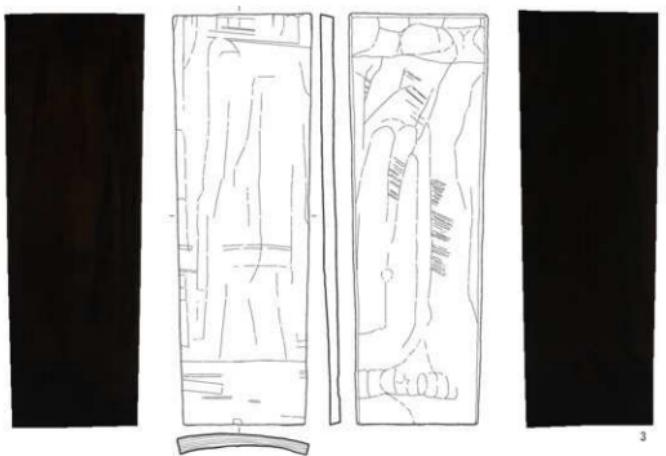
** 同様觀察による。

報告 番号	遺物名	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	造構・層位	備考	
6	下駄	20.7	—	8.5	4.9 (高さ) 1.4 (台脚)	SX402 ※	台と脚を一本でつくる漆喰下駄(野田・上原編 1985)。軽便を台の中央にあげ、後進を脚の内側にある。脚は台と同じ幅で、断面は方角である。下駄の表面は長方形である。下面の脚と台の境間に直線的な切り込みがみられる。台の上面に隙間で記号あるいは文字が書かれている。台の後端部が焼け変色化する。

造構・層位欄の丸数字は、第74図と対応する。

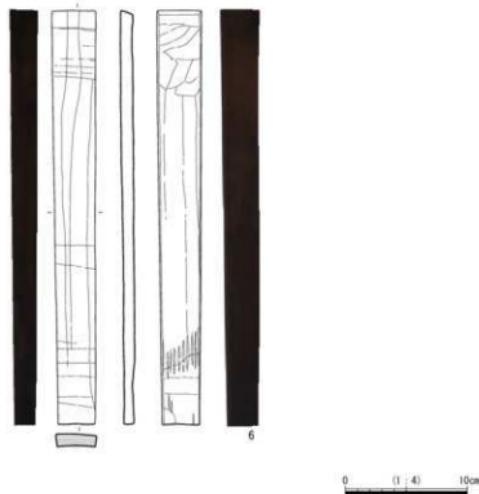
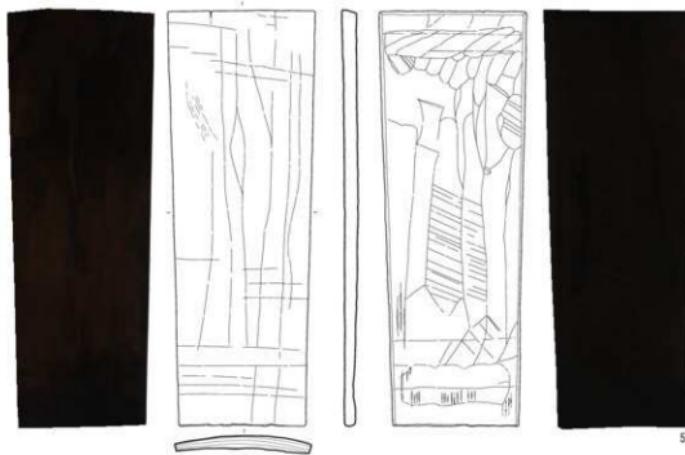


第76図 SX402 出土遺物 (1)

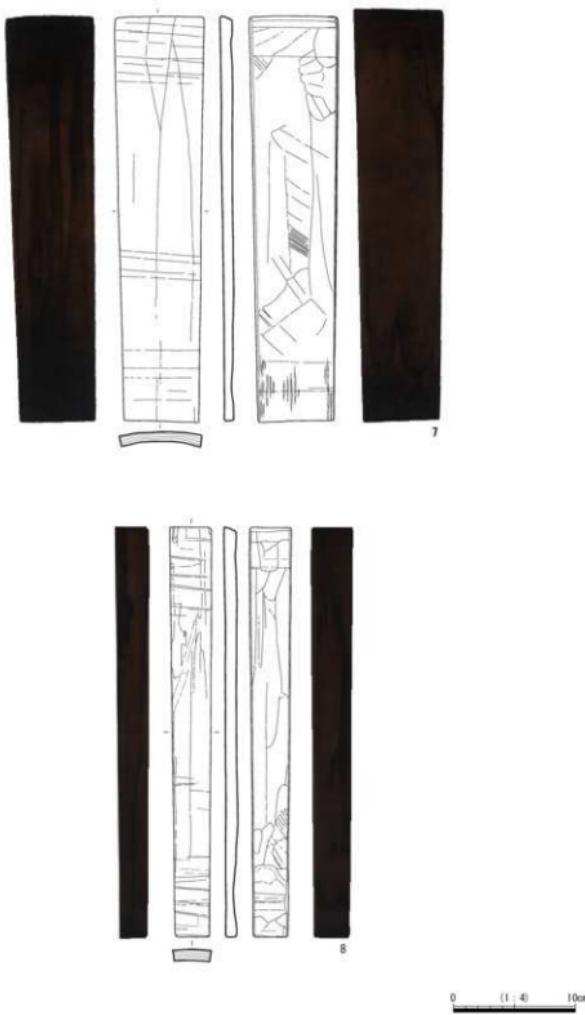


0 (1 : 4) 10cm

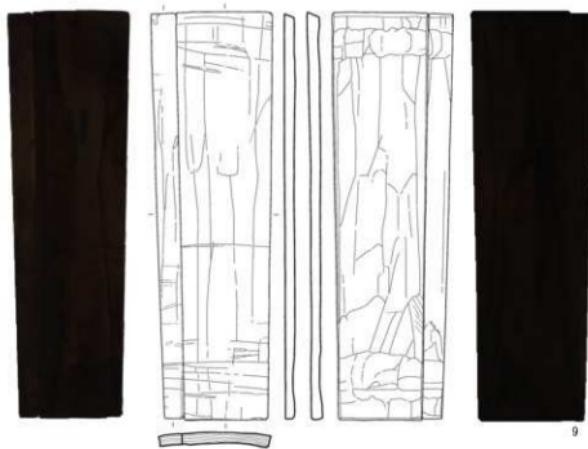
第77図 SX402出土遺物（2）



第78図 SX402 出土遺物 (3)

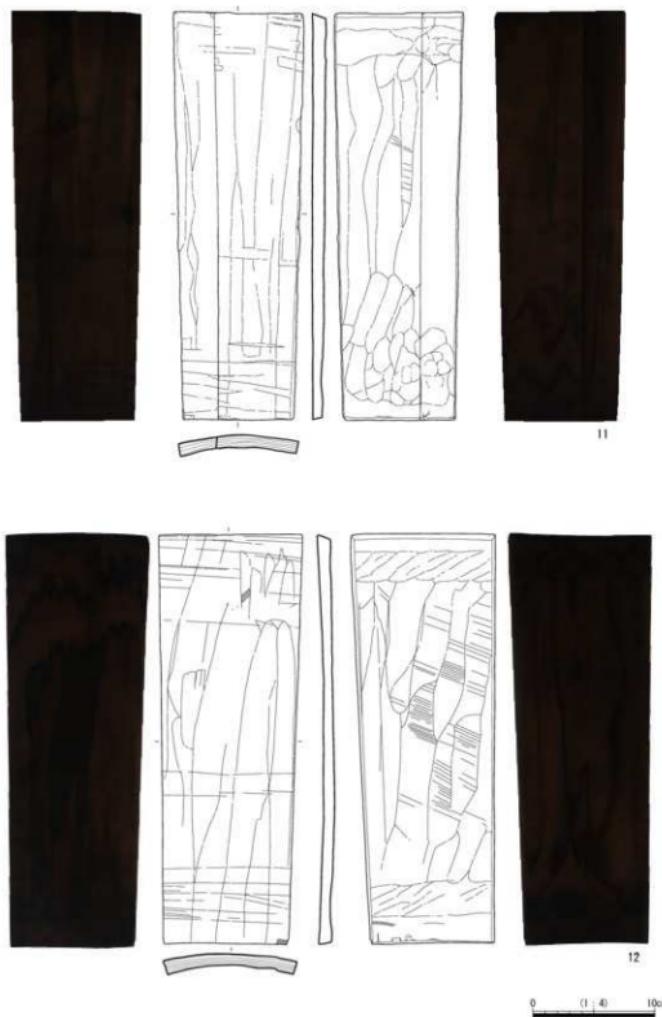


第79図 SX402 出土遺物 (4)

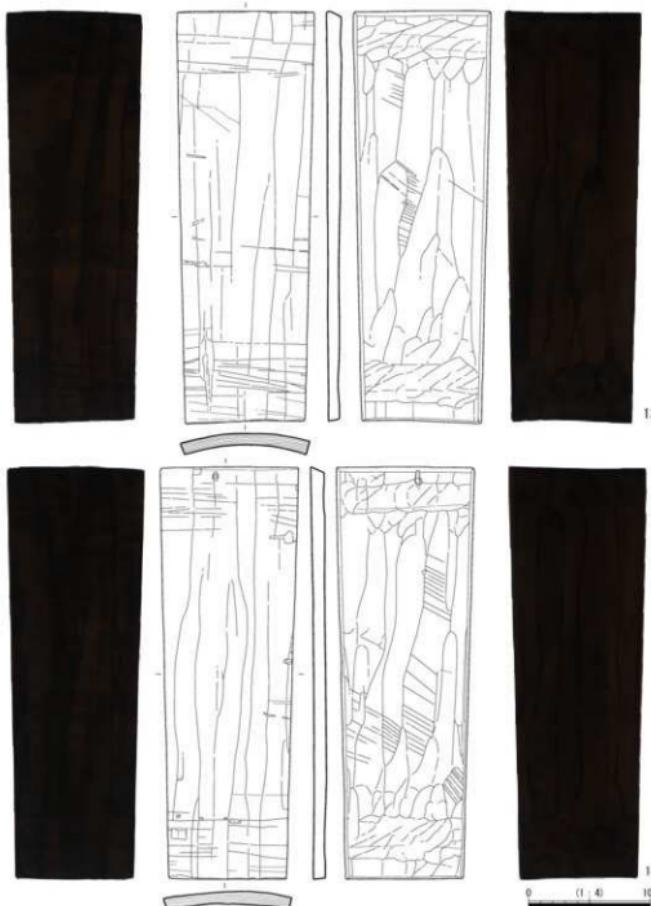


0 (1 4) 10cm

第80図 SX402 出土遺物 (5)



第81図 SX402出土遺物(6)



番号	遺物名	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	遺構・層位	備考
1	焼物板①	23.7	11.5	1.1	SX402	
2	焼物板②	23.8	11.8	1.1	SX402	
3	焼物板③	23.7	11.5	1.0	SX402	
4	焼物板④	23.7	11.1	1.1	SX402	
5	焼物板⑤	23.6	11.9	1.2	SX402	
6	焼物板⑥	23.5	3.6	1.0	SX402	
7	焼物板⑦	23.2	7.3	1.0	SX402	
8	焼物板⑧	23.6	3.4	1.0	SX402	
9	焼物板⑨	23.2	2.1	0.9	SX402	
10	焼物板⑩	23.5	7.9	1.0	SX402	
11	焼物板⑪	23.7	4.5	1.1	SX402	
12	焼物板⑫	23.6	10.6	1.1	SX402	
13	焼物板⑬	23.7	11.9	1.1	SX402	
14	焼物板⑭	23.8	11.3	1.2	SX402	

遺物名欄の丸数字は第72回と対応する。

第82図 SX402出土遺物(7)

焼物外面に縦條が上端・中位・下端の3段にみられる。焼物内面の下位に、底板をはめる溝が手斧で刻成される。焼物内面の上端に、手斧痕がみられる。焼物外表面に縦條、縦條がみられる。焼物外表面の下位に切り込みがめぐる。

く含まれるため、飲用には適さなかつたであろう。洗濯や入浴、まき水などに用いたのではないか。飲料水は、水売り商人からの入手などが考えられよう^[22]。

本調査地点のすぐ東側に位置する第8次調査地点の西半は、長谷川家の屋敷地にあたり、ここでは畠跡が検出されている。当然、農業用水が必要となるが、やはりここで得られた水はそれには適さない。おそらく農業においては、水堺や天水桶のような貯水設備を利用していただと思われる。常三島地区において、飲料水や農業用水をどのように確保していたのかは、今後解明すべき課題である。

(端野晋平)

(3) 溝

SD371 (第84図)

C-4・5区で検出された溝。残存部の長さ2.0m、幅0.6m、深さ0.2m。断面形は楕円形。

(4) 土坑

SK330 (第83図)

C-D-3区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ1.2m、幅1.1m、深さ0.4m。断面形は楕円形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

埋土より備前系陶器の擂鉢2点（第86図1・2）が出土した。1の頸部をもち張り出しが明瞭な点、口縁部内面の段が明瞭な点、スリメの間隔が粗く口縁部まで及ばずナナメ方向のスリメを有する点、体部外面にヘラケズリが認められずクロメが明瞭な点、胎土に黒色鉱物粒を含む点、断面が（暗）灰色である点、火拂がみられない点、黄ゴマがつく点、口縁部上端・頸部に重ね焼き時の溶着痕がつく点は、乗岡（2002）の近世1c期（17世紀初頭）頃の特徴と一致する。2の底部が不整形で細かな凹凸がみられる点、スリメの間隔が粗くナナメ方向のスリメを有する点、見込みのスリメが＊形である点、体部外面にヘラケズリが認められずクロメが明瞭な点、胎土に黒色鉱物粒を含む点、断面がセピア色・（暗）灰色である点は、乗岡（2002）の近世1c期（17世紀初頭）頃の特徴と一致する。

SK335 (第83図)

C-3区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.5m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK336 (第83図)

C-3区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長さ0.7m、幅0.4m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK346 (第83図)

G-5区で検出された土坑。平面形は不整梢円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1m。断面形は楕円形。

SK347 (第83図)

G-5区で検出された土坑。平面形は不整梢円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.2m。断面形は楕円形。

SK348 (第83図)

G-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.05m。断面形は台形。

SK349 (第83図)

F・G-5区で検出された土坑。平面形は不整梢円形で、長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK350 (第83図)

F-5 区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK351 (第 83 図)

F-5 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK352 (第 83 図)

F-5 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK353 (第 83 図)

F-5 区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK354 (第 83 図)

F-5 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。

SK355 (第 83 図)

F-5 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.6 m、短径 0.4 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK356 (第 83 図)

F-5 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK357 (第 83 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。

SK358 (第 83 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.5 m、短径 0.4 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK359 (第 83 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。

SK360 (第 83 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK361 (第 83 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径 0.5 m、深さ 0.3 m。断面形は楕形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK362 (第 83 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。

SK387 (第 83 図)

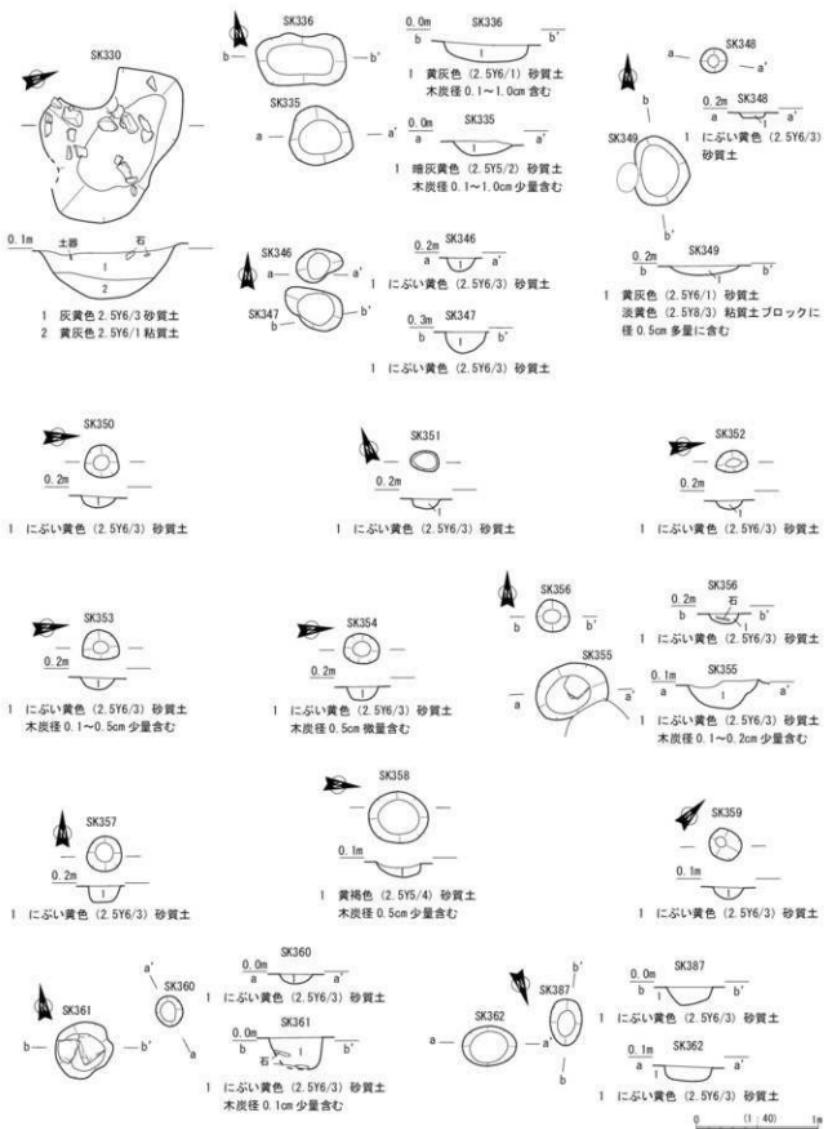
F-3 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。

SK363 (第 84 図)

F・G -3 区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存部の長径 0.6 m、短径 0.3 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形と推定される。

SK364 (第 84 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.5 m、短径 0.4 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。



第83図 第2造構面検出造構(1)

SK365 (第84図)

F・G-2区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.7m、深さ0.4m。断面形は台形。

SK366 (第84図)

G-1区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.2m。断面形は楕形。

SK367 (第84図)

B・C-4・5区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.8m、深さ0.2m。断面形は台形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。SK398を切る。

SK398 (第84図)

B・C-4・5区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.4m。断面形は台形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。埋土より鉄釘(第87図1)が出土した。SK367に切られる。

SK368 (第84図)

B-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径1.1m、深さ0.2m。断面形はレンズ形。

SK369 (第84図)

B-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1m。断面形は楕形。

SK370 (第84図)

B-3・4区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK372 (第84図)

D-4・5区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径1.2m、短径0.5m、深さ0.2m。断面形は不整レンズ形で、西肩は垂直に立ち上がる。SK393に切られる。

SK393 (第84図)

D-5区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.05m。断面形はレンズ形。SK372を切る。

SK373 (第84図)

D-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK374 (第84図)

D-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1m。断面形は楕形。

SK375 (第84図)

D・E-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.1m。断面形は不整レンズ形。

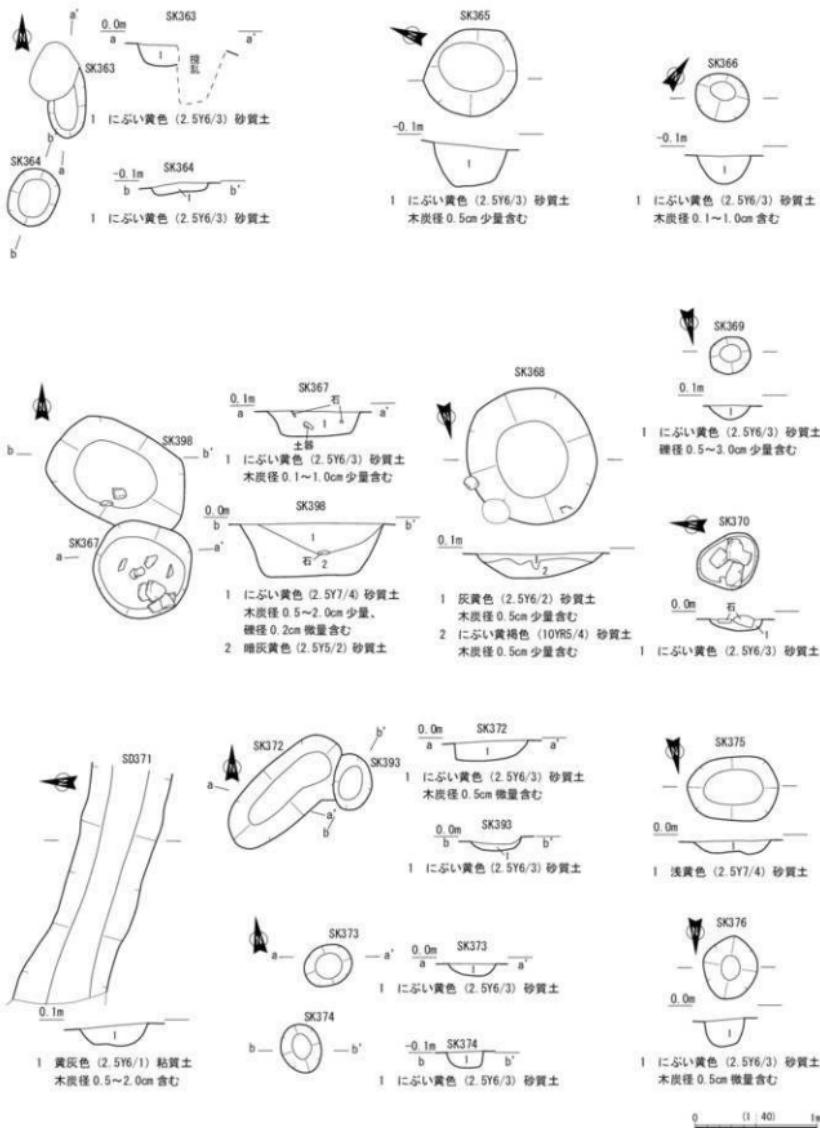
SK376 (第84図)

D-3区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.5m、深さ0.2m。断面形は楕形。

SK377 (第85図)

D-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.3m。断面形はU字形。

SK378 (第85図)



第84図 第2造構面検出造構(2)

C-3 区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径 0.8 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。SK379 を切る。

SK379 (第 85 図)

C-3 区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径 0.8 m、短径 0.6 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形と推定される。SK378 に切られる。

SK380 (第 85 図)

C-3 区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径 1.6 m、短径 0.9 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK381 (第 85 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ 0.4 m、幅 0.3 m、深さ 0.3 m。断面形は U 字形。

SK382 (第 85 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK383 (第 85 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.2 m。断面形は U 字形。

SK384 (第 85 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.2 m。断面形は U 字形。

SK385 (第 85 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存部の長径 0.2 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK386 (第 85 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。

SK388 (第 85 図)

F・G-3 区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径 0.6 m、深さ 0.3 m。断面形は楕形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK389 (第 85 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。

SK390 (第 85 図)

E-3 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.4 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK391 (第 85 図)

D-3 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.8 m、短径 0.7 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。

SK392 (第 85 図)

D-5 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.3 m。断面形は U 字形。

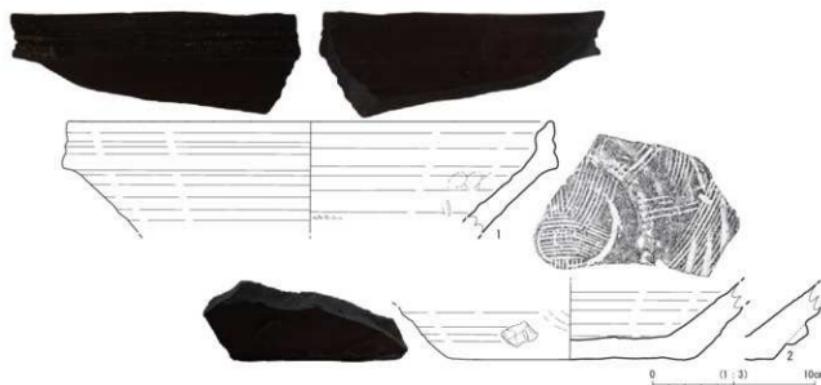
SK394 (第 85 図)

D-5 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK395 (第 85 図)



第85図 第2構造面検出構造(3)



報告書号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径(横径)(cm)	高さ(cm)	成形技法	釉薬	絞付	装飾技法	輪・刺印(番号)	胎土色	造構・層位	備考
1	陶器	信鉢	信濃系	(30.0)	—	—	口クロ					灰白色 NT/1 赤褐色 1065.3 (口縁部芯部)	SK330	口縁部上端に口縁部外側下に茎部引き抜、口縁部外側に茎ゴマ、茎頭 近世 C期? 内面に凹凸状の凹凸、凹凸間隔約1.5cm 外側に回転ナデ内面に回転ナデ、ユビオサエ
2	陶器	信鉢	信濃系	—	(15.0)	—	口クロ					灰白色 1097.1 皮褐色 SYRS.2 (芯部)	SK330	見込みスリメイロヌタゲー ン、スリメイケン / 艶化・II 層位。内面に凹凸状の凹凸 の複数箇所。茎頭 近世 C期? 内面に凹凸状の凹凸、凹凸間隔約1.5cm 外側に回転ナデ内面の チナナ(ケヌ)の跡跡(あ)

(一)は、「不規」を示す。(一)内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

第 86 図 SK330出土遺物



報告書号	遺物名	最大長(cm)*	最大幅(cm)*	最大厚(cm)*	重量(g)*	材質**	造構・層位	備考
1	針	(3.4)	0.7(頭部)	(0.5)(身部)	(1.09)	鐵	SK398	身部断面方形。

* () は残存部のサイズを示す。重量は統計を含む。

** 純鐵鍛錠による。

第 87 図 SK398 出土遺物

D-4・5区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK396 (第85図)

D-5区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.9m、短径0.6m、深さ0.2m。断面形はレンズ形。

SK397 (第85図)

C-D-4・5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.2m。断面形は不整な楕形で、中央部が窪む。

SK399 (第85図)

B-3区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ0.6m、幅0.4m、深さ0.05m。断面形はレンズ形。

SK400 (第85図)

E-5区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存部の長径0.4m、短径0.4m、深さ0.2m。断面形は椀形。

4. 第1.5遺構面の遺構と遺物（第88図）

(1) 土坑・ビット

SK213 (第89図)

G-5区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ1.3m、幅0.1m、深さ0.3m。断面形は不整レンズ形で、中位に狭いテラスをもつ。SK214を切る。

SK214 (第89図)

G-5区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.1m。断面形は不明。SK213に切られる。

SK215 (第89図)

G-5区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.05m。断面形はレンズ形。

SK216 (第89図)

G-4区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径0.4m、深さ0.4m。断面形はU字形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK217 (第89図)

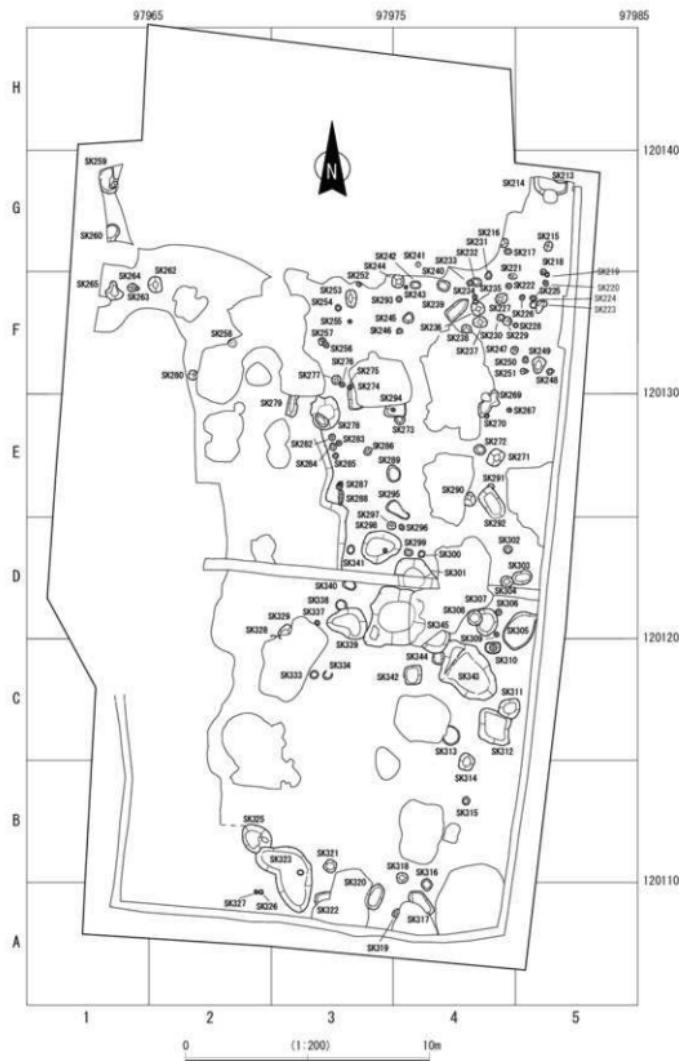
G-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.2m。断面形はU字形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK218 (第89図)

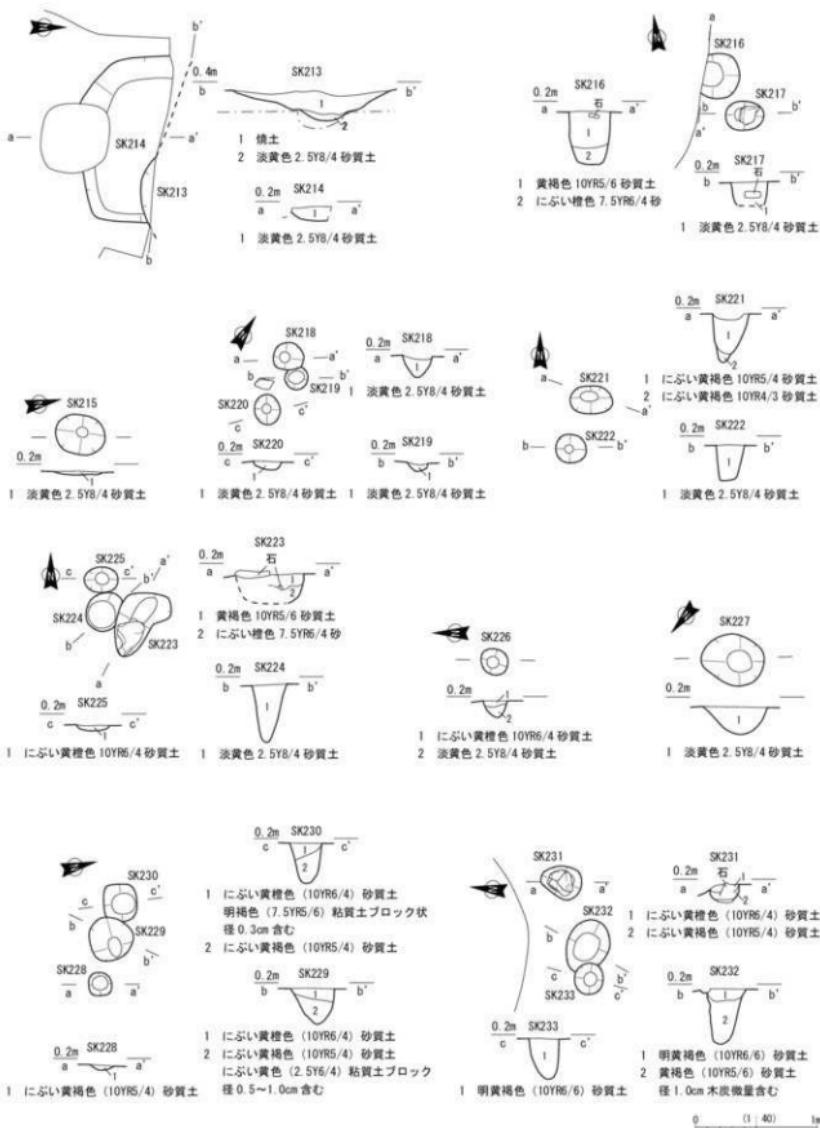
F・G-5区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.3m、深さ0.2m。断面形は楕形。SK219を切る。

SK219 (第89図)

F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.05m。断面形はレンズ形。SK218に切られる。



第88図 第1.5遺構面全体図



第89図 第1.5造模面検出遺構 (1)

SK220 (第89図)

F-5区で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK221 (第89図)

F-4・5区で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.4m。断面形はV字形。

SK222 (第89図)

F-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.3m。断面形はU字形。

SK223 (第89図)

F-5区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ0.6m、幅0.3m、深さ0.2m。断面形は楕形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。SK224を切る。

SK224 (第89図)

F-5区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径0.3m、深さ0.5m。断面形はV字形。

SK223に切られる。

SK225 (第89図)

F-5区で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.05m。断面形はレンズ形。

SK226 (第89図)

F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕形。

SK227 (第89図)

F-4区で検出された土坑。平面形は不整橢円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2m。断面形は楕形。

SK228 (第89図)

F-4・5区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長幅0.2m、深さ0.05m。断面形レンズ形。

SK229 (第89図)

F-4区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.4m、深さ0.3m。断面形はV字形。SK230を切る。

SK230 (第89図)

F・G-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長幅0.3m、深さ0.3m。断面形はU字形。

SK229に切られる。

SK231 (第89図)

F-4区で検出された土坑。平面形は不整橢円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

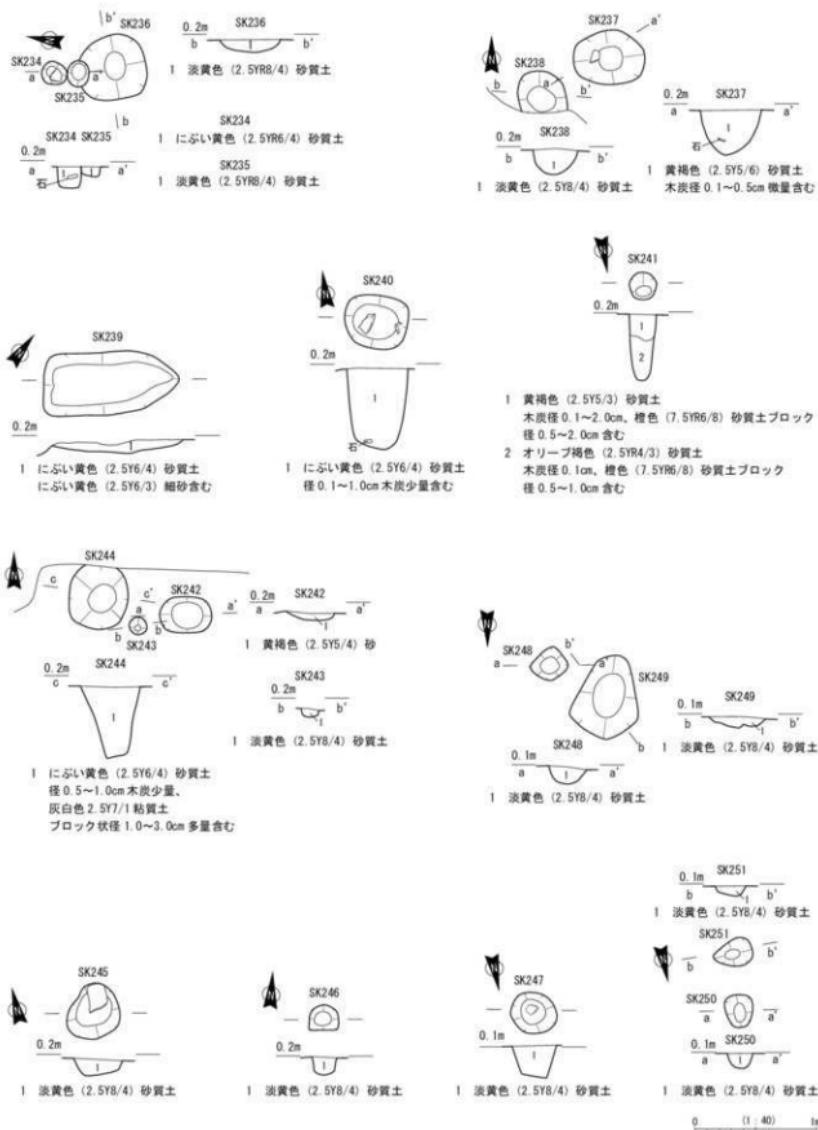
SK232 (第89図)

F-4区で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.4m。断面形はU字形。SK233に切られる。

SK233 (第89図)

F-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.3m。断面形はU字形。SK232を切る。

SK234 (第90図)



第90図 第1.5造構面検出造構(2)

F-4 区で検出された土坑。平面形はやや不整円形で、直径 0.2 m、深さ 0.2 m。断面形は U 字形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK235 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。SK236 を切る。

SK236 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径 0.5 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。SK235 に切られる。

SK237 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 0.6 m、短径 0.4 m、深さ 0.4 m。断面形は楕形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK238 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、残存部の直径 0.4 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。

SK239 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整な舟形で、長さ 1.1 m、幅 0.5 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK240 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整梢円形で、長径 0.5 m、短径 0.4 m、深さ 0.7 m。断面形は U 字形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK241 (第 90 図)

G-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.5 m。断面形は U 字形。

SK242 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK243 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。

SK244 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径 0.5 m、深さ 0.6 m。断面形は台形。

SK245 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径 0.5 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK246 (第 90 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形はホームベース形で、長幅 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形。

SK247 (第 90 図)

F-4・5 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.2 m。断面形は台形。

SK248 (第 90 図)

F-5 区で検出された土坑。平面形は方形で、長さ 0.3 m、幅 0.2 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。

SK249 (第 90 図)



第91図 第1.5造模面検出造構 (3)



第92図 SK260 炭化木材検出状況（北から）

SK253（第91図）

F-3区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径0.7m、短径0.4m、深さ0.2m。断面形はレンズ形。

SP254（第91図）

F-3区で検出された柱穴。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.2m。断面形は楕円形。底部に礎石と考えられる礎が検出されている。

SK255（第91図）

F-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕円形。

SK256（第91図）

F-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.2m。断面形は台形。SK257を切る。

SK257（第91図）

F-3区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長幅0.3m、深さ0.1m。断面形はV字形。SK256に切られる。

SK258（第91図）

F-2区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.5m、深さ0.3m。断面形は不整U字形。

SK259（第91図）

G-1区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ1.0m、幅0.7m、深さ0.6m。断面形は不整台形で、東半が壅む。埋土に0.1m以上の礎が含まれる。

SK260（第91・92図）

G-1区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.8m。断面形は台形と推定される。内部からは炭化した木材を検出した。

F-5区で検出された土坑。平面形は不整六角形で、長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.1m。断面形は不整レンズ形。

SK250（第90図）

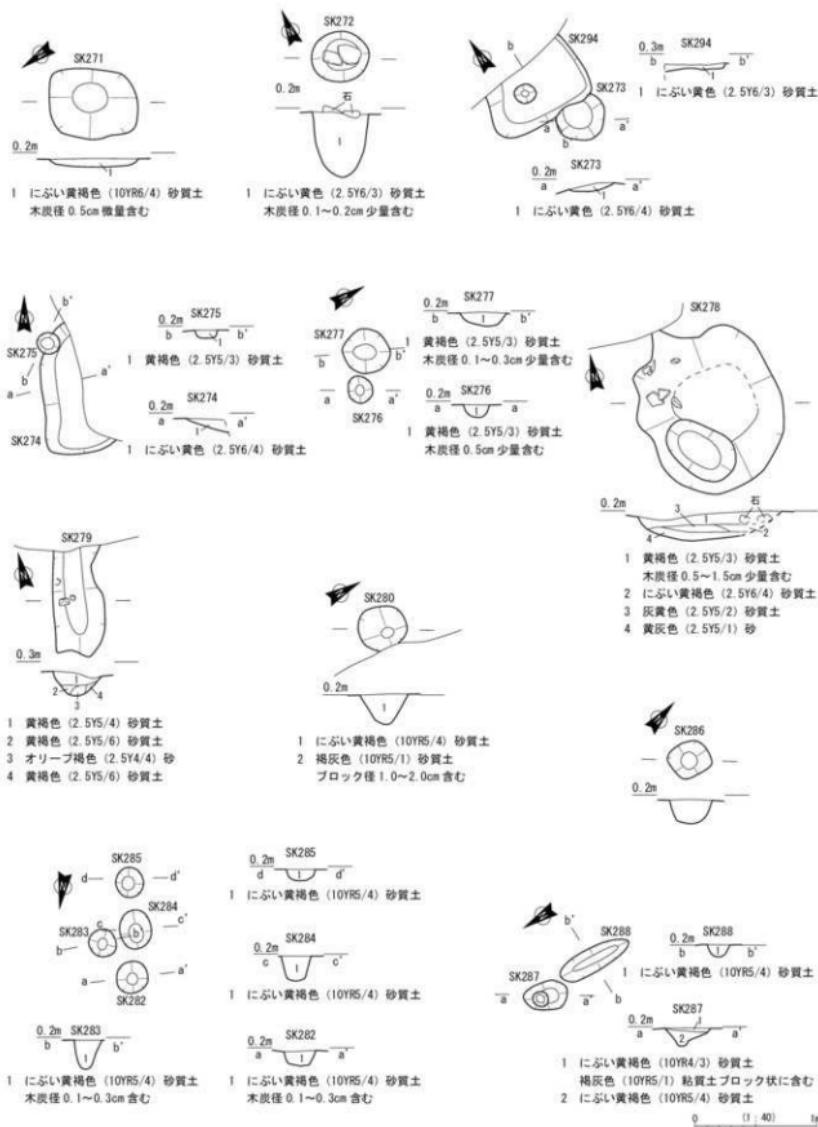
F-5区で検出された土坑。平面形は不整椭円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕円形。

SK251（第90図）

F-5区で検出された土坑。平面形は不整椭円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK252（第91図）

F-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形は方形。



第93図 第1.5造構面検出造構(4)

SK262 (第91図)

F-1・2区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.2m。断面形は台形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK263 (第91図)

F-1区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存部の長径0.1m、短径0.1m、深さ0.4m。断面形は台形。SK264に切られる。

SK264 (第91図)

F-1区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.3m、深さ0.3m。断面形は楕形。SK263を切る。

SK265 (第91図)

F-1区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.4m。断面形は台形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK267 (第91図)

E-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.05m。断面形はレンズ形。

SK269 (第91図)

E・F-4区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK270 (第91図)

E-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕形。

SK271 (第93図)

E-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長さ0.7m、幅0.6m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK272 (第93図)

E-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.5m。断面形はU字形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK273 (第93図)

E-4区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、残存部の直径0.4m、深さ0.05m。断面形はレンズ形。SK294に切られる。

SK294 (第93図)

E-3・4区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ0.9m、幅0.5m、深さ0.05m。断面形はレンズ形と推定される。SK273を切る。

SK274 (第93図)

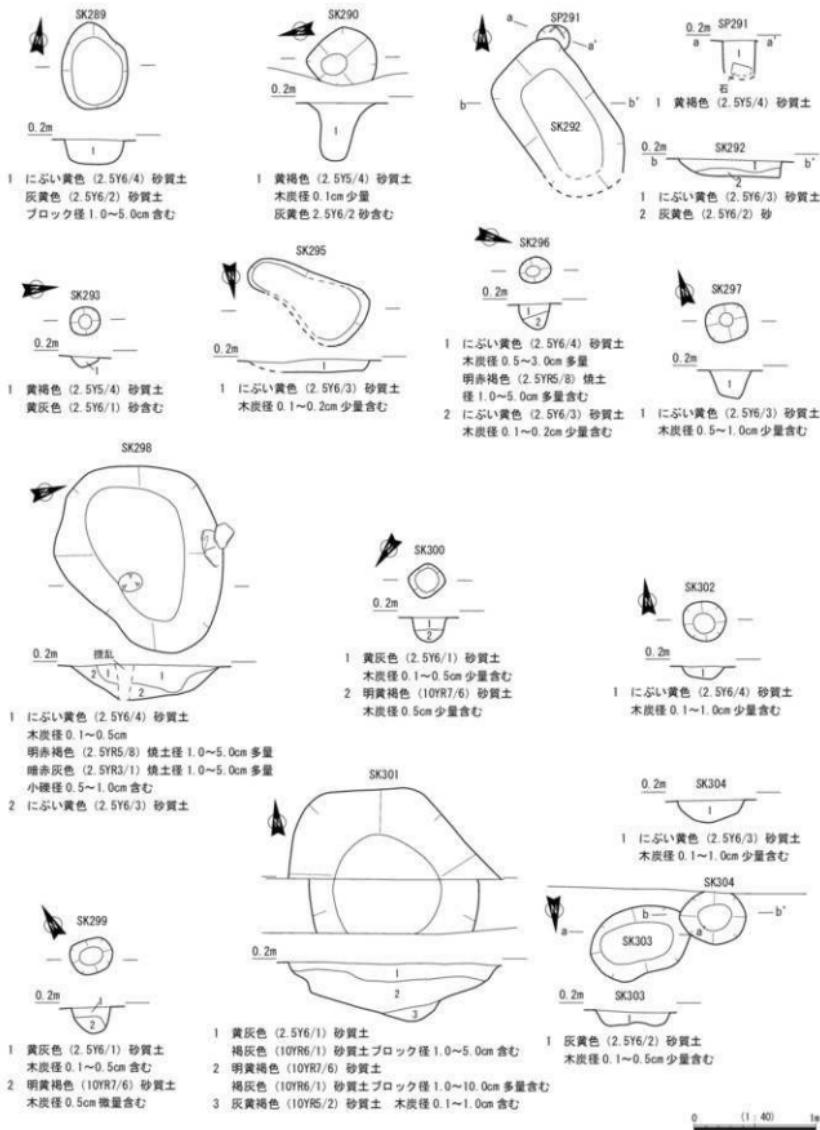
E・F-3区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ1.1m、幅0.6m、深さ0.1m。断面形はレンズ形と推定される。SK275に切られる。

SK275 (第93図)

F-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。SK274を切る。

SK276 (第93図)

F-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕形。



第94図 第1.5造構面検出造構 (5)

0 (1:40) 1m

SK277 (第93図)

F-3区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.4m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK278 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ1.4m、幅1.1m、深さ0.2m。断面形はレンズ形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK279 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は不整形で、残存部の長さ0.9m、幅0.4m、深さ0.2m。断面形は楕形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK280 (第93図)

F-2区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.2m。断面形はV字形。

SK282 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1m。断面形は台形。

SK283 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.2m。断面形はU字形。

SK284 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.2m。断面形はU字形。

SK285 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK286 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長幅0.3m、深さ0.2m。断面形は楕形。

SK287 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は不整椭円形で、長径0.5m、短径0.2m、深さ0.1m。断面形は不整V字形。

SK288 (第93図)

E-3区で検出された土坑。平面形は椭円形で、長径0.6m、短径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕形。

SK289 (第94図)

E-3・4区で検出された土坑。平面形は不整椭円形で、長さ0.7m、短径0.5m、深さ0.2m。断面形は楕形。

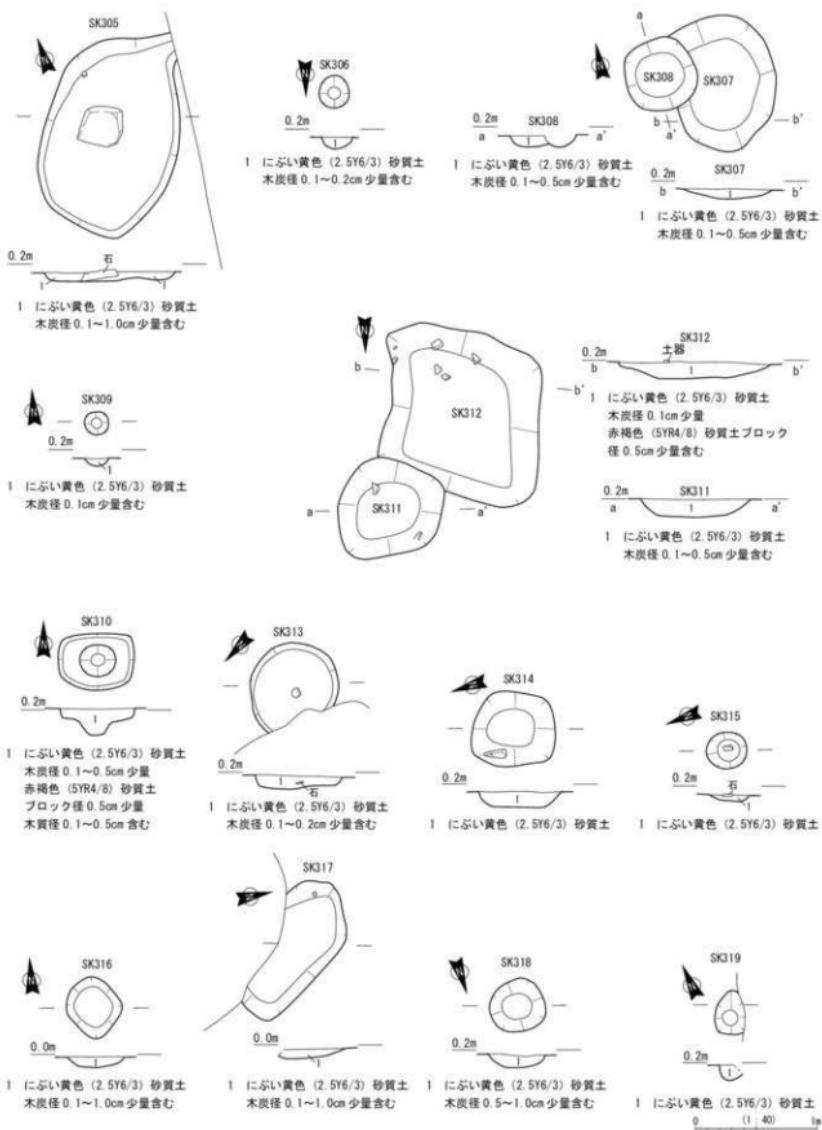
SK290 (第94図)

E-4区で検出された土坑。平面形は不整円形と推定され、残存部の直径0.6m、深さ0.5m。断面形はU字形で、上位が広がる。

SP291 (第94図)

E-4区で検出された柱穴。平面形は円形と推定され、残存部の直径0.3m、深さ0.3m。断面形はU字形。底部に礫石と考えられる礫が検出されている。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。SK292に切られる。

SK292 (第94図)



第95図 第1.5造模面検出遺構 (6)

E-4 区で検出された土坑。平面形は舟形と推定され、残存部の長さ 1.3 m、幅 0.7 m、深さ 0.1 m。断面形は不整レンズ形で、東肩は垂直に立ち上がる。SK291 を切る。

埋土より備前系陶器の擂鉢（第 99 図 1）が出土した。頸部をもち張り出しが明瞭な点、口縁部内面の段が明瞭な点、底部が不整形で細かな凹凸がみられる点、スリメが直線放射状で間隔が粗く口縁部まで及ばない点、体部外面にヘラケズリが認められずクロメが明瞭な点、胎土に黒色鉱物粒を含む点、断面が（暗）灰色である点、火拂がみられない点、黄ゴマがつく点、口縁部上端・頸部・底面に重ね焼き時の溶着痕がつく点は、乗岡（2002）の近世 1c～2a 期（17 世紀前半）頃の特徴と一致する。

SK293（第 94 図）

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK295（第 94 図）

E-3・4 区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ 1.0 m、幅 0.5 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形と推定される。

SK296（第 94 図）

D-4 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。

SK297（第 94 図）

D-3・4 区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長幅 0.3 m、深さ 0.2 m。断面形は台形。

SK299（第 94 図）

D-4 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。

SK298（第 94 図）

D-3・4 区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径 1.6 m、短径 1.3 m、深さ 0.3 m。断面形はレンズ形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK300（第 94 図）

D-4 区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長幅 0.3 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。

SK301（第 94 図）

D-4 区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ 1.8 m、幅 0.7 m、深さ 0.5 m。断面形は不整レンズ形。

SK302（第 94 図）

D-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK303（第 94 図）

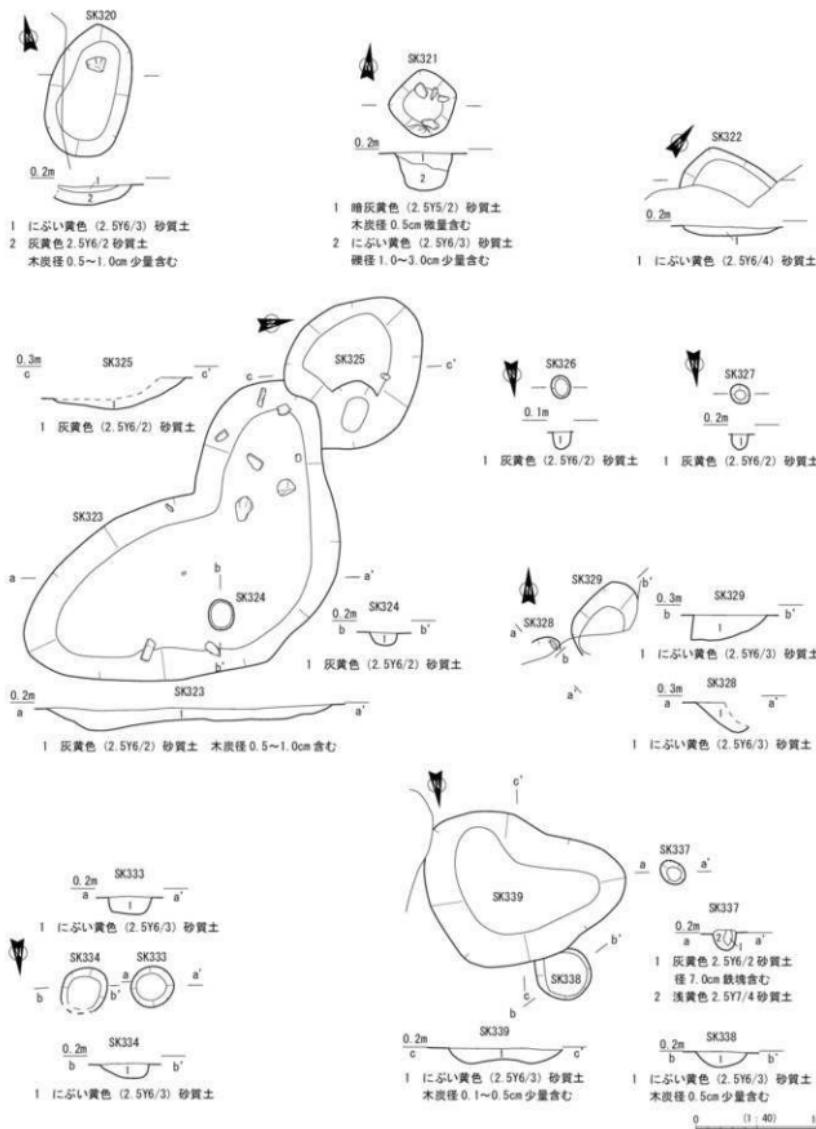
D-4・5 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.8 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 m。断面形は不整レンズ形。SK304 に切られる。

SK304（第 94 図）

D-4 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.6 m、短径 0.4 m、深さ 0.2 m。断面形は楕形。

SK303 を切る。

SK305（第 95 図）



第96図 第1.5造模面検出遺構 (7)

C・D-4・5区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径1.6m、短径1.1m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK306（第95図）

D-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK307（第95図）

D-4区で検出された土坑。平面形は不整楕円形で、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。SK308に切られる。

SK308（第95図）

D-4区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径0.6m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。SK307を切る。

SK309（第95図）

D-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK310（第95図）

C-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長さ0.6m、幅0.5m、深さ0.2m。断面形は不整レンズ形で、中央部が窪む。

SK311（第95図）

C-4・5区で検出された土坑。平面形は不整隅丸方形で、長幅0.8m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。SK312を切る。

SK312（第95図）

C-4区で検出された土坑。平面形は不整隅丸方形で、長さ1.3m、幅1.2m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

埋土より瀬戸・美濃系陶器（第100図1）が出土した。SK311に切られる。

SK313（第95図）

C-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.8m、短径0.7m、深さ0.1m。断面形は不整レンズ形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK314（第95図）

B・C-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長さ0.7m、幅0.6m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK315（第95図）

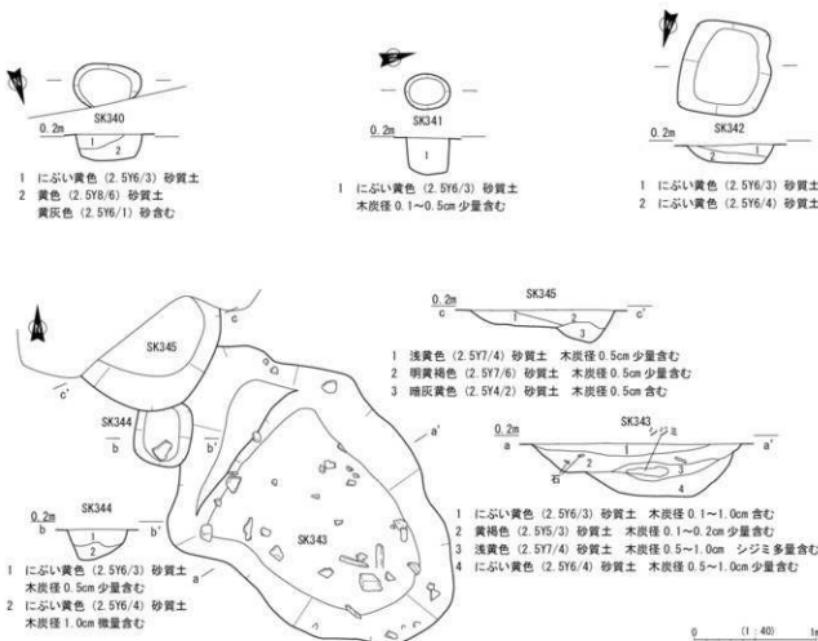
B-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.05m。断面形はレンズ形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK316（第95図）

A・B-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長幅0.4m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK317（第95図）

A-4区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。



第97図 第1.5遺構面検出遺構(8)

SK318 (第95図)

A・B-4区で検出された土坑。平面形は不整円形で、直径 0.5 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK319 (第95図)

A-3・4区で検出された土坑。平面形は不整楕円形と推定され、残存部の長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m。断面形は楕形と推定される。

SK320 (第96図)

A-3区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存部の長径 1.1 m、幅 0.5 m、深さ 0.2 m。断面形はレンズ形と推定される。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK321 (第96図)

B-3区で検出された土坑。平面形は不整隅丸方形で、長幅 0.5 m、深さ 0.3 m。断面形は楕形。埋土に 0.1 m 以上の礫が含まれる。

SK322 (第96図)

A-3区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ 0.6 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 m。断面形はレンズ形。

SK323（第96図）

A・B-2・3区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ3.2m、幅1.5m、深さ0.2m。断面形は不整レンズ形。SK324に切られ、SK325を切る。

SK324（第96図）

B-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕円形。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。SK323を切る。

SK325（第96図）

B-2・3区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存部の長径1.3m、短径1.1m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。SK323に切られる。

SK326（第96図）

A-2区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕円形。

SK327（第96図）

A-2区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1m。断面形は楕円形。

SK328（第96図）

D-2・3区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長幅0.2m、深さ0.3m。断面形はV字形と推定される。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。

SK329（第96図）

D-3区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存部の長径0.6m、短径0.4m、深さ0.2m。断面形は不整レンズ形で、西肩は垂直に立ち上がる。

SK333（第96図）

C-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1m。断面形は楕円形。

SK334（第96図）

C-3区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径0.4m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。

SK337（第96図）

D-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.2m。断面形は楕円形。

SK338（第96図）

D-3区で検出された土坑。平面形は不整円形と推定され、残存部の直径0.4m、深さ0.1m。断面形はレンズ形。SK339に切られる。

SK339（第96図）

C・D-3区で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ1.6m、幅1.3m、深さ0.1m。断面形は不整レンズ形。SK338を切る。

SK340（第97図）

D-3区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存部の長径0.6m、短径0.4m、深さ0.2m。断面形は方形。

SK341（第97図）

D-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.3m。断面形は方形。



第98図 SK343

1. 遺物出土状況（東から） 2. 土層断面（南東から）

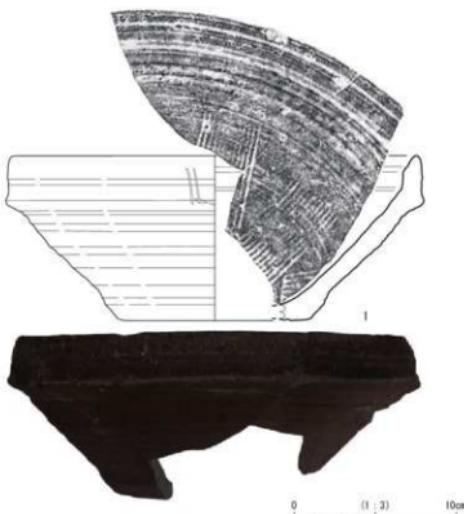
SK342（第97図）

C-4区で検出された土坑。平面形は不整隅丸方形で、長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.2m。断面形はレンズ形。

SK343（第97・98図）

C-4区で検出された土坑。平面形は不整形で、残存部の長さ2.9m、幅2.0m、深さ0.4m。断面形は不整レンズ形で、中位にテラスを有する。埋土に0.1m以上の礫が含まれる。第3層にシジミとみられる二枚貝貝殻が集中する部分がみられる。SK344・SK345に切られる。

埋土より備前系陶器の擂鉢（第101図1）が出土した。頸部をもち張り出しが明瞭な点、口縁部内面の段が明瞭な点、スリメの間隔が粗く口縁部まで及ばずナナメ方向のスリメを有する点、体部外面



報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 張み径(cm)	器高(cm)	成形技法	釉面	粗付	装飾技法	新・剥印・ 墨書き	胎土色	造模・層位	備考
1	陶器	縦鉢	焼前系	(24.0)	(11.9)	10.2	ロクロ				ヘラ彫による2つの横縞(底印?)	灰白色 磁/口縁部外面	SK292	スリメ(2枚)/単位、口縁部上端・口縁部外表面下、底部に重ね焼き帯、口縁部外側に斜めの凹溝、(1:7) 東周 近世 1c~2c 前半(17世紀前半) 頭部外蓋、強い回転ナデ

「—」内の数字は、残存部から復元した数値を示す。
備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

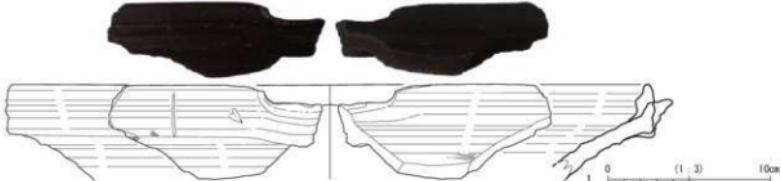
第99図 SK292出土遺物



報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 張み径(cm)	器高(cm)	成形技法	釉面	粗付	装飾技法	新・剥印・ 墨書き	胎土色	造模・層位	備考
1	陶器	—	里石・ 奥庭系	—	3.2	—	ロクロ	瓦絵 (全面白セラフ土 窓席のち)				灰白色 磁/白色斑端い	SK312	小环または香合?

「—」は、「不明」を示す。

第100図 SK312出土遺物



報告番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 張み径(cm)	器高(cm)	成形技法	釉面	粗付	装飾技法	新・剥印・ 墨書き	胎土色	造模・層位	備考
1	陶器	縦鉢	焼前系	(39.0)	—	—	ロクロ				ヘラ彫による1つの横縞(底印?)	灰白色 磁/灰白色 (口縁部外面)	SK343	口縁部上端と口縁外表面に重ね焼き帯、注口部に剥離マ、 東周 近世 1c~2c 前半(17世紀初) 頭部外蓋、回転ナデ

第101図 SK343出土遺物

にヘラケズリが認められずロクロメが明瞭な点、胎土に黒色鉱物粒を含む点、断面がセピア色・（暗）灰色である点、器面の色調が暗褐色系である点、火襷がみられない点、黄ゴマがつく点、口縁部上端・注口部に重ね焼き時の溶着痕がつく点は、乗岡（2002）の近世1c期（17世紀初頭）頃の特徴と一致する。

SK344（第97図）

C-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形と推定され、残存部の長幅0.5m、深さ0.3m。断面形はV字形。SK343を切り、SK345に切られる。

SK345（第97図）

C・D-4区で検出された土坑。平面形は不明で、残存部の長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.3m。断面形は不整レンズ形で、西半にテラスを有する。SK343・SK344を切る。

（三阪一徳）

5. 第1遺構面の遺構と遺物（第102図）

（1）溝

SD01（第103図）

G-5区で検出された溝。残存値2.8m、幅0.3～0.5m、深さ0.1mである。断面は逆三角形を呈する。

SD128（第122図）

D-4・5区で検出された溝。残存値2.9m、幅0.2～0.4m、深さ0.2mである。断面はU字形を呈する。

SD130（第122図）

C-4・5区で検出された溝。残存値2.3m、幅0.2～0.5m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SD187（第129図）

C-3区で検出された溝。残存値1.6m、幅0.2m、深さ0.1mである。断面はU字形を呈する。

SD206（第142図）

B-2・3・4区で検出された溝。長さ11.9m、幅0.3～0.6m、深さ0.1～0.2mである。断面はU字形を呈する。遺物は御厨系土師質土器の焰烙（第104図1）が出土した。

SD210（第142図）

B-2・3・4区で検出された溝。長さ12.1m、幅0.4～0.6mである。断面は台形である。

（2）土坑・ピット

SK02（第103図）

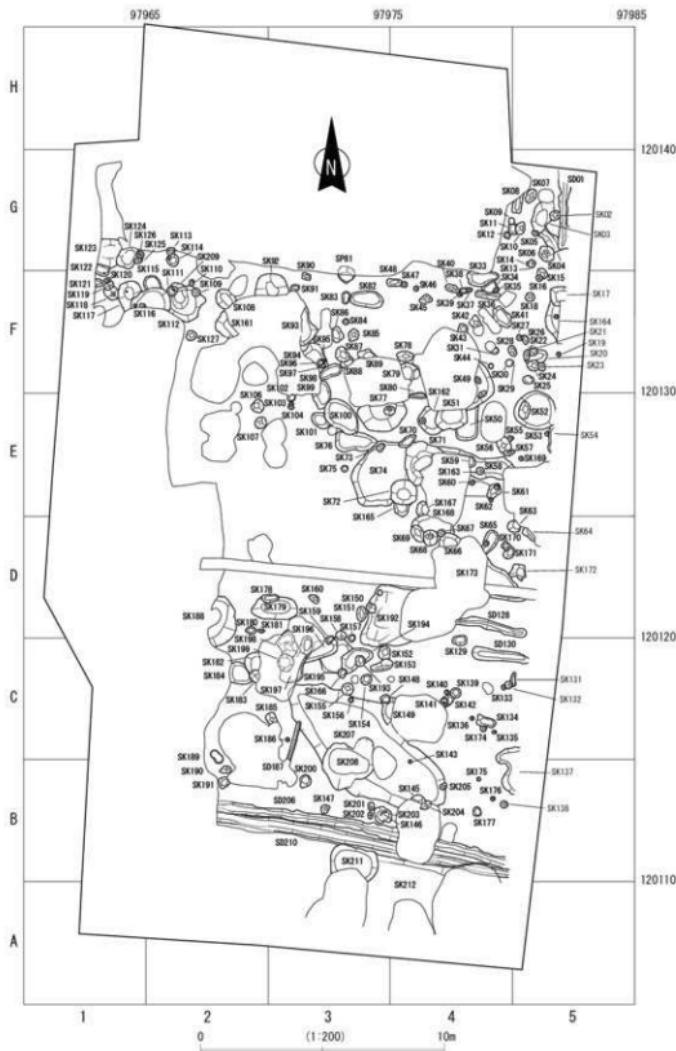
G-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.1mである。断面形は皿形を呈する。

SK03（第103図）

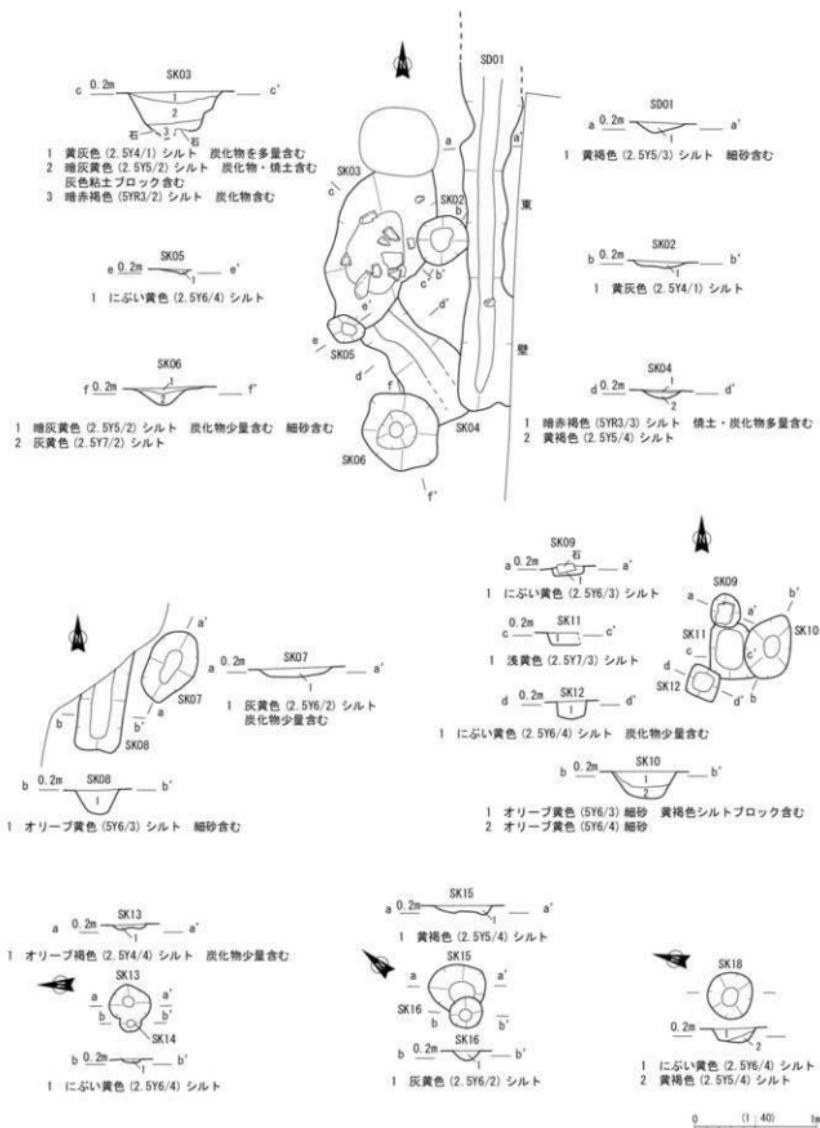
G-5区で検出された土坑。平面形は不整な橢円形で、長径1.3m、短径0.8m、深さ0.4mである。断面形は逆台形を呈する。遺物は備前系陶器の甕（第105図1）が出土した。

SK04（第103図）

G-5区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値1.0m、東西0.4～0.5m、深さ0.1mである。断面形はレンズ形を呈する。遺物は鉄製の飾り金具（第106図1）が出土した。



第102図 第1遺構面全体図



第103図 第1造構面核出構造(1)

SK05（第103図）

G-5区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.05mである。

SK06（第103図）

G-5区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径0.6m、深さ0.1mである。断面は逆三角形を呈する。

SK07（第103図）

G-5区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK08（第103図）

G-5区で検出された土坑。平面形は長方形で、南北残存値0.8m、東西0.4m、深さ0.2mである。断面は台形を呈する。

SK09（第103図）

G-4・5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面は長方形を呈する。

SK10（第103図）

G-5区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mである。断面は長方形を呈する。

SK11（第103図）

G-4・5区で検出された土坑。平面形は長方形で、長さ0.4m、残存幅0.3m、深さ0.1mである。断面は台形を呈すると思われる。

SK12（第103図）

G-4区で検出された土坑。平面形は方形で、一辺0.25m、深さ0.1mである。断面はU字形を呈する。

SK13（第103図）

G-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.05mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK14（第103図）

G-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.05mである。断面は皿形を呈する。

SK15（第103図）

G・F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.5m、深さ0.1mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK16（第103図）

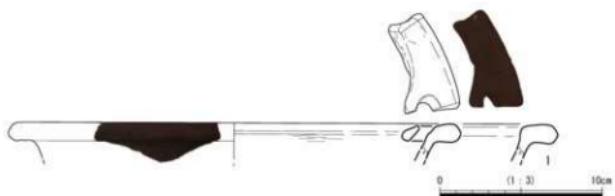
F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK18（第103図）

F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.1mである。断面は台形を呈する。

SK17（第110図）

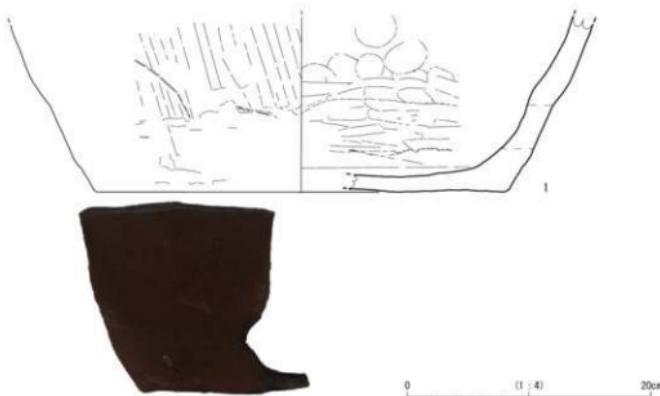
F-5区で検出された土坑。平面形は長方形と判断され、南北0.8m、東西残存値0.6m、深さ0.2mである。断面は台形を呈する。



報告書番号	胎質	器種	生産地	口径 (cm)	底径・ 側み径 (cm)	器高 (cm)	成形技法	釉薬	給付	装飾技法	鉢・封印・ 壺	胎土色・ 含有鉱物	遺構・層位	備考
I	土師質 土器	縦柄	御賀系	(27.9)	—	—	黏土絹 巻上げ				にぶい褐色 SYR6.4 長石 (細小～中)	SD206	口縁部内側に粘土を付加し、裏面する跡がある。外側に手捺 (口縁部)、腹 ハケのちナデ (腹部)、内側にハケ (口縁部)、横 ハケ (腹部)	

「—」は、「不明」を示す。 () 内の数字は、推存部から復元した数値を示す。

第104図 SD206出土遺物



報告書番号	胎質	器種	生産地	口径 (cm)	底径・ 側み径 (cm)	器高 (cm)	成形技法	釉薬	給付	装飾技法	鉢・封印・ 壺	胎土色	遺構・層位	備考
I	陶器	壺?	御賀系	—	34.0	—	輪摺み ロクロ				皮色輪 /灰褐色 増毛皮 7 SYR6.1 灰色輪 (内側→外側)	SK03		

「—」は、「不明」を示す。

第105図 SK03出土遺物

SK164 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は不整形と判断され、南北残存値1.3m、深さ0.1mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK19 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK20 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径1.0m、残存短径0.6m、深さ0.15mである。断面は不整な台形を呈する。

SK21 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK22 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径0.5m、短径0.2m、深さ0.2mである。断面は不整なU字形を呈する。

SK23 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK24 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は不整な梢円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mである。断面は不整な台形を呈する。

SK25 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は不整な梢円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.3mである。断面は台形を呈する。

SK26 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長さ0.4m、幅0.3m、深さ0.1mである。断面は台形を呈する。

SK27 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK28 (第110図)

F-4・5区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.15mである。断面はレンズ形を呈する。

SK29 (第110図)

F-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.1m、深さ0.1mである。断面は逆三角形を呈する。

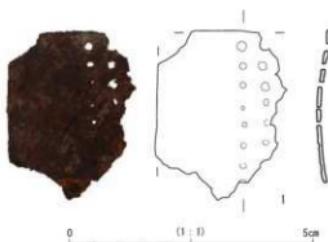
SK30 (第110図)

F-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.4mである。断面はU字形を呈する。

SK31 (第110図)

F-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.2mである。断面はU字形を呈する。

SK33 (第111図)



報告番号	遺物名	最大長 (cm) *	最大幅 (cm) *	最大厚 (cm) *	重量 (g) *	材質 **	造様・層位	備考
1	飾り金具	(3.5)	(2.7)	0.1	(2.69)	銅	SK04	黄通・非貫通の丸列。

* () 内は残存部のサイズを示す。重量は錆びを含む。

** 内容観察による。

第106図 SK04出土遺物



報告番号	遺物名	最大長 (cm) *	最大幅 (cm) *	最大厚 (cm) *	重量 (g) *	材質 **	造様・層位	備考
1	缸	(2.6)	1.2 (底部)	0.7 (底部)	(2.50)	銅	SK35	底部断面楕円方形。

* () 内は残存部のサイズを示す。重量は錆びを含む。

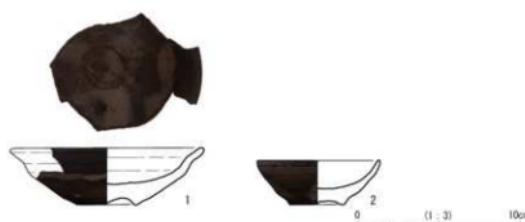
** 内容観察による。

第107図 SK35出土遺物



報告番号	材質	器種	生産地	口径 (cm)	底径・底み幅 (cm)	器高 (cm)	成形技法	施墨	絞付	装飾技法	鉛・封印・墨書き	釉土色	造様・層位	備考
1	陶器	罐	肥前系	—	3.8	—	ロクロ	灰輪 (底部斜く)				にぶい黄褐色 7.5W7/3	SK162	17世紀前葉

第108図 SK162出土遺物



報告番号	材質	器種	生産地	口径 (cm)	底径・底み幅 (cm)	器高 (cm)	成形技法	施墨	絞付	装飾技法	鉛・封印・墨書き	釉土色	造様・層位	備考
1	陶器	皿	肥前系	(11.55)	3.75	3.5	ロクロ	灰輪 (底部斜く)				にぶい褐色 7.5W7/4	SK55	青磁胎土目録、1596～1610年代
2	陶器	小杯	肥前系	7.5	3.4	2.7	ロクロ	灰輪 (底部斜く)				にぶい褐色 7.5W7/4	SK55	17世紀前葉

() 内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

第109図 SK55出土遺物

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値 0.5 m、東西 1.3 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK34 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、南北残存値 0.4 m、東西 0.6 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK35 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.05 m である。断面はレンズ形を呈する。遺物は鉄製の釘（第 107 図 1）が出土した。

SK36 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 1.0 m、短径 0.3 m、深さ 0.15 m である。断面は逆三角形を呈する。

SK37 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK38 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整な隅丸長方形で、南北 0.2 m、東西 0.3 m、深さ 0.1 m である。断面は U 字形を呈する。

SK39 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 0.2 m、短径 0.1 m、深さ 0.05 m である。断面は不整な逆三角形を呈する。

SK40 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北 0.3 m、東西 0.6 m、深さ 0.1 m である。断面は皿形を呈する。

SK41 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北 1.0 m、東西 0.6 m、深さ 0.1 m である。断面は皿形を呈する。

SK42 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北 0.5 m、東西 0.4 m、深さ 0.1 m である。断面は皿形を呈する。

SK43 (第 111 図)

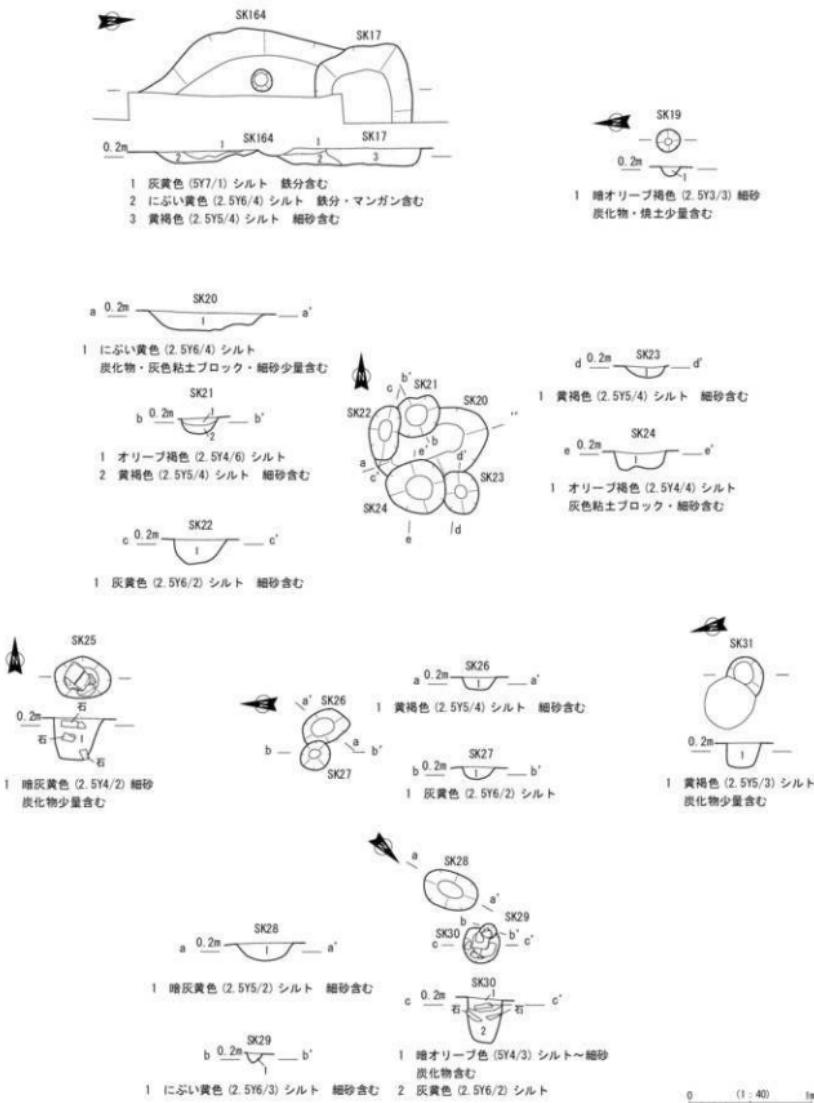
F-4 区で検出された土坑。平面形は隅丸の方形で、南北残存値 0.4 m、東西 0.4 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK44 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.05 m である。断面は皿形を呈する。

SK45 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北 0.3 m、東西 0.5 m、深さ 0.1 m である。断面



第110図 第1透構面積出露構造 (2)

は不整な皿形を呈する。

SK46 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面は台形を呈する。

SK47 (第 111 図)

F-4 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面は台形を呈する。

SK48 (第 111 図)

F-3・4 区で検出された土坑。平面形は不整な梢円形で、長径 0.6 m、短径 0.3 m、深さ 0.1 m である。断面はレンズ形を呈する。

SK49 (第 112 図)

E・F-4 区で検出された土坑。平面形は隅丸方形と推定され、南北残存値 1.4 m、東西残存値 1.4 m、深さ 0.2 m である。断面は台形を呈すると考える。

SK50 (第 112 図)

E-4 区で検出された土坑。平面形は隅丸長方形と推定され、南北残存値 1.2 m、東西 0.9 m、深さ 0.2 m である。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK51 (第 112 図)

E-4 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値 0.8 m、東西 1.3 m、深さ 0.3 m である。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK162 (第 112 図)

E-4 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北 1.2 m、東西残存値 0.7 m、深さ 0.1 m である。断面は台形を呈する。遺物は 17 世紀前葉の肥前系陶器の碗（第 108 図 1）が出土した。

SK52 (第 112 図)

E-5 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 1.7 m、短径 1.6 m、深さ 0.3 m である。断面は不整な台形を呈する。

SK53 (第 112 図)

E-5 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面は U 字形を呈する。

SK54 (第 112 図)

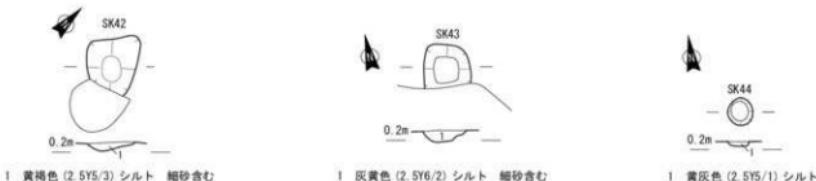
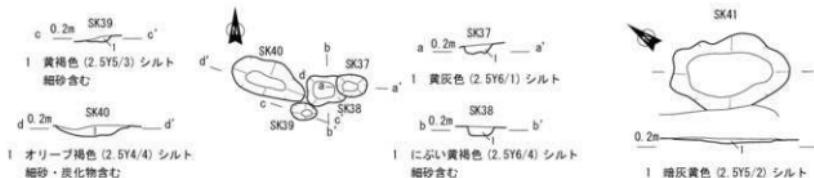
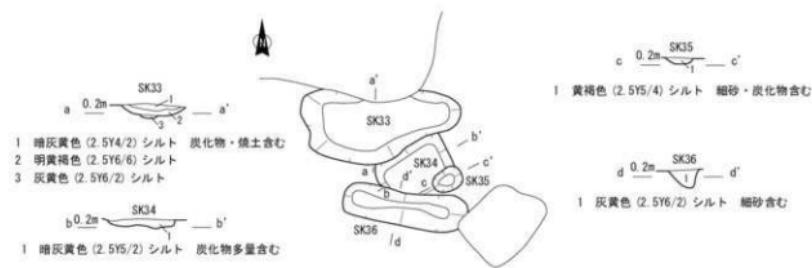
E-5 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値 1.2 m、東西残存値 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面は長方形を呈する。

SK55 (第 112 図)

E-4・5 区で検出された土坑。平面形は不整な三角形で、東西 0.2 m、南北 0.2 m、深さ 0.2 m である。断面は U 字形を呈する。遺物は、16 世紀末～17 世紀初めの肥前系陶器の皿（第 109 図 1）、17 世紀前葉の肥前系陶器の小坪（第 109 図 2）が出土した。

SK56 (第 112 図)

E-4 区で検出された土坑。平面形は不整な長方形で、南北残存値 0.6 m、東西残存値 0.5 m、深さ 0.2 m である。断面はレンズ形を呈する。



0 (1-40) 1m

第111図 第1透構面核出構造 (3)

SK57（第112図）

E-4・5区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.5m、短径0.2m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。

SK58（第113図）

E-4・5区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北0.8～0.9m、東西残存値3.2m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK59（第113図）

E-4区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径0.4m、深さ0.4mである。断面は不整なU字形を呈する。

SK163（第113図）

E-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.2mである。断面はU字形を呈する。

SK60（第113図）

E-4区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面はU字形を呈する。

SK61（第113図）

E-4区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。遺物は頁岩製の墓石（第114図1）が出土した。

SK62（第113図）

E-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK63（第113図）

D-4・5区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径0.5m、深さ0.2mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK64（第113図）

D-5区で検出された土坑。平面形は不整形で、残存長0.7m、残存幅0.3m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK65（第113図）

D-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、南北残存値0.9m、東西0.5m、深さ0.1mである。断面は台形を呈する。

SK66（第113図）

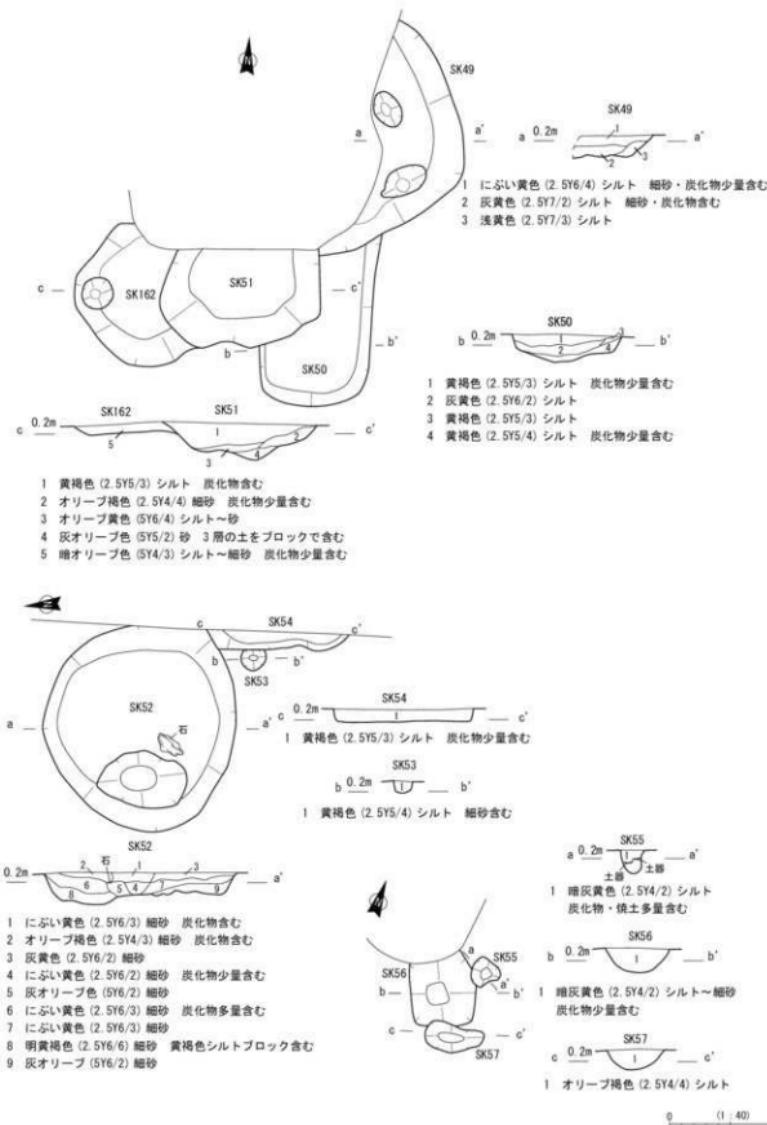
D-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形と推定され、南北残存値0.5m、東西残存値0.9m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。

SK67（第113図）

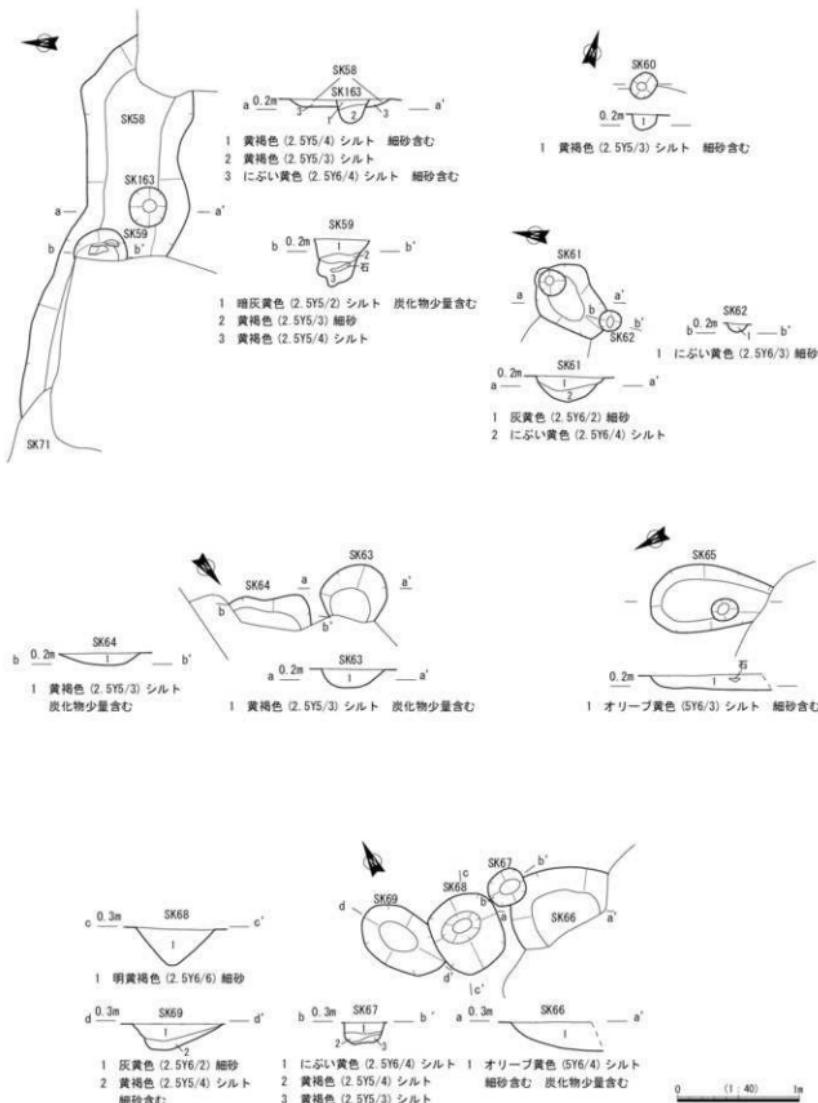
D-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、南北0.3m、東西0.3m、深さ0.2mである。断面は不整なU字形を呈する。

SK68（第113図）

D-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、南北0.6m、東西0.6m、深さ0.3mである。断



第112図 第1造構面核出構造(4)



第113図 第1構造面検出構 (5)



0 (1-2) 10cm

報告番号	遺物名	最大長(cm)*	最大幅(cm)*	最大厚(cm)*	重量(g)*	石材**	遺構・層位	備考
1	碁石	2.5	2.0	0.6	4.62	頁岩	SK61	

* () は残存部のサイズ・重量を示す。

** 肉眼観察による。

第114図 SK61出土遺物



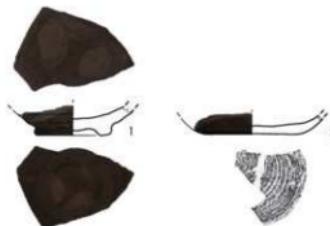
0 (1-2) 10cm

報告番号	遺物名	最大長(cm)*	最大幅(cm)*	最大厚(cm)*	重量(g)*	石材**	遺構・層位	備考
1	碁石	2.2	2.2	0.5	4.27	頁岩	SK81	

* () は残存部のサイズ・重量を示す。

** 肉眼観察による。

第115図 SP81出土遺物



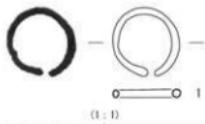
0 (1-2) 10cm

報告番号	材質	器種	生産地	口径(cm)	底径・ 側面径(cm)	高さ(cm)	成形技法	釉薬	粒付	装飾技法	鉛・刻印・ 墨書き	胎土色・ 含有鉱物	遺構・層位	備考	
1	陶器	皿	肥前系	—	4.55	—	ロクロ	皮輪(底部跡)				灰白色	7.SY7/1	SK99	東込・高台内砂目。1610 ~1690年代
2	土師質 土器	皿	—	—	(6.0)	—	ロクロ					浅黄褐色 (薄)	長石・石英(極 小、少量)	SK99	内面全周・周辺外縁に入付着 付着した場合、底部に凹部を削り 削し(底部)、周辺ナデ 内面・回転ナデ

「—」は「不明」を示す。 () 内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

含有鉱物は、土器のみ記載。 備考欄に記載した年代は、生産地における作成年代を示す。

第116図 SK99出土遺物



0 (1:1) 5cm

報告番号	遺物名	最大長(cm)*	最大幅(cm)*	最大厚(cm)*	重量(g)*	材質**	遺構・層位	備考
1	輪状鋼製品	1.4	1.4	0.2	0.38	鋼	SK116	

* () は残存部のサイズを示す。重量は錆びを含む。

** 肉眼観察による。

第117図 SK116出土遺物

面は逆三角形を呈する。

SK69 (第113図)

D-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mである。断面は不整な逆三角形を呈する。

SK70 (第118図)

E-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.8m、短径0.4m、深さ0.1mである。断面は不整な皿形を呈する。

SK71 (第118図)

E-4区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北1.8m、東西1.5m、深さ0.5mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK72 (第118図)

E-4区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径1.0m、深さ0.3mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK73 (第118図)

E-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK74 (第118図)

E-3・4区で検出された土坑。平面形は不整な長方形で、南北2.7m、東西残存値2.2m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK75 (第118図)

E-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK76 (第118図)

E-3区で検出された土坑。平面形は不整形で南北0.8m、東西1.7m、深さ0.1mである。断面は不整な皿形を呈する。

SK77 (第119図)

E-3・4区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北1.1m、東西2.0m、深さ0.3mである。不整な皿形を呈し、一部深い。

SK78 (第119図)

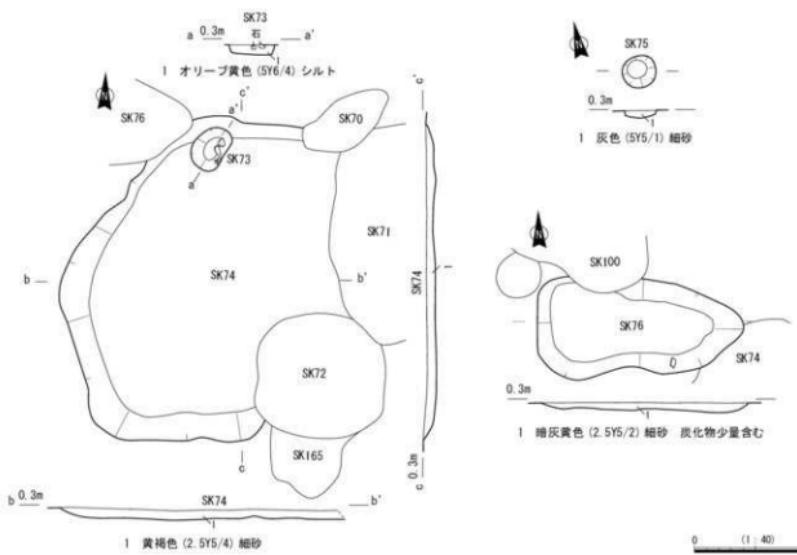
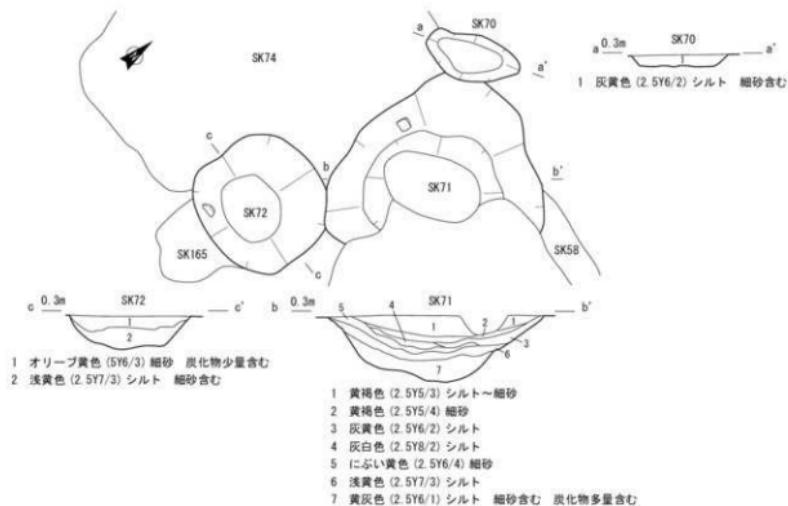
F-4区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.7m、短径0.4m、深さ0.2mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK79 (第119図)

F-4区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.1mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK80 (第119図)

E-4区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.7m、短径0.2m、深さ0.1mである。断面は不整な台形を呈する。



第118図 第1造構面積出造構 (6)

0 (1:40) 1m

SK81 (第119図)

F-3区で検出された柱穴。平面形は不整な円形と推定され、直径0.7m、深さ0.8mである。断面に柱の痕跡がみられる。断面は不整なU字形を呈する。遺物は頁岩製の基石(第115図1)が出土した。

SK82 (第119図)

F-3区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径1.3m、短径0.7m、深さ0.1mである。断面は不整な皿形を呈する。

SK83 (第119図)

F-3区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.05mである。断面は皿形を呈する。

SK84 (第119図)

F-3区で検出された土坑。平面形は方形で、一边0.2m、深さ0.1mである。断面はU字形を呈する。

SK85 (第119図)

F-3区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北0.5m、東西0.4m、深さ0.1mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK86 (第119図)

F-3区で検出された土坑。平面形は長方形で、長さ0.6m、幅0.5m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。

SK87 (第119図)

F-3区で検出された土坑。平面形は不整な梢円形で、長径0.6m、短径0.5m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。

SK88 (第119図)

F-3区で検出された土坑。平面形は不整な梢円形と推定され、長径0.6m、残存短径0.3m、深さ0.1mである。断面は不整な逆三角形を呈する。

SK89 (第119図)

F-3区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値0.4m、東西0.7m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK90 (第120図)

F-3区で検出された土坑。平面形は長方形で、南北0.3m、東西0.4m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

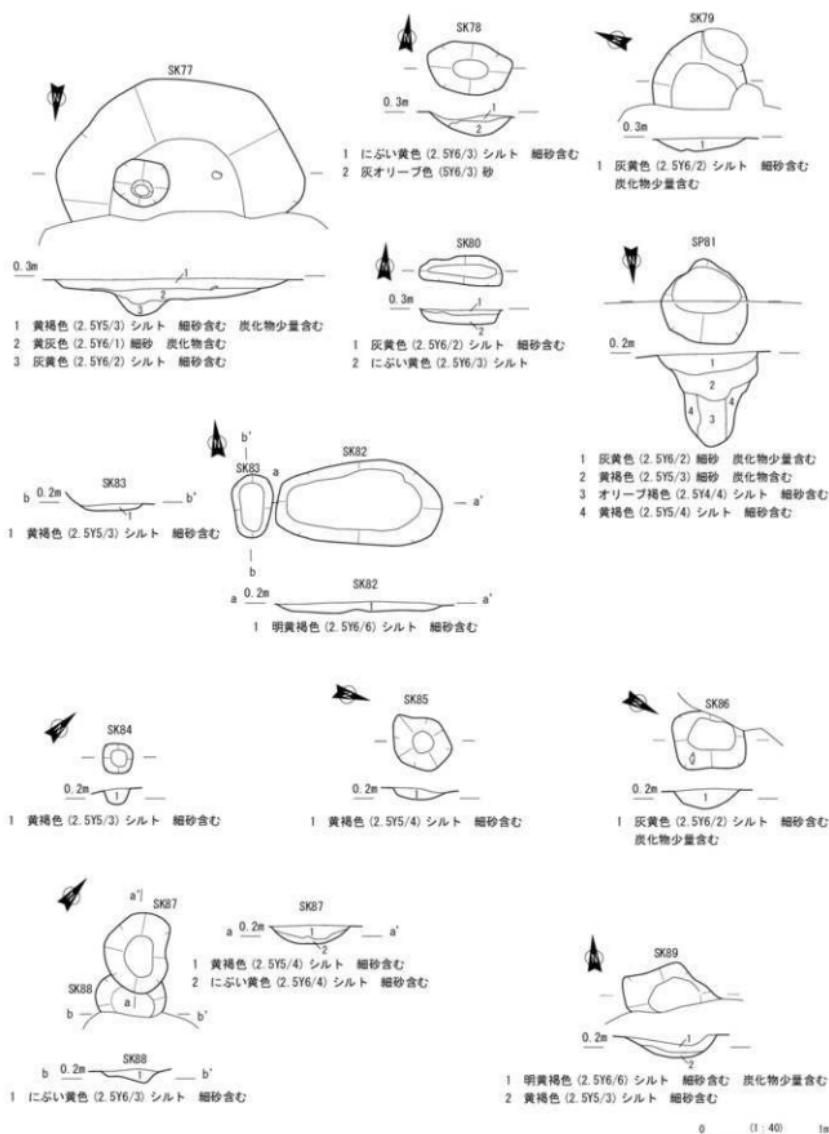
SK91 (第120図)

F-3区で検出された土坑。平面形は不整な梢円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK92 (第120図)

F-2・3区で検出された土坑。平面形は隅丸方形と推定され、南北残存値0.9m、東西1.4m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。

SK93 (第120図)



第119図 第1構造面検出構造(7)

0 [1:40] 1m

F-3 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北 1.6 m、東西残存値 0.7 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK94 (第 120 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値 1.3 m、東西残存値 0.8 m、深さ 0.4 m である。断面は皿形で、一部は逆三角形を呈する。

SK95 (第 120 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な U 字形を呈する。

SK96 (第 120 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.3 m である。断面は U 字形を呈する。

SK97 (第 120 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面はレンズ形を呈する。

SK98 (第 120 図)

F-3 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 1.0 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK99 (第 120 図)

E・F-3 区で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、南北 1.1 m、東西 0.8 m、深さ 0.2 m である。断面は不整な U 字形を呈する。遺物は、17 世紀代の肥前系陶器の皿（第 116 図 1）と土師質土器の皿（第 116 図 2）が出土した。

SK100 (第 120 図)

E-3 区で検出された土坑。平面形は不整な梢円形で、長径 1.7 m、短径 1.1 m、深さ 0.1 m である。断面は皿形を呈する。

SK101 (第 120 図)

E-3 区で検出された土坑。平面形は梢円形で、長径 0.8 m、短径 0.7 m、深さ 0.2 m である。断面はレンズ形を呈する。

SK102 (第 121 図)

E-3 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.4 m、深さ 0.1 m である。断面はレンズ形を呈する。

SK103 (第 121 図)

E-3 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.2 m である。断面は U 字形を呈する。

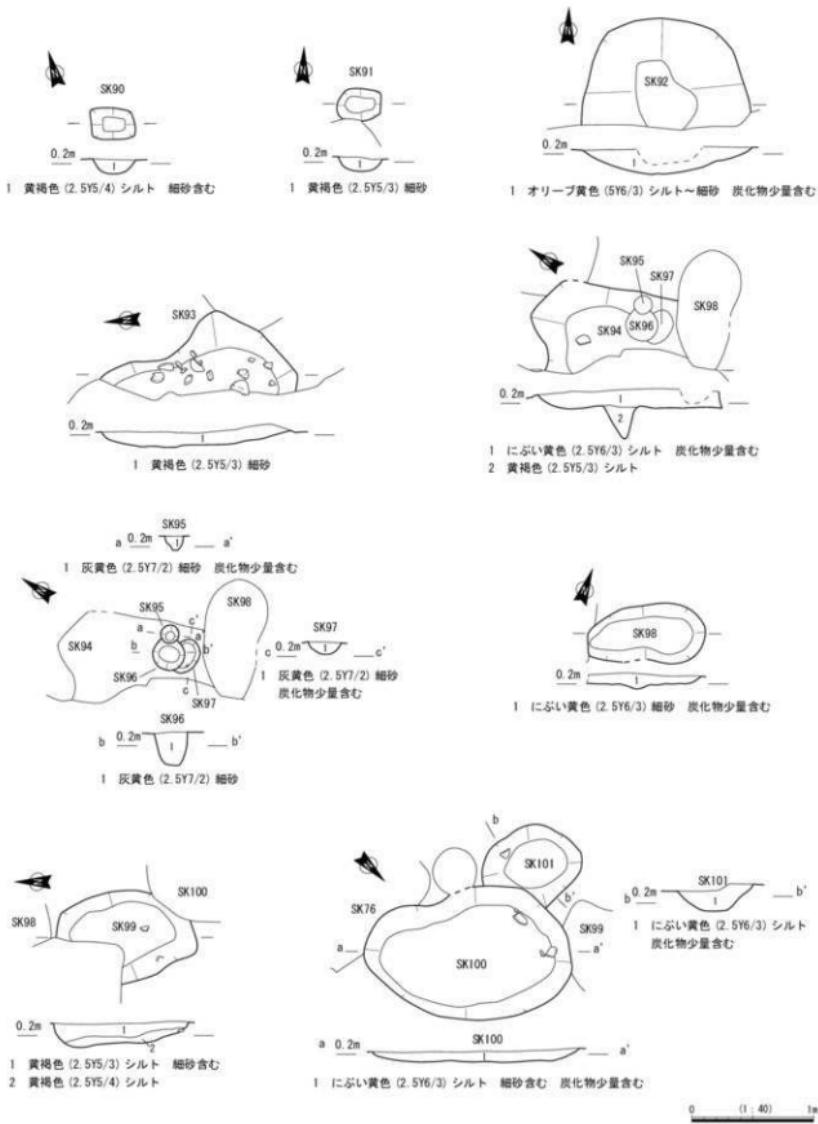
SK104 (第 121 図)

E-3 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.2 m である。断面は U 字形を呈する。

SK106 (第 121 図)

E-2 区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径 0.5 m、深さ 0.05 m である。断面は皿形を呈する。

SK107 (第 121 図)



第120図 第1造構面核出構造(8)

0 (1 : 40) 1m

E-2 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.5 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な台形を呈する。

SK108 (第 121 図)

F-2 区で検出された土坑。平面形は橢円形で、残存長径 0.8 m、短径 0.7 m、深さ 0.2 m である。断面は皿形を呈する。

SK113 (第 121 図)

G-2 区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径 0.4 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK114 (第 121 図)

G-2 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.5 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK109 (第 121 図)

F-2 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m である。断面は皿形を呈する。

SK110 (第 121 図)

F-2 区で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径 0.3 m 短径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面はレンズ形を呈する。

SK111 (第 121 図)

F-2 区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径 0.4 m、深さ 0.05 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK112 (第 121 図)

F-2 区で出された土坑。平面形は不整形で、南北 1.4 m、東西残存値 1.5 m、深さ 0.1 m である。断面は皿形を呈する。

SK115 (第 121 図)

F-1・2 区で検出された土坑。平面形は不整な円形と推定され、長径残存値 0.7 m、短径 0.7 m、深さ 0.05 m である。断面はレンズ形を呈する。

SK116 (第 121 図)

F-1・2 区で検出された土坑。平面形は橢円形と推定され、長径 1.6 m、残存短径 0.8 m、深さ 0.3 m である。断面はいびつなレンズ形を呈し、一部深い。遺物は輪状銅製品（第 117 図 1）が出土した。

SK117 (第 121 図)

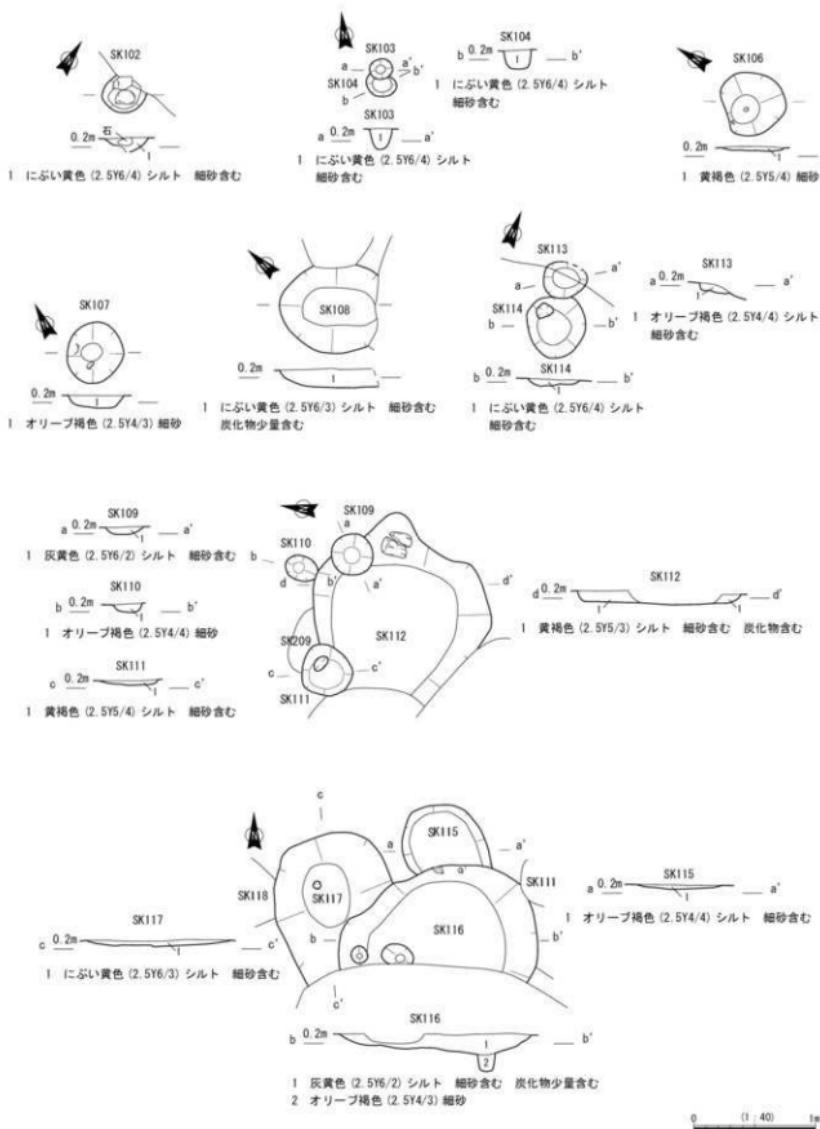
F-1 区で検出された土坑。平面形は隅丸長方形と推定され、南北残存値 1.1 m、東西 1.0 m、深さ 0.05 m である。断面は皿形を呈する。

SK118 (第 122 図)

F-1 区で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、長さ 0.6 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 m である。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK119 (第 122 図)

F-1 区で検出された土坑。平面形は隅丸長方形か橢円形で、長さ 0.4 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 m である。



第121図 第1透構面核出構造 (9)

断面は逆三角形を呈する。

SK120 (第122図)

F-1区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK121 (第122図)

F-1区で検出された土坑。平面形は長方形と推定され、長軸残存値0.3m、短軸0.3m、深さ0.05mである。断面は不整な皿形を呈する。

SK122 (第122図)

F・G-1区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、南北0.4m、東西残存値0.6m、深さ0.05mである。断面は皿形を呈する。

SK123 (第122図)

G-1区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径1.2m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。遺物は肥前系陶器の皿(第123図1)が出土した。

SK124 (第122図)

G-1区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、南北残存値0.9m、東西0.8m、深さ0.3mである。断面は不整な台形を呈する。遺物は17世紀前葉の肥前系陶器の碗(第124図1)が出土した。

SK125 (第122図)

G-1区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.4m、短径0.2m、深さ0.1mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK126 (第122図)

G-1区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.2mである。断面は不整な逆三角形を呈する。

SK127 (第122図)

F-2区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径0.4m、深さ0.2mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK129 (第122図)

C・D-4区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK131 (第122図)

C-4・5区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.6m、短径0.2m、深さ0.05mである。断面は皿形を呈する。

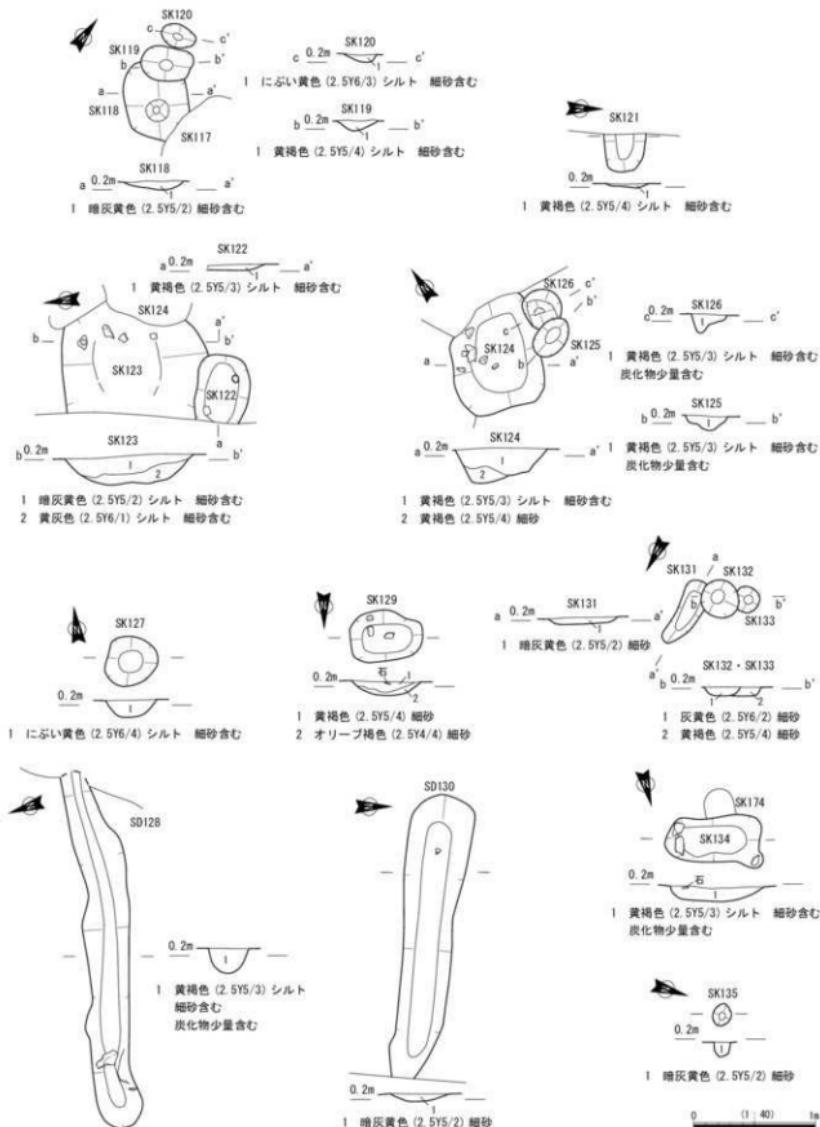
SK132 (第122図)

C-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK133 (第122図)

C-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK134 (第122図)



第122図 第1造構面積出露構 (10)



報告書名	臍質	器種	生産地	口径 (cm)	奥深 さ (cm)	基部 (cm)	茎高 (cm)	成形技法	輪葉	被付	装飾技法	墨、刻印、 墨書き	胎土色	造構・肩位	備考
1	陶器	皿	肥前系	一	4.6	一	ロクロ	灰陶(内面) (外縁部陶輪わざか れに付着)				灰白色	5Y7/1	SK123	

「一」は、「不明」を示す。

第123図 SK123出土遺物



種子番号	育成地	品種	生産地	口徑 (mm)	處理 方法 (mm)	表面 (cm)	成形方法	難度	組付	装飾方法	純 度印 鑄型	胎土色	造模・層位	備考	
1	鹿児島県	薩摩	肥前系	4.0	—	ロクロ	反輪(内面)	—	—	—	—	褐色	7.5YR7/6	SK124	17世紀の薦

「—」は、「不明」を示す。()内の数字は、残存部から復元した数値を示す。備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

機械化に起因した年代は、生産地における操業年代を示す。

第124図 SK124出土遺物



種類区分	地質	岩種	生産地	口径 (cm)	奥行き 掘み幅 (cm)	巻高 (cm)	成形技法	釉面	絞付	装飾技法	額・押印・ 墨書き	施釉 方法	造構・層位	備考	
1	土師質 土器	陶	—	(9.0)	6.7	1.15	口クロ						(二重)燒色 7.5VR	SK189	打刃油滴、全表面素燒施 白陶、回転目録、不規則 離しのち直在後より 施釉。器底に「子」字 内面、回転ナフ。ナデ 目録。

「-」は、「不明」を示す。 () 内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

第125図 SK189出土遺物



報告書 番号	加質	器種	生産地	口径 (cm)	奥深さ・ 幅広さ (cm)	高さ (cm)	成形技法	施墨	絞付	装飾技法	跡印・ 墨書き	胎土色	造様・層位	備考	
1	陶器	碗	京、 奈良系	-	(3.3)	-	ロクロ	医輪(底面斜く)				灰白色	緑	SK19	小ぶり茶碗、10世紀前半～ 中期

「-」は、「不明」を示す。〔 〕内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

佛号欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

第126図 SK191出土遺物

C-4 区で検出された土坑。平面形は不整な隅丸方形で、南北 0.4 m、東西 0.8 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK135 (第 122 図)

C-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面は U 字形を呈する。

SK136 (第 127 図)

C-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面は U 字形を呈する。

SK137 (第 127 図)

B・C-4・5 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北 1.9 m、東西残存値 0.9 m、深さ 0.2 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK138 (第 127 図)

B-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.2 m である。断面は逆三角形を呈する。

SK139 (第 127 図)

C-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.4 m、深さ 0.2 m である。断面は台形を呈する。

SK140 (第 127 図)

C-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m である。断面はレンズ形を呈する。

SK141 (第 127 図)

C-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.05 m である。断面はレンズ形を呈する。

SK142 (第 127 図)

C-4 区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 0.6 m、短径 0.4 m 深さ 0.1 m である。断面は台形を呈する。

SK143 (第 127 図)

B-4 区で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.1 m、深さ 0.2 m である。断面は不整な U 字形を呈する。

SK145 (第 127 図)

B-4 区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径 0.6 m、深さ 0.1 m である。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK146 (第 127 図)

B-3 区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径 0.3 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な逆三角形を呈する。

SK147 (第 127 図)

B-3 区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北 0.4 m、東西 0.3 m、深さ 0.1 m である。断面は不整な皿形を呈する。

SK148 (第 127 図)

C-3 区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径 0.4 m、深さ 0.2 m である。断面は長方形を呈する。

SK149（第127図）

C-3・4区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形と推定され、長径1.2m、残存短径0.5m、深さ0.3mである。断面は不整な逆三角形を呈する。

SK150（第127図）

D-3区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.3mである。断面は不整な台形を呈する。

SK151（第127図）

D-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK152（第127図）

C-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.6m、短径0.5m、深さ0.3mである。断面はU字形を呈する。

SK153（第127図）

C-3・4区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径1.0m、短径0.4m、深さ0.1mである。断面は皿形を呈する。

SK154（第127図）

C-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1mである。断面は不整な皿形を呈する。

SK155（第128図）

C-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.5m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK156（第128図）

C-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK157（第128図）

C・D-3区で検出された土坑。平面形は不整な円形で、直径0.3m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK158（第128図）

C・D-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK159（第128図）

C・D-3区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1mである。断面は不整形な台形を呈する。

SK160（第128図）

D-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.1mである。断面は逆三角形を呈する。

SK161（第128図）

F-2区で検出された土坑。平面形は隅丸方形と推定され、残存長1.0m、残存幅0.7m、深さ0.2



第127図 第1造構面積出造構 (11)

mである。断面は皿形を呈する。

SK165 (第128図)

E-4区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値0.5m、東西0.7m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈すると推定される。

SK167 (第128図)

E-4区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値0.6m、東西残存値0.5m、深さ0.2mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK168 (第128図)

D-4区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形と推定され、長径1.7m、残存短径0.7m、深さ0.2mである。断面は不整な皿形を呈する。

SK169 (第128図)

E-5区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.2mである。断面はU字形を呈する。

SK170 (第128図)

D-4区で検出された土坑。平面形は方形で、一辺0.3m、深さ0.1mである。断面は台形を呈する。

SK171 (第128図)

D-4・5区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK172 (第128図)

D-4・5区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北0.7m、東西0.7m、深さ0.2mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK173 (第129図)

D-4・5区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値1.4m、東西残存値1.7m、深さ0.3mである。断面は不整なレンズ形を呈し、一部深い。

SK174 (第129図)

C-4区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、南北残存値0.2m、東西0.2m、深さ0.2mである。断面はU字形を呈する。

SK175 (第129図)

B-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面は不整なU字形を呈する。

SK176 (第129図)

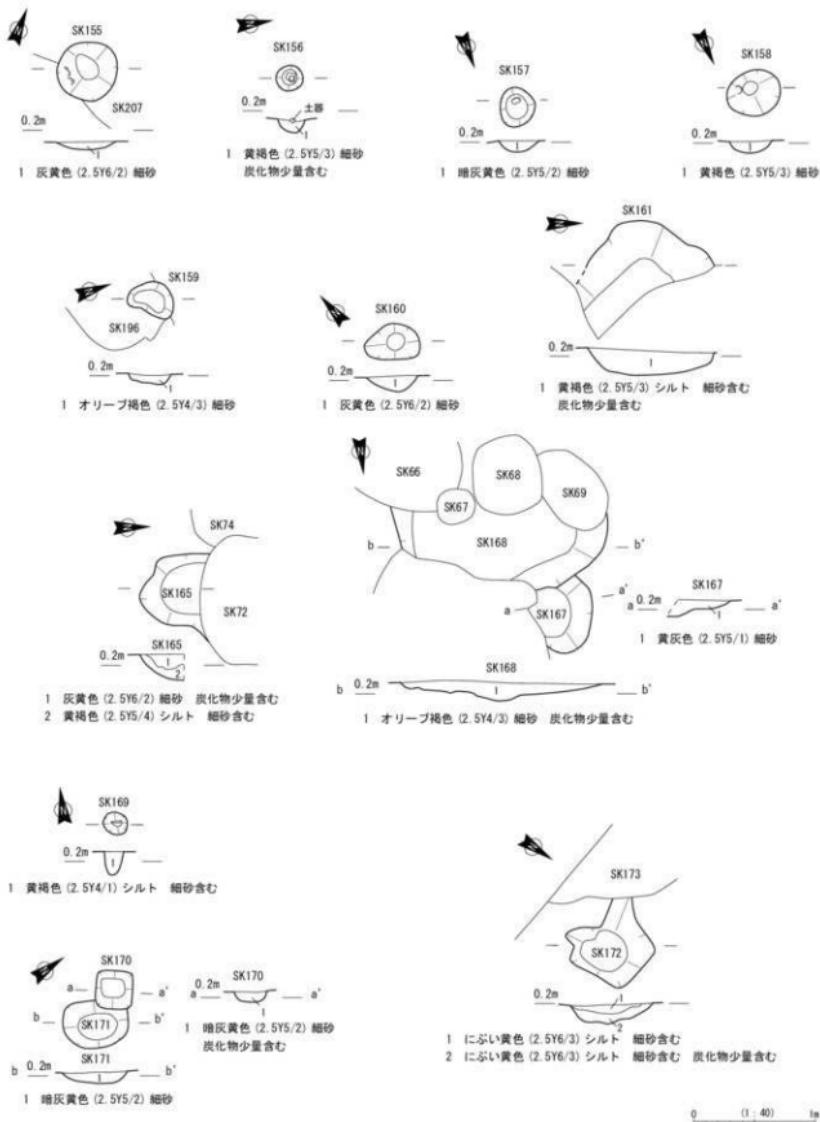
B-4区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK177 (第129図)

B-4区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。

SK178 (第129図)

D-2・3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.8m、短径0.4m、深さ0.2mである。



第128図 第1造構面積出造構 (12)

断面はレンズ形を呈する。

SK179 (第129図)

D-2・3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径1.9m、短径0.9m、深さ0.1mである。断面は不整な皿形を呈する。

SK180 (第129図)

D-2区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.1mである。断面は不整な台形を呈する。

SK181 (第129図)

D-2区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1mである。断面は台形を呈する。

SK182 (第129図)

C-2区で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、残存長径0.8m、残存短径0.7m、深さ0.05mである。断面は皿形を呈する。

SK183 (第129図)

C-2区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値0.4m、東西0.5m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK184 (第129図)

C-2区で検出された土坑。平面形は楕円形であり、残存長径0.9m、短径0.9m、深さ0.1mである。断面は不整な台形を呈する。

SK185 (第129図)

C-2・3区で検出された土坑。平面形は隅丸方形と推定され、南北残存値0.4m、東西0.4m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。

SK186 (第129図)

C-3区で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mである。断面はU字形を呈する。

SK188 (第130図)

C・D-2区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形と推定され、長径2.1m、残存短径1.1m、深さ0.1mである。断面は不整な皿形を呈する。

SK189 (第130図)

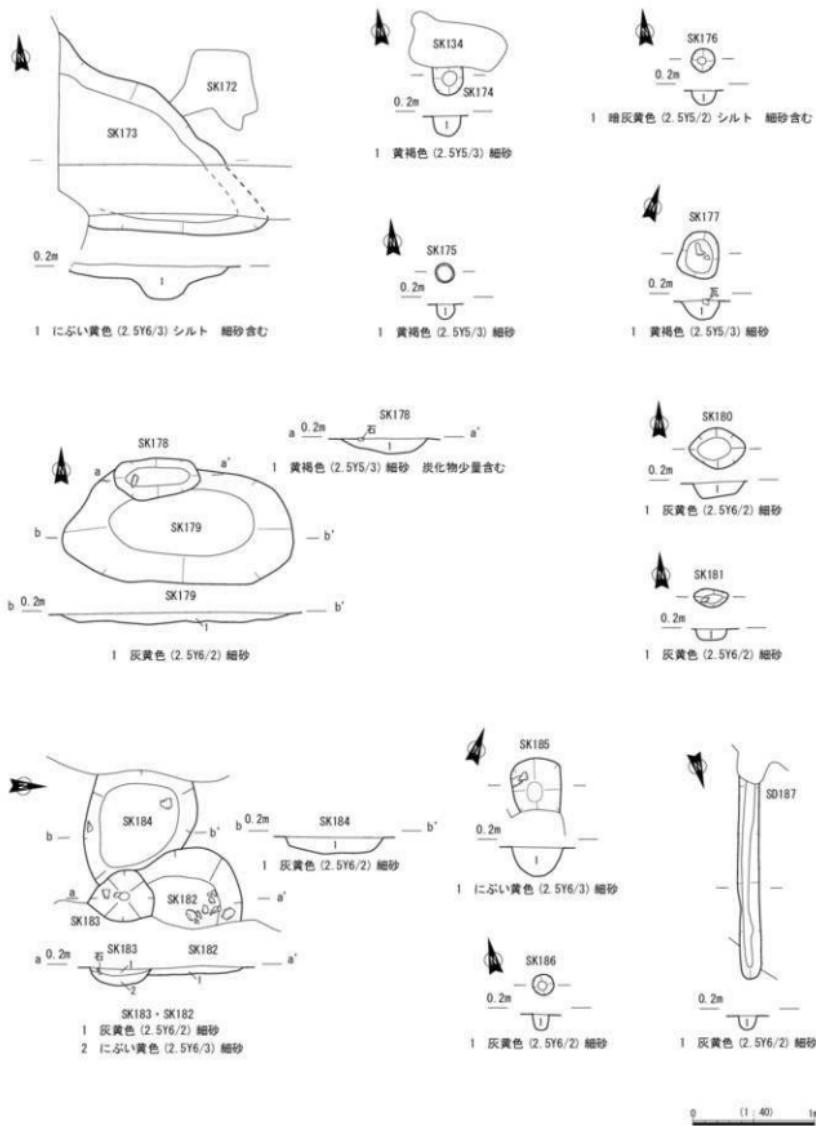
B・C-2区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径0.6m、短径0.4m、深さ0.2mである。断面は台形を呈する。遺物は土師質土器の皿（第125図1）が出土した。

SK190 (第130図)

B-2区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北0.3m、東西0.5m、深さ0.2mである。断面は逆三角形を呈する。

SK191 (第130図)

B-2区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北0.5m、東西0.4m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。遺物は18世紀前半～幕末の京・信楽系陶器の碗（第126図1）が出土した。



第129図 第1造構面検出造構 (13)

SK192（第131・132図）

C-D-3・4区で検出された土坑。平面形は不整形であり、南北2.5m、東西残存値2.1m、深さ0.5mである。断面をみると、台形である。遺物は、標高-0.1m～標高-0.5mから多く出土している。肥前系陶磁器（第133図1～5・7～17、第134図19・20・25～28・30、第135図32・35）、瀬戸・美濃系陶磁器（第133図6・18、第134図29）、京・信楽系陶器（第134図21～24）、備前系陶器（第135図31・33・34・38）、大谷焼（第135図39）、御殿系土器質土器（第135図47）、鉄釘（第136図48）、瓦（第136図49）、火打石（第136図50）、漆器が出土した。漆器は残存状態が悪く、図化し得なかった。本土坑は第1構造の遺構のうち、遺物の出土量が最も多い。遺物の時期は、16世紀末～幕末までと幅広い。

SK193（第130図）

C-3区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、一边0.4m、深さ0.3mである。断面はU字形を呈する。

SK194（第130図）

C-3区で検出された土坑。平面形は不整な梢円形で、長径1.3m、短径0.8m、深さ0.2mである。断面はレンズ形を呈する。

SK195（第130図）

C-3区で検出された土坑。平面形は隅丸方形と推定され、一边1.4m、深さ0.2mである。断面は不整な台形を呈する。

SK196（第130図）

C-3区で検出された土坑。平面形は隅丸長方形と推定され、南北残存値0.7m、東西残存値1.4m、深さ0.2mである。断面は不整なレンズ形を呈する。

SK197（第130図）

C・D-3区で検出された土坑。平面形は不整形であり、南北2.1m、東西0.9m、深さ0.1mである。断面は台形を呈する。

SK198（第130図）

C・D-3区で検出された土坑。平面形は不整な隅丸方形と推定され、南北1.0m、東西0.9m、深さ0.2mである。断面は不整なレンズ形を呈する。遺物は、16世紀第2四半期末～17世紀初頭の備前系陶器の擂鉢（第137図1）が出土した。

SK199（第130図）

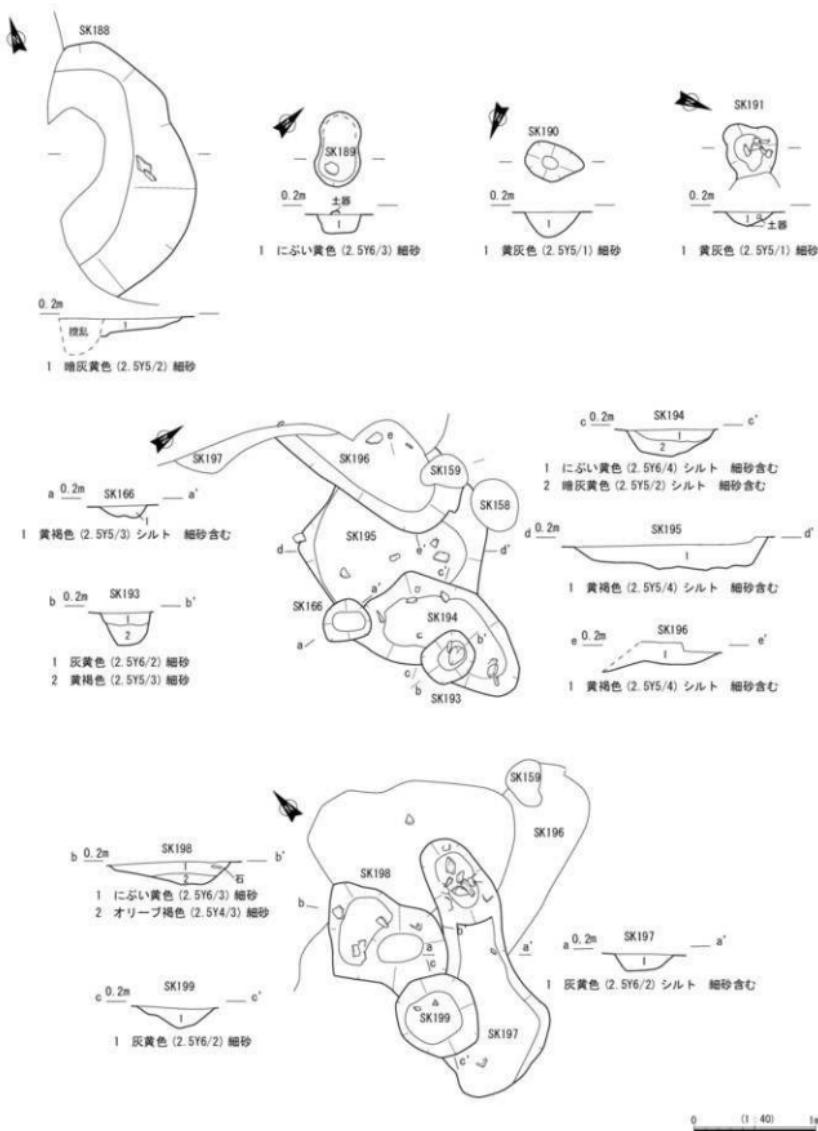
C-3区で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径0.7m、深さ0.2mである。断面は逆三角形を呈する。

SK200（第139図）

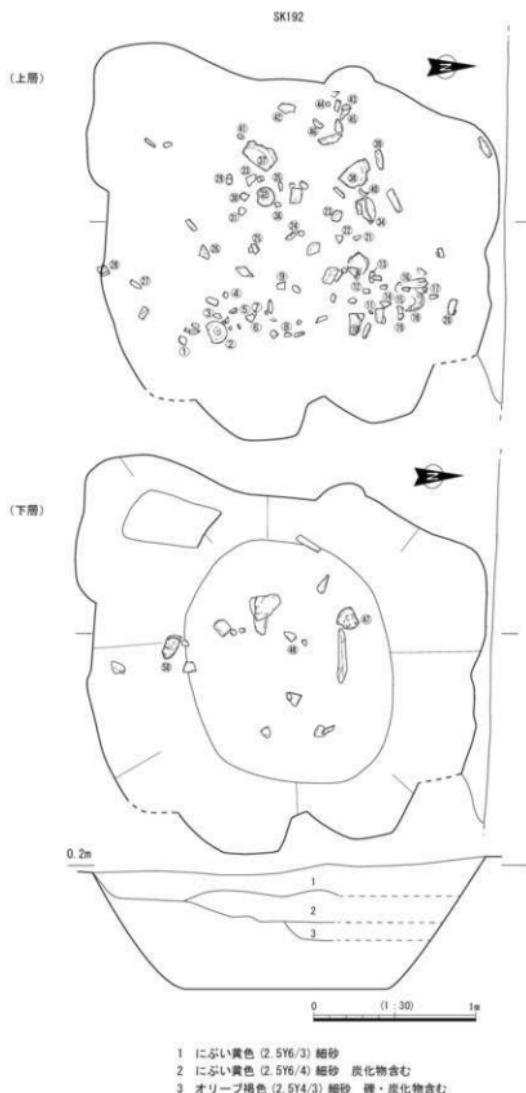
B-3区で検出された土坑。平面形はやや不整な円形で、直径0.5m、深さ0.2mである。断面は台形を呈する。

SK201（第139図）

B-3区で検出された土坑。平面形は隅丸方形で、南北0.3m、東西0.2m、深さ0.1mである。断



第130図 第1構造面検出構 (14)



第131図 第1遺構面検出遺構 (15)

丸数字は第19・20表と対応する。



第132図 SK192

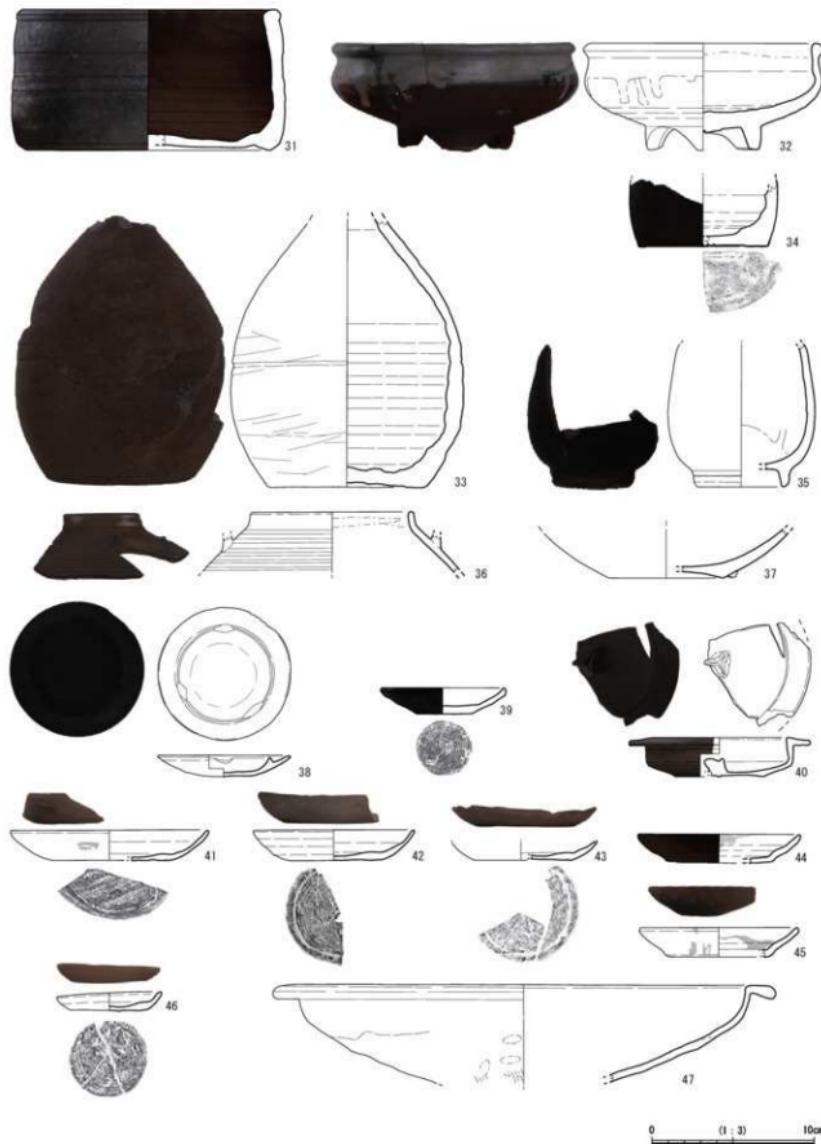
1. 遺物出土状況（東から） 2. 土層断面（西から）



第133図 SK192出土遺物(1)

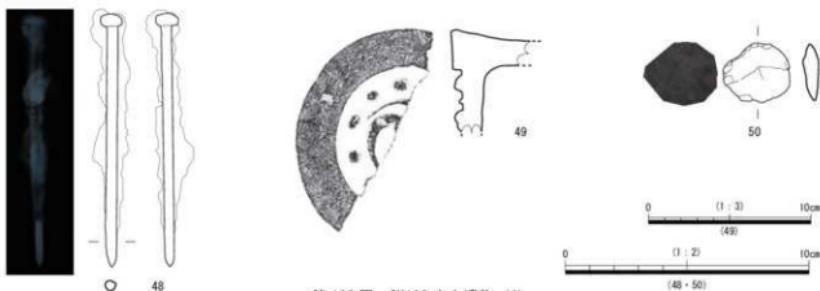


第134図 SK192出土遺物 (2)



第135図 SK192出土遺物(3)

0 (1:3) 10cm



第136図 SK192出土遺物(4)

第19表 SK192遺物観察表(1)

報告号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径(縦×横)(cm)	高さ(cm)	成形技法	釉薬	給付	装飾技法	銘・刻印・書書き	胎土色・有・無	造機・部位	備考
1	磁器	碗	肥前系	11.3	4.6	5.9	ロクロ	透明釉 (内面・高台内)	染付	手描き	二重方角鉢 (内・外底縁) 鉢・高台内)	灰白色 細/白(白色薄暗い)	SK192	焼高台、青磁塗付。1820 ~1870年代。
2	磁器	碗	肥前系	(11.4)	4.55	5.7	ロクロ	透明釉	染付	手描き	白(白色薄暗い)	SK192	焼高台、1820~1870年代 SK12-18と接合	
3	磁器	碗	肥前系	-	3.4	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き	「大明年製」 鉢・高台内)	灰白色 細/白(白色薄暗い)	SK192	くわんんと、高台周縁部处理 しない。1660~1880年代
4	磁器	碗	肥前系	(10.8)	-	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細/白(白色薄暗い)	SK192	広口碗、青磁免色薄い。 1780~1840年代	
5	磁器	碗	肥前系	(10.2)	-	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 細/白(白色薄暗い)	SK192	初期伊万里。1610~1650 年代	
6	磁器	皿 (小皿)	唐戸・ 青磁系	(9.8)	(5.5)	2.0	型打	透明釉		型打による 輪郭	白(白色薄暗い)	SK192	19世紀	
7	磁器	小环	肥前系	(7.5)	2.75	3.5	ロクロ	透明釉			白(白色薄暗い)	SK192		
8	磁器	小环	肥前系	-	(2.6)	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き	白(白色薄暗い)	SK192	焼成不良(釉白済)、施釉 粗い	
9	磁器	仏頭瓶	肥前系	-	4.4	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き	白(白色薄暗い)	SK192		
10	磁器	仏頭瓶 ?	肥前系	(6.1)	-	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き	白(白色薄暗い)	SK192		
11	磁器	御清利	肥前系	1.7	2.9	7.2	ロクロ	透明釉	染付	手描き	白(白色薄暗い)	SK192	真須赤色薄い	
12	磁器	御清利 ?	肥前系	-	4.6	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き	白(白色薄暗い)	SK192		
13	磁器	破壊	肥前系	(10.0)	5.85	2.7	ロクロ	透明釉	染付	手描き	白(白色薄暗い)	SK192	広口碗、青磁免色薄い。 1780~1840年代	
14	磁器	破壊	肥前系	10.75	5.55	2.7	ロクロ	透明釉	染付	手描き	二重方角鉢 (内・外底縁) (底のみ内)	白(白色薄暗い)	SK192	広口碗、1780~1840年代
15	磁器	破壊	肥前系	-	4.7	-	ロクロ	青磁頭 (底部・外縁) (内面・高台内)	染付	手描き	二重方角鉢 (内・外底縁) (底のみ内)	白(白色薄暗い)	SK192	丸腹、青磁塗付。18世紀 中頃~19世紀末
16	磁器	破壊	肥前系	-	3.7	-	ロクロ	透明釉			白(白色薄暗い)	SK192	丸碗?	
17	磁器	破壊	肥前系	(9.2)	-	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き	白(白色薄暗い)	SK192	焼高台、1820~1870年代	
18	磁器	破壊	唐戸・ 青磁系	-	-	-	ロクロ	透明釉	染付	手描き 墨書き	白(白色薄暗い)	SK192	焼高台、19世紀初半 昭和50年~19世纪末3四年期	
19	陶器	碗	肥前系	-	5.0	-	ロクロ	灰釉 (底部斜) (外縁)			白(白色薄暗い)	SK192	17世紀前葉	
20	陶器	碗	肥前系	-	4.5	-	ロクロ	(底部斜・外縁) 透明釉 (内面)			白(白色薄暗い)	SK192		
21	陶器	碗	京・ 信楽系	8.9	3.2	5.2	ロクロ	灰釉 (底部斜)			白(白色薄暗い)	SK192	堆反影、19世紀前半~	
22	陶器	碗	京・ 信楽系	9.2	-	-	ロクロ	灰釉 (底下部外 斜)			白(白色薄暗い)	SK192	堆反影、19世紀前半~	
23	陶器	碗	京・ 信楽系	9.2	3.6	5.5	ロクロ	灰釉 (底部斜)	鉄絵	手描き	白(白色薄暗い)	SK192	小鉢碗、18世紀前半~ 末	
24	陶器	碗	京・ 信楽系	9.2	3.6	6.75	ロクロ	鉄絵 (底部斜) (内面)	白化粧土	手描き	白(白色薄暗い)	SK192		
25	陶器	皿	肥前系	13.7	5.0	3.2	ロクロ	灰釉 (底部斜)	鉄絵	手描き	にぶい褐色 7.5W7/4	SK192	鉢底深、費込付。置付 わざかに沙利着。1610~ 1660年代。	
26	陶器	皿	肥前系	(13.8)	(5.0)	3.4	ロクロ	灰釉 (底部斜)	鉄絵	手描き	にぶい褐色 7.5W7/4	SK192	鉢底深、費込付。1610~ 1660年代。	
27	陶器	皿	肥前系	(15.8)	5.2	4.6	ロクロ	灰釉 (底部斜)			にぶい褐色 5W7/4	SK192	見込付。1610~1660年頃 ~1810年代。	
28	陶器	皿	肥前系	4.2	2.9	-	ロクロ	灰釉 (底部斜)			白(白色薄暗い)	SK192	見込付。土器底、口縁部全 周に墨書き。1610~1660年頃 ~1810年代。	

「-」は、「不明」を示す。()内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

造機・局は機の丸数字は、第131回と対応化する。

第20表 SK192遺物観察表(2)

順番 番号	貯質	器種	生産地	口径 (cm)	底径・ 横溝径 (cm)	器高 (cm)	成形技法	施薬	給付	装飾技法	鉛・鋳印・ 墨書き	胎土色・ 含み有機物	造形・層位	備考
29	陶器	皿	越戸・ 肥前系	(24.6)	—	—	ロクロ	長石釉	鉢底	手焼き	反白色 2.SY8/1	SK192	馬の目皿。18世紀後葉～	
30	陶器	鉢	肥前系	27.9	10.2	7.15	ロクロ	灰釉 (底部斜)	白化粧土 下挖行 (絞鉢・鉢底)	二彩手	赤色 10R5/6	SK192 ②(3)付	見込砂胎土目皿 (器口のみ 残存)。17世紀前半～	
31	陶器	サヤ形 鉢	肥前系	(15.4)	(15.0)	8.6	ロクロ	灰釉 (口縁部内 面・底面)、 施釉洗し仕上げ (外縁)	白化粧土	網毛口?	反白色 10R9/1 灰色 細 (芯部)	SK192 34	便土 (外面)、火漆 (内面)	
32	陶器	香炉	肥前系	(3.9)	(6.8)	6.5	ロクロ	灰釉 (口縁部内 面・底面)、 施釉洗し仕上げ (外縁)	白化粧土	網毛口?	赤褐色 10R5/4	SK192 165	三方向アーチ状に切り込む 高台	
33	陶器	瓶	肥前系	—	9.5	—	ロクロ	—	—	—	反白色 2.SY7/1	SK192 33付	内面下部錐状物質付着	
34	陶器	瓶?	肥前系	—	(8.0)	—	ロクロ	—	—	—	△:陶口による △:火漆跡 △:鉢口 (窓口)? (底部外縁)	にぶい褐色 7.SY9E/2	SK192	便土 (外面)
35	陶器	水注?	肥前系	—	(5.3)	—	ロクロ	灰釉 (費付跡く 外縁・底部内面)	—	—	黄褐色 2.SY6/1	SK192	費付アルミニウム塗布、脚部 口縁部底缺損物質付着	
36	陶器	土瓶	—	(9.8)	—	—	ロクロ	灰釉 (口縁部内 面)、 黏付 (耳)	—	—	反白色 2.9Y7/1 (灰色輪裏)	SK192	口縁部内面アルミニウム塗布	
37	陶器	土瓶	—	—	(7.1)	—	ロクロ	灰釉 (口縁部く 外縁)、 鉢輪 (内面)	—	—	にぶい赤褐色 10R6/4	SK192	—	
38	陶器	灯明 受皿	肥前系	8.1	3.8	1.3	ロクロ	粘付 (仕切り)	—	—	灰色 84/	SK192	仕切りにリメイク (3か所)	
39	陶器	灯明 受皿 (上皿)	大谷	7.4	3.4	1.6	ロクロ	粘付 (内面～ 口縁部外縁)	—	—	にぶい赤褐色 10R6/4	SK192	脚付灯明受皿、脚部下部裏 ねじりきず (焼付)、底部 右回転式切り離し。19世紀	
40	陶器	蓋	—	(8.4)	(5.4)	2.4	ロクロ	粘付 (施内)	灰釉 (上面)	—	—	灰白色 2.SY7/1	SK192	土瓶または水注
41	土師質 工器	皿	—	(12.2)	(7.0)	1.85	ロクロ	—	—	—	灰白色 7.5Y9E/1 瓦石・石粉 (極 小、少量)	SK192	外・内面スカス付着、灯芯油 痕 (底部外縁) 外縁部左側に切り離しの ち直付仕立て (瓦石部)、回転ナット、 回転ナット、ナデ	
42	土師質 工器	皿	—	(10.0)	(5.7)	1.85	ロクロ	—	—	—	灰白色 10R8/1 瓦石・石粉 (極 小、少量)	SK192 33	内面・底部スカス付着 外縁部左側に切り離し (瓦 石部)、回転ナット、 内面・回転ナット、ナデ	
43	土師質 工器	皿	—	—	6.1	—	ロクロ	—	—	—	灰白色 10R8/1 瓦石・黑色粒 (極 小、少量)	SK192 33	外・内面スカス付着 外縁部左側に切り離し (瓦 石部)、回転ナット、 内面・回転ナット、ナデ	
44	土師質 工器	皿	—	(10.0)	(6.4)	(1.75)	ロクロ	—	—	—	灰黄色 7.5Y6/2 瓦石・黑色斑紋 (極小、少量)	SK192 33	灯芯油痕 外蓋、回転方式不明切り 離し (瓦石部)、回転ナット、 内面・回転ナット、ナデ	
45	土師質 工器	皿	—	(9.6)	(6.0)	1.8	ロクロ	—	—	—	褐色 7.5Y9E/1 瓦石・石粉 (極 小、少量)	SK192 33	外・内面スカス付着、灯芯油痕 外縁部左側に切り離し (瓦 石部)、回転ナット、 内面・回転ナット、ナデ	
46	土師質 工器	皿	—	—	6.3	4.6	1.2	ロクロ	—	—	灰白色 10R8/2 瓦石・石粉・赤 色斑紋・結晶片 (極小、少量)	SK192 ③(7)付	外蓋、回転方式不明切り 離し (板口と瓦石部あり?) (底部)、回転ナット、 内面・回転ナット、ナデ	
47	土師質 工器	堵物	肥前系	(30.2)	—	—	粘土堵物 土膏	—	—	—	にぶい褐色 7.5Y6/4 瓦石・金雲母 (極小、少量)	SK192	外蓋・口縁部内面スカス付着 外蓋、回転ナット (口縁部), ハサワの跡 (オサエ (底部)) 内面・回転ナット	

以上は第19表と同じ。

順番 番号	遺物名	最大長 (cm) *	最大幅 (cm) *	最大厚 (cm) *	重量 (g) *	材質 **	造形・層位	備考
48	釘	10.4	0.9 (頭部)	0.4 (底部)	15.90	鐵	SK192	背部断面多角形・円形。

* ()は残存部のサイズを示す。計測部位は頭・小林編 (2012) に従う。

** 肉眼観察による。

順番 番号	遺物名	瓦当・軒丸部 (cm) *	瓦当・軒平部 (cm) *	瓦當 (cm) *	鉛質	色調 (表面)	胎土	含み有機物	模型剤 **	コビキ **	造形・層位	備考
49	軒丸瓦	三巴文、 追跡	13.8	5.2	1.3	—	—	(5.0)	テ	1.5	テ	SK192 2層
50	火打石	—	2.7	—	—	—	—	—	—	—	—	SK192 2層

* ()は残存部のサイズを示す。計測部位は頭・小林編 (2012) に従う。

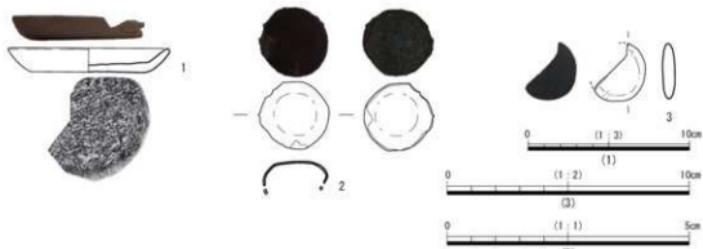
** 肉眼観察による。

順番 番号	遺物名	最大長 (cm) *	最大幅 (cm) *	最大厚 (cm) *	重量 (g) *	石材 **	造形・層位	備考
50	火打石	2.7	—	2.4	0.7	石英	SK192 2層	剥離を有する。



「—」は、「不明」を示す。
() 内の数字は、検査部から復元した数値を示す。
備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

第137図 SK198出土遺物



「—」は、「不明」を示す。
() 内の数字は、検査部から復元した数値を示す。

報告書番号	遺物名	最大長 (cm) *	最大幅 (cm) *	最大厚 (cm) *	重量 (g) *	材質 **	造構・部位	備考
2	円状鋼製品	1.5	(0.5) (高さ)	0.05	(0.81)	鋼	SK207	内面に緑青付着。

* () は残存部のサイズ、重量を示す。

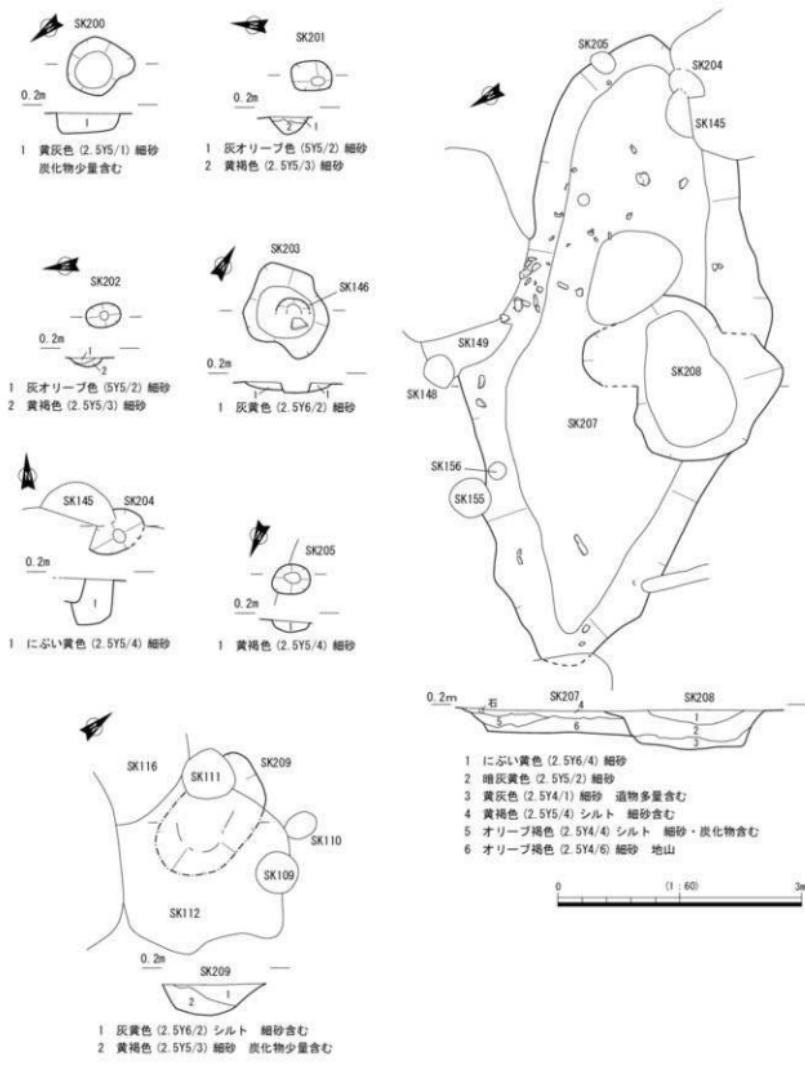
** 内容観察による。

報告書番号	遺物名	最大長 (cm) *	最大幅 (cm) *	最大厚 (cm) *	重量 (g) *	石材 **	造構・部位	備考
3	巖石	2.5	(1.4)	0.5	(3.03)	頁岩	SK207	

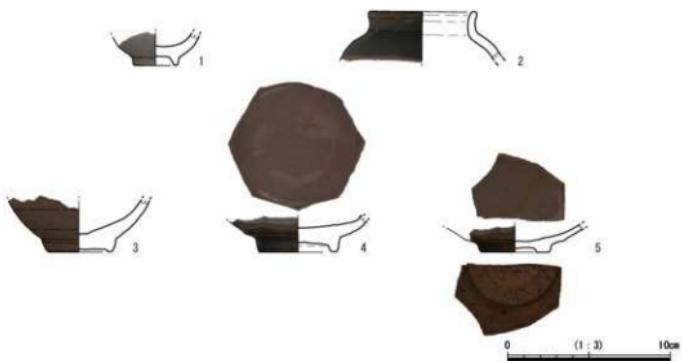
* () は残存部のサイズ、重量を示す。

** 内容観察による。

第138図 SK207出土遺物



第139図 第1遺構面検出遺構 (16)



報告書番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・拂み径(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	給付	装飾技法	鉢・封印・墨書き	胎土色	遺構・層位	備考
1	磁器	小鉢	肥前系	—	2.8	—	ロクロ	透明釉(質付～高台内側<)			灰白色 NS/(白色珠地黒文)	SK208	墨付砂付裏	
2	磁器	壺？	肥前系	(6.6)	—	—	ロクロ	青磁釉(外面)			墨青釉	7.5987.3	SK208	
3	陶器	碗	肥前系	—	3.95	—	ロクロ	灰釉(内面)			に(白)・褐色	5YR7/4	SK208	17世紀前葉
4	陶器	壺	肥前系	—	4.8	—	ロクロ	灰釉(底部脛<)			に(白)・黄褐色	10YR7/2	SK208	見込・墨付砂目、1610～1690年代
5	陶器	壺	肥前系	—	(4.2)	—	ロクロ	灰釉(内面)			に(白)・黄褐色	10YR7.3	SK208	見込・墨付砂目、1610～1690年代

「—」は「不明」を示す。〈 〉内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

第140図 SK208出土遺物



報告書番号	胎質	器種	生産地	口径(cm)	底径・拂み径(cm)	器高(cm)	成形技法	釉薬	給付	装飾技法	鉢・封印・墨書き	胎土色	遺構・層位	備考
1	磁器	小鉢	肥前系	(7.35)	2.8	3.55	ロクロ	透明釉			灰白色 NS/(白色珠地黒文)	SK211	高台内側砂付裏	

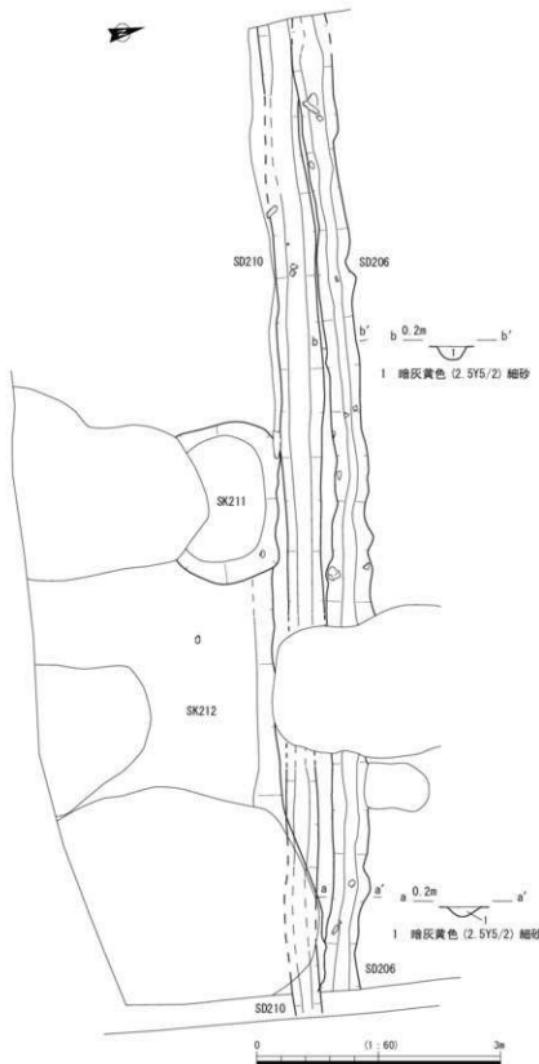
()内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

報告書番号	遺物名	最大長(cm)*	最大幅(cm)*	最大厚(cm)*	重量(g)*	材質**	遺構・層位	備考
2	釘	(4.6)	1.1(頭部)	0.6(底部)	(4.25)	鐵	SK211	骨部断面方形。折れ曲がる。

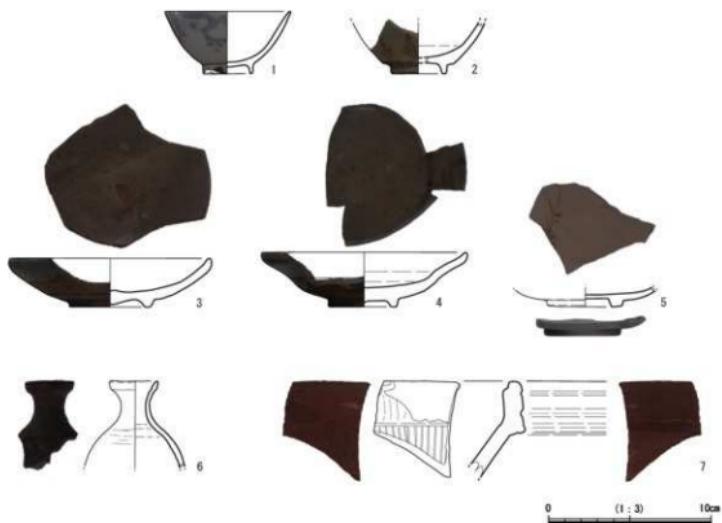
* ()は残存部のサイズを示す。重量は鉛びを含む。

** 向應軸板によると。

第141図 SK211出土遺物



第142図 第1造構面検出構 (17)



器物名	胎質	器種	生産地	口径 (cm)	底径・ 盛り付 (cm)	厚高 (cm)	成形技法	釉薬	紙付	装飾技法	柄・印・ 墨書き	胎土色	造様・層位	備考
1 磁器	粘土	小杯	肥前系	(7.15)	2.0	1.55	ロクロ	透明釉	染付	手描き	灰白色 N8/ (白色透彫り)	SK212	傾反転、蓋付砂付窓。高台 に穿孔?	
2 陶器	硬	碗	肥前系	—	(3.2)	—	ロクロ	灰釉 (底部斜く)	模絵	手描き	灰白色 ST8/I	SK212	小舟系罐。18世紀前半～ 益末	
3 陶器	皿	肥前系	(12.2)	4.9	3.0	ロクロ	灰釉 (底部斜く)			にがい(青)繪色 10YR7/2	SK212	見込勘土目鉢。1594年埴 ～1610年代		
4 陶器	皿	肥前系	(12.5)	4.2	3.35	ロクロ	灰釉 (底部斜く)			灰白色 N8/	SK212	見込勘土目鉢。1594年埴 ～1610年代		
5 陶器	瓦	肥前系	—	4.5	—	ロクロ	灰釉 (底部斜く)	模絵	手描き	灰白色 ST8/1 (白色透彫り)	SK212			
6 陶器	瓶	肥前系	—	—	—	ロクロ				灰白色 2.5YR8.2	SK212	口縁部内面～頸部外面一部 自然施釉。 頸部外面：圓弧へラケズリ		
7 陶器	楕円	横井	唐・ 明石系	—	—	—	ロクロ				赤褐色 10R6.6	SK212	白神工型式 (18世紀後半 例部外面：回転ヘラケズリ	

「—」は、「不明」を示す。
() 内の数字は、残存部から復元した数据を示す。

第143図 SK212出土遺物

面はU字形を呈する。

SK202 (第139図)

B-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK203 (第139図)

B-3・4区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北0.7m、東西0.7m、深さ0.1mである。断面はレンズ形を呈する。

SK204 (第139図)

B-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.4mである。断面はU字形を呈する。

SK205 (第139図)

B-4区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1mである。断面はU字形を呈する。

SK207 (第139図)

B・C-3・4区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径7.8m、短径3.3m、深さ0.3mである。断面は台形を呈する。遺物は土師質土器の皿(第138図1)、円状銅製品(第138図2)、基石(第138図3)が出土した。

SK208 (第139図)

B・C-3区で検出された土坑。平面形は不整形で、南北1.9m、東西2.0m、深さ0.5mである。断面は台形を呈する。遺物は、肥前系磁器の小壺・壺(第140図1・2)、肥前系陶器の碗・皿(第140図3~5)が出土した。3は17世紀前葉、4・5は17世紀代のものである。

SK209 (第139図)

F-2区で検出された土坑。平面形は不整な楕円形で、長径1.1m、短径0.6m、深さ0.3mである。断面はU字形を呈する。

SK211 (第142図)

B-3区で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径2.0m、残存短径1.2mである。断面は台形である。遺物は、肥前系磁器の小壺(第141図1)、鉄釘(第141図2)が出土した。遺物の時期は17世紀後半であるが、遺構検出面から、18世紀後半~19世紀代と判断する。

SK212 (第142図)

A・B-4区で検出された土坑。平面形は不整形と推定され、南北最大値3.0m、東西残存値5.2mである。断面は台形である。遺物は、肥前系陶磁器の小壺・皿(第143図1・3・4)、京・信楽系陶器の碗・皿(第143図2・5)、堺・明石系陶器の擂鉢(第143図7)、備前系陶器の瓶(第143図6)が出土した。2が18世紀前半~幕末、3・4が16世紀末~17世紀初頭、7が18世紀後半~19世紀代のものである。

(脇山佳奈)

6. 包含層出土遺物（第144～157図・第21～26表）

包含層からは、陶磁器・土器・土製品、金属製品、ガラス製品、瓦・石製品、骨製品が出土した。ここでは残存状態が良好で、図化し得たものだけを報告する。陶磁器には、肥前系磁器、肥前系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、堺・明石系陶器、瀬戸・美濃系磁器、大谷焼、関西系磁器、丹波系陶器、萩系陶器がある。構成比は、肥前系磁器（39%）が最も高く、それに肥前系陶器（17%）、京・信楽系陶器（15%）とつづき、そのほかは1割を下回る。そのほか、火鉢・焜爐といった瓦質土器、各種の土師質土器・土製品がある。これらは、おおむね16世紀末～近代にかけてのものである。金属製品には、鉄製品と銅製品があり、鉄製品には飾り金具、釘、鉄砲玉が、銅製品には輪状銅製品、円状銅製品がある。ガラス製品には、化粧瓶がある。瓦には、軒丸瓦、軒桟瓦、軒平瓦／軒桟瓦がある。瓦の再加工品もある。石製品には、碁石、硯、火打石がある。骨製品には、齒ブラシ形骨加工品がある。

(端野晋平)

註

- 根津寿夫氏（徳島市立徳島城博物館）からのご協力を得た。
- 近世徳島城下での水売り商人の存在は、延宝4年（1678）、藩が水売り商人を16人に限定したという記録（『藩署紀聞』徳島県立図書館蔵）から知られる。徳島市に上水道が敷設される大正初期までは、鮎喰川の地下水脈からはずれ、飲料水に恵まれない地域、内町（出来島を除く）・新町・富田・佐古の一部に住む人びとは、毎日、水売り商人から鎌竜水などの眉山の湧水を買っていたという（河野1982）。ただし、こうした水売り商人が常三島地区でも、水を販売していたという記録は見つかっていない。ちなみに、明治31年の徳島県による市内の井戸の水質調査では7割以上、大正8年の徳島市による市内の井戸の水質調査ではほぼ半数が飲料不適とみなされた（団1962；徳島市水道部1966）。

文献

- 河野幸夫, 1982. 徳島・城と町まちの歴史. 聚海書林, 東京.
- 久保和士, 1999. 久保和士遺稿集刊行会編. 動物と人間の考古学. 真陽社, 京都, pp.245-262.
- 团武雄, 1962. 徳島城下と飲料水. ふるさと阿波. 阿波郷土会, 徳島.
- 徳島市水道部, 1966. 徳島市水道 40年史. 徳島市水道部, 徳島.
- 乗岡実, 1999. 近世備前焼の捕鉢. 関西近世考古学研究7, 119-130.
- 乗岡実, 2002. 近世備前焼捕鉢の編年案. 岡山城三之曲輪跡. 岡山市教育委員会, 岡山, pp.190-197.
- 端野晋平, 2015. 発掘調査の概要. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1, 121-143.
- 原祐一・小林照子編, 2012. 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院受変電設備棟地点. 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12. 東京大学埋蔵文化財調査室, 東京.
- 北條芳隆, 2006. 徳島城下町の屋敷境1－常三島地区－. 近世の屋敷境とその周辺. 四国城下町研究会, 板野, pp.9-15.
- 町田章・上原真人編, 1985. 木器集成図録: 古畿古代篇. 奈良国立文化財研究所史料第27冊. 奈良国立文化財研究所, 奈良.
- 森田克行, 1984. 屋瓦. 指津高櫻城: 本丸跡発掘調査報告書. 高櫻市文化財調査報告書第14冊. 高櫻市教育委員会, 大阪, pp.129-142.
- 斎田みゆき, 2013. 寒梅館地点出土の齒ブラシ形骨加工品: 2002年度大学会館（室町殿跡）発掘調査に伴う事例報告. 同志社大学歴史資料館館報16, 54-62.
- 斎田みゆき, 2015. 近世・近代遺跡出土齒ブラシ形骨加工品: 植毛孔に着目した分類試案の提示と時期差の予察. 松藤和人編. 同志社大学考古学シリーズXII. 同志社大学考古学シリーズ刊行会, 京都, pp.741-754.
- 山崎信二, 2008. 近世瓦の研究. 同成社, 東京.



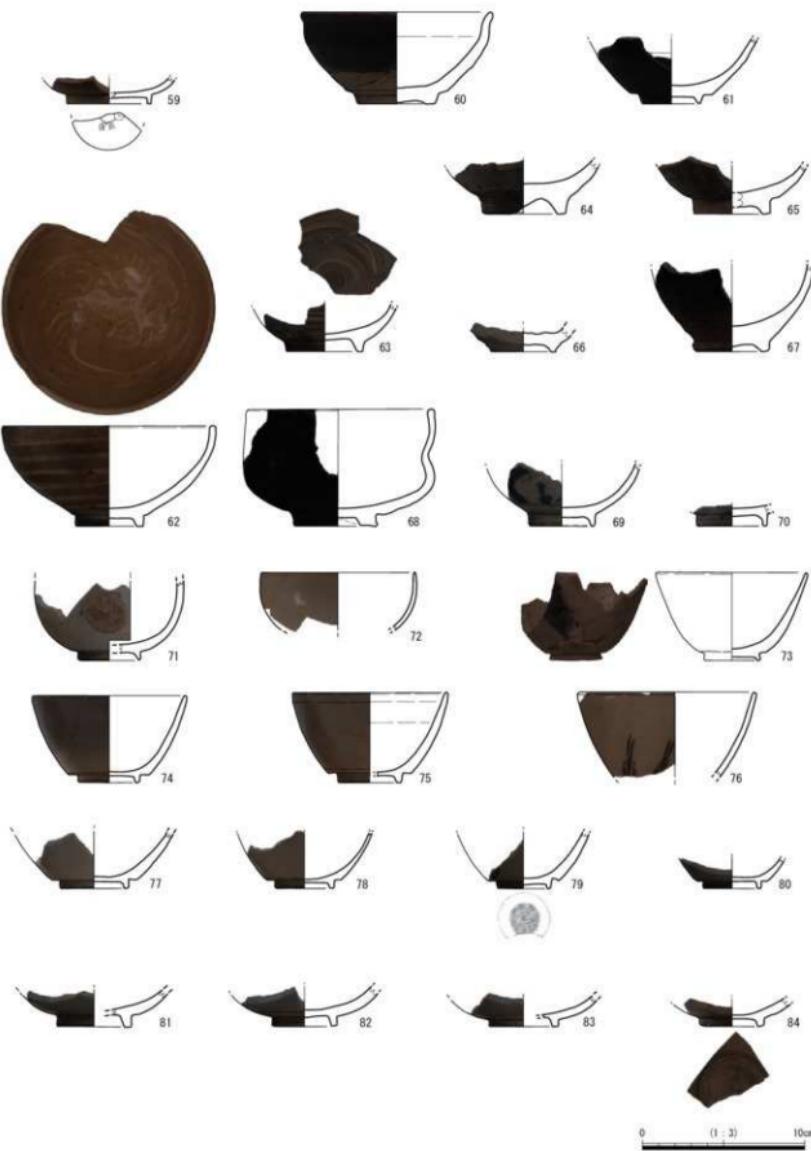
第144図 包含層出土遺物(1)



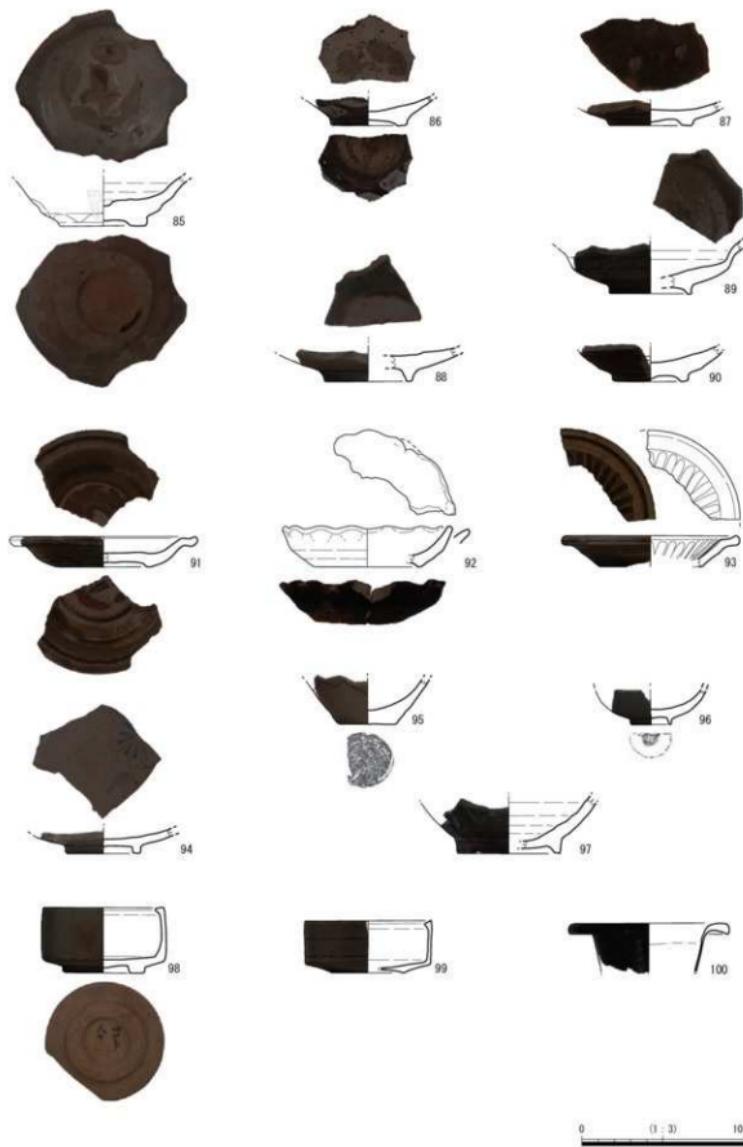
第145図 包含層出土遺物（2）



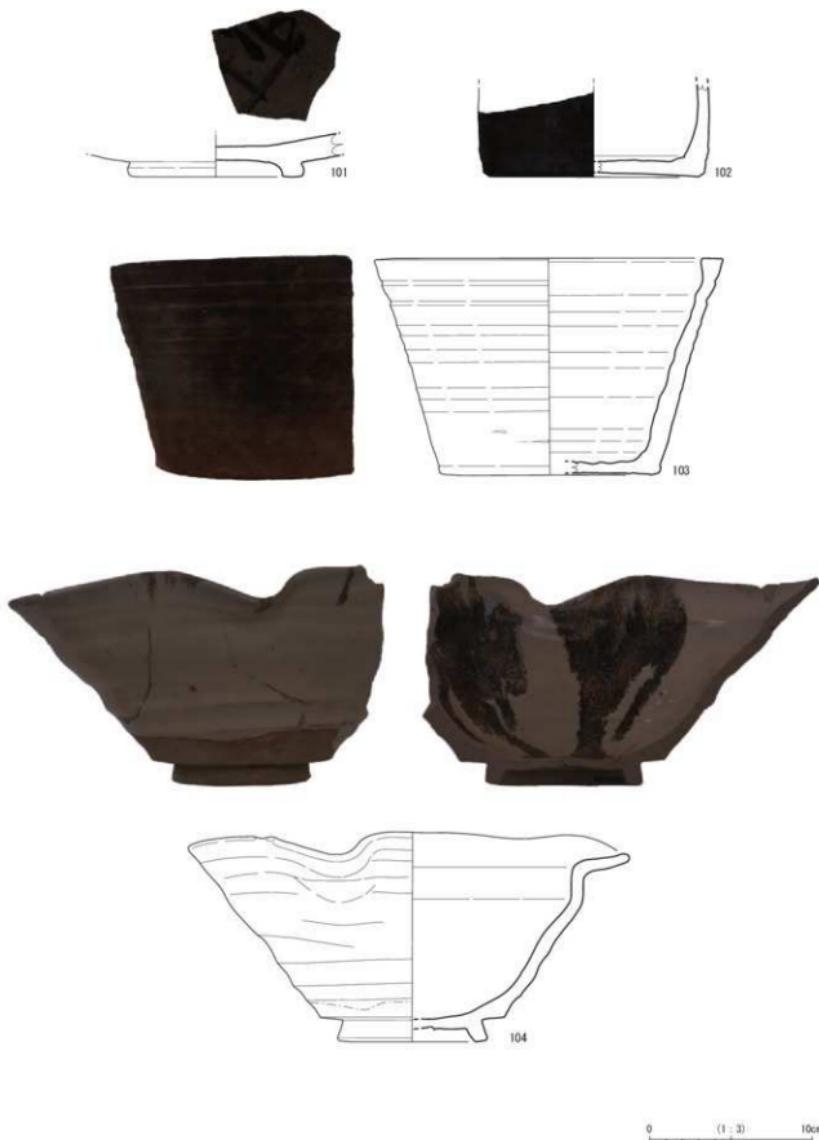
第146図 包含層出土遺物(3)



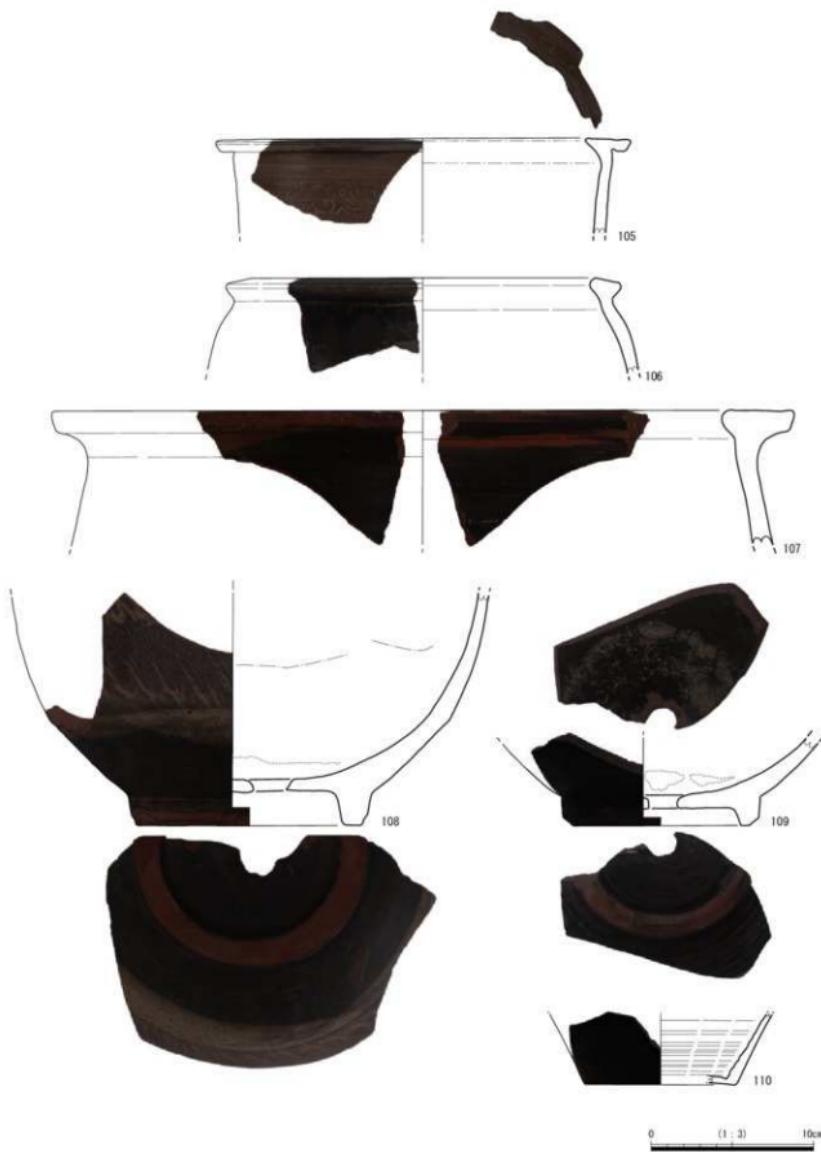
第147図 包含層出土遺物 (4)



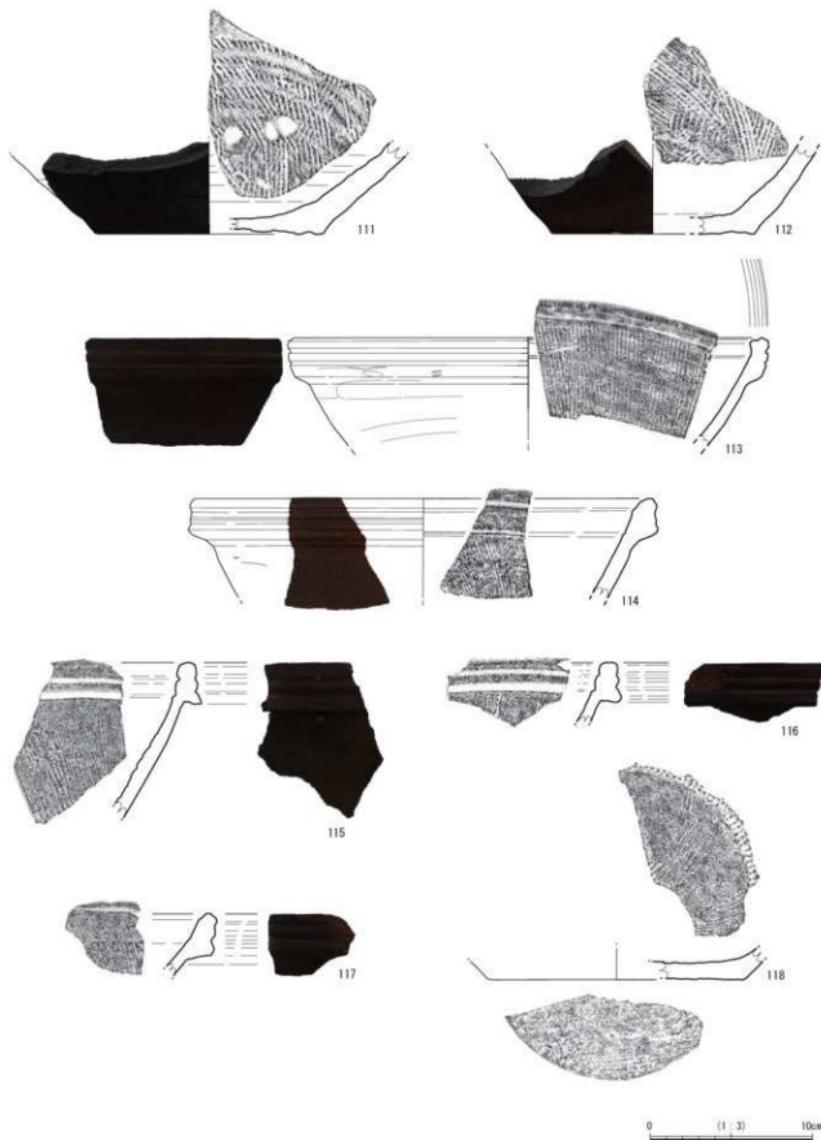
第148図 包含層出土遺物(5)



第149図 包含層出土遺物 (6)



第150図 包含層出土遺物(7)

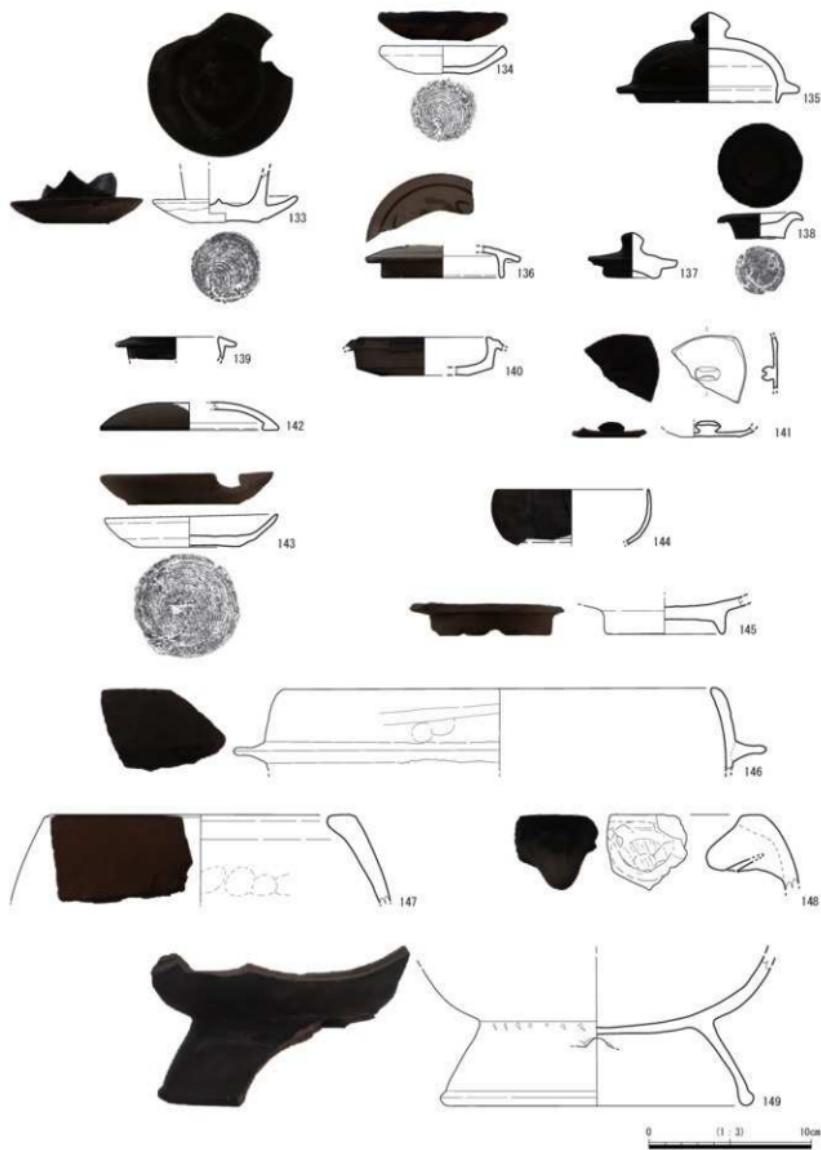


第151図 包含層出土遺物 (8)

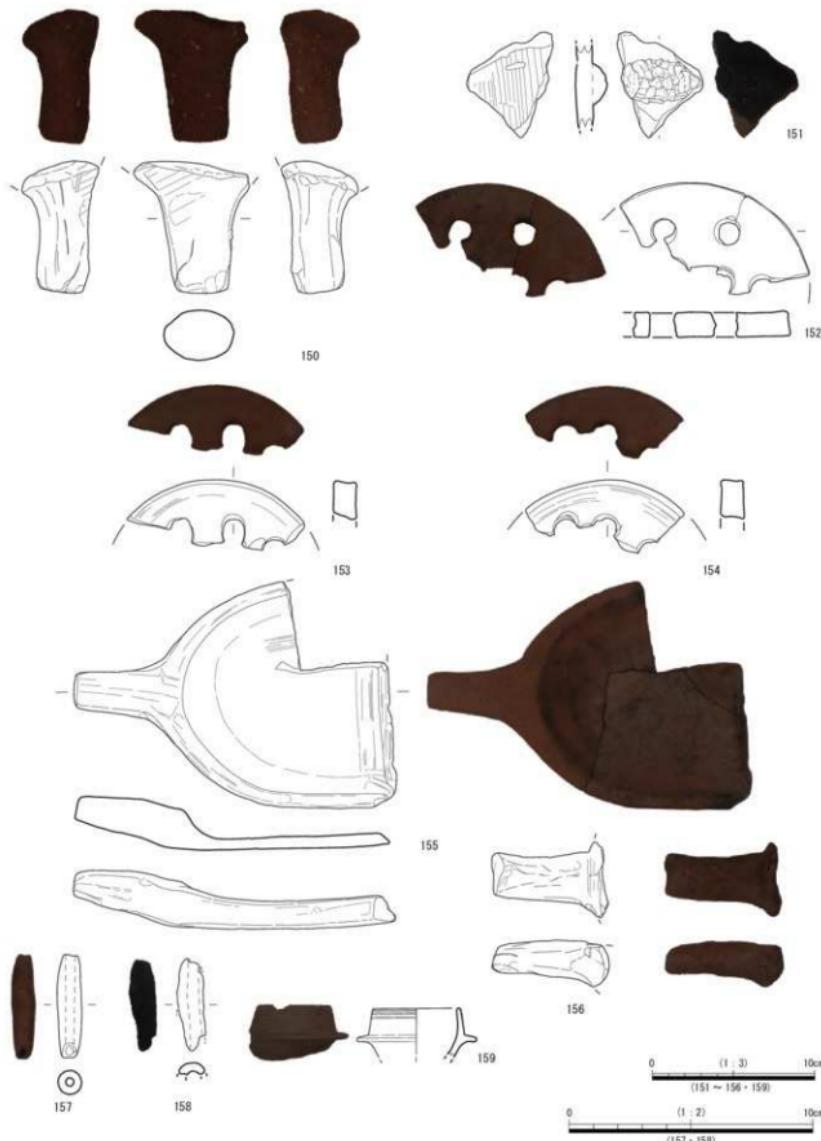


第152図 包含層出土遺物（9）

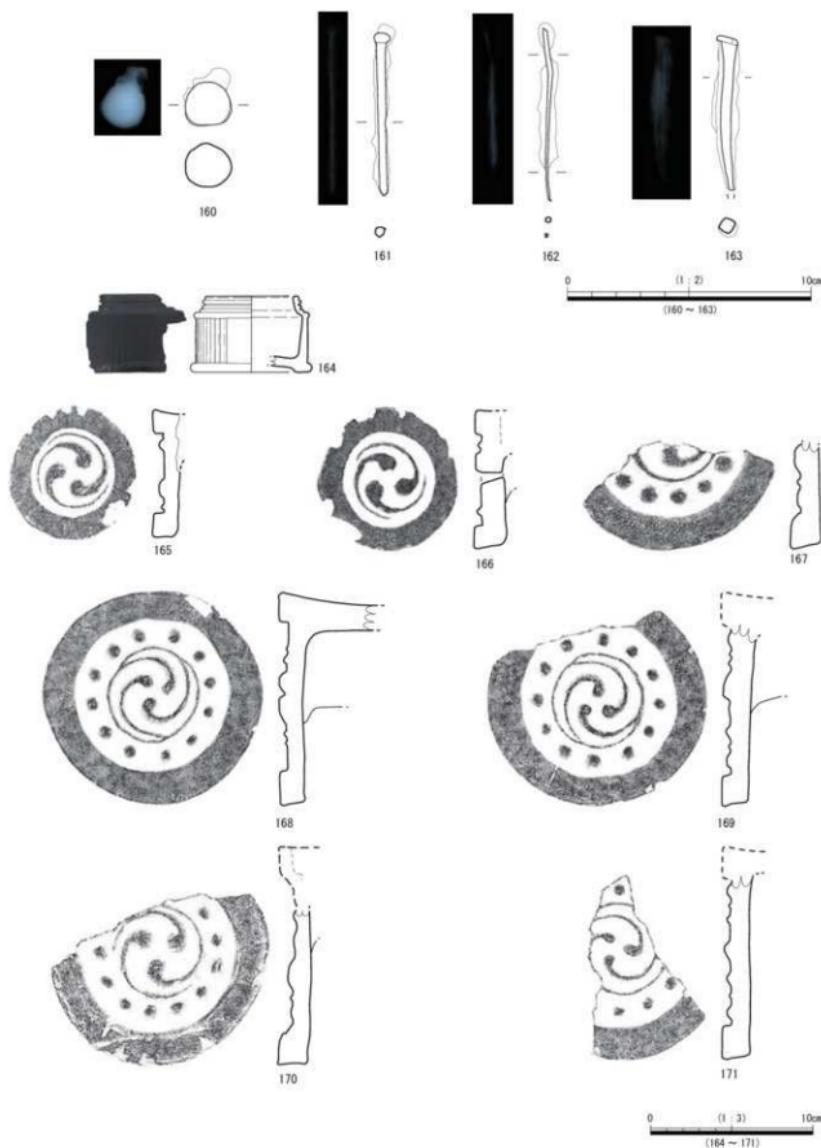
0 (1 : 3) 10cm



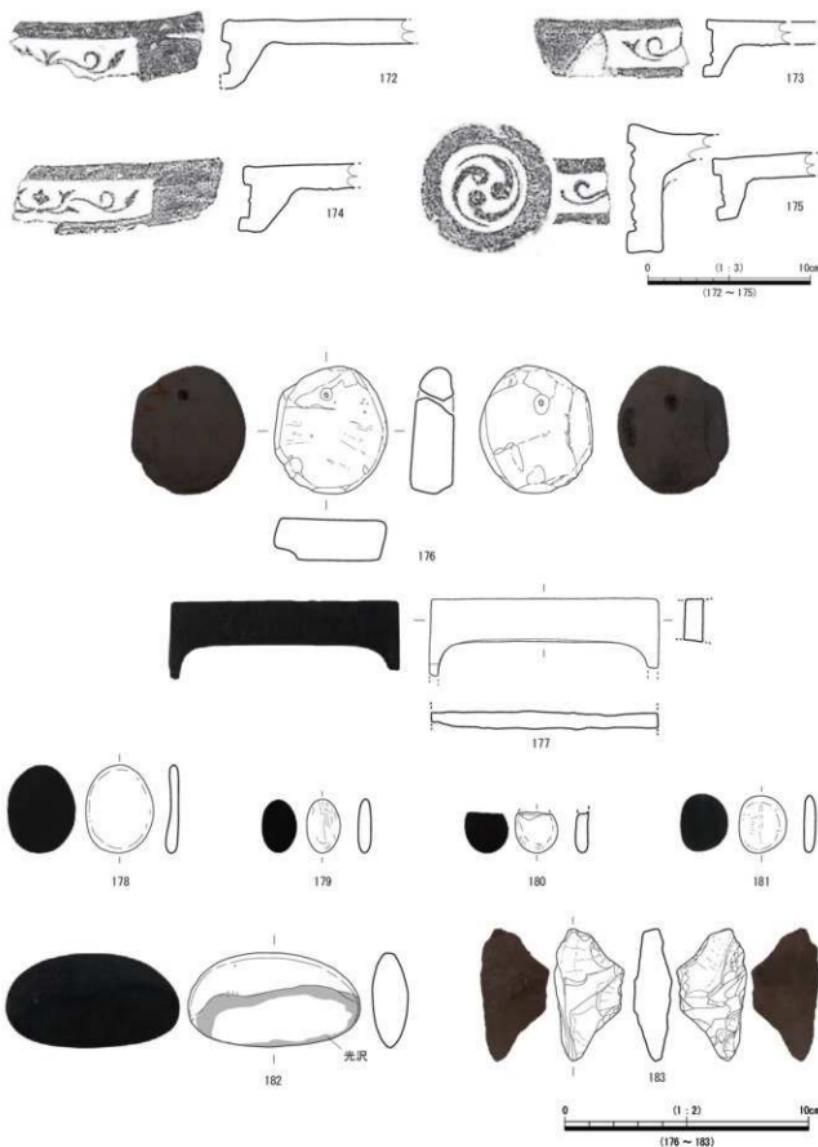
第153図 包含層出土遺物 (10)



第154図 包含層出土遺物(11)



第155図 包含層出土遺物 (12)



第156図 包含層出土遺物 (13)



第157図 包含層出土遺物(14)

第21表 包含層遺物観察表(1)

器物番号	胎質	基理	生産地	口径(cm)	底径・ 横幅(cm)	高さ(cm)	成形技法	輪葉	絞付	装飾技法	鉛・刻印・墨書	施土色・ 含有鉱物	造形・層位	備考
1 磁器	磁	肥前系	(9.9)	4.1	5.05	ロクロ	透明釉 (明緑反色)	染付	手書き	手彫能 (高台内)	淡白色 脈/ (やや赤色強め)	南側溝 壁	くわんかんか、青白地黒口 不織い、1660~1800年代	
2 磁器	磁	肥前系	(8.6)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	コニニャック 印付	—	淡白色 脈/ (反色強め)	南側溝 壁	くわんかんか、燒成不良(外 面緑白薄、済滑色黒い)、 1660年代~19世紀初頭	
3 磁器	磁	肥前系	—	4.0	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱	くわんかんか、高台内薄く擦 れ、1660~1860年代	
4 磁器	磁	肥前系	—	(4.2)	—	ロクロ	青磁釉 (内面緑白薄 内面)	染付	手書き	一重方唇格内 (高台内)	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱、 南西側溝	くわんかんか、青白地黒口、 丸窓配中腹~18世紀末	
5 磁器	磁	肥前系	(8.8)	(3.0)	(5.55)	ロクロ	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱	釋張碗、1710~1810年代	
6 磁器	磁	肥前系	(10.2)	(3.5)	5.2	ロクロ	透明釉	染付	手書き(素書き)	紙あり(高台内)	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱	小広東碗、1780~1820年 代	
7 磁器	磁	肥前系	—	(3.4)	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	南側溝 壁	小広東碗、1760~1820年 代	
8 磁器	磁	肥前系	7.5	3.6	6.25	ロクロ	透明釉	鉢絞	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱、 南西側溝	釋張碗、沈綱(初期外腹) 18世紀半期~1810 年代	
9 磁器	磁	肥前系	—	(4.2)	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	一重方唇格内 (高台内)	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱、 南西側溝	青磁碗、18世紀2四半 期末~19世紀末	
10 磁器	磁	肥前系	11.0	5.8	5.9	ロクロ	透明釉	染付	手書き	「太年型」紙 (高台内)	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱	広東碗、18世紀末	
11 磁器	磁	肥前系	(9.0)	5.1	4.8	ロクロ	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	南側溝 壁	広東碗、1780~1840年代	
12 磁器	磁	肥前系	(9.0)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱、 東側溝	広東碗、1780~1840年代	
13 磁器	磁	肥前系	—	(3.8)	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	横円錐内 (高台内)	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱、 南側溝	青磁碗、1820年 代~明治	
14 磁器	磁	肥前系	(10.6)	—	—	ロクロ	青磁釉 (外面) 透明釉 (内面)	—	—	—	—	搅乱、 東側溝	口紅、1640年代~	
15 磁器	磁	肥前系	—	(4.8)	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	二重方唇格内 (高台内)	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱	1670年代頃~18世紀末	
16 磁器	磁	肥前系	—	3.4	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱、 南西側溝	—	
17 磁器	磁	肥前系	—	3.7	—	ロクロ	透明釉	—	—	—	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱、 南側溝	付付わざに砂付茎	
18 磁器	磁	肥前系	—	3.8	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱	—	
19 磁器	磁	肥前系	—	3.65	—	ロクロ	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	搅乱、 南側溝 壁	輪花	
20 磁器	磁	肥前系	(14.2)	(7.9)	3.25	型打	透明釉	染付	手書き	—	淡白色 脈/ (白色強め)	—	—	

「—」は「不明」を示す。
() 内の数字は、残存部から復元した数値を示す。
含有鉱物は、土器のみ記載。備考欄に記載した年代は、生産地における製作年代を示す。

第22表 包含層遺物観察表(2)

報告書号	地質	埋理	生産地	口径(cm)	底径(高台径)(cm)	高さ(cm)	成形技法	繪画	焼付	装飾技法	銘・刻印・墨書き	胎土色・含有量物	遺構・部位	備考	
21	磁器	皿	肥前系	(12.9)	(底3)	3.15	型打	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	直土	輪花	
22	磁器	皿	肥前系 鹿児島 美濃系?	(12.1)	6.2	2.75	ロクロ	透明釉 (高台擦く)				灰白色 緩/	直土	燒成不良? (輪白萬)	
23	磁器	皿	肥前系	—	(6.6)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 南北側溝		
24	磁器	皿 (小皿)	肥前系	(10.8)	6.3	2.4	型打	透明釉	染付	手描き	「成化年製」 (高台内)	灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	輪花、18世紀中頃~19世 紀前半	
25	磁器	皿 (小皿)	肥前系	(10.0)	(底0)	2.1	型打	透明釉		繡刻(型打)		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	白磁文皿。1855年~ 1860年代	
26	磁器	皿 (小皿)	肥前系	—	3.4	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	南北側溝、 縦溝	初燒伊万里。1610~1650 年代	
27	磁器	皿 (大皿)	肥前系	—	(9.3)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	初燒伊万里。1610~1650 年代	
28	磁器	鉢	肥前系 美濃系	(16.6)	(6.4)	5.65	ロクロ	透明釉	上絵付 (見青・青花・ 金色絵)	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	直土、 調查区分		
29	磁器	鉢	肥前系	(15.8)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	南北側溝、 縦溝		
30	磁器	鉢?	肥前系	—	(13.9)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 東側溝	鉢または蓋物、漆緞	
31	磁器	鉢	肥前系	—	(7.5)	—	ロクロ	透明釉 (透竹加彩)				灰白色 緩/ (白色珠渦)	I・II層	置付砂付壺	
32	磁器	向付?	肥前系	—	5.1	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 東側溝	中付または蓋物、珍人目高 台	
33	磁器	小杯	肥前系	7.6	3.0	4.0	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 南北側溝	くらわんか、焼成不良 (高 台)。1600~1860年代	
34	磁器	小杯	肥前系	(6.6)	(2.8)	2.3	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 南北側溝		
35	磁器	小杯	肥前系 美濃系	(8.4)	(2.7)	2.9	ロクロ	透明釉	上絵付 (見青・青花・ 金色絵)	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	南北側溝、 縦溝		
36	磁器	小杯	肥前系	(5.5)	—	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 南北側溝	半球形	
37	磁器	小杯	肥前系	—	(2.1)	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	半球形、蓋付砂付壺	
38	磁器	小杯	肥前系	(6.9)	2.5	3.5	ロクロ	透明釉	上絵付 (見青・青花・ 金色絵)	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	南北側溝、 縦溝	薄手环杯。1780~1820年 代	
39	磁器	小杯	肥前系	6.7	2.5	3.05	ロクロ	透明釉	上絵付 (内面 黄色絵)	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	南北側溝、 縦溝	薄手环杯。28と同じ式様。 1780~1820年代	
40	磁器	小杯	肥前系	—	(2.55)	—	ロクロ	透明釉				灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 東側溝		
41	磁器	紅皿	肥前系	(5.8)	(1.7)	2.5	ロクロ	透明釉 (赤色絵)	上絵付 (赤色絵)	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	南北側溝、 縦溝		
42	磁器	紅皿	肥前系	(5.0)	—	—	ロクロ	透明釉 (赤色絵)	上絵付 (赤色絵)	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	直土		
43	磁器	紅皿	肥前系	—	1.5	—	ロクロ	透明釉 (赤色絵)	上絵付 (赤色絵)	手描き		灰白色 緩/	直土		
44	磁器	紅皿	肥前系 美濃系	(6.7)	4.5	6.1	ロクロ	透明釉 (底部擦く)	上絵付 (赤色絵)	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝		
45	磁器	香炉	肥前系	(6.1)	(2.5)	4.85	ロクロ	青磁胎 (鏡上部内面~ 外周、手付~高 台、見込)				灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 東側溝	貴重物付壺	
46	磁器	香炉	肥前系	—	(7.4)	—	ロクロ	青磁胎 (外面)				灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	蛇ノ目百合、更迭付壺	
47	磁器	瓶	肥前系	—	(6.0)	—	ロクロ	青磁胎 (外面)				灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	高台付壺	
48	磁器	瓶	肥前系	—	6.5	—	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 2.5YB/1	直土	初期伊万里。高台内側に卯 付。1610~1650年代	
49	磁器	酒利	肥前系	(2.0)	3.7	8.7	ロクロ	透明釉 (明治 後期) (青磁胎)	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	高台内側付壺	
50	磁器	酒利	肥前系	—	(4.6)	—	ロクロ	透明釉 (外面)	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	豊作付壺	
51	磁器	蓋物	肥前系	(16.8)	(13.0)	(9.8)	ロクロ	透明釉 (口縁 内部擦く)	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 東側溝		
52	磁器	須彌?	肥前系	—	(6.0)	—	梨形	透明釉 (底部外側擦く)				灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	底部内面輪郭下に浅型押成形 時のビオラ工法	
53	磁器	給食器	肥前系	—	2.6	2.2	2.2	型打	透明釉	繡刻 (型打)		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	近代~	
54	磁器	破壊	肥前系	9.9	3.6	3.8	ロクロ	青磁胎 (内面・ 高台)	染付	手描き	二重方角柱 (高台内)	灰白色 10YB/1	縦溝		
55	磁器	破壊	肥前系	(10.2)	(4.2)	2.9	ロクロ	透明釉	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝	高台、1820~1870年代	
56	磁器	波紋物	肥前系	9.3	3.35	3.35	ロクロ	透明胎 (口縁外側擦く)	染付	手描き		灰白色 緩/	縦溝	波紋物色悪い、合わせ目に 縫合	
57	磁器	波紋物	肥前系	—	—	—	ロクロ	透明胎 (口縁外側擦く)	染付	手描き		灰白色 緩/ (白色珠渦)	縦溝、 東側溝	合わせ目アルミナセラム	
58	磁器	碗?	肥前系	—	2.35	1.4	9.65	ロクロ?	透明胎 (上部 穿孔内)			灰白色 2.5YB/1	縦溝、 東側溝	水注の紋様? 中央部に直線 束縛	

註は第1表に同じ。

第23表 包含層遺物観察表(3)

報告書番号	胎質	基準	生産地	口径(cm)	底径・高さ(cm)	器高(cm)	成形技法	輪裏	紋付	装飾技法	折・刻印・墨書き	胎土色・含有鉱物	造様・部位	備考
59	陶器	磁	肥前系	—	(5.2)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)			刻印・円刻(高台内)	灰白色 2.5YB/2	墨土、 調製壁型	京焼風陶器。17世紀後半 ~18世紀前半
60	陶器	磁	湖南・ 美濃系	(11.7)	4.8	5.6	ロクロ	灰輪(底部削除) 鉄輪(底部削除)				灰白色 2.5YB/1	墨土/ 1・1層	天目焼。17世紀初期
61	陶器	磁	肥前系	—	3.6	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				青褐色 10R5/3	1・1層	天目焼。1594年頃~1690 年代
62	陶器	磁	湖南・ 美濃系	13.0	4.15	6.15	ロクロ	灰輪(底部削除)	白化粧土	刷毛目		灰白色 10R8/2	粗乱	1760年代~
63	陶器	磁	肥前系	—	4.7	—	ロクロ	灰輪	白化粧土	刷毛目		灰色 5Y6/1	墨土	17世紀後半~
64	陶器	磁	肥前系	—	(5.1)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				鐵灰色 5YR6/1	1・1層	外腹被熱。17世紀前葉
65	陶器	磁	肥前系	—	(4.7)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				淡黃色 2.5YB/4	1・1層	17世紀前葉
66	陶器	磁	肥前系	—	(4.0)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 7.5YB/1	粗乱、 家側溝	17世紀前葉
67	陶器	磁	肥前系	—	4.4	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 2.5YB/1	1・1層	
68	陶器	磁	湖南・ 美濃系	(11.3)	5.0	7.2	ロクロ	鋸歯輪(底部削除) 高台(底なし) 真石輪(底なし) (鋸部外削)				灰白色 5Y7/1	粗乱、 南西側溝	豊作玉焼。蛇口高台、鋸 部外削押。16世紀後半~
69	陶器	磁	湖南・ 美濃系	—	(4.0)	—	ロクロ	鋸歯輪(底部削除) 高台(底なし) (鋸部外削)	染付	手描き		灰白色 10R8/1	粗乱	太白手、 蠟付寸付。18 世紀後半~19世紀前葉
70	陶器	磁	湖南・ 美濃系	—	(4.2)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)	鉄輪	手描き		青褐色 5Y6/1 (白色迷強)	粗乱、 南西側溝	
71	陶器	磁	京・ 信楽系	—	(3.6)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)	上絞付(底なし) 黑色(底なし) 銀質性	手描き		灰白色 2.5YB/2 (白色迷強)	粗乱	
72	陶器	磁	京・ 信楽系	(9.5)	—	—	ロクロ	灰輪				灰白色 2.5YB/1	兩側溝、 盤	半球形
73	陶器	磁	京・ 信楽系	9.2	3.3	5.4	ロクロ	灰輪(底部削除)	銀鉢	手描き		灰白色 2.5YB/2	粗乱	小杉茶碗、18世紀前半~ 高台
74	陶器	磁	京・ 信楽系	(8.8)	(3.6)	4.9	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 10R8/2	粗乱	小杉茶碗、18世紀前半~ 高台
75	陶器	磁	京・ 信楽系	(9.1)	(3.6)	5.1	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 2.5YB/2	粗乱	小杉茶碗、18世紀前半~ 高台
76	陶器	磁	京・ 信楽系	(10.9)	—	—	ロクロ	灰輪	下絞付(銀輪・内削)	手描き		灰白色 2.5YB/1 (白色迷強)	兩側溝、 盤	小杉茶碗、18世紀前半~ 高台
77	陶器	磁	京・ 信楽系	—	3.9	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 2.5YB/1	粗乱、 南西側溝	小杉茶碗、18世紀前半~ 高台
78	陶器	磁	京・ 信楽系	—	3.5	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 2.5YB/1	粗乱	小杉茶碗、18世紀前半~ 高台
79	陶器	磁	京・ 信楽系	—	3.2	—	ロクロ	灰輪(底部削除)	銀鉢	手描き	内削(高台内)	灰白色 7.5YB/1	粗乱、 南西側溝	小杉茶碗、18世紀前半~ 高台
80	陶器	磁	京・ 信楽系	—	(3.5)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 脱	兩側溝、 盤	小杉茶碗、18世紀前半~ 高台
81	陶器	磁	京・ 信楽系	—	(4.5)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 7.5YB/1	粗乱、 家側溝	見込円錐ビン底
82	陶器	磁	京・ 信楽系	—	(4.0)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 2.5YB/1 (白色迷強)	墨土	
83	陶器	磁	京・ 信楽系	—	(4.0)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 5Y6/2 (白色迷強)	粗乱、 南西側溝	
84	陶器	磁	京・ 信楽系	—	(3.9)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)			墨書きあり (高台内)	灰白色 2.5YB/2	1・1層	
85	陶器	磁	肥前系	—	5.0	—	ロクロ	灰輪(底部削除)	銀鉢?	手描き		にぶい褐色 5YR7/4	粗乱、 南西側溝	更込跡目(4か所用)、 便付 の跡。手描きの跡。内削 の跡。墨書きの跡が見 込まれる。1610~1690年代
86	陶器	磁	肥前系	—	(4.2)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				にぶい褐色 5YR6/4	粗乱	更込跡目、高台(銀輪) の跡。墨書きの跡。 1610~1690年代
87	陶器	磁	肥前系	—	5.05	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				にぶい褐色 5YR7/3	1・1層	1594~ 1610年代
88	陶器	磁	肥前系	—	(5.0)	—	ロクロ	銀鉢輪(内削) 灰輪(外削)				灰白色 5Y7/1	粗乱、 南西側溝	銀鉢輪目、墨書き・日輪刻 の跡。16世紀後半~17世紀初頭
89	陶器	磁	肥前系	—	(5.0)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)	鐵輪?			灰白色 7.5Y/1	墨土	17世紀
90	陶器	磁	肥前系	—	(4.7)	—	ロクロ	灰輪(内削)				灰白色 2.5YB/2	1・1層	
91	陶器	磁	湖南・ 美濃系	(11.3)	(5.6)	1.85	ロクロ	灰輪(高台内削)				灰白色 2.5YB/2	1・1層	1594~ 1610年代
92	陶器	磁	湖南・ 美濃系	(10.8)	(5.5)	2.5	ロクロ	鐵輪(鉄輪)				灰白色 2.5YB/1	1・1層	鐵輪(鉄輪)、墨書き・日輪刻 の跡。16世紀末~17世紀初頭
93	陶器	磁	湖南・ 美濃系	(10.5)	—	—	ロクロ	灰輪	ソゾ(丸ノエ 仕工風)			灰白色 2.5YB/1	墨土	16世紀末~17世紀初頭
94	陶器	磁	京・ 信楽系	—	4.15	—	ロクロ	灰輪(底部削除)	下絞付(銀輪・内削)	手描き		青褐色 5Y6/1 (白色迷強)	粗乱	
95	陶器	小坪	肥前系	—	3.4	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				灰白色 5Y6/1	粗乱、 南西側溝	
96	陶器	小坪	京・ 信楽系	—	(2.5)	—	ロクロ	灰輪(底部削除)				内削(高台内)	灰白色 2.5YB/1 (白色迷強)	鐵輪(右側輪部切り取 り)、1580年代~1594年頃
97	陶器	瓶	—	—	(6.3)	—	ロクロ	銀鉢?				灰色 5Y5/5	1・1層	16世紀末~17世紀初頭
98	陶器	壺	京・ 信楽系	(7.25)	5.1	4.0	ロクロ	灰輪(底部削除・ 墨書き)			墨書きあり (高台内)	灰白色 2.5YB/2	粗乱	

註は第21表に同じ。

第24表 包含層遺物観察表(4)

番号	物質	器種	生産地	口径(cm)	底面・ 溝み掛け (cm)	器高 (cm)	成形技法	輪裏	絞付	装飾技法	施・印・墨書き	釉色・ 含有物	造様・層位	備考
99	陶器	合子	京・ 奈良系	(7.8)	(4.5)	3.2	ロクロ	灰輪(蓋受け・ 底部難け) 鉄輪(裏輪)(外輪)				灰白色 2.5YR/1	素土	
100	陶器	植木鉢	湖戸・ 美濃系	(9.4)	—	—	ロクロ					灰白色 2.5YR/1	表土	
101	陶器	鉢	肥前系	—	(10.6)	—	ロクロ	灰輪(内面)	鉄輪	手描き		にぶい黄褐色 10YR/2	SG401 鏡面複数 トレシテ	鹿屋津、17世紀
102	陶器	鉢?	肥前系	—	(12.8)	—	ロクロ					赤褐色 2.5YR/1	南側溝・ 壁	壁土(外側)、火煙(内側)
103	陶器	鉢	備前系	(21.4)	(13.7)	13.4	ロクロ					明褐色 2.5YR/6	粗乱	火煙(底部内側)、外・内 丸足付
104	陶器	鉢	萩系	(25.4)	(8.5)	12.0	ロクロ	灰輪(外側) 鉄輪(内側)				灰白色 2.5YR/1 (灰色珠溝L)	南側溝・ 壁	輪花(口縁部強打で押さ えてヒダ状にする)、湯呑 高台、17世紀前葉~
105	陶器	壺	肥前系	(23.9)	—	—	ロクロ	灰輪(外側) 鉄輪(内側)	白化粧土	三島手(日花・ 絞り)		灰白色 7.5YR/2	南側溝・ 壁	17世紀前半~
106	陶器	壺	丹波系	(22.7)	—	—	ロクロ	鉄輪(口縁部 外輪・内面) 鉄輪(リーフ 文)強打(銀 部分内面)				灰白色 N7/	南側溝・ 壁	16世紀末~17世紀中頃
107	陶器	壺	大谷?	(42.8)	—	—	ロクロ	鉄輪(外側) 内面強打(銀毛 打)				褐色 2.5YR/6	粗乱・ 南西側溝	19世紀
108	陶器	壺	肥前系	—	(13.0)	—	ロクロ	灰輪(上半) 鉄輪(下半) 鉄輪(下半・ 周毛打)	白化粧土	周毛目		にぶい褐色 2.5YR/3	粗乱・ 南西側溝	底部内面砂付舟。底部底 厚浮舟・植木鉢に転用。蓋 は鉄輪(内面)で強打され けられ。思われる強打のよう な強打跡の(ぼひき)が所 みられる。17世紀後半~
109	陶器	壺	肥前系	—	(10.2)	—	ロクロ	鉄輪(蓋受け難 く、周毛打)				にぶい褐色 3YR/3	粗乱・ 南西側溝	残存土壁上部周毛目。底 部底厚浮舟。17世紀後半 丸足・植木鉢に転用
110	陶器	壺?	—	—	(9.3)	—	ロクロ	鉄輪(外側)				灰白色 N7/ (灰色珠溝L)	素土・ 調査区壁	
111	陶器	壺	備前系	—	(14.2)	—	ロクロ					灰色 N7/ 灰色 N6/(芯部)	SG401 鏡面複数 トレシテ	東国近世 Ic期(17世紀初) 内面強打(鉄輪)
112	陶器	壺	備前系	—	(12.5)	—	ロクロ					灰白色 10Y/2	素土	東国近世 Ic期(17世紀初) 鉄輪外表面・鉄輪(芯部)のナダ
113	陶器	壺	早・ 明石系	(28.9)	—	—	ロクロ					赤褐色 10YR/3 5YR/1 (芯部)	粗乱・ 南西側溝	ストリオ 10条/赤褐色、白神 10条/赤褐色、白神 5YR/1 周毛打(内面) 周毛打(外表面) 周毛打(内面)ナダ
114	陶器	壺	早・ 明石系	(26.3)	—	—	ロクロ					にぶい褐色 2.5YR/4	素土	白神 10条(18世紀後半 周毛打) 周毛打(外表面) 周毛打(内面)ナダ
115	陶器	壺	早・ 明石系	—	—	—	ロクロ					にぶい褐色 7.5YR/3	粗乱	白神 10条(18世紀後半 周毛打)
116	陶器	壺	早・ 明石系	—	—	—	ロクロ					赤色 10YR/6	粗乱	白神 10条(18世紀後半 周毛打)
117	陶器	壺	早・ 明石系	—	—	—	ロクロ					赤色 10YR/6	粗乱	白神 10条(18世紀後半 周毛打)
118	陶器	壺	早・ 明石系	—	(15.8)	—	ロクロ					明褐色 2.5YR/6	粗乱・ 東側溝	土壌(脚部)、底込式 放射状(9条、単位) 底込式放射状(9条、単位) 底込式放射状(9条、単位) 底込式放射状(9条、単位)
119	陶器	片口	肥前系	(16.6)	8.2	9.6	ロクロ	灰輪(蓋受け・ 底部内側)				褐色 2.5YR/6	粗乱	底込不良?(難白面)
120	陶器	土瓶?	—	(9.7)	—	—	ロクロ	底面・外 口縁部強打・ 内面強打由器より 強打(内面周 縁部強打下)				にぶい黄褐色 10YR/2	粗乱	
121	陶器	水注	—	—	(9.5)	—	ロクロ	鉄輪(蓋受け 外面)				灰白色 7.5Y/1	粗乱・ 東側溝	底部右回転糸切り出し
122	陶器	鍋	—	(19.7)	—	—	ロクロ	鉄輪(鉄輪)				灰白色 N8/	粗乱・ 東側溝	
123	陶器	鍋	—	(13.5)	—	—	ロクロ	貼付(把手)				灰白色 2.5Y/1	粗乱	
124	陶器	鍋	—	(15.35)	—	—	ロクロ	鉄輪(鉄輪) 貼付(足)				灰白色 9Y/1	素土	助輪部にスス付茎
125	陶器	鍋	—	—	(3.0)	—	ロクロ	鉄輪(鉄輪) 貼付(足)				赤褐色 2.5Y/2 (灰色珠溝L)	粗乱	土(内面)、火煙(外面)、 火煙(内面)
126	陶器	灯明皿	肥前系	8.1	3.05	1.4	ロクロ					赤褐色 10YR/4	粗乱	土(内面)、火煙(外面)、 火煙(内面)
127	陶器	灯明皿	備前系	7.8	1.4	1.4	ロクロ					赤褐色 10YR/4	粗乱	土(内面)、火煙(外面)、 火煙(内面)
128	陶器	灯明皿	備前系	(8.2)	(3.0)	1.6	ロクロ					赤褐色 10YR/6	粗乱・ 南西側溝	土(内面)、火煙(外面)
129	陶器	灯明皿	京・ 奈良系	(13.2)	(5.5)	2.6	ロクロ	灰輪(内面) (仕切り部 底難)				灰白色 N8/	粗乱・ 南西側溝	土(内面)、仕切りに口 縁部強打(9条)、底部右 回転糸切り出し
130	陶器	灯明皿	備前系	7.6	3.2	1.35	ロクロ	灰輪(内面) (仕切り)				赤褐色 10YR/4	粗乱	土(内面)、口縁部外側

図は第21表に同じ。

第25表 包含層遺物観察表(5)

組合番号	胎質	種類	生産地	口径(cm)	底面・縁面・側面の深さ(cm)	器高(cm)	成形技法	輪蓋	縁付	装飾技法	鉛・刻印・墨書	胎土色・含有物質	造構・部位	備考
121	陶器	灯明 受皿	鹿前系	7.6	3.6	1.2	ロクロ 黏付 (仕切り)					黒色 2.5YR6/6	焼粘・ 東側溝	鹿前系(内面)。仕切りに亘 る斜溝2か所残存。灯芯油滴
122	陶器	灯明 受皿	鹿前系	7.7	4.6	0.8	ロクロ 黏付 (仕切り)					赤褐色 10R4/3	焼粘	李門(全周)。仕切りに亘 る斜溝2か所残存。灯芯油滴
123	陶器	灯明 受皿	肥前系	—	4.3	—	ロクロ	灰輪(受皿外 面側)				黑色 N6/ 灰褐色 7.5YR4/2	焼粘	受皿底部右回転仕切り離し
124	陶器	灯明 受皿	大谷	7.4	3.4	1.7	ロクロ	铁輪(内面)				黒色 2.5YR6/8	焼粘・ 東側溝	即付灯明受皿。鹿前右回転 仕切り離し。19世紀
125	陶器	盒蓋	—	8.55	2.4	5.5	ロクロ 縫付(縫み)	灰輪(外面)				灰黄色 2.5Y6/2	焼粘	合せ目に重ね焼き痕(複 数枚)
126	陶器	土瓶蓋	—	(7.5)	—	—	ロクロ	透明輪 (外面白色化 土器布の?)	下輪付 (鐵輪・ 銀輪)	手書き		灰白色 2.5Y7/1	焼粘	
127	陶器	水注置	肥前系	3.55	1.35	2.8	ロクロ 縫付(縫み)	铁輪(上面)				灰色 N6/	焼粘・ 東側溝	
128	陶器	水注置	大谷	3.7	3.0	1.6	ロクロ	铁輪(上面)				灰赤色 2.5YR4/2	焼粘	底部右回転仕切り離し。19 世紀
129	陶器	蓋	大谷	(5.4)	—	—	ロクロ	铁輪(上面)				灰赤色 7.5R5/2	焼粘・ 南西側溝	土瓶または水注。洋世紀
140	陶器	蓋	—	(7.2)	(5.1)	2.15	ロクロ	铁輪(上面)				灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2 (外側)	燒粘・ 南側溝・ 壁	土瓶または水注
141	陶器	蓋	—	—	(3.65)	—	ロクロ 縫付(縫み)	铁輪(鉢輪) (上面)				灰褐色 5YR6/4	1・1層	土瓶または水注
142	陶器	瓶蓋	—	(11.0)	—	—	ロクロ	灰輪(外面)				灰褐色 10YR7/3	素土	
143	土質質工部	皿	—	10.6	6.4	2.05	ロクロ					灰白色 10YR8/2 灰岩・長石・黑色 粘土質骨材(極小、 少量)	素土	外側・底部右回転仕切り離 し。日付無(?)。即付
144	土質質工部	破片	土器	—	9.4	—	—	ロクロ				黑色 5Y2/1 灰岩・金雲母(極 少、少量)	不明	焼粘。全面スス付裏
145	土質質工部	火入?	—	—	6.6	—	ロクロ	透明輪(外面)				焼粘・ 南西側溝	跡剥離層(高台版・萬合 院付)付。内面 スス付裏	
146	土質質工部	羽釜	—	(24.9)	—	—	型成形 粘付(鋼輪)					灰褐色 5YR6/4 長石・金雲母(極 少、少量)	焼粘	鋼輪下面スス付裏 外側・ナデ、ユビオサエ 内面・ナデ
147	土質質工部	火鉢・ 爐炉	—	(18.5)	—	—	ロクロ					焼粘・ 南西側溝	焼粘。残部下端に穿孔1 か所。即付輪上部スス付裏 外側・ナデ、即付ナデ 内面・ナデ	
148	土質質工部	火鉢・ 爐炉	—	—	—	—	ロクロ (角状突起)					灰褐色 5YR6/4 長石・金雲母・黑 色粘土(極少、少量)	素土、 素土質 外側・ナデ、 内面・ナデ、ユビオサエ 内面・ナデ	外側・ 内面スス付裏 外側・ナデ、ユビオサエ 内面・ナデ
149	瓦質工部	火鉢・ 爐炉	—	—	(18.6)	—	ロクロ					灰褐色 5YR8/2 灰岩・金雲母(極 少、少量)	素土	高台に穿孔1か所残存。工 作痕。丸吹(崩壊)。即 付ナデ・内面・回転ナデ
150	土質質工部	火鉢・ 爐炉?	—	—	—	—	型成形?					焼粘・ 5YR6/6 長石・石英・赤色 粘土(極少、中 量に多く)	素土	板ナデ?
151	瓦質工部	火鉢・ 爐炉	—	—	—	—	板作り 型成形・ 粘付(持手)					焼粘・ 5YR6/4 長石・金雲母・黑 色粘土(極少、少 量)	焼粘	内面・板ハケ
152	土質質工部	さな	—	(15.1)	(14.9)	1.5	型成形 模状工具に よる穿孔					焼粘・ 5YR6/4 長石・石英・金雲 母・黑色粘土(極 少)	焼粘・ 東側溝	上面・侧面スス付裏
153	土質質工部	さな	—	(13.3)	(12.8)	1.3	型成形 模状工具に よる穿孔					焼粘・ 5YR7/4 長石・石英・金雲 母・黑色粘土(極 少)	焼粘	154と同一個体?
154	土質質工部	さな	—	—	—	1.35	型成形 模状工具に よる穿孔					焼粘・ 5YR7/4 長石・石英・金雲 母・黑色粘土(極 少)	焼粘	153と同一個体?
155	土質質工部	十輪	—	長さ 19.4	幅 13.9	3.6	板作り					焼粘・ 5YR7/4 長石・金雲母(極 少、少量)	焼粘	底部外、内面スス付裏 外、内面・ナデ
156	土質質工部	十輪 (柄)	—	—	—	—	—					焼粘・ 5YR7/4 長石・金雲母(極 少、少量)	焼粘・ 東側溝	
157	土質質工部	管状 工具	—	—	—	—	—	黏土巻付け				焼粘・ 5YR7/4 長石・金雲母(極 少、少量)	素土	
158	土質質工部	管状 工具	—	—	—	—	—	黏土巻付け				焼粘色 10YR4/1 長石・金雲母(極 少、少量)	素土	全面スス付裏
159	土質質工部	ミニ チニア・ 糞窓	—	(5.2)	—	—	ロクロ					灰白色 10YR8/2 銀色・長石・金 雲母(極少、少量)	南側溝 ・壁	色彩強跡? (口縁部外 ・内面全面)。沈緑

註は第21表に同じ。

第26表 包含層遺物観察表(6)

報告書番号	遺物名	最大長(cm) *	最大幅(cm) *	最大厚(cm) *	重量(g) *	材質**	造様・部位	備考
160	鉄頭玉	1.9	1.8	—	9.39	鉄	1・Ⅲ層	
161	釘	6.7	0.7(頭部)	0.5(身部)	4.97	鉄	表土	身部断面多角形。
162	釘?	7.1	—	0.2(身部)	4.57	鉄	表土	頭部欠損?身部断面多角形。
163	釘	(6.3)	0.9(頭部)	0.7(身部)	(8.213)	鉄	表土	

* ()は残存部のサイズを示す。重量は概算を含む。

** 内因観察による。

報告書番号	貯留	整理	产地	口径(cm)	厚度(cm)	深度(cm)	造様・部位	備考
164	ガラス	化粧瓶	—	(5.5)	(7.0)	4.7	環狀・南北側面	白色、不透明

「—」は「不明」を示す。

()内の数字は、残存部から復元した数値を示す。

報告書番号	遺物名	瓦当・軒丸部(cm) *		瓦当・軒平部(cm) *		筒瓦(cm) *		調査	色調(表面)	胎土	含有物質	模型例**	コピク**	造様・部位	備考				
		瓦当・軒丸部	内区幅	瓦当・軒平部	瓦当・軒平部	筒瓦全幅	筒瓦全幅		瓦当裏面 (裏面)	瓦当裏面 (裏面)	瓦当裏面 (裏面)								
165	軒丸瓦	三巴瓦	8.0	4.5	—	?	?	[2.0]	[8.23]	?	—	瓦当裏面 (裏面)	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	キコ?	?	青土壁 瓦当裏面	
166	軒丸瓦	三巴瓦	8.6	4.6	—	?	?	[2.1]	[8.43]	?	—	十子	瓦白地 2.5H7/2	織密	青磁	?	?	瓦当中央部に伝成身穿孔。 加工工具か?	
167	軒丸瓦	三巴瓦・ 連鎖	13.2	6.0	1.2	—	—	[1.9]	?	?	?	ナデ	瓦白地 2.5H7/2	織密	青磁	キコ?	?	瓦白地 瓦白地 瓦白地	
168	軒丸瓦	三巴瓦・ 連鎖	13.3	5.8	1.0	—	—	[6.1]	?	1.6	6.4	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	ハナレ秒	?	瓦当裏面に平付けの網目あ り。	
169	軒丸瓦	三巴瓦・ 連鎖	13.4	6.0	1.1	—	—	[4.6]	?	?	?	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	ハナレ秒	?	瓦当裏面に平付けの網目あ り。	
170	軒丸瓦	三巴瓦・ 連鎖	13.3	5.5	1.2	—	—	[2.1]	?	?	?	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	?	?	瓦当裏面に平付けの網目あ り。	
171	軒丸瓦	三巴瓦・ 連鎖	13.1	5.7	1.1	—	—	[1.6]	?	?	?	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	ハナレ秒	?	?	
172	軒丸瓦 ノ野口	?	?	?	—	抱壓唐草文	[12.5]	4.1	[11.5]	[12.0]	1.6	—	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	キコ	?	瓦白地 瓦白地
173	軒丸瓦 ノ野口	—	—	—	—	抱壓唐草文	[10.3]	3.5	[7.5]	[10.5]	1.5	—	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	キコ	?	瓦当裏面に平付けの網目あ り。
174	軒丸瓦 ノ野口	?	?	?	—	抱壓唐草文	[12.9]	4.1	[8.6]	[13.0]	1.5	—	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	?	?	?
175	軒丸瓦	三巴瓦	8.1	4.4	—	抱壓唐草文	[3.2]	2.8	[8.1]	[11.2]	1.5	—	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	?	?	?

* ()は残存部のサイズを示す。計測部位は原・小林編(2012)に従う。

** 番号(166)に従う。

報告書番号	遺物名	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	調査	色調	胎土	含有物質	造様・部位	備考
176	瓦再加工品	5.7	4.4	1.7	ナデ	瓦白地 2.5H7/1	織密	青磁	袋詰・東西側面	上下からの穿孔により貫通する孔があげられる。

* ()は残存部のサイズを示す。

** 内因観察による。

報告書番号	遺物名	最大長(cm) *	最大幅(cm) *	最大厚(cm) *	重量(g) *	材質**	造様・部位	備考	
177	鍼	(3.2)	—	9.4	(0.6)	(29.47)	青磁?	南側面	
178	碁石	4.5	—	2.8	0.5	—	青磁	表土	
179	碁石	2.2	—	1.4	0.5	2.61	青磁	表土	
180	碁石	(1.7)	—	1.8	0.5	(2.6)	青磁	表土	
181	碁石	2.3	—	1.9	0.5	3.61	青磁	—	I・Ⅲ層
182	不明	7.0	—	3.8	1.5	52.5	玄武岩?	東側面	片面下間に光沢を有する。
183	火打石	5.4	—	2.9	1.6	22.9	石英	表土	刻離を有する。

* ()は残存部のサイズを示す。

** 内因観察による。

報告書番号	遺物名	最大長(cm) *	最大幅(cm) *	最大厚(cm) *	重量(g) *	材質	造様・部位	備考
184	施フランジ骨加工品 —骨製施フランジ骨 (斎田2015)	15.1	—	1.1	0.8	15.09	大型哺乳類の骨?	(久保1999)
185	施フランジ骨加工品 —骨製施フランジ骨 (斎田2015)	(6.2)	—	(1.3)	(0.6)	(5.24)	大型哺乳類の骨?	(久保1999)

* ()は残存部のサイズを示す。

台部前面に縦4列、変から18・19・19・18個の穿孔が施された骨部である。裏面は裏面裏面で、裏面裏面の骨部が緑色に着色。骨部下端の穿孔部に、乳白色(セリロイド質?)の骨部(?)が接着されている。(斎田2015)

炳部上面から「口正・口摩利」と階級が残る。「エ」は「子」の上半部分とみられる。「施」は「寺」の回字で左半分の「寺」は完結しているが、本来は「寺」であったと考えられる。(斎田2015)

第4章 木製品の樹種同定と年代測定

第1節 常三島遺跡第19・20次調査出土木製品の樹種

中原計(鳥取大学地域学部)

1. 試料内容

今回樹種同定を行った試料は、常三島遺跡第19次調査（地域連携プラザ地点）出土の杭3点と同遺跡第20次調査（フロンティア研究センター地点）出土の下駄1点、桶側板2点である。所属時期はいづれも17世紀代の可能性が高い（本章第2・3節）。

2. 同定方法

剃刀（フェザーS青函両刃、青函片刃）を用いて、木口面（横断面）・柾目面（放射断面）・板目面（接線断面）の3断面の切片を徒手により作成し、ガムクロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作成した。作成したプレパラートを光学顕微鏡（ニコンECLIPSE-E200）で観察し、同定した。

3. 同定結果と考察

杭は3点ともツガ、下駄はヒノキ、桶は2点ともスギであった（第27表・第158・159図）。以下に各種の解剖学的特徴を記す。

ツガ (*Abies* マツ科)

垂直・水平のいずれの樹脂道をも持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は急で年輪幅は一般的に狭い。放射組織は放射仮道管と放射柔細胞からなる。放射柔細胞の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する。分野壁孔はスギ型で1分野に2～4個存在する。放射組織は単列で、2～20細胞高である。

スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don ヒノキ科スギ亜科)

垂直・水平のいずれの樹脂道をも持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅が比較的広く、年輪界は明瞭である。樹脂細胞が晩材部に接線状に散在している。放射組織はすべて放射柔細胞からできており、分野壁孔はスギ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列で多くは10細胞高以下である。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. ヒノキ科)

垂直・水平のいずれの樹脂道をも持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が晩材部に接線状に散在している。放射組織はすべて放射柔細胞からできており、分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列で、1～15細胞高である。

第27表 常三島遺跡第19・20次調査出土木製品一覧

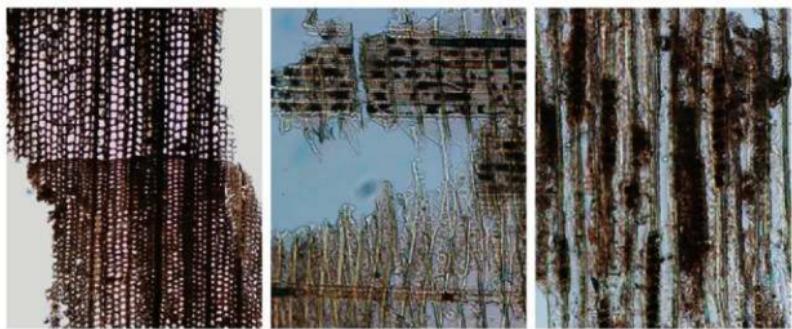
No.	製品名	樹種	調査次数（地点名）	出土遺構	時期	遺物番号
1	杭	ツガ（マツ科）	19（地域連携プラザ）	SD1	17世紀	第23図1
2	杭	ツガ（マツ科）	19（地域連携プラザ）	SD1	17世紀	第23図2
3	杭	ツガ（マツ科）	19（地域連携プラザ）	SD1	17世紀	第23図3
4	下駄	ヒノキ（ヒノキ科）	20（フロンティア研究センター）	SX402	17世紀	第75図6
5	桶	スギ（ヒノキ科スギ亜科）	20（フロンティア研究センター）	SX402	17世紀	第76図1
6	桶	スギ（ヒノキ科スギ亜科）	20（フロンティア研究センター）	SX402	17世紀	第80図9

近世の杭の用材は、マツ属を中心に、比較的重硬で油分が多く水湿に強い樹種が使われる傾向にある。常三島遺跡のものはツガであったが、ツガ属も重硬な材であり、江戸時代には比較的利用の多い樹種である。

近世の下駄の用材は、西日本での集成を行い、傾向をまとめた研究（本村・高橋2009）によると、針葉樹ではヒノキ・ヒノキ科、スギなど、広葉樹ではクリ、モクレン属、ケヤキなどが利用されている。針葉樹のほうが多く使われており、その中でもヒノキが最もよく利用されている。徳島城下町では、スギの出土例が多いが、次いでヒノキ・ヒノキ科が使われており、傾向に当てはまっているといえる。桶は、上水利用のための施設とみられるSX402（石組み遺構）の下部で検出されたものである。東京都沙留遺跡では、上水施設を構成する井戸枠には主にヒノキ属が使われ、時期が新しくなるにつれて、スギなどを使うようになっていることが明らかにされている。このことからヒノキ属ができるだけ使われ、ヒノキの不足により、スギやマツ属が代用された可能性が指摘されている（吉川・吉田1996）。また上水施設には、マツ属は松脂の問題から使用部位をある程度限定して利用していたことも明らかにされている。徳島城下町遺跡では、上水施設の調査事例はあまり多くないため、傾向は明らかではない。ただ、本事例では、スギが用いられていることから、生活用水利用のための施設としての用材選択と考えられる。

参考文献

- 島地謙・伊東隆夫 1996『図説木材組織』地球社
 本村充保・高橋敦 2009「遺跡出土下駄に関する製作技法および使用樹種に関する基礎的研究－西日本出土資料を中心として－」『櫛原考古学研究所紀要 考古学論叢』第32冊
 吉川洋子・吉田敏久 1996「沙留遺跡における上水施設」『沙留遺跡』第3分冊 沙留地区遺跡調査会



No. 1 ツガ (マツ科)



No. 2 ツガ (マツ科)

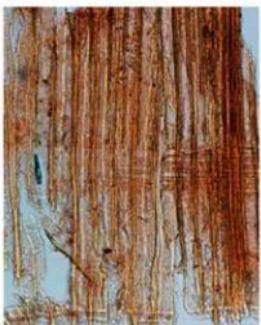


No. 3 ツガ (マツ科)

第158図 常三島遺跡第19次調査出土木製品の顕微鏡写真



No.4 ヒノキ(ヒノキ科)



柾目 × 100



板目 × 100



No.5 スギ(ヒノキ科スギ亜科)



柾目 × 100



板目 × 100



No.6 スギ(ヒノキ科スギ亜科)



柾目 × 100



板目 × 100

第2節 常三島遺跡第19次調査出土杭の放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

常三島遺跡は、徳島県徳島市南常三島町2-1に所在し、吉野川の河口付近のデルタに立地する。測定対象試料は、溝から出土した杭1点である（第28表）。SD1の下層からは杭が出土し、その最外年輪部から採取された木片No.3を測定した。No.3の樹種はツガとされる。

試料となった杭が属する溝の掘削時期は、17世紀代と推定されている。

2. 測定の意義

杭の年代測定により、溝の掘削時期の推定の妥当性について確認する。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第28表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（第28表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $\delta^{13}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第28表に、補正していない値を参考値として第29表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第28表に、補正していない値を参考値として第29表に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によつても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第29表に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される)。

6. 測定結果

測定結果を第160図、第28・29表に示す。

試料の ^{14}C 年代は $290 \pm 20\text{yrBP}$ 、历年較正年代(1σ)は $1524 \sim 1649\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示される。溝の掘削時期は17世紀代と推定され、その年代と重なる測定結果となっている。

試料の炭素含有率(=回収された二酸化炭素に含まれる炭素相当量/燃焼された試料量×100)は、50%を超える適正な値であった。

文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第28表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正)

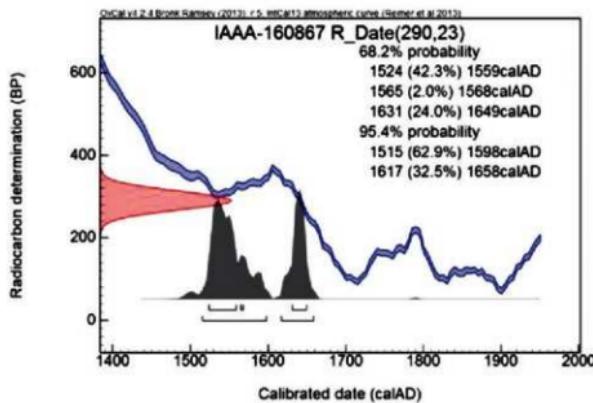
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-160867	No.3 (遺物番号445)	常三島遺跡 19次 SD1	木片(ツガ)	AAA	-24.49 ± 0.50	290 ± 20	96.45 ± 0.28

[#8137-3]

第29表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年年代範囲		2σ 暦年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)		1σ 暦年年代範囲	2σ 暦年年代範囲	
IAAA-160867	280 ± 20	96.55 ± 0.27	290 ± 23	1524calAD - 1559calAD (42.3%) 1565calAD - 1568calAD (2.0%) 1631calAD - 1649calAD (24.0%)	1515calAD - 1598calAD (62.9%) 1617calAD - 1658calAD (32.5%)	

[参考値]



第160図 暦年較正年代グラフ

第3節 常三島遺跡第20次調査出土桶（タガ）の放射性炭素年代測定

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadidze・黒沼保子

(パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ)

1. はじめに

常三島遺跡第20次調査（フロンティア研究センター地点）から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、17世紀の遺構と推測されているSX402（石組み遺構）から出土した桶のタガ（試料No. 21: PLD-30036）である。素材植物は、肉眼観察によりタケ亜科と同定された。

測定試料の情報、調製データは第30表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。残りの試料は徳島大学埋蔵文化財調査室に保管されている。

第30表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30036	遺跡名：常三島遺跡（フロンティア） 遺構：SX402（石組み遺構） 試料No. 21	種類：生材（タケ亜科） 器種：桶のタガ 推定時期：17世紀 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

第31表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行つて暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従つて年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第161図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

第31表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-30036 試料No. 21	-30.98 \pm 0.21	340 \pm 17	340 \pm 15	1495–1523 cal AD (24.2%) 1560–1562 cal AD (2.0%) 1571–1602 cal AD (28.2%) 1615–1631 cal AD (13.8%)	1474–1530 cal AD (33.4%) 1540–1635 cal AD (62.0%)

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

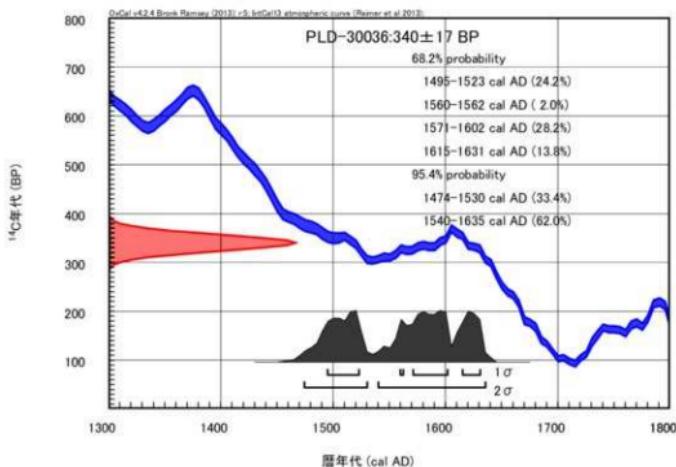
^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2 (較正曲線データ : IntCal13) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

今回、年代測定を行った桶のタガ（試料 No. 21 : PLD-30036）は、2 σ 暦年代範囲（確率 95.4%）で 1474–1530 cal AD (33.4%) および 1540–1635 cal AD (62.0%) であった。これは 15 世紀後半～17 世紀前半の暦年代で、室町時代～江戸時代前期に相当する。調査所見によれば、試料の桶が出土した SX402 は 17 世紀の遺構と推定されているため、試料の年代は 1540–1635 cal AD (62.0%) である可能性が高い。なお、タケ亜科の試料は、素材植物が生育していたある時期を示している。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3–20, 日本国第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.



第161図 純年較正結果

第5章 総括

CAD を用いた遺構変遷図の作成 最後に、これまでの常三島遺跡の調査で検出された主要な遺構の変遷を概観することで、本書のまとめに代えたい。ここでは、本調査室に新たに導入した CAD ソフトウェア（オートデスク社製・AutoCAD2015）を用いて、作成した図をもとに検討を進める。今日、CAD (Computer-Aided Design) は GIS (Geographic Information System: 地理情報システム) とならんで、考古学分野に広く普及しているアプリケーションのひとつであり、常三島遺跡のような武家屋敷跡などの遺跡の空間情報を管理するのに最適かつ簡単なものである。

作業はまず、これまでの各調査地点での主要な遺構を抽出することから始めた。これには、正式報告書と概要報告書^{〔1〕}などに記載された情報をもとに、各調査地点の主要遺構を選び出すとともに、その所属時期を把握した。そして、この作業をふまえ、各調査地点の遺構全体図のなかの主要遺構を色塗りし、それをスキャナーで取り込み、デジタル画像化 (jpeg 形式) した。つづいて、画像化された各調査地点の遺構全体図を、AutoCAD の仮想空間座標上に位置づける作業を行った。画像のなかに地理座標の既知点が二つあれば、「移動」「回転」「尺度変更」のコマンドを用いて、この作業を簡単に実行することができる。しかし、各調査地点の遺構全体図は、最近の調査を除いて、地理座標が記録されておらず、周辺の建物の角などの 2 点の記録によって、それらとの相対的な位置関係がわかるものがほとんどであった。そこで、こうした地理座標の不明な遺構全体図を配置するため、徳島大学常三島キャンパス建物配置図（本学施設マネジメント部作成）を、まず座標上に位置づけた。AutoCAD の尺度単位を km とし、少数点以下 6 位まで表記することで、平面直角座標 1 mm 精度で、仮想空間上への測量図の配置が可能である。こうした単位の設定をもとに、建物配置図を手がかりにして、各調査地点の遺構全体図を配置した。そして、あらかじめ色塗りした主要遺構を、時期ごとに画層（レイヤー）を分けて「ボリライン」でトレースした。

以上の作業過程を経て作成された dwg ファイル（AutoCAD 独自のファイル形式）を、Adobe 社製・Illustrator CC で加工したものが第 162～166 図である。これらの図をもとに、各時期の主要遺構に関わる情報を以下、要約したい。なお、時期区分は、これまでの調査結果から判明した、遺構の時間軸上の画期にもとづいて、I 期（17世紀前半）・II 期（17世紀後半～18世紀前半）・III 期（18世紀後半～19世紀中葉〔幕末〕）・IV 期（19世紀後葉〔明治期〕）を用いた。また、主要遺構の一覧は、第 32～34 表を参照されたい。

I 期（第 162 図） 火葬墓・素掘り舟入状遺構・溝・造成土・池状遺構・石列がある。遺構の時期は、最もさかのぼっても 17 世紀前半であり、それより古い時期の土地利用の実態は不明である。第 3・5 次調査では、屋敷地内で火葬墓が検出された。その後、出土した人骨を精査した結果、この火葬墓の被葬者は成年前半・男性であり、下肢を曲げた右側臥位の姿勢で木棺に納められ、600℃以上の高温で焼かれたことが分かった（端野・米元 2016）。この火葬骨と木棺あるいは燃料の薪とみられる木片の炭素年代測定の結果はおおむね 17 世紀前半ごろで整合していることから（加速器分析研究所 2017）、ここでは I 期に位置づけている。第 15 次調査では、絵図に描かれた徳島藩船置所に所在する

船着場跡とみられる 17 世紀前葉～中葉の素掘り舟入り状遺構が確認されている。この遺構の最下層から土壌を採取し、花粉分析を行った結果、ガマ属～ミクリ属の生育する淡水環境が推定されている（金原・金原 2005）。第 16 次調査では、舟入り状遺構の北側にある水路の西端にあたる可能性が高い溝（宅地化前の江戸初期）が検出されている。第 10 次調査地点では、17 世紀前半の造成土が確認されている。これは、船置所移設後の造成工事跡の可能性が高い。第 20 次調査では、内部に水場利用施設とみなせる石組み遺構を有する池状遺構が検出された。石組み遺構の盛土から出土した遺物の年代と、石組みの下から出土した桶の炭素年代測定の結果（第 4 章第 3 節）からみて、17 世紀前半に築造されたものと考えられる。第 21 次調査では、常三島地区の南限を示す石列が検出されている。『阿波国徳島城之図』（正保 3 年 [1646] 作成、個人蔵）、『阿波国渭津城下之図』（天和 3 年 [1683] 作成、国文学研究資料館史料館蔵）、『城下町切絵図 常三島』（元文年間 [1736～1741] 作成、徳島県立博物館蔵）といった絵図には、常三島の南辺に石垣がはっきりと描かれており、この石列はその一部にあたる可能性が高い。こうした絵図の存在からみて、17 世紀中頃から 18 世紀前半にかけて、石垣は付近から視認し得る状態にあったとみられるが、土層の堆積状況（三阪 2016）をみると、18 世紀後半以降のどこかの時点で盛土により、埋没したものと考えられる。

Ⅱ期（第 163 図） 屋敷境溝・屋敷区画溝・建物跡・烟跡・井戸・溝・石組み舟入状遺構・造成土・池状遺構・石列がある。この時期になると、遺構数が急激に増加する。第 1・6・11・17・19 次調査では、屋敷境溝あるいは屋敷区画溝が検出されている。この時期から、屋敷境を表示する二条の溝が顕在化する。第 11 次調査で検出された屋敷区画溝は、屋敷表を区画するものであり、北側のそれは門と思われる建物跡を伴う。建物跡はこのほかに、第 13 次調査の北側でも検出されている。第 8 次調査では、烟跡とみられる鉛痕が高密度で検出されている。この場所は絵図からみて、長谷川家屋敷地の裏庭にあたる。第 11・17 次調査では、井戸が検出されている。第 10・13 次調査では、民澤家屋敷地を分断する東西方向の溝と、それに接続する南北方向の溝の一部が検出されている。このうち、東西方向の溝については、第 10 次調査で橋脚遺構が確認されている。また、第 13 次調査では、南北方向の溝と東西方向の溝とが交わるコーナーに土留め遺構が確認されている。第 15 次調査では、17 世紀後半から 18 世紀の石組み舟入状遺構が検出されている。これを、徳島藩船置所が移設した後、私的な水運を行うために造られた船着場とみる見解が提出されている。この遺構の最下層から土壌を採取し、花粉分析を行った結果、ガマ属～ミクリ属が認められず、ヨシとみられるイネ科のみが生育する汽水環境が推定されている（金原・金原 2005）。第 17 次調査では、17 世紀前半に徳島藩船置所があつた安宅島の北側の水路を埋め立てたとみられる造成土が検出されている。時期は 17 世紀後半とされる。第 20 次調査で検出された池状遺構は、前時期から引き続き、利用されたものと考えられる。第 21 次調査の石列（石垣）は、先述の通り、この時期までは確實に視認し得る状態にあつたとみられる。

Ⅲ期（第 164 図） 屋敷境溝・屋敷区画溝・石組み溝・建物跡・埋甕遺構・烟跡・井戸・溝・石組み遺構・石敷き遺構・道路・道路側溝・土坑・池状遺構がある。この時期に遺構数はピークを迎える。屋敷境（区画）溝は、前時期よりもさらに多くの地点（計 13 地点）で、検出されている。第 11 次調査では、素掘りの屋敷区画溝に加え、石組み溝も検出されている。これも素掘りの区画溝と同様、屋敷表を区画する機能を有するものと考えられる。徳島地区に所在する新蔵遺跡では、素掘りの屋敷境溝より遅れて、

19世紀に石組みの屋敷境溝が出現するが（中原 2015）、常三島地区でも同様の傾向があるのか、今後の調査をふまえて検討していく必要がある。建物跡は、計 7 地点で検出されている。このうち、第 2 次調査のそれには、青銅製品埋納遺構が伴う。この遺構は、地鎮祭や何らかの呪術的な儀式に際して、家の縁辺部に埋納された痕跡とみられる。また、第 4 次調査のそれは、常三島遺跡で唯一の雨落溝が伴う例である。第 2 次調査では、埋甕遺構が検出されている。これは、甕の内面に尿起源の石灰分が付着していたことから、便所と推定されている。第 4・8 次調査では、烟跡が検出されている。このうち、第 8 次調査のそれは、前時期から継続するものである。第 11・15・16・17 次調査では、井戸が検出されている。第 4・10・15 次調査では、溝が検出されている。第 4 次調査の溝は、雨落溝を伴う。第 10 次調査の溝は、前時期から継続するものである。第 4・11 次調査では、石組み遺構・石敷き遺構が検出されている。用途は不明である。第 13 次調査では、道路とそれに伴う側溝が検出されている。道路は、固くたたき縮められたとみられる硬化面からなる。第 15 次調査の土坑は、前時期の石組み舟入状遺構が埋没した後、そのくぼみを廃棄坑として利用したものである。第 20 次調査の池状遺構は、前時期から継続したものとみられる。

IV期（第 165 図） 方形水溜遺構・井戸・石組み遺構・建物跡・烟跡・溝・水田・揚水施設・暗渠・池がある。これまで調査された遺構はそれほど多くない。第 2 次調査の方形水溜遺構は、明治期以降の水田化に伴い、造られた農業用の水溜施設とみられる。これには、井戸が伴う。第 4 次調査で検出されている石組み遺構・建物跡・烟跡・溝などの遺構は、前時期から継続するものである。第 15 次調査では、水田・揚水施設・暗渠・溝が検出されている。水田では、ほぼ全面で飼痕が、畦部で作物を植えたと思われる痕跡が確認されている。畦部で検出された痕跡内とその周辺の土壤を採取して行った花粉分析の結果は、水田と畑地の存在を示唆し、畦部の痕跡はササゲ属やソラマメといった豆類が植えられていたとみなされている（金原・金原 2005）。第 17 次調査では、池と暗渠が検出されている。

第 14 次調査地点（第 166 図） このほか、常三島キャンパス北側に位置する総合グラウンドでの第 14 次調査では、18世紀以降（III期）のものとみられる土手と明治期（IV期）の溝が確認されている。

以上、主要な遺構の変遷を概観したが、その多くは未報告であり、概報からの限られた情報によっている。そのため、遺構の時期決定については、暫定的なものであることを断っておきたい。また、ここで示した遺構の変遷は、概報から時期を知り得たものに限っており、遺跡全体の形成過程をトレースしたものとは到底いえない、きわめて大雑把なものにとどまっている。今後、正式報告を行うたびに、整理作業の成果をふまえて、遺構変遷図をより精緻なものへと更新していく予定である。（端野晋平）

註

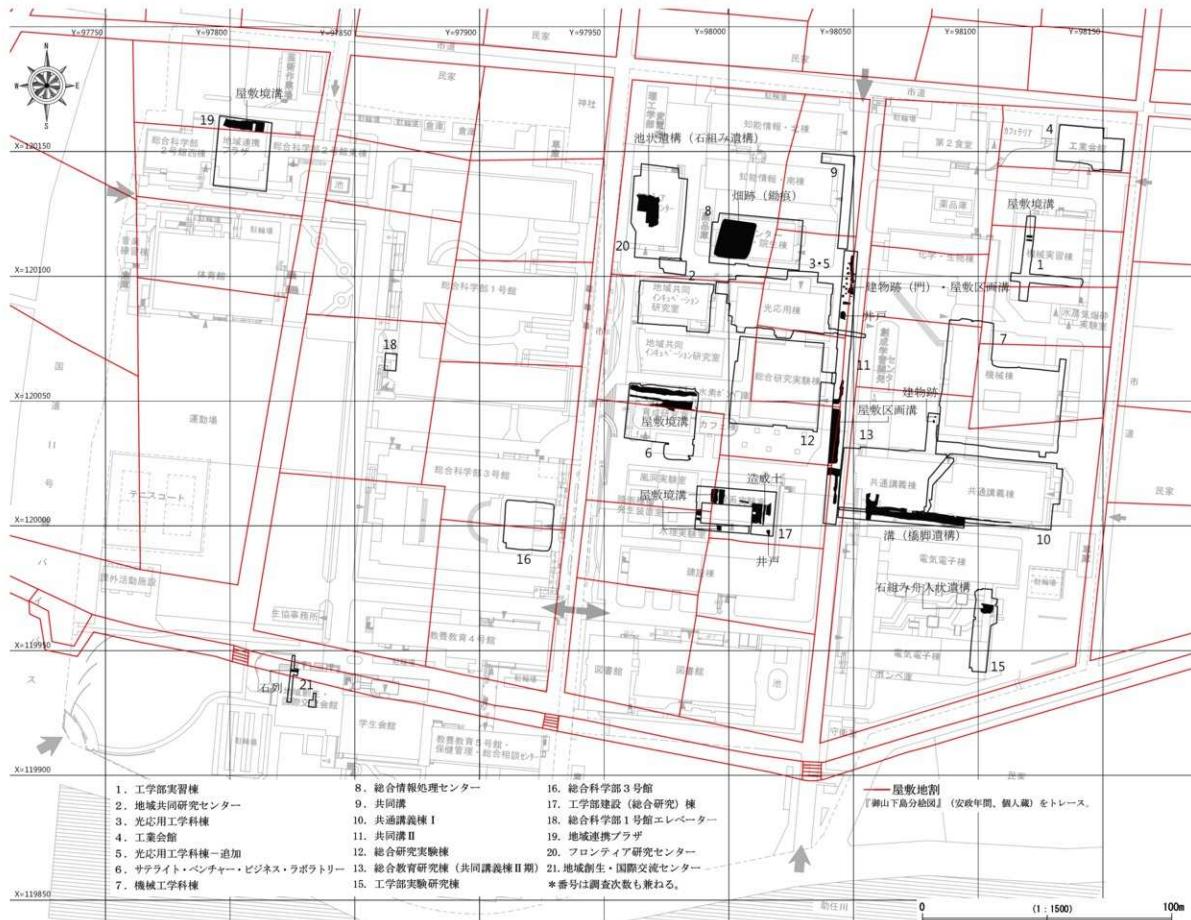
1. 正式報告書と概要報告書の PDF ファイルは、本調査室のホームページ (<http://tokudaimaibun.jp>) よりダウンロードできる。以下の文章では、煩雑さを避けるため、これらについてはとくに引用しない。第 12 次調査（工学部総合研究実験棟新設地点）については、本調査室が保管する原図を用いた。

文献

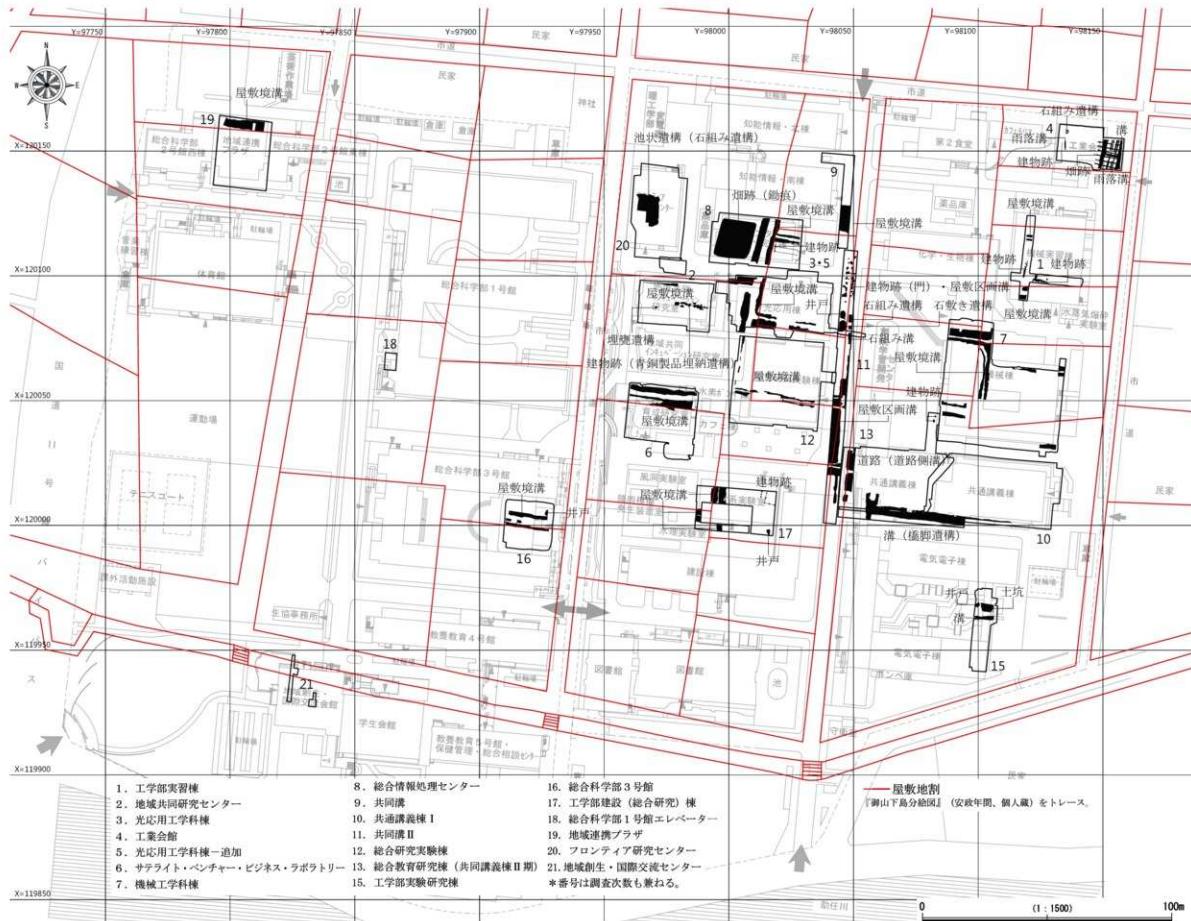
- 加速器分析研究所, 2017. 常三島遺跡第3・5次調査における放射性炭素年代測定. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 127-131.
- 金原正明・金原正子, 2005. 常三島遺跡工学部電気電子地点における花粉分析. 定森秀夫（編）, 常三島遺跡1－工学部電気電子棟地点一. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 72-77.
- 中原計, 2015. 総括. 端野晋平(編), 新蔵遺跡－地域・国際交流プラザ地点一. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 555-558.
- 端野晋平・米元史織, 2016. 常三島遺跡の近世火葬墓. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 2, 37-51.
- 三阪一徳, 2016. 常三島遺跡地域創生・国際センター新營に伴う試掘調査. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 2, 63-72.



第162図 常三島跡の主要遺構（I期）



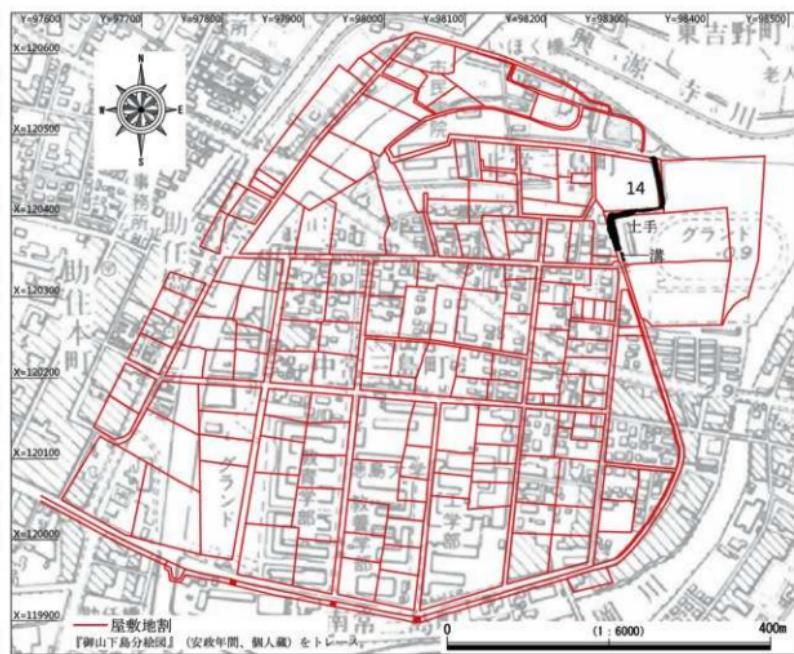
第163図 常三島遺跡の主要遺構（II期）



第 164 図 常三島遺跡の主要遺構（Ⅲ期）



第 165 図 常三島遺跡の主要遺構 (IV)



第166図 常三島遺跡第14次調査地点の遺構

下図は国際航業株式会社調整『徳島市全図2』をもとに作成。

第32表 常三島遺跡の主要遺構一覧（1）

調査 次数	調査地点	遺構の種類	大別時期	詳細時期	数量	備考
1	工学部実習棟	屋敷境溝	II・III	17世紀～19世紀	2	
		屋敷境溝	III	18世紀末～	2	
		建物跡	III	19世紀	2	
2	地域共同研究センター	屋敷境溝	III	19世紀中頃	1	
		埋廐遺構	III	19世紀中頃	1	
		井戸	IV	19世紀後半（明治期）	1	
		方形水溜遺構	IV	19世紀後半（明治期）	1	
		建物跡	III	幕末	1	
		青銅製品埋納遺構	III	幕末	1	
3・5	工学部光応用工学科棟	屋敷境溝	III	18世紀後半～幕末	6	
		火葬墓	I	17世紀前半	1	
4	工業会館	石組み遺構	III・IV	19世紀後半（幕末～明治初期）	1	
		建物跡	III・IV	19世紀後半（幕末～明治初期）	1	
		雨落溝	III・IV	19世紀後半（幕末～明治初期）	5	
		烟跡	III・IV	19世紀後半（幕末～明治初期）	6	缺間とみなせる複数の溝を確認
		溝	III・IV	19世紀後半（幕末～明治初期）	3	
		屋敷境溝	III	18世紀後半～幕末	2	
6	サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリ	屋敷境溝	II	17世紀～18世紀	2	
7	工学部機械工学科棟	屋敷境溝	III	18世紀後半～19世紀	10	
8	総合情報処理センター	烟跡（勘痕）	II・III	17世紀～19世紀	-	実測図なし
		屋敷境溝	III	18世紀後半掘削	2	
		屋敷境溝	III	19世紀再掘削	2	
		建物跡	III	幕末	1	
9	共同溝	屋敷境溝	IV	19世紀後半	1	
		屋敷境溝	III	18世紀末～19世紀前半	1	
		屋敷境溝	III	18世紀後半	1	
10	工学部共通講義棟／共同溝II-4区	橋脚遺構	II・III	18世紀前半～幕末以前	1	幕末期は陸橋
		溝	II・III	18世紀前半掘削	1	民澤家を南北に分断
		溝	II・III	18世紀前半掘削	1	道路の側溝？
		造成土	I	17世紀前半	1	水軍移動後の造成工事の可能性が高々
11	共同溝II-1区	建物跡（門）	III	18世紀後半～19世紀	1	
		石組み遺構	III	18世紀後半～19世紀	3	

第33表 常三島遺跡の主要遺構一覧(2)

調査 次数	調査地点	遺構の種類	大別時期	詳細時期	数量	備考
11	共同溝II-1区	石敷き遺構	III	18世紀後半～19世紀	1	
		石組み溝	III	18世紀後半～19世紀	1	屋敷表を区画
		建物跡(門)	II・III	18世紀前半～後半	1	
		井戸	II・III	18世紀前半～後半	1	
		屋敷区画溝	II	17世紀～18世紀前半	2	屋敷表を区画
		井戸	II	17世紀～18世紀前半	1	
		屋敷区画溝	III	18世紀後半～19世紀	5	屋敷表を区画
		石組み溝	III	18世紀後半～19世紀	1	屋敷表を区画
		屋敷区画溝	II・III	18世紀前半～後半	4	屋敷表を区画。一つは17世紀までさかのぼる可能性あり
		屋敷区画溝	II	17世紀～18世紀前半	1	屋敷表を区画
12	総合研究実験棟	屋敷境溝	III	幕末	3	
13	工学部総合教育研究棟	道路	III	幕末	1	
		道路側溝	III	幕末	1	
		溝	II・III	18世紀掘削	1	屋敷地内の大溝。土留め遺構を確認
		建物跡	II・III	18世紀～幕末	1	
14	総合グラウンド管理棟・器具庫	溝	IV	明治期	1	
		土手	III	18世紀～	1	寛永2(1790)年以降の絵図で確認
15	工学部電気電子棟	素掘り舟入り状遺構	I	17世紀前葉～中葉	1	徳島藩船置所に所在した船着場。花粉分析を実施
		石組み舟入り状遺構	II	17世紀後半～18世紀	1	私的な水運に利用した船着場か。花粉分析を実施
		土坑	III	18世紀後半～19世紀	1	廃棄坑
		溝	III	18世紀後半～19世紀	1	
		井戸	III	18世紀後半～19世紀	1	
		揚水施設	IV	明治期	1	
		暗渠	IV	明治期	1	
		水田	IV	明治期	1	鋤痕、作物を植えた痕跡を確認。花粉分析を実施
16	総合科学部3号棟	屋敷境溝	III	幕末	2	
		井戸	III	幕末まで下らない時期	1	

第34表 常三島遺跡の主要遺構一覧(3)

調査 次数	調査地点	遺構の種類	大別时期	詳細时期	数量	備考
16	総合科学部3号棟	溝	I	江戸初期(宅地化前)	2	一つは舟入り状遺構の北側にあると思われる水路の西端の可能性高い
17	工学部総合研究棟	暗渠	IV	明治期	2	
		池	IV	明治期以降	1	
		屋敷境溝	III	19世紀～幕末	4	
		建物跡	III	幕末	2	
		屋敷境溝	II・III	18世紀	4	
		井戸	II・III	18世紀	1	
		屋敷境溝	II・III	17世紀後半～18世紀	5	一つはごく初期の可能性あり
		土坑	II	17世紀後半	1	
		造成土	II	17世紀後半	1	安宅島の北側の水路を埋め立てた土
19	地域連携プラザ	屋敷境溝	II・III	17世紀後半～19世紀	1	
20	フロンティア研究センター	池状遺構	I～III	17世紀前半～幕末	1	
		石組み遺構	I～III	17世紀前半～幕末	1	
21	地域創生・国際センター	石列	I・II	17世紀中頃～18世紀前半	1	絵図に描かれた石垣に相当する可能性が高い

報告書抄録

ふりがな	じょうさんじまいせき さん						
書名	常三島遺跡 3						
副書名	地域連携プラザ地点・フロンティア研究センター地点						
卷次							
シリーズ名	徳島大学埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第6巻						
編著者名	端野晋平・脇山佳奈・三阪一徳・中原計						
編集機関	徳島大学埋蔵文化財調査室						
所在地	〒770-8503 徳島市藏本町2丁目50-1 TEL 088(633)7236						
発行年月日	2017年3月31日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
常三島遺跡 地域連携プラザ地点	徳島市南常三 島町1丁目	36201	37 04° 43"	134° 33' 35"	20130606～ 20130701	458m ²	地域連携プラザ新営その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
常三島遺跡 フロンティア研究センター地点	徳島市南常三 島町2丁目	36201	34 04° 43"	134° 33' 41"	20130627～ 20130911	756m ²	フロンティア研究センター新営に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
常三島遺跡 地域連携プラザ地点	城下町	近世～近代	溝、杭列	磁器、陶器、土器、金属製品、ガラス製品、瓦、石製品、木製品	二つの武家屋敷地の境界を表す溝が検出された。		
常三島遺跡 フロンティア研究センター地点	城下町	近世～近代	池状遺構、石組み遺構、溝、土坑、ピット	磁器、陶器、土器、土製品、金属製品、ガラス製品、瓦、石製品、骨製品	生活用水を利用するための石組み遺構が検出された。		

2017年3月31日発行

徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第6巻

常三島遺跡3

－地域連携プラザ地点・フロンティア研究センター地点－

編集・発行 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

徳島市藏本町2丁目50-1 (088)633-7236

<http://tokudaimaibun.jp/>

印 刷 徳島県教育印刷株式会社

徳島市東沖洲2丁目1-13 (088)664-6776

ISBN 978-4-908223-02-0